下吹上

——蓼科山北麓における縄文中期末葉の調査——

長野県考古学会研究報告書　11

1978

長野県考古学会

序

このたびの下吹上遺跡発掘調査は、底冷えのする昭和51年11月８日から11月末日まで多くの方々の御協力によりまして行なうことができました。

この発掘調査は、望月町にとっては初めての学術調査であり、文化財をより深く理解し、活用していくためには非常に貴重なものであります。近年、開発事業に伴う調査が大変多いと聞きますが、その中にあって、かねてからの念願であった敷石住居址を解明するという目的をもった調査が実施されたことは、誠に喜ばしい限りであります。

原始社会は、今の私どもから考えますと、想像もつかないような長い時間の流れがあり、現在とは全く異なった様式で生活が営なまれていたと思います。発掘調査をすることによって、それらのことが目の前に現われてきた瞬間、なにか言いようもないような不思義な気持ちをいだかせてくれました。その気持が、現在の我々の生活には重要なものであるようにも思われます。この調査をきっかけに、望月町民の文化財に対する意識が芽ばえ、また高まってくることを願うところであります。

調査の計画、進展に際しては、団長である森嶋稔氏（日本考古学協会員）を中心に、調査主任の福島邦男氏（日本考古学協会員）、塩入秀敏氏（長野県考古古学会員）、渡辺重義氏（長野県考古学会員）、望月町文化財委員会などの方々に大変御苦労を賜わりました。また、望月町公民館、上田女子短大、他の方々にも御協力をいただきました。とくに地主であります渡辺国俊氏と耕作者であります飯島太郎氏には、大切な土地を無償で提供していただきました。それぞれの方々に対し、深甚なる感謝の意を表する次第であります。

本報告書の作成は森嶋稔氏と福島邦男氏によるところが大きく、出版においては、長野県考古学会に御援助をいただきました。重ねて御礼申し上げる次第です。

この報告書が、一般の皆様、さらには研究者の皆様に大いに活用していただけることを望んでおります。

昭和53年10月

望月町教育委員会
教育長　佐　藤　初　雄

例　　言

（敬称略）

1．本書は、長野県北佐久郡望月町大字協和字下吹上2922番地に発見された「下吹上遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は当初より目的をもって行なわれ、望月町教育委員会と発掘調査団が主体となり、昭和51年11月８日より11月30日まで実施し福島邦男が専従した。

3．地形測量は、依田慎三、篠原一人、吉川徹、高橋重雄、大森睦男、松本荘雄、福島邦男が行い、また遺構の実測は、塩入秀敏、渡辺重義、松本荘雄、福島邦男が行なった。それぞれのトレース、図版の作成は福島が行なった。

4．遺物整理は、昭和51年12月１日より昭和52年４月30日まで行ない、小林良子、上野早苗、福島がその任に当った。

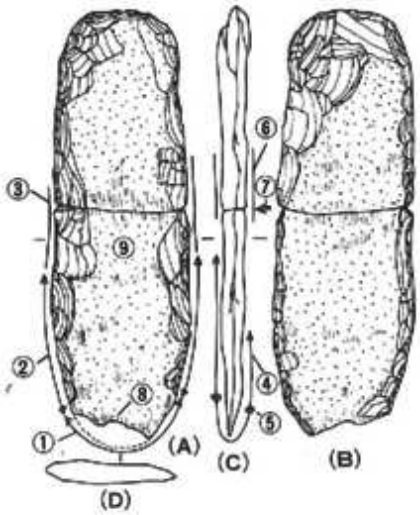
5．遺物の実測、写真撮影、図版作成は福島が行ない、拓本は上野と福島が行なった。

6．岩石の鑑定は、石和一夫に御指導、御助言を賜った。

7．本文執筆は、第１章、第２章、第３章を福島、第４章を森嶋稔が担当した。

8．本書の編集は、森嶋、川上、福島が行なった。

9．図版中、特に石器の記号は下記のように定めた。



本文中に使用している記号は次の通りである

(A)　表　面
(B)　裏　面
(C)　側面の見通し及び縦断面
(D)　側面の見通し及び横断面
①　側辺部使用痕（特に顕著）
②　側辺部使用痕
③　磨耗痕
④　側面部の使用痕
⑤　特に顕著な部分との接点
⑥　側辺部磨耗痕
⑦　折断の方向
⑧　使用痕と方向
⑨　自然面

目　次

序
第1章　発掘調査の動機と経過……1
　第1節　発掘調査の動機と目的……1
　第2節　調査の構成と調査団の編成……1
　第3節　発掘調査日誌……3
第2章　遺跡の環境……7
　第1節　位置と地理的環境……7
　第2節　考古学的環境……8
第3章　遺構と遺物……13
　第1節　第5号住居址……14
　第2節　第1号敷石住居址……36
　第3節　第1号住居址……44
　第4節　第2号住居址……53
　第5節　第3号住居址……68
　第6節　第4号住居址……83
　第7節　グリッド遺物……95
　第8節　表面採集の遺物……103
第4章　総括……112
　第1節　黒浜期資料をめぐって……112
　第2節　敷石住居址の提起するもの……114
　第3節　縄文中期末葉の課題……116
　第4節　埋甕をめぐって……122
　第5節　生産用具のあり方……124
　第6節　第4号住居址の復元設計……128
おわりに……131

挿図目次

第１図　八丁地川周辺の地形及び遺跡分布図（１：60000）…… 9
第２図　下吹上遺跡周辺地形図（１：1200）…… 11
第３図　下吹上遺跡グリッド及び遺構全体図（１：240）…… 13
第４図　下吹上遺跡土層断面図（１：40）…… 14
第５図　第５号住居址実測図（１：60）…… 15
第６図　第５号住居址炉址実測図（１：30）…… 15
第７図　第５号住居址出土土器（１：３）…… 17
第８図　第５号住居址出土土器（１：３）…… 18
第９図　第５号住居址出土土器（１：３）…… 19
第10図　第５号住居址出土土器（１：３）…… 20
第11図　第５号住居址出土石器（１：２）…… 26
第12図　第５号住居址出土石器（１：３）…… 27
第13図　第５号住居址出土石器（１：２）…… 28
第14図　第５号住居址出土石器（１：２）…… 29
第15図　第１号敷石住居址実測図（１：40）…… 37
第16図　第１号敷石住居址出土土器（１：３）…… 39
第17図　第１号敷石住居址出土埋甕（１：２）…… 40
第18図　第１号敷石住居址出土石器（１：２）…… 41
第19図　第１号住居址実測図（１：60）…… 44
第20図　第１号住居址出土土器（１：３）…… 46
第21図　第１号住居址炉址内出土土器（１：３）…… 47
第22図　第１号住居址出土石器（１：２）…… 48
第23図　第１号住居址出土石器（１：３）…… 50
第24図　第２号住居址実測図（１：60）…… 54
第25図　第２号住居址埋甕平面図及び断面図（１：20）…… 55
第26図　第２号住居址出土土器（１：３）…… 56
第27図　第２号住居址出土土器（１：３）…… 57
第28図　第２号住居址出土埋甕展開図（１：６）…… 58
第29図　第２号住居址出土石器（１：２）…… 60
第30図　第２号住居址出土石器（１：３）…… 62
第31図　第２号住居址出土石器（１：３）…… 63

第32図　第３号住居址実測図（１：60）…… 69
第33図　第３号住居址ＳＫ―１実測図（１：20）…… 70
第34図　第３号住居址ＳＫ―２実測図（１：20）…… 70
第35図　第３号住居址出土土器（１：３）…… 72
第36図　第３号住居址出土土器（１：３）…… 73
第37図　第３号住居址ＳＫ―１出土土器（１：３）…… 74
第38図　第３号住居址出土石器（１：２）…… 77
第39図　第３号住居址出土石器（１：２）…… 78
第40図　第３号住居址出土石器（１：３）…… 79
第41図　第４号住居址実測図（１：60）…… 84
第42図　第４号住居址出土土器（１：３）…… 86
第43図　第４号住居址出土土器（１：３）…… 87
第44図　第４号住居址出土石器（１：３）…… 88
第45図　第４号住居址出土石器（１：２）…… 91
第46図　第４号住居址出土石器（１：３）…… 92
第47図　グリッド出土土器（１：３）…… 97
第48図　グリッド出土土器（１：３）…… 98
第49図　グリッド出土石器（１：２）…… 100
第50図　グリッド出土石器（１：３）…… 104
第51図　表面採集の石器（１：３）…… 105
第52図　表面採集の石器（１：３）…… 106
第53図　表面採集の石器（１：３）…… 107
第54図　表面採集の石器（１：３）…… 107
第55図　第５号住居址及び出土の遺物…… 113
第56図　第１号敷石住居址及び出土の遺物…… 115
第57図　第１号住居址及び出土の遺物…… 117
第58図　第２号住居址及び出土の遺物…… 118
第59図　第３号住居址及び出土の遺物…… 119
第60図　第４号住居址及び出土の遺物…… 120
第61図　各住居址の埋甕…… 123
第62図　各住居址出土の生産用具…… 125・126
第63図　下吹上遺跡第４号住居址復元設計図…… 129

表　目　次

第１表　第５号住居址土器胎土分析表…… 32
第２表　第５号住居址石器集成表（その１）・（その２）・（その３）…… 33
第３表　第１号敷石住居址石器集成表…… 43
第４表　第１号住居址石器集成表…… 52
第５表　第２号住居址石器集成表（その１）・（その２）…… 66
第６表　第３号住居址石器集成表（その１）・（その２）…… 81
第７表　第４号住居址石器集成表（その１）・)(その２）…… 93
第８表　グリッド出土石器集成表（その１）・（その２）…… 101
第９表　表面採集の石器集成表（その１）・（その２）…… 110
第10表　各住居址出土の石器数及びその百分率…… 127

図版・目次

図版１　１．遺跡全景　２．八丁地川河岸段丘（浅間山を臨む）　３．遺跡と河岸段丘
図版２　１．調査現場　２．大谷地地籍の鉄平石露頭　３．調査風景
図版３　１．敷石住居址埋甕調査風景　２．見学者への説明風景　３．熱心に見入る小学生
図版４　１．第５号住居址全景　２．同炉址
図版５　第５号住居址出土土器
図版６　第５号住居址出土土器
図版７　第５号住居址出土土器　１．無節縄文　２．単節縄文　３．羽状縄文　４．単節縄文の組合せ　５．複節縄文　６．組紐縄文
図版８　第５号住居址出土石器
図版９　１．第１号敷石住居址全景　２．同敷石部
図版10　第１号敷石住居址炉址内焼土堆積状態　２．同柱穴間出土の埋甕　３．同埋甕断面　４．同埋甕
図版11　第１号敷石住居址出土石器
図版12　１．第１号住居址全景　２．同炉址　３．同立替え柱穴
図版13　第１号住居址出土土器
図版14　第１号住居址出土石器
図版15　１．第２号住居址全景　２．同埋甕と配石
図版16　１．第２号住居址埋甕断面　２．同埋甕下部の施設　３．同埋甕下部の施設
図版17　第２号住居址出土土器

図版18　第２号住居址出土石器
図版19　１．第３号住居址全景　２．同炉址とＳＫ―１
図版20　第３号住居址出土土器
図版21　第３号住居址出土石器
図版22　１．第４号住居址全景　２．同炉址　３．同磨製石斧出土状態
図版23　第４号住居址出土土器
図版24　第４号住居址出土石器
図版25　グリッド出土土器及び石器
図版26　表面採集の石器
図版27　石器の使用痕と研磨痕の観察

第１章　発掘調査の動機と経過

第１節　発掘調査の動機と目的

望月町文化財保護委員会では、以前より民衆に直結した歴史や民俗学的な調査を積極的に行なっていたが、埋蔵文化財の調査は計画性に足らず実現するまでには至っていなかった。そのような状況のなかで昭和50年に下吹上遺跡の発掘調査が提案され、望月町教育委員会の積極的な支援と承認を得、予算化され実現した。調査対象に下吹上遺跡を選定した理由は、昭和30年に耕作者の飯島太郎氏が耕作中偶然にも鉄平石が幾枚にも敷き詰められているのを発見し、興味の深かった人々によって敷石住居址であることを確認したが、調査せずにそのまま埋め戻してあり、正式調査によりぜひ全容を明らかにしたいとの意向があった。（なお当時の写真だけは「北佐久郡誌」第一巻歴史編に収録されている。）

敷石住居址は、佐久地方の小諸に比較的多く存在しており、千曲川の川西地区では御牧ヶ原を西域として分布しているが、下吹上遺跡の立地は千曲川水系と蓼科山北麓との中間的位置にあたり、位置的にも非常に重要性を見い出したことも理由の一つであった。また特殊遺構としての存在の賛否も語られている中にあって本址の究明も重要な要所を占めていることも考えにあった。

このような理由と、さらには低迷状態にある地方の文化財行政を盛り立て、住民をも含めたかたちで文化に対する意識の高揚と、現実的生活の中での文化活動の高揚が成されることも動機と目的の一つでもあった。

調査を計画するに当り、教育委員会と文化財保護委員会が中心となったが、特に地主である渡辺国俊氏、それに耕作者の飯島太郎氏には大切な耕作地を調査のために無償で提供してくださり、全面的な理解と協力を賜った。この紙上を借りて厚く御礼申し上げる次第です。

第２節　調査の構成と調査団の編成

１．遺　跡　名　下吹上遺跡
２．遺跡所在地　長野県北佐久郡望月町大字協和字下吹上2922番地
３．調 査 主 体　望月町教育委員会・下吹上遺跡発掘調査団
４．調 査 面 積　440㎡

5．調査期間　昭和51年11月8日～11月30日

6．調査方法　グリッド方式による平面発掘法

7．調査団の編成

団　　長　森嶋　稔（日本考古学協会員・上山田小学校教諭）

調査主任　福島邦男（長野県考古学会員・望月町天来記念館学芸員）

調査員　川上　元（日本考古学協会員・上田博物館学芸員）

塩入秀敏（長野県考古学会員・上田女子短大講師）

高村博文（　　〃　　・佐久市教育委員会）

大沢洋三（望月町文化財保護委員長）

岩下清海（長野県考古学会員・望月町文化財保護副委員長）

鈴木　高（　　〃　　・　　〃　　委員）

真山伍一郎（望月町文化財保護委員）

小野山甚之丞（　　〃　　）

桜井昌晃（　　〃　　）

桜井正人（　　〃　　）

調査特別協力者（岩石鑑定）石和一夫（長門小学校教諭）

調査協力者　市川宗生、土屋重雄、諏訪定雄、竹花ふじみ、古田徳寧、桑沢きさ、岩下純武（以上望月町公民館主事）上野敦子、林　康子、小出里美、高地美智子、（以上上田女子短大学生）、臼田俊保（望月高校生徒）望月中学校生徒数名、協和小学校生徒数名、望月町役場職員、佐久市後沢遺跡発掘調査団

事務局参加者　佐藤初雄（教育長）、依田慎三（教育次長）、竹花謙一郎（公民館長）、吉川徹（同和教育課長）、高橋重雄、松本荘雄、平林一郎、小林美枝子、上野早苗

8．調査事務　篠原一人、大森睦男、小林良子（以上社会教育課）

9．調査見学　春日小学校、協和小学校、望月中学校、その他町内外600名

10．報導機関　信濃毎日新聞、朝日新聞、中部日本新聞、ＮＨＫテレビ、望月町有線放送、望月町公民館報

第３節　発掘調査日誌

11月２日（火）晴れ

教育委員会事務局により、遺跡周辺の地形測量を行なう。（600分の１）

11月４日（木）　雨

雨の降る中、事務局により３ｍ×３ｍのグリッド設定を行なう。県道浅田切線沿いにＡ～Ｉ、縦に１～６とする。

11月８日　（月）　晴れ

８時30分に望月町福祉センターに集合し調査現場に行く。結団式を行なう。教育長の挨拶、福島の調査内容、方法、注意事項等の話、事務局よりの連絡事項を伝え調査に入る。

本日は、グリッドA_1、B_2、C_1、C_3、D_2、E_1、E_3、F_1、F_2、G_1、H_2、を掘る。各グリッドから濃密に縄文式中期末葉の土器片が出土する。B_2とC_3地点はかなり量が多いので、仮りにＡ遺物群とする。F_2より敷石住居址の敷石部がすでに検出される。同時に敷石上より縦2.5㎝の小型磨製石斧が出土する。

11月９日　（火）　晴れ

昨日と同様よい天気。作業人数はかなり少なかったが、能率よく進められた。A_2、A_3、B_3、C_2、C_4、E_2、F_3の各グリッドを掘る。C_2より半個体の土器が横たわる炉址が確認され、周辺は焼土と灰が密に存在し、また土器片、黒曜石フレイクがかなり散在している。A_2からは、埋甕、凹石、土器片多数が見つかり、プランは確認されないが埋甕の存在からＡ遺物群には住居址があると考えられる。敷石住居址のプラン確認作業を行なう。その結果、炉址を中心に敷石部の全容がほぼ明らかとなる。また敷石以外の床面も炉址近くで確認され、遺物も床面直上で出土する。

11月10日　（水）　晴れ

A_4、D_3、F_4、G_2、G_3グリッドを掘る。D_3では、昨日確認された炉址周辺で柱穴が確認され第１号住居址とする。またA_2より確認の埋甕周辺部を第２号住居址とする。さらにA_4からは多量の土器片、黒曜石スクレーパー、フレイク、打製石斧が出土し、焼土も広範囲で検出される。さらに柱穴と思われるピットも検出され第３号住居址とし、それぞれ発見順にNo.を付ける。敷石住居址のプラン確認作業を行ない、G_2、G_3よりそれぞれ１個づつ柱穴が検出される。床面は、耕作によりかなりの攪乱を受け明確には検出し得ない。

11月11日　（木）　雨のち曇り

朝から雨が降り続いているので福祉センターに於て遺物洗いを行なう。午後ようやく雨が上がり事務局のみで作業を行なう。第３号作居址プラン確認のためA_5、B_4、B_5グリッドを掘る。

A_5より大小の礫が多量に集中しているのが見つかる。遺物も多量に出土する。飯島さんよりA_1とA_2グリッドの中間西側の区域外で、かつてかなりの焼土を掘ったとの話しを聞き、第2号住居址の炉址であった疑いがもたれる。

11月12日　（金）　晴れ

今朝、霜が降り非常に寒く、しかも調査員が2人であったので作業はあまりはかどらない。A_6、D_4グリッドを新たに掘りA_5-A_6間で立石が確認される。$A_2-A_3\sim D_2-D_3$までの土層断面図（A－B）を実則する。セクションベルトを外し第2号住居址のプラン確認作業を行なう。床面は部分的に検出されたが、壁面は耕作により全面攪乱されている。埋甕は口縁部を上に向け、ほぼ全周が確認される。埋甕の周辺には、平らな磨り石があり、比較的床面までは攪乱を受けていない。プランの西側半分は調査区域外のため調査ができない。

11月13日　（土）　晴れのち曇り

第2号住居址の測量と第1号住居址のプラン確認作業を行なう。遺物が少量出土したがプランを確することはできない。

11月14日　（日）　雨

朝から雨が降り続いており、本日の調査が危ぶまれたが、敷石住居址上にテントを張りめぐらし、敷石住居址のプランと柱穴確認作業、そして柱穴掘りを行なう。Eグリッドより大小7個の柱穴が検出され、また2個の柱穴間に埋甕が発見される。埋甕は中期末葉のものであり、両側の柱穴は、ヤヤ斜め外側方向に埋められていたことが分かる。これで敷石住居址は、ほぼ床面から出土した遺物を含めると、中期末葉に位置づくと考えられる。プランは攪乱もあまり受けておらず良好な状態である。壁面が確認されないところから平地式を呈するものとの考えをもつ。

11月15日　（月）　晴れ

敷石住居址の写真撮影を行なう。その後やり方を組み平面測量及びエレベーションをとる。第1号住居址のプランをさらに追求する。

11月16日　（火）　晴れ

敷石住居址の平面測量と、埋甕の平面実測、それにエレベーションをとる。埋甕の西側半分を掘り断面図をとる。埋甕は底部を下にしてやや東側に傾むいた状態で部分的に欠落しており、土坑内には他の土器片も詰められるように入り込んでいた。後取り上げ作業を行なう。第1号住居址の柱穴を掘り写真撮影を行なう。連日霜の降りる寒さの中で、焚き火を囲みながらの作業である。

11月17日　（水）　晴れ

第1号住居址の測量を行なう。壁面は攪乱によりすでに破壊されており、床面も良好な状態とは言えない。炉址は、上部に半欠の土器が入っており、焼土が厚くまた灰の存在も多かったり、炉石は抜かれており確認されなかったが、石の抜かれた位置と四面の溶さいが検出される。

レベルの記入を行なう。第1号住居址調査完了の後、床面下を削ったところ、新たに大きな石囲い炉が見つかり、第4号住居址とする。遺物は土器片、黒耀石製スフレーパー、フレイク等多数出土する。

11月18日　（木）　曇り

本日は人員が増えたので、C_5、D_5、H_3、H_4、H_5、I_2、I_3、I_4の各グリッドを新たに掘る。I_2、I_3、I_4グリッド中に方形の第5号住居址が確認される。耕作土からプラン上部にかけて、前期黒浜式土器が中期土器片に混って出土している。第4号住居址のプラン確認のための作業を行なう。遺物が多量に出土する。

11月19日　（金）　曇り

第4号住居址のプラン確認の後、覆土の掘り下げを行なう。比較的浅くすぐに床面が確認された。遺物は南側に磨製石斧が床面に直立状態で突きささって出土している。土器片、黒耀石片が多量に出土する。

11月20日　（土）　曇り

第4号住居址の掘り下げを行ない写真撮影を行なう。本址の南側に出入り口部と思われる内側へのやや傾斜した張り出し部が確認たれ、両側には柱穴も確認されている。柱穴は全部で8個で、土坑は2基確認されている。炉址は規模のわりあいには余り使用された様子はなく焼土の存在がない。

11月21日　（日）　晴れ

本日は調査を休む。

11月22日　（月）　晴れ

一部検出されている第5号住居址の全体を確認するために東側を拡張したが、その部分は耕作のために深く攪乱されており、また、南側部分も丁度東側部分と交わるように深く攪乱を受けている。その後プランの掘り込みを行なう。床面まではかなり浅かったが壁面は良好に残っている。床面より前期黒浜式土器片が濃密に出土する。また黒耀石スクレーパー、フレイクも多数出土する。検出床面中央に1.5×2mの隅丸方形を程する落ち込み部があり、礫が頭を出している。何であるのかは不明であるがいずれにしろ床面からの落ち込みであり、本住居址に伴なうものであることが確認できる。春日小学校生徒90名が見学に来、福島が説明を行なう。

11月23日　（火）　雨のち曇り

朝のうち雨が降っていたが早くに上がる。それにしても冷たい風が一日中吹きすさんでおり、これが吹上という地名の由来かと感じるほどである。床面中の土坑の掘り込みを行なう。大小の礫が多量に散乱しておりまた土器片と黒耀石片が多量に出土する。底部付近から焼土が確認される。礫も焼けているものが大分であり、炉址的な遺構であることを想像させる。

11月24日　（水）　晴れ

第5号住居址床面の落ち込の掘り込みを続ける。礫は円礫が多く焼けており、焼土が広範囲

に存在している。出土する土器片は、住居址床面出土のものと接合するものが幾つか確認され、第5号住居址の炉址であることが分かる。しかも一般的な炉址ではなく、焼石炉的機能をもつものであると考える。住居址全体の写真撮影を行ない平面測量と断面図をとり、さらに炉址をやり方実測する。後、礫を取りはずす。中に入っていた礫は、凹石や磨石、平らな磨り石などが含まれている。

11月25日　（木）　晴れ

早朝から現場は霜が降り、氷がはっており午前中はあまり作業がはかどらない。第5号住居址炉址の掘り方全容を出し、写真撮影と断面の記入を行なう。本址の調査は完了し、午後から第3号住居址のプラン確認作業を行なう。協和小学校高学年が見学に来る。福島が説明する。

11月26日　（金）　晴れ

第3号住居址のプラン確認作業と柱穴掘りを行なう。すでに炉址が確認され、遺物もかなり散乱していたがプランをつかめずにいた。しかし本日炉址の南側に土坑が1基とピットがプランを描くように円形に確認される。土坑内には、半欠の中期終末の土器が横たわっており、その上部に蓋石と思われる平石が確認される。

11月27日　（土）　晴れ

第3号住居址の壁は、第1号、2号住居址と同様耕作による攪乱により、破壊されており、しかも西側の部分は調査区域外であるために検出できないが柱穴によりほぼプランの全容がつかめた。また第2号土坑が検出され、底部には土器片が入っていた。柱穴と炉址の掘り下げを行なう。ぐり石を詰めた柱穴が見つかる。炉址は石が抜かれ構造を明らかにすることはできなかったが、かなり大きな掘り方が確認された。全面が焼土と化しており打製石斧、土器片が出土する。望月中学校生徒、職員が見学に来、福島が説明する。

11月28日　（日）　晴れ

第3号住居址の柱穴掘りと写真撮影、全体測量、土坑、炉址の実測を行ない完了する。本址は、床面に礫がかなり散乱している。プランは柱穴により想定したが、各構造ははっきりと確認できた。

11月29日　（月）　大雪のち晴れ

明け方より雪が激しく降り出し、あたり一面銀世界となる。その中で手をこごえさせながら遺構全体測量を松本と福島が行なう。

11月30日　（火）　晴れ

改めて、今まで実測した図面のチェックを行なう。午前中で調査を全て完了する。

調査を通じて参加者に班があり1人、2人という日が幾日かあり、作業に支障をきたしたが、教育長さんや教育次長さん自らがスコップを手にし、また教育委員会全員の方も忙しい中積極的に参加してくださり心強い支援を受けた。

第2章　遺 跡 の 環 境

第１節　位置と地理的環境

下吹上遺跡は、長野県北佐久郡望月町大字協和字下吹上2922番地に位置している。

望月町は主峰蓼科山（標高2530ｍ）の裾野が放射状に広がる北側に位置し、奥深い沢とその間に広がる台地と扇状地状地形によって形成されている。蓼科山の水を集めて流下する主流は４河川あり、上流では、急流で険しい渓谷を作り、下流に至っては、低地、段丘を作り出している。鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川がそれで鹿曲川は、蓼科火山東方の大河原峠付近に源を発し、蓼科山火山の北斜面を北流し、春日の沢①を通り春日本郷付近で細小路川と合流する。さらに望月に至って八丁地川と合流し、川幅を広げつつ御牧原と八重原との間を流れて畔田で芦田川も合流させ、さらに切久保付近で藤沢川と合流し、島河原で千曲川に流れ込んでいる。細小路川は、鹿曲川源流よりもさらに東方の険しい渓谷より流下し、岩下、新町を経て春日本郷に至って鹿曲川と合流する。岩下付近からしだいに平野が広がってくる。布施川は佐久市前山の西南端に近い蓼科火山東北斜面に源を発して北流し、布施谷に入って、しだいに山間を広げる大木を経て百沢に至り、そこから方向を北東に転じ、御牧原の東南麓を流れて耳取対岸に於て千曲川に合流する。本遺跡の脇を流れる八丁地川は、蓼科火山の北麓一帯の５箇所の険しい谷より源を発し、途中唐沢と本沢の２つの支流となり、寺久保地籍付近で本流となる。この付近より渓谷平野が序々に広がってくる。雨境峠を経て流下する支流を浅田切で本流と合流させ、川幅と谷平野を広げつつ畳石、八丁地、鳶岩を経て吹上地籍に至り、望月で鹿曲川に合流している。このように望月町は、蓼科火山と４河川により地理的環境と生活の立地条件が作り出されているのである。

蓼科山は緩傾斜の裾野がかなり広範囲に広がっており、特に北方の望月方向へは長い裾野が延びている。頂部には円錐形の山林があり、これをみかぶり又はめしもりとも呼んでいる。裾野と山頂の下部には、普通輝石安山岩、橄欖石玄武岩、複輝石安山岩の集塊岩及び凝灰角礫岩が広く分布している。最上部には角閃石安山岩が分布している。

下吹上遺跡は、吹上地籍に於ける八丁地川の左岸の第一河岸段丘上に位置しており、段丘線からすぐに入り込んだ所にある。ここは、新世代第四紀更新世の蓼科山から続く安山岩系の山塊と望月方向へ続くローム・火山岩屑、さらに沖積層へと変化していく接点的な地域にあたり、複雑な地質構造を成している所である。標高750ｍを測る。幸い調査地域は、第１層耕作土、第２層茶褐色土、第３層黄色ソフトローム、第４層礫混り黄色砂質ロームとなるが、第３層ソフトロ

ーム上面を掘り込んで遺構が構築されているため調査のむずかしさはなかった。敷石住居址に使用されている鉄平石は複輝石安山岩で、八丁地川上流の鳶岩、畳石で良質のものが産出されている。石を運搬するには、現在ではダンプカーで行なっているが、当時に於ては、イカダを組み八丁地川を下れば容易なことである。近年になって鉄平石の切り出しが異常なほど盛んになって来ており、自然環境や住民の生活に大きく影響を与えてきている。いにしえの社会の復元をするなかで、原始社会と現在の社会とのかかわり合いが、こんなにも身近かな所で接合されているのである。

参考文献

(1) 福島邦男「長野県北佐久郡望月町における土偶二例一立地環境２」（長野県考古学会誌23.24合併号）長野県考古学会　昭和51年３月

(2) 神津叡祐・木崎喜雄「地形概説」（北佐久郡志第１巻自然編）北佐久郡志編算会、昭和30年３月

(3) 富沢恒雄「長野県地質図」信濃教育会出版部、昭和51年６月

第２節　考古学的環境

望月町に於ける遺跡の分布は、地理的環境でも述べたが、鹿曲川、細小路川、布施川、そして八丁地川の各水系に沿った所にあり、最も典型的な立地環境で、現在の住民の生活立地、環境も遺跡の分布と同様、各水系に沿っているのである。下吹上遺跡周辺に於ける考古学的環境は、このうちの八丁地川水系に最もかかわりあいの深いものである。

沢が深いため余り分布調査が行き届いていない面もあるが、現在までに確認されている遺跡は次の通りである。（第１図）

(1)寺久保Ｂ遺跡（協和字西久保入）

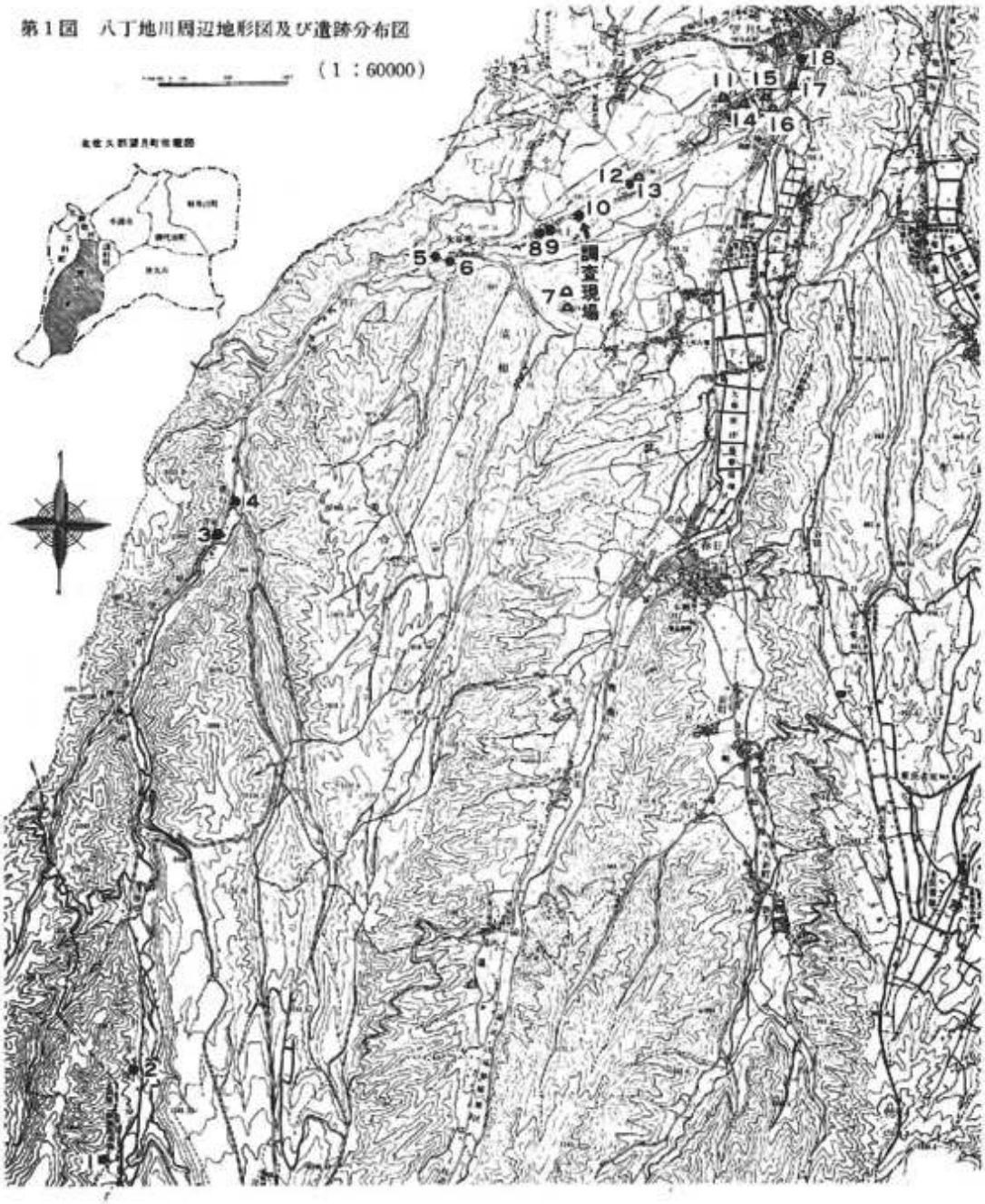
林道唐沢線と林道本沢線の交鎖する所より本沢線に500ｍ入った蓼科山寄りの所で、沢に向ってややなだらかな東向きの斜面である。蓼科火山により、溶岩や安山岩の堆積が著しく、耕作土の下層はガラ場になっている。冬になると多量の雪を降らせるが、丁度この付近が降雪量の多少の境界となっており、本遺跡より下流は少なくなる。標高は1150ｍである。遺物は縄文式中期・後期の土器、石鏃、磨石、鉄鏃などが出土し、高地性遺跡の在り方を示しているといえる。

(2)寺久保Ａ遺跡（協和字寺久保）

寺久保Ｂ遺跡より900ｍ下流左岸の寺久保部落に位置する。標高は1000ｍで、八丁地川はやや蛇行しはじめ川幅も広くなり谷平野が少し広がっている所である。クマザサなどの原生植物が繁植し、この付近より水田耕作が行なわれている。土師器、須恵器など平安時代の遺物が出土している。

第１図　八丁地川周辺地形図及び遺跡分布図

（１：60000）



(3)菅原遺跡（協和字菅原）

寺久保Ａ遺跡より菅原遺跡までは、直線距離にして4500ｍほどあり、その間はまだ遺跡の発見がない。浅田切からは雨境峠に向かう道路があり、古代東山道の要所と言われているが、その地域が最も平野部の広がる所であり、段丘も険しく発達している。押出しから菅原にかけて集落が増えはじめるが、この間に複輝石安山岩の鉄平石の切り出しが行なわれている。また、やや下流の畳石にまでも切り出しが行なわれている。菅原遺跡は、八丁地川左岸の北東に面した

日当りのよい段丘面にあり、後背は鉄平石の露頭箇所が迫ってきている。標高は900mである。縄文式時代中期後半の遺跡で、磨製石斧などが出土している。

(4)畳石遺跡（協和字大石）

菅原遺跡より300mほど下流の、県道浅田切線と八丁地川の中間の段丘面にあり、縄文式中期後半の土器が出土している。環境は菅原遺跡と同様、後背には鉄平石の露頭が迫る要害の地である。

(5)平石遺跡（協和字平石）

俗名大谷地と呼ばれる平石付近より、しだいに複輝石安山岩で構成される蓼科山の裾野の一群が終わりはじめて来、下流方向に視野がいっきに開けてくる。本址は八丁地川左岸にある県道浅田線の左岸にあり、縄文式時代中期と平安時代の遺物が出土している。

(6)山の神遺跡と山の神古墳群（協和字山の神）

この付近の右岸には、まだ要害の鉄平石露頭箇所が残るが、平野部は開けており生活環境としては良好な所である。山の神遺跡と古墳群は同じ地点に存在しており、縄文式時代中期の遺物と平安時代の土師器、須恵器が出土する。古墳は、かっては数基群集していたようであるが現在では二基しか存在しない。そのうち一基は昭和45年に耕作による破壊に伴なって調査をした古墳であり、直刀19、小刀32、刀装具20、馬具4、埴輪片4、鉄鏃53、勾玉7、管玉1、切子玉17、金環13、銀環1、金鈴2、が出土している良好な資料である。墳丘と石室は破壊され、調査がゆきとどかなかったようだが、これらは後期古墳の所産である。現在では遺物のみ保管されているだけである。

(7)内裏塚古墳（協和字新林・字大里久保）

内裏塚の名の通り、1号墳と2号墳の2基が存在する。標高875mの山頂にある円墳で、2基ともかなり大きなものである。明らかに前期古墳の様相を呈している。ここからは、西に土林の狭谷、北には八丁地川の開けた平野と管平連山、東には鹿曲川によって開けた平とさらに東方には佐久平、浅間山の雄姿と連山が一望のもとに望め、また南には蓼科山がくっきりと映えているのが望める。平野部との比高差は、およそ140m程である。内裏塚古墳は、まだ未調査で盗掘や破壊が全くなく当時の様相をそのまま伝えている。

(8)(9)上吹上遺跡（協和字上吹上・字中吹上）

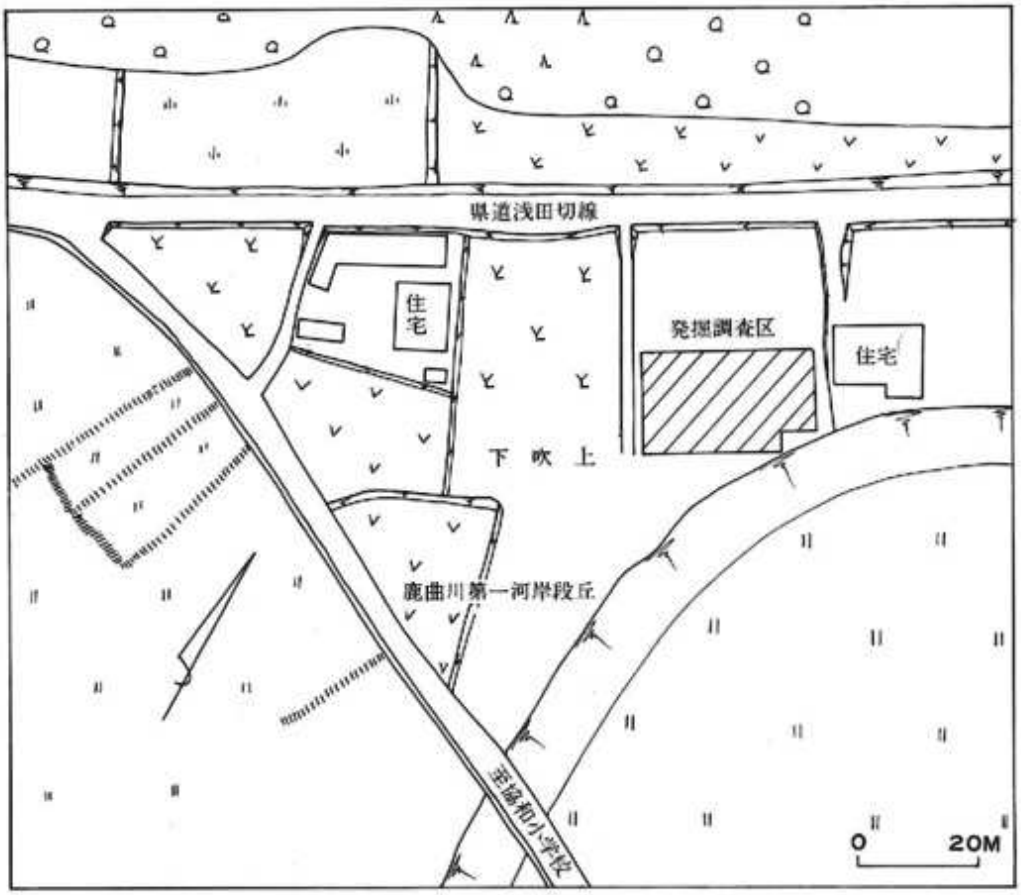
本遺跡付近より八丁地川は平野の中央部を流れはじめ、両側には河岸段丘をみごとに発達させている。遺跡は左岸の段丘上にあり、南向きで日当りのよい所である。縄文式中期、後期の土器、石器が出土している。

(10)下吹上遺跡（協和字下吹上）

本文参照

(11)貴船神社古墳（協和字貴船反）

貴船神社古墳は、貴船神社の裏手にあり、積石塚的様相をにおわす古墳である。保存状態が



第２図　下吹上遺跡周辺地形図（１：1200）

悪く、くずれかかっている。位置は八丁地川の左岸の段丘より丘陵に上る斜面にある。

⑿⒀真光寺遺跡、真光寺古墳（協和字真光寺）

真光寺遺跡は八丁地川と県道浅田切線の中間の段丘上に位置し、縄文式中期、後期の土器、石器、土師器、須恵器などの平安時代の遺物が出土している。真光寺古墳は、段丘際に在り、積石塚的な様相をにおわしているが、この付近にはヤックラ状に積み上げられた石積みがあるため、後に石捨て場となったようである。しかし、ヤックラと思われているものの中に古墳の存在が確認される可能性もある。

⒁⒂下高呂古墳群、大塚古墳群（協和字下高呂、字大塚）

現存しているものは、下高呂古墳群で１基、大塚古墳群で２基が残存しており、後世の破壊によって大部分が失なわれている。大塚古墳はかなり大きな円墳が残り、八丁地川左岸の段丘に位置している。

⒃⒄尾崎古墳群、藤塚古墳群（協和字尾崎、望月字中原）

尾崎古墳群と藤塚古墳群は、近くに近接していて一括して１つの古墳群として呼び直した方が適当であると考えられる。現在では尾崎に１基、藤塚に２基存在しているが、かってはかな

りの数にのぼり、後世にほとんどが破壊されてしまっている。この地点は八丁地川と鹿曲川が合流する所で、鹿曲川によって作られた河岸段丘と、八丁地川によって作られた河岸段丘の接点にも当たり、立地的にも各時代の文化の要地となっている。

⒅極楽寺遺跡（協和字極楽寺）

鹿曲川と八丁地川の段丘の接点を成す立地条件にある本遺跡は、沖積層台地に展開される典形的な縄文式時代後期の遺跡である。多量の土器、石器の他、住居址、炉址等の遺構が見つかかっている。特に地域的特色のある板状節理面を両面にもつ打製石斧が見つかっている。しかしながら近年になって、畑地作出のために破壊されてしまった。

以上八丁地川水系に於ける主要な遺跡を概観してきたが、遺跡の立地と自然的環境がかなり的確に把握することのできる条件をそなえているといえる。この水系には、自然環境に足した地名（小字）がかなりあり、地名を見ればいかなる地形をしているのかが分るほどである。

①「久保」―寺久保・西久保口・西久保入・大久保・東久保・半兵衛久保・小豆久保・舟久保

②「沢」―唐沢・本沢・細尾沢・腰巻沢・上合之沢・合ノ沢口・延沢・浅田切・赤谷

③「石・岩」―大石・畳石・平石・立石・岩下・鳶岩

④「木・山」―五味之木・針之木・藤之木・ゴトメキ・新林・細山・八丁地峰

⑤「平・原」―大平・大平口・三ケ月平・上今平・中今平・中平・下平・今平口・柏原・菅原
上大行原・下大行原

⑥「川原」―上川原・平石川原・山ノ神川原

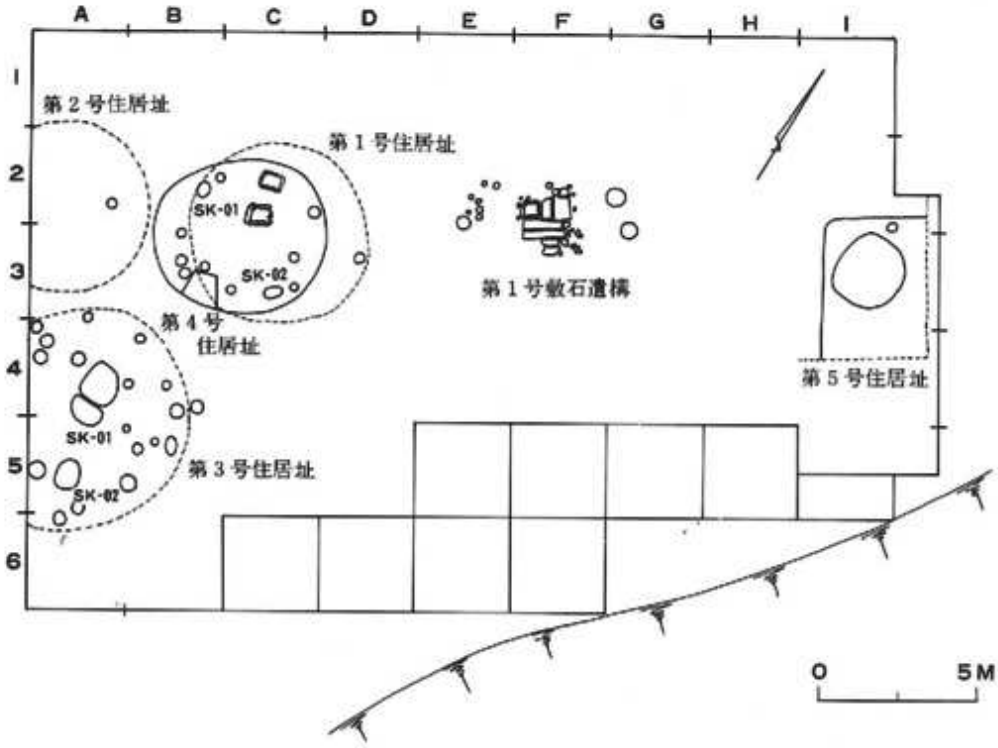
⑦「池・沖・崎」―八丁地・大谷地（俗称）・雨池・上沖・下沖・中島・尾崎

⑧「風」―上吹上・中吹上・下吹上

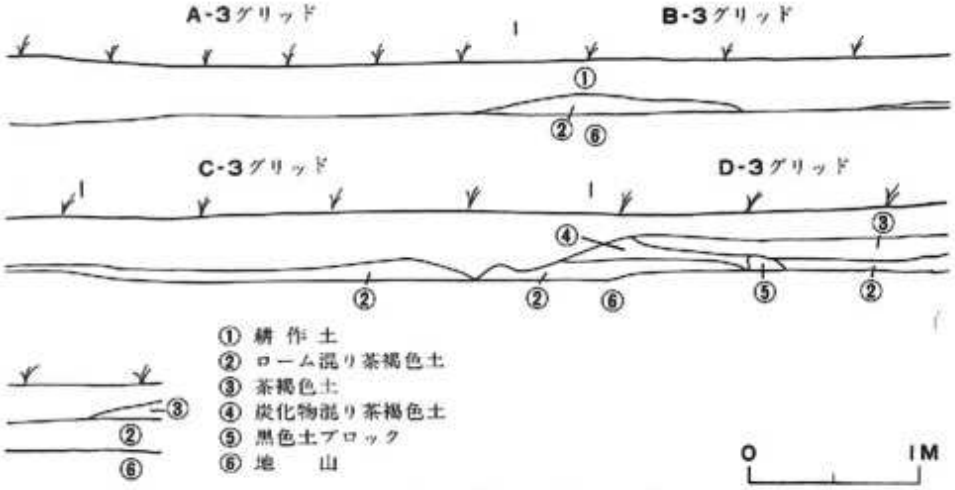
以上の分類を地域的環境から概観すると、上流地域の険しい狭谷と深い森林地域に於ては、①「久保」②「沢」③「石・岩」④「木・山」などに関連した地名が圧倒的に多く、また中流地域の比較的谷平野が広がり始める所には、⑤「平・原」の一部、⑥「川原」⑦「池」⑧「風」に関連した地名が多い。また下流地域に於ては、⑤「平・原」⑥「川原」⑦「沖・崎」にかかわる地名が多いのである。上記したように上流地域ではほとんど開けた所がなく、非常に険しい地形であり、中流に於ては、その険しさが急に開け始め谷平野が発達してくる。したがってその状況を伝えるべき、「平」平らな所、「原」・広がる平野、川幅を広げつつできる「川原」湿地を意味する「池」、風の吹きすさぶ吹上等の自然環境の故に名付けられたのであろうかと思われる。また下流地域に至っては、まさしく雄大に段丘が発達し、川幅も広くなって来る。したがって「平・原」があり、「川原」も存在する。八丁地川下流は、鹿曲川と合流する地点であり、「沖」や「尾崎」の地名が存在しているのである。自然とのかかわり合いはもののみごとに地名としても展開されているのである。この地にも「寺」にかかわる地名、「馬」にかかわる地名など住民の生活に直結する地名が数多く残されており、いかなる研究に於ても重要な位置を締めると思われるのである。

第3章　遺構と遺物

下吹上遺跡に於ける検出遺構は、縄文式前期中葉の住居址１軒、縄文式中期末葉の住居址４軒、同敷石住居址１軒が検出された。第１号～第３号と第５号住居址は耕作による破壊が激しく、特に第１号～第３号住居址は、壁面が存在せず、炉石までが抜かれてしまっている状態で全体プランを明確に把握することができなかったが、幸い柱穴等である程度の全体プランは想定することができた。第４号住居址は、皮肉ながら第１号住居址との複合関係の故に比較的良好な状態で検出することができた。また第５号住居址は、耕作土の厚い（深い）部分は良好な状態で保存されていたが、一部破壊の難を逃がれることはできなかった。敷石住居址の敷石部は、かって偶然にも発見され、そのまま埋め戻してあったため良好な状態で検出されたが、敷石上で出土した遺物は少なく、また原位置を保っているものははとんどないと理解してもよい



第３図　下吹上遺跡遺構全体図（１：240）



第4図　下吹上遺跡土層断面図（1：40）

第4図

状態であるが、プラン全体からすれば少量ではあったが良好な状態で出土している。また他の遺構全体の遺物は、遺構がそのような状態であったため床面に密着しているものを伴出遺物として取り扱い、その他の遺物は包含層の遺物として処理をした。

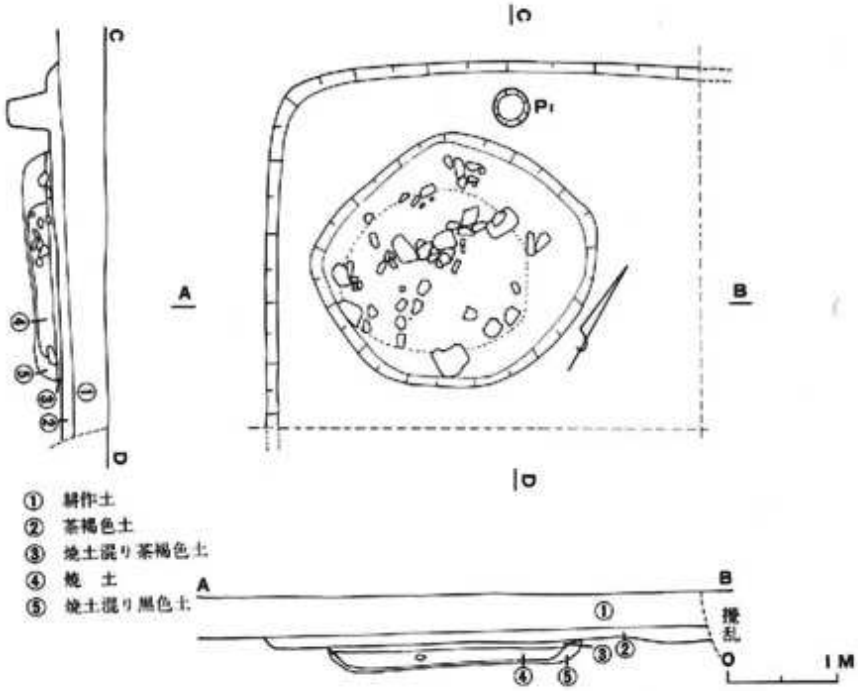
本報告書の特色は、各遺構ごとに遺物をまとめ、生活のセットとして捉えていくというものである。さらに遺跡全体の性格を捉える中で全体の遺物を比較見当していくという方法によるものである。以下遺構ごとに記述していく。

第1節　第5号住居址

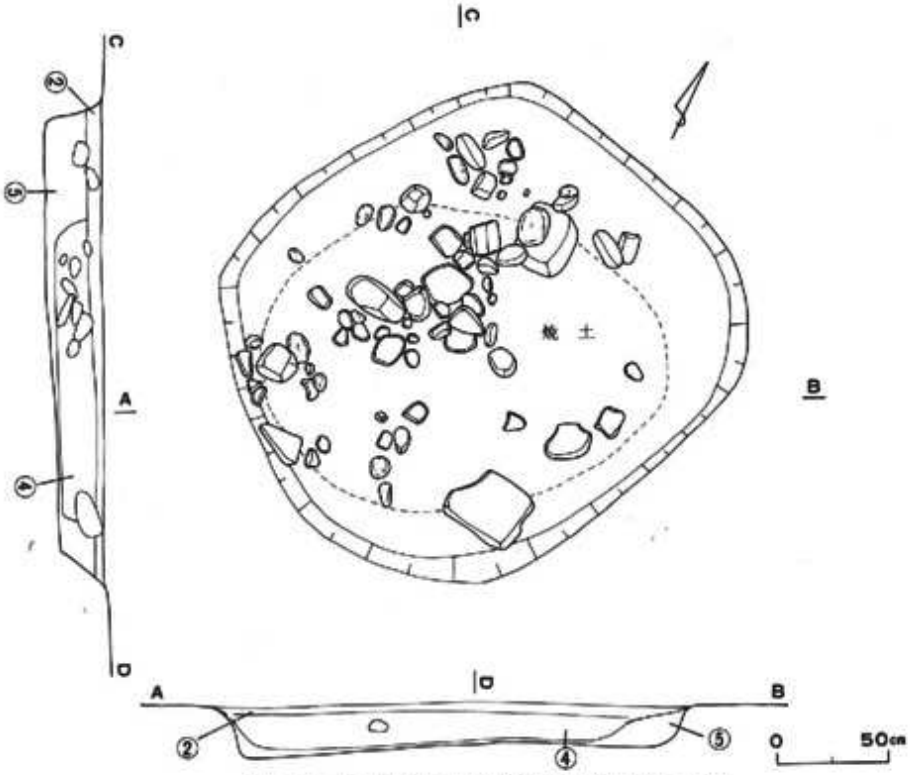
遺　　構（第5図、第6図）

本址は、調査地域の東側に検出された縄文式時代前期中葉の黒浜式文化に比定される竪穴住居址である。かかるグリッドは、I－2・3、J－2・3でプランの東側と南側は耕作により、破壊されており全体を捉えることはできなかったが、残存部は比較的明瞭に良好な状態で検出することができた。中期の住居址群が調査地域の西側に集中しているのに対し、本址はそれよりも約4mほど離れた東側に存在しており、また第一河岸段丘の河岸線より約3～4mほどの所に位置し、多少の地形の変化はあるかも知れないがかなり河岸線際に構築されている。

プランは、現存部で東西3.8m、南北3.25mを測り、隅丸方形を呈している。壁高は10～12cmで、かなり固く締まっている部分が所々に残っていた。床面はローム層上に存在するが、この上面に薄い黒色土が乗っておりタタキが成されたように固く締っており、この面がいわゆる生活面であったかと思われる。柱穴は北側壁面の中央よりやや西側に1個確認し、直径34cm、深さ37cmを測る。その他の柱穴は、プランの内部及び外部を精査したが確認することはできな



第5図　5号住居址実測図（1：60）



第6図　第5号住居址内特殊遺構実測図（1：30）

かった。炉址（第6図）は、プランの北西部にやや寄った所に不正方形の形状をして検出された。東西2.0m、南北2.23m、深さは場所によって差があり18～26cmを測る。炉址内部には大小さまざまな石が入り込んでおり、焼けて黒ずんでいるものが多かった。また焼土がほぼ全体に厚く堆積しており、かなり長期にわたって使用されていたのではないかと考える。堆積状態は、最下層に黄色土と焼土混りの黒色土があり、その上面に焼土が堆積していた。壁際には黄色土、焼土混り黒色土が全体に入り込んでいた。さらにその上面にはプランの覆土と同様の黒色土が全体に堆積していた。壁際の堆積は焼土の堆積よりも早い時期に成されたものであるため、少なくとも1回は炉址内の焼土等を掘り、また壁の補修などの現状変更を行なっているのではないかと考えられる。この炉址は、一般的なものに比べるとかなり規模が大きく、また焼石が多量に混入していることなどから単なる炉ではなく、焼石を投げ込んだいわゆる焼石炉的機能をもつ炉址ではないかと考える。しかしながら住居址の床面積に対する炉址の締める割合は非常に大きく、また焼石炉が住居址内施設として伴なっているのかという疑念もあるが、本址は少なくても床面から掘り込まれており明らかにプランに伴なう施設として理解できよう。

遺　物

土器（第7図、第8図、第9図、第10図）

本址出土の土器は全て破片であったが、前期黒浜式に比定される良好な資料が多数出土している。これらの資料は、胎土、施文原体、精製と粗製を捉えるにはかなりまとまっており、この地域に於ける指標ともなる良好なものである。

出土した資料を分類すると次のようになる。

第Ⅰ類土器：縄文を文様の主体としているもの

A—無節、単節の斜縄文

B—縄の末端を利用した文様

C—結節縄文

D—羽状縄文

E—組紐縄文

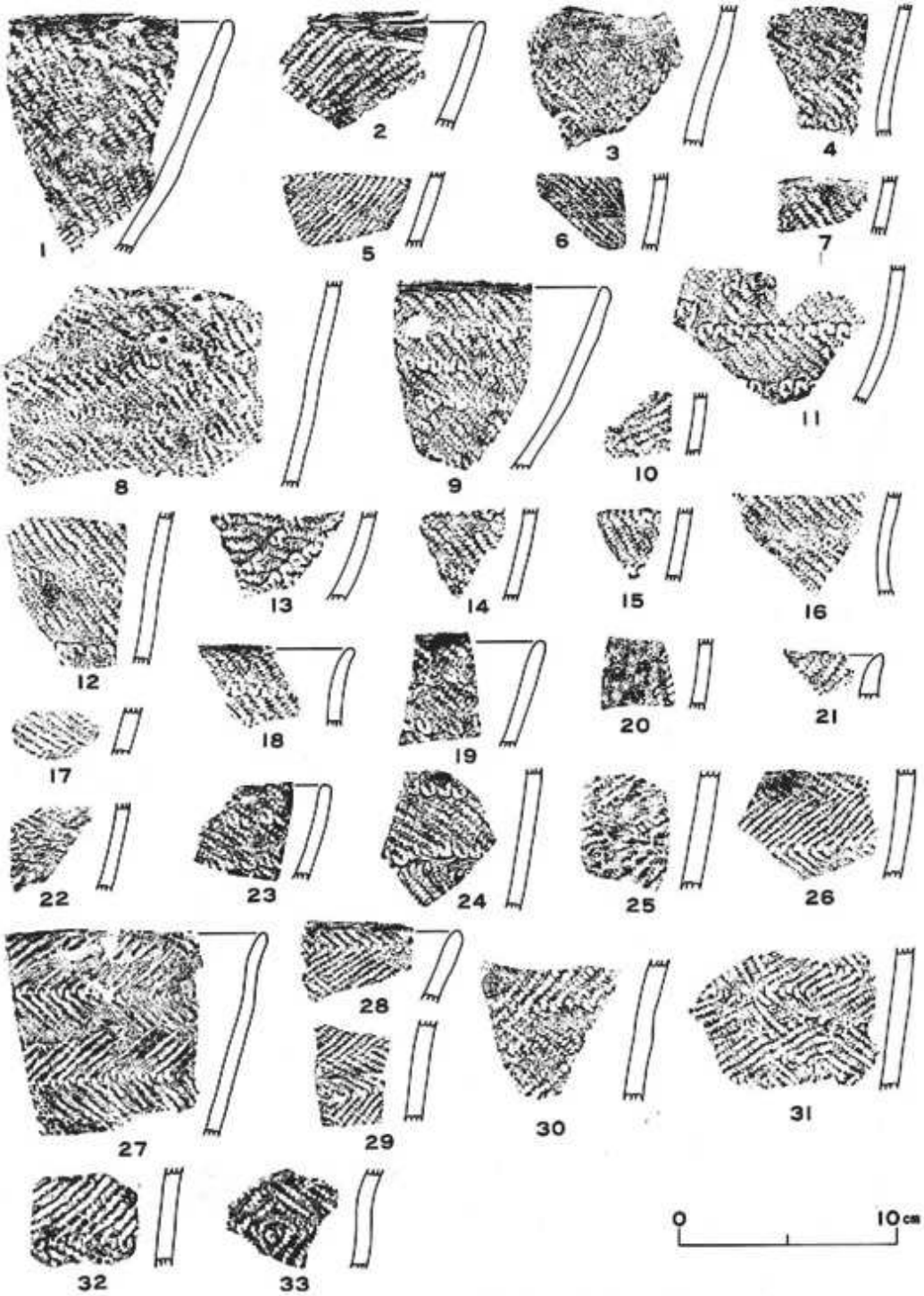
F—異条縄文

第Ⅱ類土器：半截竹管文を文様の主体としているもの。縄文との組み合わせも含まれる（半截竹管文が主体）

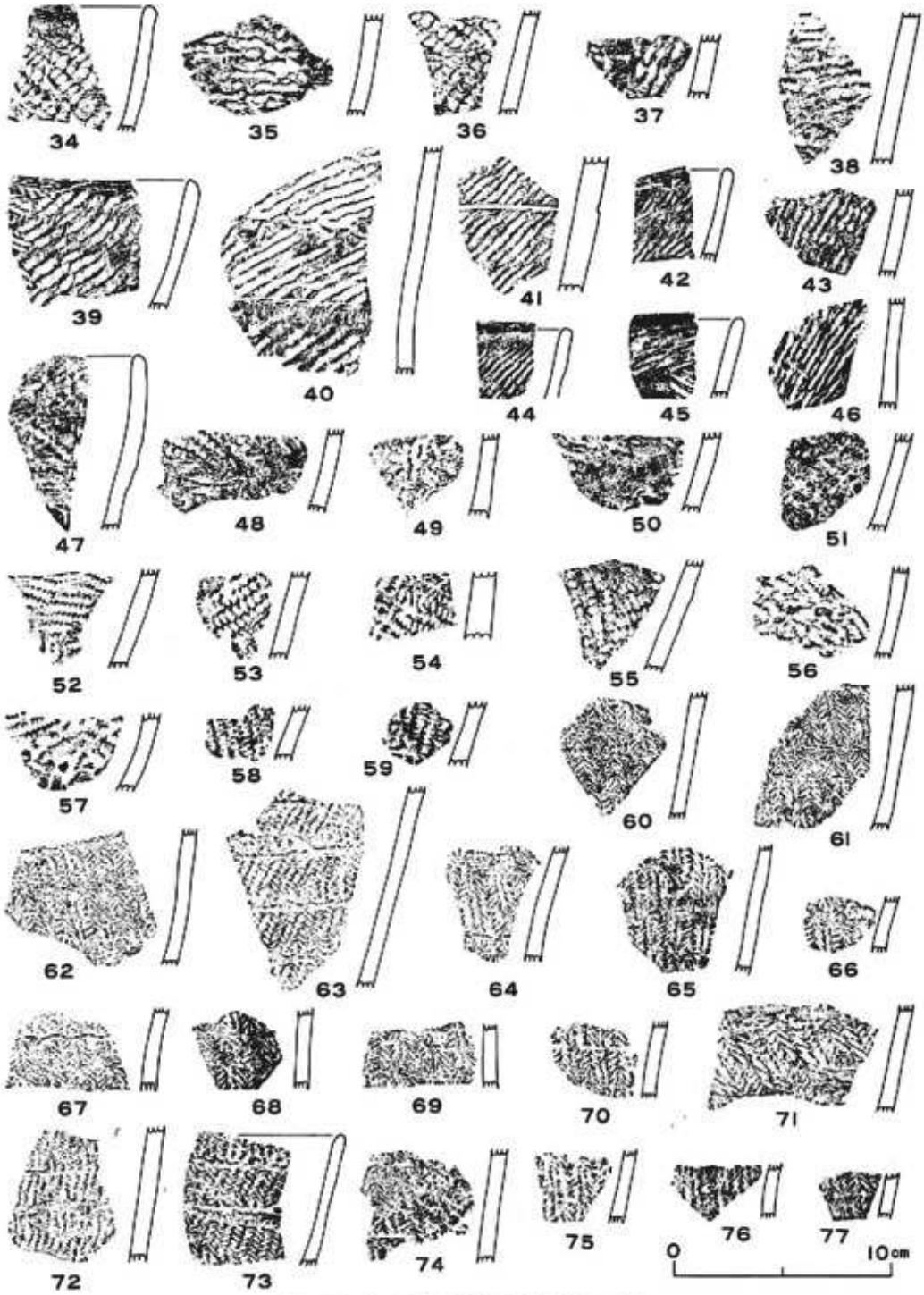
第Ⅲ類土器：沈線が文様の主体となるもの（本類は櫛歯状工具による波状文）

第Ⅳ類土器：粗製土器

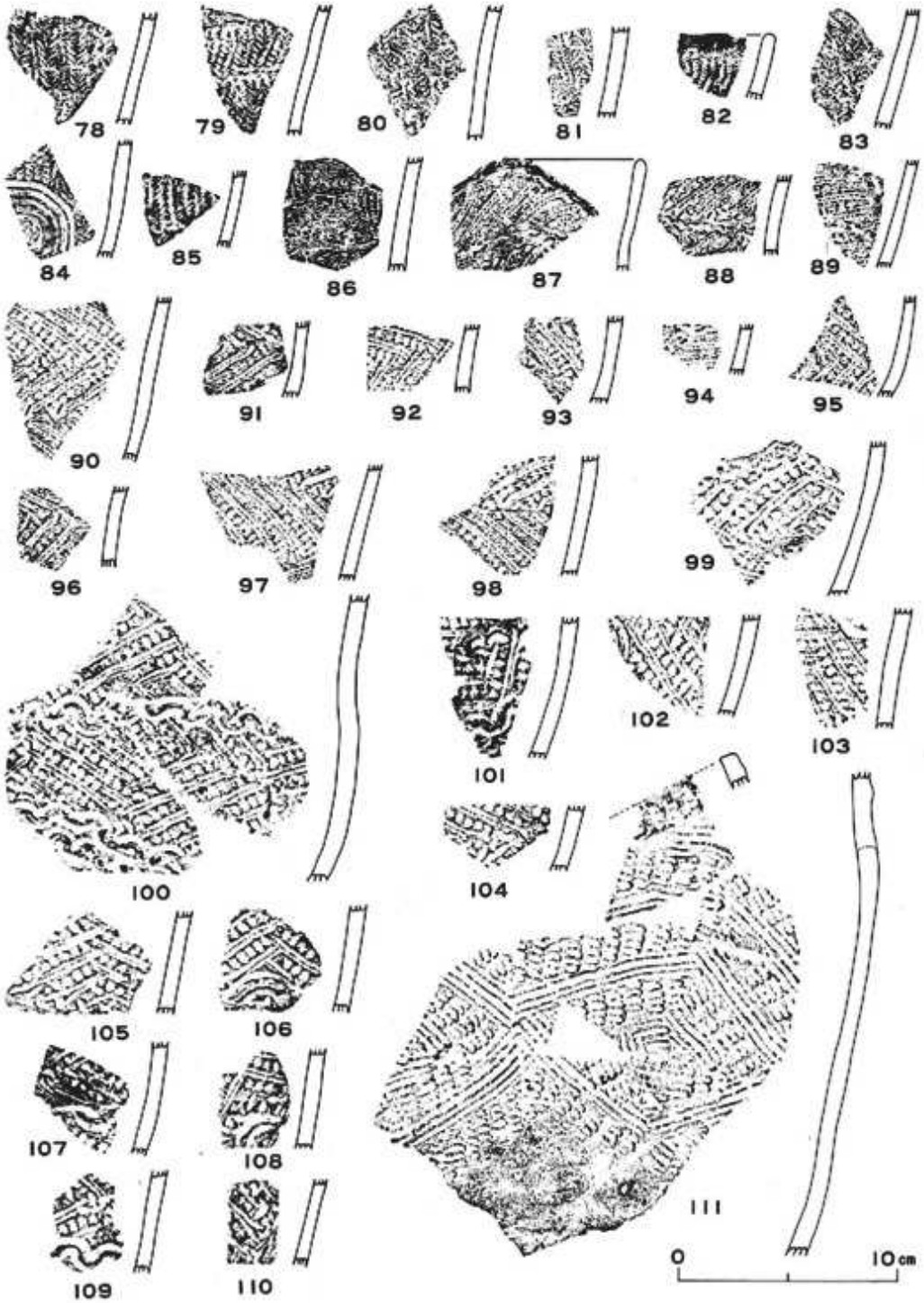
上記の分類のように黒浜式期におけるわずか1軒の住居址出土の土器であるがかなりまとまった分類が可能である。以下この分類に基づいて資料の検討を行なっていく。



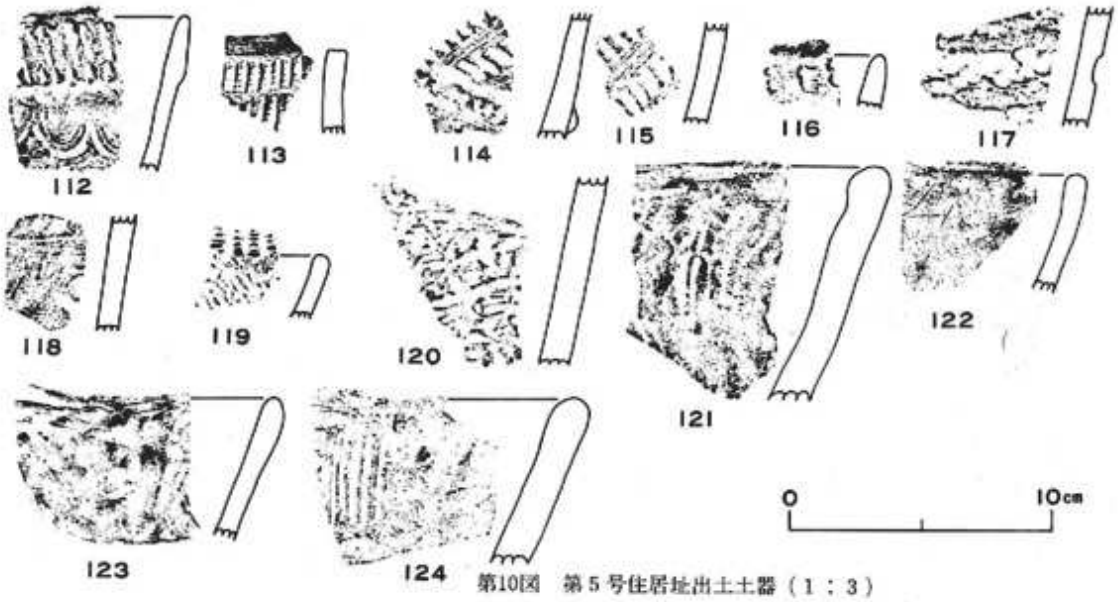
第7図　第5号住居址出土土器（1：3）



第8図　第5号住居址出土土器（1：3）



第9図　第5号住居址出土土器（1：3）



第10図　第５号住居址出土土器（１：３）

第１類Ａ土器　（第８図35、37～38、40～46〔無節〕、第７図１～７、10、第８図47～59、〔単節〕）35、37～38、39～40は比較的粗大な無節縄文で、かなり太い原体を回転押捺している。そのうち35と38は、器面に対して原体を斜めに回転し施文している。いずれも胎土には繊維が多量に混入しており、黒褐色を示すもろい土器で、器厚は0.7～0.9㎝を測る。その他は器面に対して横方向に原体を回転させて施文しており、37～39は原体の直径約0.4～0.5㎝あり、器面に対して深く施文されている。37の原体の長さは3.5㎝が１単位となっており、縦に数段の施文を行なっている。器厚は0.8㎝で胎土には多量の繊維が混入し、内外面とも黒褐色を呈しており焼成は良好であるが、混入している多量の繊維が焼失し空洞化状態になっているため比較的もろい状態である。41～46は一般に多くみられる原体の太さで、41は横方向の沈線を施文した後、縄文を施文しており、厚さは1.2㎝と本址出土の土器の中では最も厚く、胎土は精鍛されており表面黒褐色の焼成良好な資料である。42は口縁部の資料で口唇は丁寧に調整され丸味を帯びている。器面には所々に凹凸があるため凹部は文様のはっきりしない所が残る。44も同様口縁部の資料であるが平縁を示している。器厚は不均一の部分があり、口縁から胴部に至る間に極端に薄くなる所があり、また口縁部直下には無文部がある。45も口縁部の資料で、42と同様口唇は丸味を帯びている。口縁直下の施文は左から右方向に原体を回転させ、その直下には右から左方向に対して施文しており、交鎖付近には無文部が残されている。器厚は0.6㎝で内外面とも茶褐色を示す焼成良好の土器である。

１～７、10、47～59は単節の斜縄文である。１は口縁から胴部に至る資料で、口唇はやや丸味を帯びており、器面は規則的に微妙な凹凸がある。繊維の混入は微量であり、本址出土の中にあっては最も少ない部類に属している。器面は黄色、内面は茶褐色で焼成良好であり、器厚は0.6～0.8㎝を測る。縄文の撚りはＲ$\frac{L}{L}$である。２は１と同様丸味を帯びている口縁の資

料である。断面の傾きも1と全く同様である。口縁直下には僅かに無文部があり、その直下にL｛$\frac{R}{R}$の斜縄文が施文されている。器厚は0.8cmを測り表面は黄色、内面は茶褐色で焼成良好の資料である。胎土にはごく微量の繊維が混入している。5と6は節の細かい原体を使用しているが、5はL｛$\frac{R}{R}$、6はR｛$\frac{L}{L}$の斜縄文である。胎土な比較的均一で、繊維はごく僅か混入されている。器厚は0.7cmを測る。

第Ⅰ類B土器(第8図9、11～16、18～25)

9は口縁部から胴部にかけての資料で、口縁直下1.5cmの所に焼成の後内外面の両方から補修孔が開けられており直径1cm、内径0.4cmを測る。口唇は丁寧に整形され丸味を帯びている。原体はR｛$\frac{L}{L}$を示し、縄の末端の折り返し部が回転することによってリング状の文様がついている。施文は口縁より始まっており、施文サイクルは2.7～2.8cmである。内外面とも黄褐色を示しているが、かなりススが付着し黒ずんでいる部分が多く、また横方向に対する整形痕が顕著である。器厚は0.6cmと薄く砂粒と小石が僅かに混入しているが、繊維はほとんど混入しておらず焼成は良好である。11は胴部中央から下半にかけての資料で、R｛$\frac{L}{L}$の原体を示し施文は2.5cmが1単位となっている。器面はススが付着していたり、炎が当って黒色を呈し、また内面は横方向のなでの整形が行なわれ、茶褐色を示している。胎土には雲母、長石、石英が混入していいるが均一であり、繊維の混入はなく焼成やや良好の資料である。12～16は前掲と同様R｛$\frac{L}{L}$の形体を成し、整形も横なでの手法である。また注目するところはいずれも繊維の混入が全くないことである。18は口唇が丸味を帯びる口縁部の資料でやや外反している。原体はR｛$\frac{L}{L}$で施文の横帯は1.5cmと本類の中では最も小さな単位の資料である。内外面とも茶褐色を呈し、胎土には砂粒が混入しているが繊維の混入はなく比較的均一で焼成はやや良好である。19の口縁部の資料は、口唇が丸味を帯びる形状を成しており反りはない。原体はR｛$\frac{L}{L}$で施文単位は2.5となり口縁直下まで施されている。内外面とも茶褐色を示し、ススが付着して黒ずんでおり、胎土には繊維の混入はなく焼成良好である。器厚は0.7cmを測り口縁直下がやや厚みを帯びている。23の口縁部の資料は、部分的な整形の癖であると思われるが若干の波状を成しており、器体の傾斜に対して直立した口縁をもっている。原体はR｛$\frac{L}{L}$で0.2 cmを単位に施文されているが、原体の折り返し末端部に近い部分は器面に対しての接着が弱く無文部が残っている。器厚は0.6cmで繊維の混入はなく胎土は均一であり、内外面とも赤褐色を示す焼成良好の土器である。25は原体R｛$\frac{L}{L}$を示し、施文単位2.5cmを測る資料で、繊維の混入はなく横なでの整形痕が顕著に残っている。

第Ⅰ類C土器(第8図8)

本址出土の第Ⅰ類Cに属する資料は1片だけであった。8がそれで原体はR｛$\frac{L}{L}$を示し、2.2～2.5cm間隔に1つの結節があり、あまり目立って大きなものではなく縄文の節と同程度のものである。胎土には繊維の混入はなく、砂粒が僅かに混入しているが均一であり、器面は茶褐色を示し内面は黒灰色でかなり厚くススが付着している。指の腹で横なで状に整形した痕がはっ

きりと残されている。器厚は0.6cmを測り、器体の大きさにしてはかなり薄く焼成良好の資料である。

第Ⅰ類D土器（第8図26～33）

羽状縄文の原体に於ける基本形態は、縄の撚りの中間点に結束または連絡がみられるものであり、結束部を中心として左右の両端部から同じ方向に撚ったものと、回転させることによって生じるものである。本址出土の羽状縄文（第Ⅰ類D）は全てこの範中にあるが施文方法が異っている。26～29は同様の施文方法を成しており、26は結束部の左右の太さがやや異っているが撚りの強さの異いであると思われる。27は26と同様に結束部の左と右では節の大きさに差があり、撚りの異いを表わしているが、全体にかなり密に撚ってあり、また原体の繊維そのものも細いものを使用しているのではないかと考えられる。原体は$R\left|\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.-L\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$となっており、長さは4.5cm程度になると思われ帯状に施文されている。口縁部は外側へやや外反し、その直下は内外にわずかくぼんでおり、また器面全体に凹凸がみられる。内面は横なでの整形が顕著である。器厚は0.5～0.7cmで、胎土には雲母が少量と石英が多量に混入し、また繊維も比較的多く混入しており、全体に赤褐色を示す焼成良好の土器である。28は口縁部の資料で、やや厚味をもっているが、口唇は外側に向けた平縁ぎみの様相を呈している。原体は$L\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.-R\left|\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.$で本資料も左右の撚りの変化があり、器面には右から左方向に帯状の回転施文を行なっている。原体の長さは2.0cmで1本の指で施文できるほどである。器厚は0.7～0.8cmを測り、繊維が多量に混入し、内外面とも茶褐色を呈しているが器面はススが付着し、かなり黒ずんでいる。29は左から右方向に回転施文しているもので繊維がかなり混入している。31は他とはやや異なった施文方法である。左から右方向に施文し、施文の始め部分に再び戻りそこから逆に右から左方向に施文されており、丁度施文開始点を基点にして左右両側に対象的に羽状縄文が広がっていく構成である。一回の帯状施文の長さはごく僅かであり、左方向からの施文と右からの施文の接点は丁度菱形を程するようになっている。したがって各所に重なっている部分がみられる。胎土には多量の繊維が含まれており、「繊維で固めた土器」という表現の方が適切のように思われるほどである。内面は赤褐色で横なでの整形が行なわれており、外面は茶褐色である。胎土に混入している繊維が焼成中に燃えて空白部がかなり目立っている。器厚は0.8cmを測り第Ⅰ類Dの中にあっては比較的厚い方である。同様な施文をしているものに33がある。施文の末端と末端との接合点で菱形を呈する部分である。原体の左右の撚りが異なっているため器面の縄文の太かが異はっているようにみえる。外面は黄褐色を示し、内面はススが厚く付着しており真黒である。器厚は0.7cmを測り、胎土には小石と多量の繊維が混入している。32は、$R\left|\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.-L\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$の原体を使用しているが、撚りの密度があまり良くない。胎土には繊維が多量に混入しており、やや焼成不良の土器である。

第Ⅰ類E土器（第8図60～77、第9図78～86）

本類は組紐の回転よる施文の土器である。組紐原体は、通常4本の条を用いて作る丸組紐と

3本の条を用いて作る平組紐とがあり、丸組紐は回転による施文であり、平組紐は側面の押圧による施文である。本類は丸組紐に属している。丸組紐は中部地方から東北地方に分布しているが、下吹上遺跡の周辺地域にはあまり出土例がない。

60～62、64～71、74～78、80～81、83、85～86は4本の条で右撚り（R）の原体を用いて施文した資料で、原体の太さは全体的にほぼ同一とみられるが、撚りの密度とは若干の差異がみられる。原体には、長さ1.5～1.8cmの間隔で結束状の巻き紐があったとみられ、文様には、原体の回転方向と同一方向に痕がみられる。これは、組紐原体がかなり太くなり、撚りが元に戻ろうとする性質を中間でほぼ等間隔にくい止めるために結束を行なった結果ではないだろうかと思われる。器厚は0.6cmと全体に均一で、胎土には砂粒が混入しており焼成良好である。繊維の混入は全くない。色調は内外面とも茶褐色を示すが、部分的に炎の当り方の異いやススが付着している所があるため黒褐色を示すものである。内面には横なで整形痕が非常に顕著である。63、72～73、79、84は4本の条で左撚（L）の原体を用いて施文した資料で、原体の太さ、器厚、胎土などかなり同一性をもっている。73は口縁部の資料で、口唇は丸味を帯びており胴部に連なる部分には余り変化はなく直線的である。この資料の口縁はやや波状的様相を伝えているが、波状口縁ではなく部分的な整形の癖であると思われ、実際には平縁である。胎土には砂粒が混入し、黄褐色を示す焼成良好の資料であるが、繊維の混入はない。84は組紐文様の中に5条を数える同心円的な波線文が施文されている。同心円になるかどうかははっきりと確認することはできないが、5条の刻み目を細工した工具によりいっきに施文したと思われる。器厚は0.6cmで砂粒が混入し、茶褐色を示す焼成良好な土器であるが、繊維の混入はない。

第Ⅰ類F土器（第9図87～110）

本類は異条縄文による回転施文の資料であり、さらに本類を原体の太さによって三種類に分類することができる。原体の撚り方は三種類とも同一で、Rの単節原体をLに撚り、Lの単節原体をRに撚り、撚った二本の原体をさらにRに撚って作った原体である。したがって図式するとR｛L/R｝となる。文様は全体の条は右上がりとなり、比較的細い二条のL・Rの条が平行して並び、それに平行しながらRの太い条が走るようになる。

87は波状口縁を成す口縁部の資料であるが、口縁の外側にやや肥厚部分がある。器厚は0.5～0.6cmを測り、胎土には砂粒が僅かに混入しているが比較的均一であり繊維の混入はなく外面黄褐色、内面茶褐色を示す焼成良好の資料である。88は同様の文様構成をもつ資料であるが、原体末端部の環状の部分がみられる。厚さは0.6cmで、繊維の混入が無く、黄褐色を示す焼成良好の土器である。

原体の太さの中間的位置を示すものとして90～98がある。原体は密に撚られ丁寧に回転押捺されている。回転は帯状に左右両方から交互に行なっており、全体からすれば羽状の様相を呈する。器厚は0.6cmが普通で、胎土には少量の砂粒が混入しているが均一で、繊維の混入はない。外面が黒褐色、内面が茶褐色を示すものが多く焼成は良好である。

99～110は、同様の形状をもつ原体で施文された土器であるが、この種の中では最も粗大なものである。この種の特徴は、原体を器面に対して左右交互に帯状に施文することによって菱形の文様を作り出し、さらに施文した上から横方向に対して半円形のコンパス文が施文されている。全体からみると幾可学的な文様構成を成している。100は同部から底部に至る部分で、胴部中央はややくびれており、その上部は内側にカーブを描きながら口縁に至り、下部は外側にカーブを描きながら底部に至っている。器厚は0.8～0.9cmを測り、胎土には小石と多量の繊維が混し、外面茶褐色、内面黄褐色を示す焼成やや良好の土器である。

この種の粗大原体を施文してある土器と胎土には、砂粒や小石それに繊維が多量に混入していることが注目されるのである。そのため焼成が良好であればあるほど胎土に含まれている繊維が焼え、空洞化が態となり比較的もろい。

第II類土器（第9図111、第10図114、115）

111は、114～115と共に本址出土の唯一の沈線で構成される資料である。口縁部は波状を成し、外側に対しての折り返しになっている。文様構成は第I類Fの粗大形態に当たる資料と同様の菱形を呈しているが、半月形のコンパス文はない。菱形を呈する部分は5条の平行沈線で描かれており、その両側にやはり5条の列点文が描かれ、そのくり返しによる構成である。工具は5つの刻み目を入れたものを使用しているが、沈線が条になっているものと列点文になっているものの工具は同一であると思われる。胴部下半には無文部が残っている。器厚は0.7～0.9cmで、胎土には小石が僅か混入しているが均一であり繊維の混入が全くない。内外面とも茶褐色を呈しているが外面には胴部上半部に、また内面には胴部下半部にススの付着がみられ黒褐色を呈している。焼成はきわめて良好である。114は波状口縁部直下の資料である。口唇を欠いているが波状頂端部より粘土紐の貼付けによる隆帯が菱形にあり、隆帯上は竹管状工具により押し付けが行なわれ、したがって刻目状の沈線になっている。隆帯の両側には、111と同様の沈線がある。器厚は0.8～1.0cmを測り、胎土には繊維の混入はない。115も同様の波状口縁部である。

第III類土器（第10図112、118）

本類は2片のみであるが非常め珍らしい形態の資料である。112は口唇は丸味をもっており、外側に折り返し口縁となる。その間は2.5cmを測り、その折り返し部に押圧の縄文が施文されている。縄文部の器厚は0.5～0.8cmを測る。その直下には2cm幅の櫛歯状工具による半円形のコンパス文が施文されている。この部分の器具は0.5cmを測る。胎土は均一で繊維の混入はなく、内外面とも黄褐色を示す焼成良好の資料である。118は櫛歯状工具による沈線であるが、文様というよりは器面を調整するために行なっている整形痕であると思われる。したがって本類に入れるのは不適当かも知れない。器厚は0.8cmを測り、内外面ともにススが付着して黒褐色を示し、胎土には繊維が比較的多く混入している。

第IV類土器（第10図121～124）

本類は上記の精製土器に対する粗製土器の一群である。いずれも口縁部の資料で、器厚は0.8～1.5cmとかなりのバラエティーがある。122と123は比較的類以性のある資料で、口縁は丸味を帯びやや肥厚している。器面は黒褐色を示しているが粗製土器にしては丁寧な整形が成されている。胎土には小石が混入しており、また繊維も僅か混入している。121と124は、これも類以性のある資料で、口縁は丸味を帯びており、かなり肥厚している。器面は、口縁直下は横方向に対して、またその直下は縦に対しての整形痕が残っている。内面はかなり荒くなっており太い繊維痕が幾所にも残っている。口縁部付近にはススが厚く付着しているが、全体に茶褐色を呈している。

図示してないがこの他の資料の中に、器面に輪積み痕が明瞭にわかるものがあり、また混入している小石が浮き出ている。整形はヘラ状工具による縦・横のなでが行なわれているが、定まった方向性はない。胎土には小石、繊維が多量に混入されている。

以上類系別に記述してきたが、この分類には当てはめることのできない資料が数点あるので代表的なものをとりあげておく。

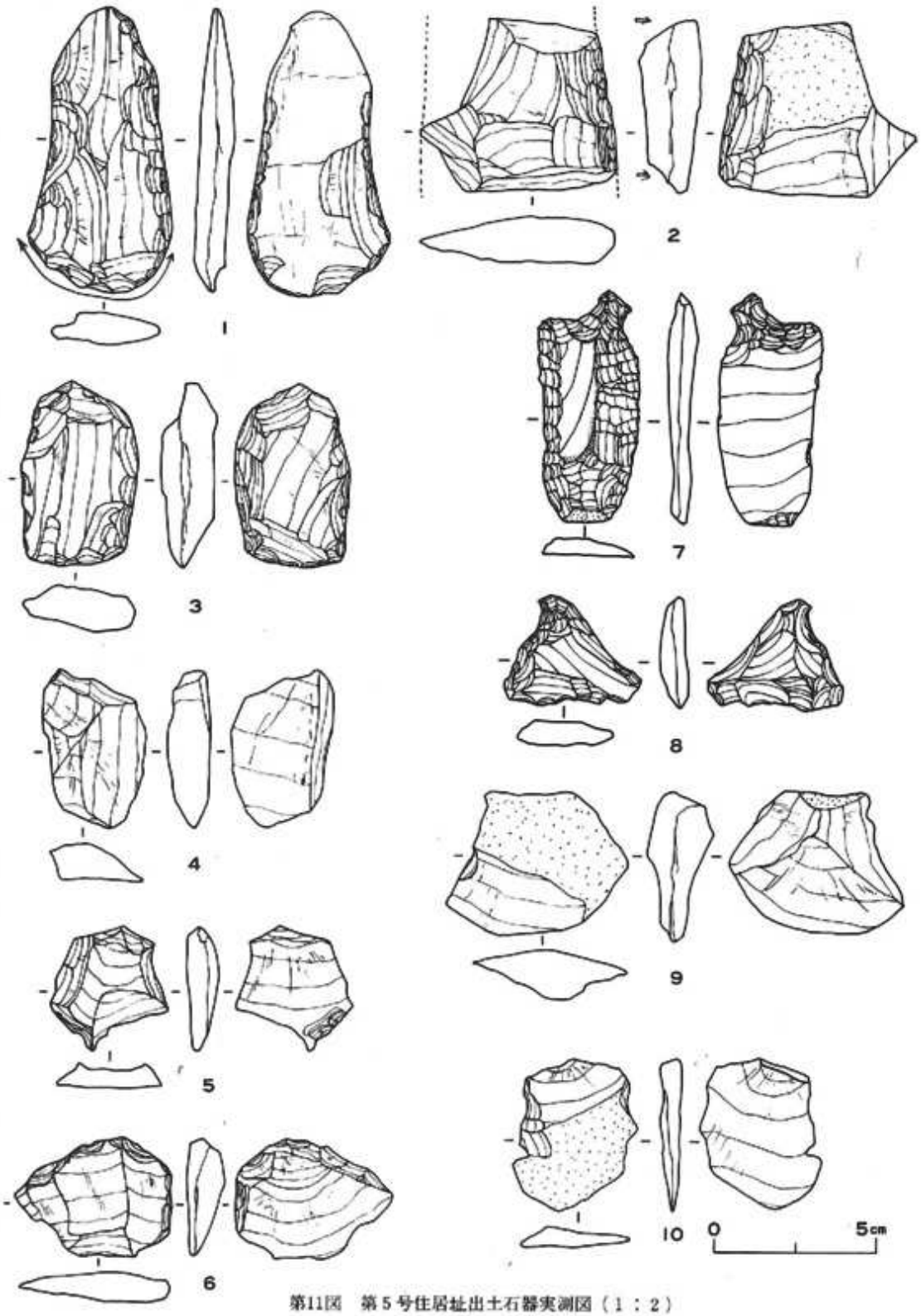
116は比較的厚味のある口縁をもつ資料である。施文工具ははっきりとはしないが、恐らくは幅１cm程度の刻目のある棒状工具を使用したのではないかと思われる、内外面とも黒褐色を示し、整形があまりよくない。117は同様にあまり整形のよくない土器である。文様は、いわゆる縄文であるが原体は、撚りのない繊維束の各所を結んでそのまま回転施文しており、したがって縄の撚り目はなく繊維痕のみ器面に残っている。器厚は0.9cmを測り、胎土には砂粒が混入しており、内面黄褐色、外面黒褐色を示す焼成良好の資料であり、繊維は多量に混入している。119は口縁部の資料で、全体に平縁を示すと思われるが、口唇に山形の刻目が無数に入れられている。さらにその山形部分に直交するように細い刻目が入れられている。器面側にも刻目があり、位置的には、第１回目の刻目直下に沿った形ちで行なわれている。その他の器面には右撚りの複節斜縄文が施文されている。胎土には繊維の混入はない。

石器（第11図、第12図、第13図、第14図）

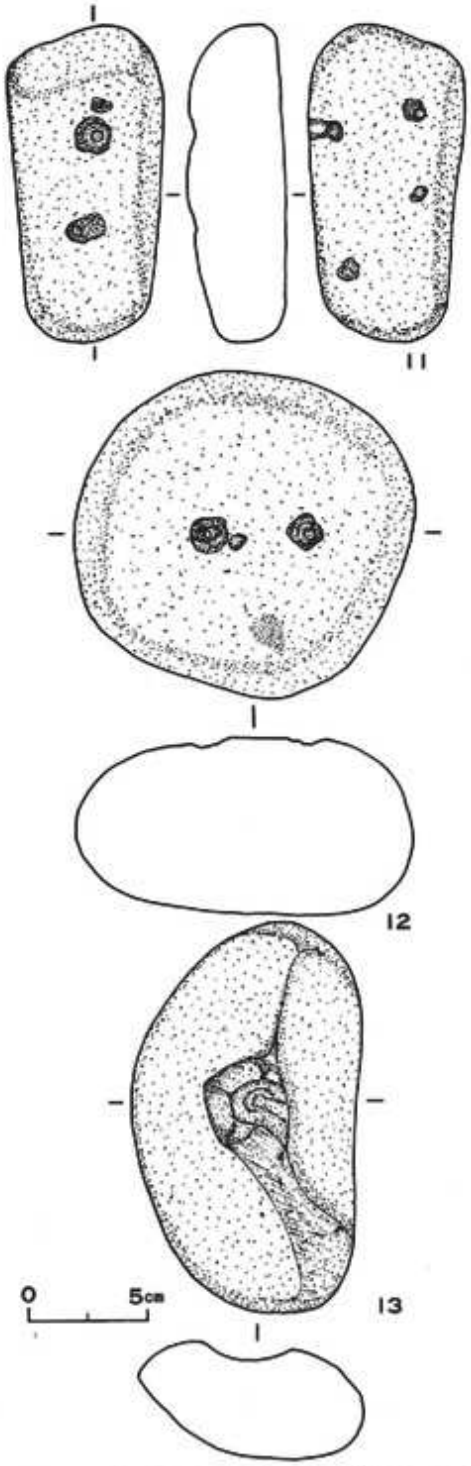
本址出土の石器は、前期の様相を呈する各種類は比較的まとまっているが、量的にはかなりかたよりのある出土状態をしている。特にその中では黒曜石製の鋭利な石器とそれに伴なう剥片が非常に多く、打製石斧や凹石などいわゆる純器的様相を呈する石器が少ないという特徴があげられる。出土位置は炉址からのものが大半を締め、床面からは比較的少なかった。

打製石斧（第11図１、２）

１は撥形を呈する資料で、縦径8.7cm横径4.4cm、厚径1.1cm重量40.0ｇを測る。第一次剥離は全体に周辺部から行なっており、ほとんどが横剥ぎの剥離面を残している。第二次剥離は、基部を限く部分に行なわれ、特に先端刃部と基部中央の所には何回もくり返し行なわれている。また裏面は、原石より１回の打撃によって剥離し、第一次加工ははとんど成されておらず第二



第11図　第５号住居址出土石器実測図（１：２）



第12図　第5号住居址出土石器実測図（1：3）

次加工によって調整している。使用痕はあまりはっきりとはしないが、僅か痕跡が認められる。2は、1とはかなり機能・形態が異なる打製石斧であると思われる。基部の中央部のみ残し、その他は欠損しているが、残存部の片面には自然の板状節理を残している。側辺刃部は片側しか残されていないが、表裏両側から刃部作出のための剥離がなされている。

石匙（第11図7・8）

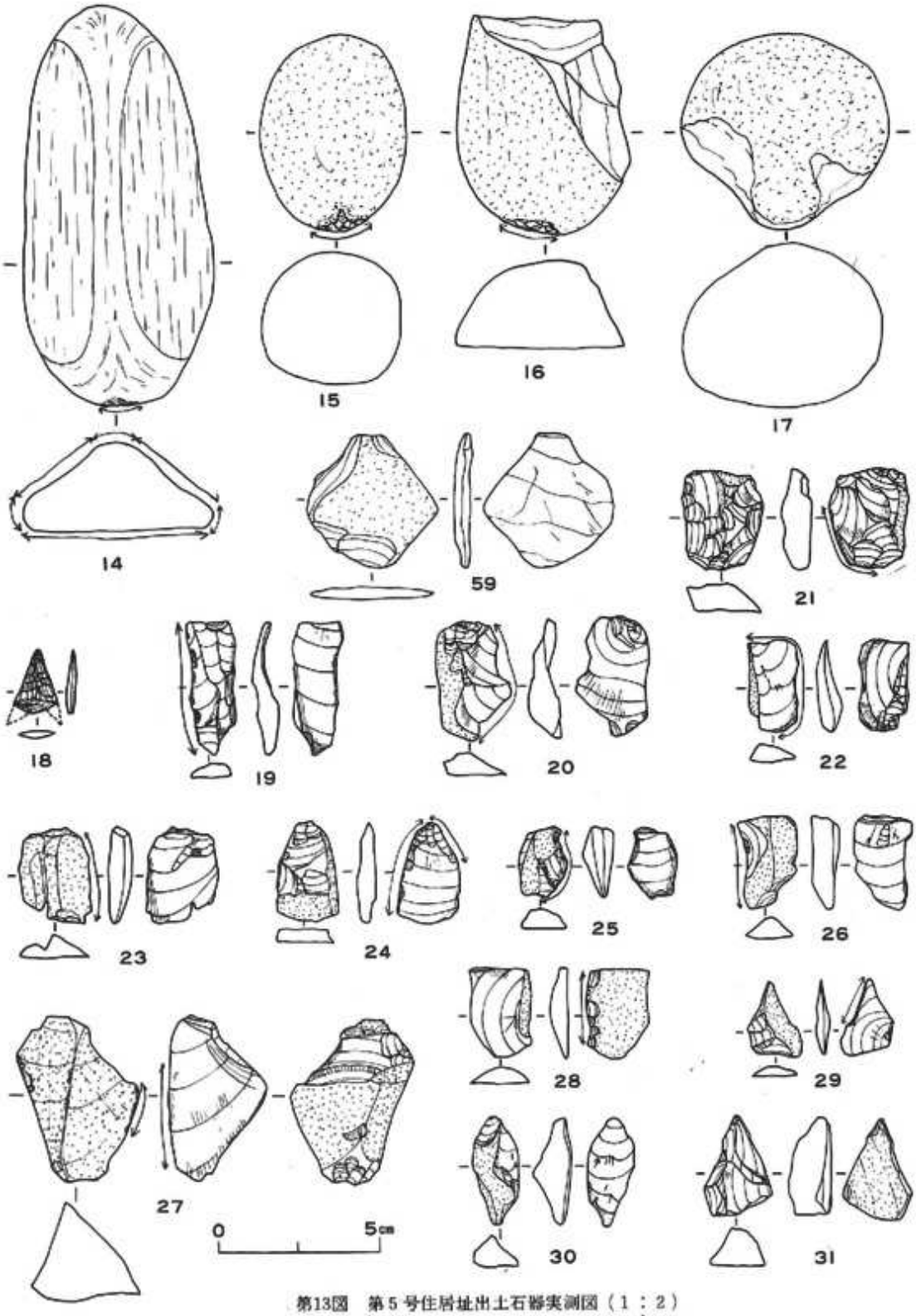
本資料は2点とも炉址内より出土したものである。7は縦径7.1cm、横径3.15cm厚さ1.0cm重量20.0gを測り縦長の形態を呈している。A面B面とも第一次剥離面を残しているが、特にB面は基部と先端部を限く全てがそうである。A面の整形は外側より内側方向に規則正しくほぼ全周にわたって剥離が成されており一部自然表皮を残す。石質は良質のチャートを使用している。8は黒曜石製の石匙で、形態的に非常に珍しい資料である。全体にかなり風化しており黒曜石の光沢がみられない。形状は三角形を呈しており、三辺とも刃部作出のためのリタッチが行なわれている。

石鏃（第13図18）

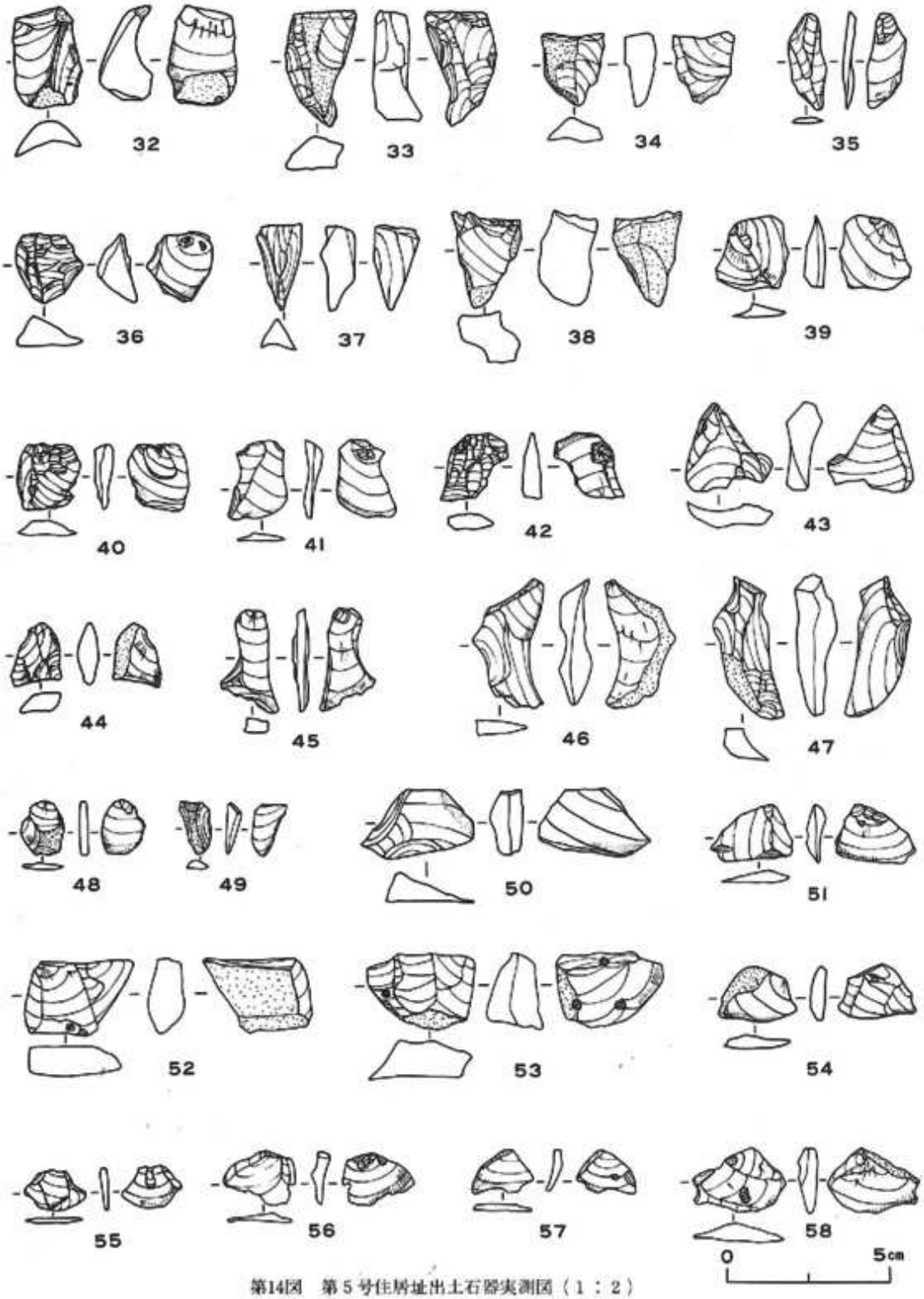
本址出土の石鏃は1点のみである。縦径2.0cm、横径1.5cm、厚径0.3cm、重量0.3cmを測り両脚部は欠損しているが、長身鏃で対称的な資料である。

掻器（第11図6、第13図19～29）

6は粘板岩製のスクレーパーで、他



第13図　第５号住居址出土石器実測図（１：２）



第14図　第５号住居址出土石器実測図（１：２）

は全て黒耀石製である。使用痕はみられないが、刃部作出のためのリタッチは顕著である。19はブレイド状の剥片を利用して側辺部にリタッチを行なった縦長のサイドスクレーパーである。剥離面はいずれも同一方向にあり規則性を有している。縦径4.1cm、横径1.5cm、厚径0.6cmを測る。20はＡ面に自然面をもつが、自然表皮を剥離した剥離面の側辺部を刃部とするサイドスクレーパーである。23は原石の自然表皮を剥離したフレイクをスクレーパーにしたもので、思考剥離面が見られない。26～28は同様に原石より剥離したフレイクを利用したスクレーパーであるが、自然面に対してリタッチを行ない刃部を作出している。27はスクレーパーの中にあっては非常に珍しい存在で、自然面は３面、剥離面は１面を数え、断面は三角形を呈する肉厚の資料であるが、刃部はほんの１部分である。縦径5.0cm、横径3.5cm、厚径3.0cm、重量30.0gを測る。

本址出土のスクレーパーは、Ａ面かＢ面のいずれかに必ず自然表皮面が残されているのが特徴である。

ハンマーストーン（第13図14～17）

14は断面三角形を呈する縦長の資料で、三面とも縦方向に対して研磨が成されており、特殊磨石の様相を呈している。先端部に僅かな使用痕が残っている。縦径12.3cm、横径5.9cm、厚径2.8cmを測る。15は楕円形の自然礫を利用した資料で、先端部には僅かに使用痕が残っている16は同様に自然礫を利用した資料で、基部には４回以上の打撃による剥離面があり恐らく両先端部を機能点として使用していたのではないかと思われる。17は円礫を利用した資料で、大きく２画の剥離面がみられるが、あまり使用した形跡は認められない。

凹石（第12図11～13）

11は硬砂岩を利用した凹石である。Ａ面Ｂ面合わせて７個の凹部があり、凹部の直径は0.7～1.5cmで深さはあまりない。12は普通輝石安山岩製の資料で、Ａ面にのみ３個の凹部が認められる。凹部の直径は1.5cmを測り深さはあまりない。部分的に研磨が成されている。13は硬砂岩の自然の凹部を加工して作出した資料で非常に珍しい。縦径16.1cm、横径9.4cm、厚径7.3cmを測る大きなものである。

これらの資料はいずれも炉址内より出土したものであるが、焼けた形跡はほとんどない。

加工痕あるフレイク（第11図4、5、10　第13図30、31、第14図33、35、36）

加工痕あるフレイクは、注意しないと単なるフレイクとして処理してしまうようなことがあり、本資料もその例にもれず細かく見ていくと比較的多く確認することができた。

5は使用による刃こぼれが見られる。10は自然面を取り除くための剥離痕がある。その他はいずれもスクレーパーと近以する形態をもっている。また全体的に自然面を持つ資料が非常に多い。

フレイク（第11図９、第14図32、34、37～58第13図59）

本址からはかなりのフレイクが出土しているが、特に炉址内からが多い。９は硬砂岩のフレ

イクであるが、その他は全て黒曜石である。出土したフレイクは、縦長と横長に大別することができるが、その比率は横長の方が若干多いか、もしくは同数程度になる。しかしこの中には剥片石器として使用されたものも含まれているかと思われる。

考　　察

（土器の胎土について）

下吹上遺跡第５号住居址は、黒浜式文化に比定される住居址であるが、望月町あるいは周辺地域に於いてはこの時期の遺構はあまり確認されていないのが現状である。本遺跡に於ても、調査区の限定もあろうが１軒しか検出することができなかったし、また分布調査の段階に於ても前期の遺物は全く確認されずにいた。そのようなことから、第５号住居址より調査区域外の東側地域にもまだ分布している可能性がある。本址は中期の住居址群と立地条件を同じくしており、地域性の問題をも含めて今後の重要な課題になるかと思われる。

前期は深鉢形土器に代表される文化であり、しかも胎土には繊維が多量に含有しているものが多い。本址から出土した土器は全て破片であって、器形を止める資料はごく僅かである。本址の資料を文様構成の分類から五に類別した。類別の内容は本文に記述したが第Ⅰ類ー第Ⅳ類まで分類し、その中で第Ⅰ類はＡ～Ｆに施文技法により細分した。さらに各類別ごとに出土した破片全てにわたって胎土の統計をとり、胎土の種類別に含有量を無量（×）、小量（△）、中量（□）、多量（○）の別に記入し、さらに統計上例外となる胎土を有する資料は、備考欄に明記した。

第１表を見ると、第Ⅰ類Ａの無節、単節縄文は、砂粒と多量の繊維が混入しておりその他は粘土だけであり、本類には例外なく全ての資料が該当する。焼成良好で厚手のものが多い。第Ⅰ類Ｂは単節の斜縄文であるが原体である縄の末端部を明瞭に施文しており、第Ⅰ類Ａとは施文の異いと胎土の異いによって分類した。本類は砂粒のみ混入しており均一した胎土である。ただし１片だけ雲母、石英、長石の混入している資料がある。第Ⅰ類Ｃの結節縄文土器、第Ⅰ類Ｅの組紐縄文土器、第Ⅰ類Ｆア・イの異条縄文土器は、第Ⅰ類Ｂと同様に砂粒のみ混入しており均一な胎土で、例外は１片もない。第Ⅰ類Ｅは、砂粒の混入量が小量の資料と中量の資料とがあるが、圧倒的に中量の資料が多く、焼成も非常に良い。また他の類別資料に比べて最も薄い。第Ⅰ類Ｆは異条縄文土器であるが、原体の大さによってア（細）、イ（中）、ウ（太）と細分した。アとイは砂粒のみ混入し均一な胎土であるのに対し、ウは小石と多量の繊維が混入している。したがって文様もかなり大担であり、多量の繊維が混入しており焼成中燃えて空洞化状態になっているため焼成は良好であるが比較的もろい土器になっている。第Ⅱ類は半截竹管文を主体とした土器で、小石のみ僅か混入しているだけであり、焼成は良好で比較的薄手の資料である。第Ⅲ類は櫛歯状工具による波状文土器で、混入物は全く無く均一な胎土である。第Ⅳ類は粗製土器である。小石と繊維がそれぞれに中量の混入がある。本址出土の土器の中では

最も厚く、整形はよくないが、焼成は比較的良好の部類に属するものである。

以上のように統計的に捉えることができ、さらに詳しくみると次のようなことがいえる。

類別と繊維との関係からみていくと、繊維が混入しているのは合計5類を数えるが、含有量は全体に多量である。そして繊維が混入している資料は、必ず少量もしくは中量の小石か、砂粒のどちらか一方が混入しているのである。いずれも器厚は厚く、繊維の混入と器厚の関係がかなり密接に結びついているのではないかと思われる。また焼成が良好な状態であるが、良好であればある程繊維が燃え、燃えた部分の空洞化状態が促進され、したがって比較的強い衝撃に対して脆さを示すようになっている。また繊維の含有のない土器は、第Ⅳ類以外は全て砂粒と小石が小量混入している。

これらのように文様構成と胎土の関係は、少なくとも本址の場合には明確に把握することができ、さらに繊維が混入する場合、その他の胎土との関係も明確に捉えることができるのである。言い換えれば、繊維が混入している土器と混入していない土器とを文様構成により区分していることが考えられ、そのことは、機能、用途に直接関連しているのではないかと考えられる。しかしながら、本址からは破片しか出土しなかったため深鉢形のいかなる器形になるかは無く分からない。繊維が混入しているのといないのでは、機能、用途が全く異なって来るのは自明であるが、本編では統計に基づいた考察に止めておく。

もうひとつは粗製土器の問題がある。前期に於ける粗製土器はあまり報告例が無く、土器の組成の中に普遍的に伴なうものかどうかの問題もあるが、少なくとも本址の場合には共存関係を示しており、また重要な位置を締めるものであると考える。

以上、問題点をふまえて統計から考察をしてきたが、何分にも1軒の住居址しか対象にでき組成の中に普遍的に伴なうもの思われるし、またこのような観点から研究をしている例が無いので、分類方法に於ても問題点を含んでいると思われる。今後さらに検討を加え普遍的な方法論として確立していこうと考える。

第1表　第5号住居址土器胎土分析表

類別	胎土				備考	記号
	砂粒	小石	繊維	その他	その他の含有鉱物	
第Ⅰ類A無節	△	×	○	×	なし	含有量
〃 A単節	△	×	△	×	なし	多量○
〃 B	△	×	×	△	雲母、長石、石英・小石の混入しているもの少量あり	中量□
〃 C	△	×	×	×	なし	少量△
〃 D	×	△	○	△	雲母、長石、石英	無量×
〃 E	□	×	×	×	なし	
〃 Fア	△	×	×	×	なし	
〃 Fイ	△	×	×	×	なし	
〃 Fウ	×	△	○	×	なし	
第Ⅱ類	×	△	×	×	なし	
第Ⅲ類	×	×	×	×	繊維が混入しているもの1片あり	
第Ⅳ類	×	□	□	×	なし	
その他					少数のため統計不可能	

第2表　第5号住居址石器集成表（その1）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第五号住居址	石	18	長脚鏃	黒曜石	•2.0	1.5	0.3	1.0	−	−	−	−	−	脚部欠損
	削器	6	横長	粘板岩	3.6	4.8	1.2	22.0	−	−	−	−	／	縦長剝片を利用したものが大多数を占めており、また片面に自然表皮をもつものが多数である。
		19	縦長	黒曜石	4.1	1.5	0.6	5.0	−	−	−	−	／	
		20	〃	〃	3.7	2.2	1.0	5.0	−	−	−	−	／	
		21	〃	〃	3.1	2.5	1.0	8.0	−	−	−	−	／	
		22	〃	〃	2.9	1.6	0.7	6.5	−	−	−	−	／	
		23	横長	〃	2.0	2.2	0.8	7.0	−	−	−	−	／	
		24	縦長	〃	3.1	1.9	0.7	5.0	−	−	−	−	／	
		25	〃	〃	2.1	1.5	0.9	2.5	−	−	−	−	／	
		26	〃	〃	2.9	1.8	0.8	3.0	−	−	−	−	／	
		27	〃	〃	5.0	3.5	3.0	30.0	−	−	−	−	／	
		28	〃	〃	2.8	1.8	0.6	3.4	−	−	−	−	／	
		29	三角形	〃	2.3	1.6	0.45	1.5	−	−	−	−	／	
	打製石斧	1	撥形	硬砂岩	8.7	4.4	1.1	40.0	1.6	1.2	21°		−	
		2	短冊形？	〃	•5.3	5.9	2.0	62.0	−	−	−	−	−	両端部欠損
		3	短冊形	粘板岩	5.2	3.5	1.6	38.0	−	−	−	−	−	小形の石斧
	石匙	7	縦長	チャート	7.1	3.15	1.0	20.0	−	−	−	−	−	真正で剝離面がととのっている。
		8	三角形	黒曜石	3.4	4.25	0.9	10.0	−	−	−	−	−	三角形で表面の磨耗がはげしい。

（その2）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部	全体	着柄磨耗 有無	備考
第五号住居址	ハンマーストーン	14	楕円形	硬砂岩	12.3	5.9	2.8	283.0	○		−	−	／	
		15	〃	普通輝石安山岩	6.1	4.6	4.1	135.0	○		−	−	／	
		16	〃	〃	・6.6	5.3	2.7	140.0	○		−	−	／	基部欠損
		17	円形	〃	6.0	6.4	5.0	200.0	○		−	−	／	
	凹石	11	楕円形	しそ輝石安山岩	13.1	6.4	4.2	585.0	−	−	／	／	／	
		12	〃	〃	13.4	14.0	7.3	2025.0	−	−	／	／	／	大形
		13	〃	〃	16.1	9.4	4.5	1000.0	−	−	−	−	／	自然の凹部を加工している。
	加工痕のあるフレイク	4	縦長	粘板岩	4.8	3.1	1.3	20.0	−	−	−	−	／	
		5	〃	〃	3.8	3.7	1.0	10.0	−	−	−	−	／	
		10	〃	〃	4.7	3.7	0.7	15.0	−	−	−	−	／	自然面を残しているものが
		30	〃	黒耀石	3.3	1.4	1.2	4.0	−	−	−	−	／	非常に多い。
		31	〃	〃	3.0	2.1	1.8	3.8	−	−	−	−	／	
		33	〃	〃	3.3	2.0	1.2	10.0	−	−	−	−	／	
		35	〃	〃	3.0	1.1	0.4	6.5	−	−	−	−	／	
		36	〃	〃	2.1	2.0	1.0	4.0	−	−	−	−	／	
	フレイク	9	縦長	硬砂岩	4.6	5.5	2.0	35.0	／	／	／	／	／	
		32	〃	黒耀石	3.0	2.1	1.7	8.0	／	／	／	／	／	
		34	〃	〃	2.2	1.9	1.0	5.0	／	／	／	／	／	
		37	〃	〃	2.6	1.5	1.1	3.0	／	／	／	／	／	
		38	〃	〃	3.0	2.0	1.7	2.5	／	／	／	／	／	

（その3）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部	全体	着柄磨耗 有無	備考
第五号住居址	フレイク	39	縦長	黒曜石	2.2	2.1	1.6	2.5	／	／	／	／	／	縦長の剝片の方が横長に比べると幾分多い。
		40	〃	〃	2.0	2.0	0.6	3.0	／	／	／	／	／	
		41	〃	〃	2.5	1.7	0.6	3.5	／	／	／	／	／	
		42	〃	〃	2.0	1.8	0.6	2.5	／	／	／	／	／	いずれも自然面を残しているものが多い。
		43	〃	〃	2.8	2.7	1.1	1.5	／	／	／	／	／	
		44	〃	〃	1.9	1.6	0.7	2.0	／	／	／	／	／	
		45	〃	〃	3.2	1.6	0.55	1.0	／	／	／	／	／	
		46	〃	〃	3.8	1.8	1.0	1.5	／	／	／	／	／	
		47	〃	〃	4.2	1.8	1.3	3.0	／	／	／	／	／	
		48	〃	〃	1.7	1.8	0.3	0.5	／	／	／	／	／	
		49	〃	〃	1.6	0.8	0.5	0.5	／	／	／	／	／	
		50	横長	〃	2.0	3.5	1.0	3.0	／	／	／	／	／	
		51	〃	〃	1.7	2.5	0.6	2.0	／	／	／	／	／	
		52	〃	〃	2.2	3.1	1.2	5.0	／	／	／	／	／	
		53	〃	〃	2.3	3.3	1.6	5.0	／	／	／	／	／	
		54	〃	〃	1.7	2.4	0.5	3.0	／	／	／	／	／	
		55	〃	〃	1.3	1.9	0.3	1.0	／	／	／	／	／	
		56	〃	〃	1.6	2.2	0.5	1.5	／	／	／	／	／	
		57	〃	〃	1.3	1.9	0.3	1.0	／	／	／	／	／	
		58	〃	〃	2.0	2.9	0.6	2.0	／	／	／	／	／	
		59	〃	硬砂岩	4.2	4.0	0.6	15.0	／	／	／	／	／	

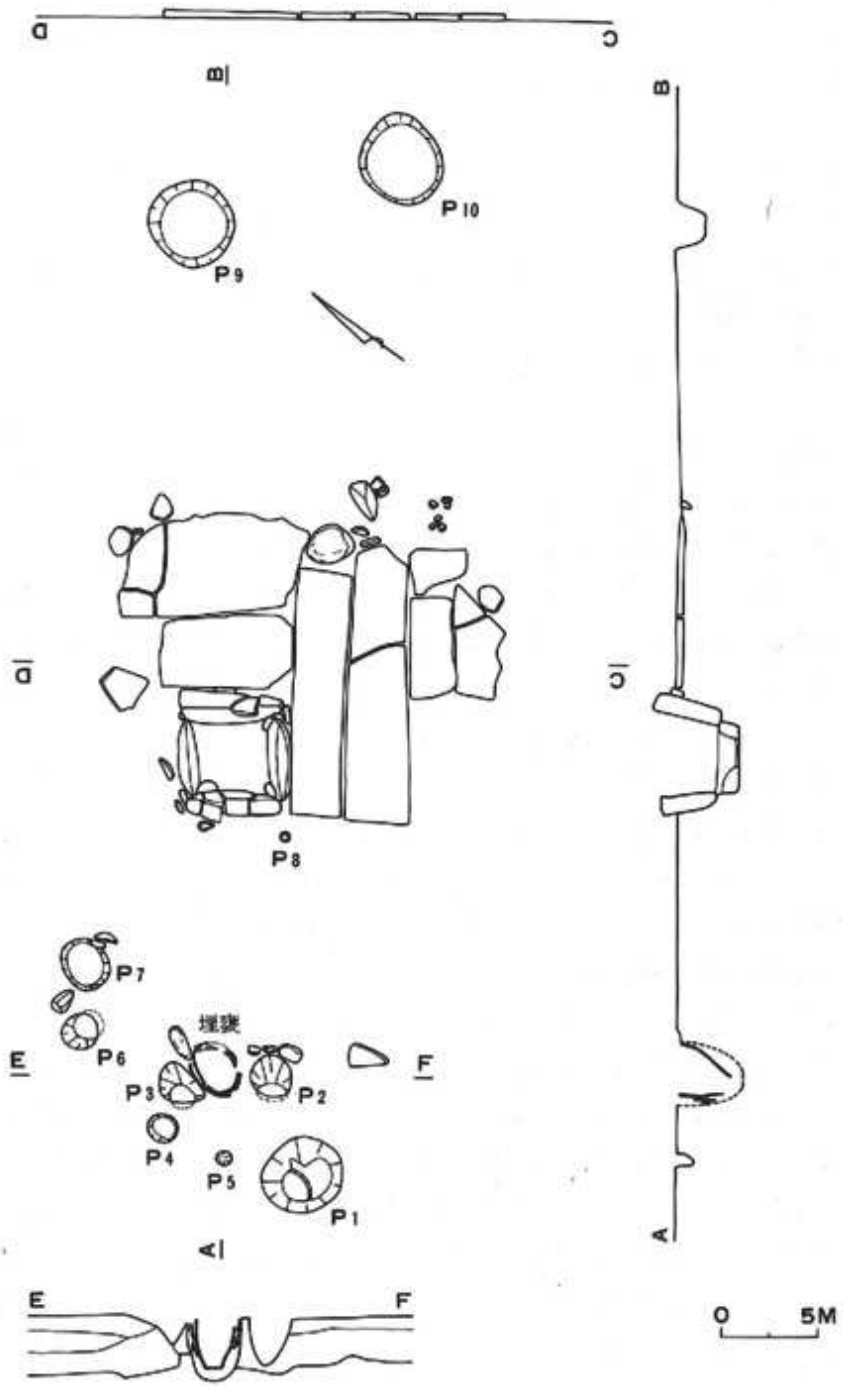
第2節　第1号敷石住居址

本址は、第1章第1節でも記述したが最初に発見された段階で炉址と敷石部だけではあるが掘られており、再び埋め戻してはあったが、したがって遺物や土層の関係はそれほど期待できるものではなかった。しかしプラン全体の構造を知るという点ではかなりの期待がもてた。

遺　　構（第15図）

本址は、調査地域のほぼ中央に検出された縄文式時代中期末葉の敷石住居址である。かかるグリットは、E－2・3、F－2・3、G－2・3で、遺構全体は比較的良好な状態で検出されたが、北側部分は長芋耕作のため深く破壊されており、その部分に位置すると思われる柱穴は確認できなかった。

本址は、円形プランを呈すると考えられる。平地式の遺構は、竪穴状の掘り込みが無いためなんらかの形ちで外部と内部を遮る壁的な構築物が必要であると思われるが、何ら確認することができなかった。プランの推定は柱穴の配例によって行ない、直径は約6ｍを測る。中央には65×60cmの石囲い炉があり、その東側と南側に接して形ちの整った大きな鉄平石（複輝石安山岩）が敷かれている。それらの敷石の大きさは、70×38cm、90×50cm、130×25cm、145×35cm、52×32cm、57×26cm、30×25cmを測り、ひび割れの入っているものもあるがこの7枚が主要な位置を占めており、多くは長方形で厚さが4～5cmと均一になっている。さらにこの他の周りには、鉄平石の小片や礫が置かれている。敷石はかなり形ちが整っており、人工的に調整したような感を受けるが、実際には原産地より形ちの整ったものを選んで運んできたものと思われる。敷石部のレベルは一定している。敷石下部の地面は、　黄褐色土混りの黒色土でタタキ等何もなされておらず、難弱の様相を呈しているが、炉址の南側の敷石の無い部分は、ほんの僅かではあるがタタキが成され固く締っている。その他の床面は耕作されていたりで明瞭には確認することはできなかったが、柱穴付近には痕跡を占めていた。炉址は4個の河原石を四方に組んで作っており、深さは炉石の頂端部より45cmあり底部より焼土が10cm堆積している。この構造の特徴は、床（敷石部）面よりも炉石頂端部の方が12cm程高いことである。多くの炉址の構造は、床面とほぼ水平に炉石頂端部がくるように構築されているのであるが、本址の場合にはかなり極端な構造をなしており、あまり例がないように思われる。おそらくは、炉址の上面と同じ高さになるように敷石部やその他の床面に敷物をしていたのではないかと考えられるのである。柱穴は合計10個検出されており、P_1、P_9、P_{10} は、直径42～48cmのやや楕円形を呈する大きなもので、P_1は柱の立て替えが行なわれたと思われる痕跡が残っている。P_2とP_3は、埋甕と最も関係の深い柱穴であると思われ、埋甕の両脇に位置している。双方とも直径2.6cmを測り、半円形の形状を呈している。またプランの内側から外側方向に斜めに掘り込まれ、袋状を成している。この柱穴で注意したいことは、平面が半円形になり、



第15図　第１号敷石住居址実測図（１：40）

円形部分はプランの外側方向に、また直線部分は内側方向に向いており、直線部分はかなり固く締まり柱穴の底部にまで達しているということである。このような遺構から柱を想定すると、少なくとも床面下に埋まった部分は、円柱ではなく、遺構通り半円形状をしていたのではないだろうかと考える。P_7は直径37cmのやや楕円形を呈するもので、囲りにはぐり石が詰められている。P_8は炉址のすぐ南側のタタキの成されている床面から掘り込まれている。直径は5cmを測り比較的深いが、位置や規模からみて家屋を支えるための柱穴ではなく、炉址に関係しているような感がある。埋甕はP_2とP_3にはさまれるような形で出土しており底部は形を保つ正位の埋甕である。口縁部は一部床面に残していたが大部分は欠落して掘り方内に落ち込んでいた。

以上が遺構の様子であるが、これらのような形態をとる敷石部、敷石部と炉址の関係、また埋甕と柱穴との関係など興味ある問題を提示しているのである。

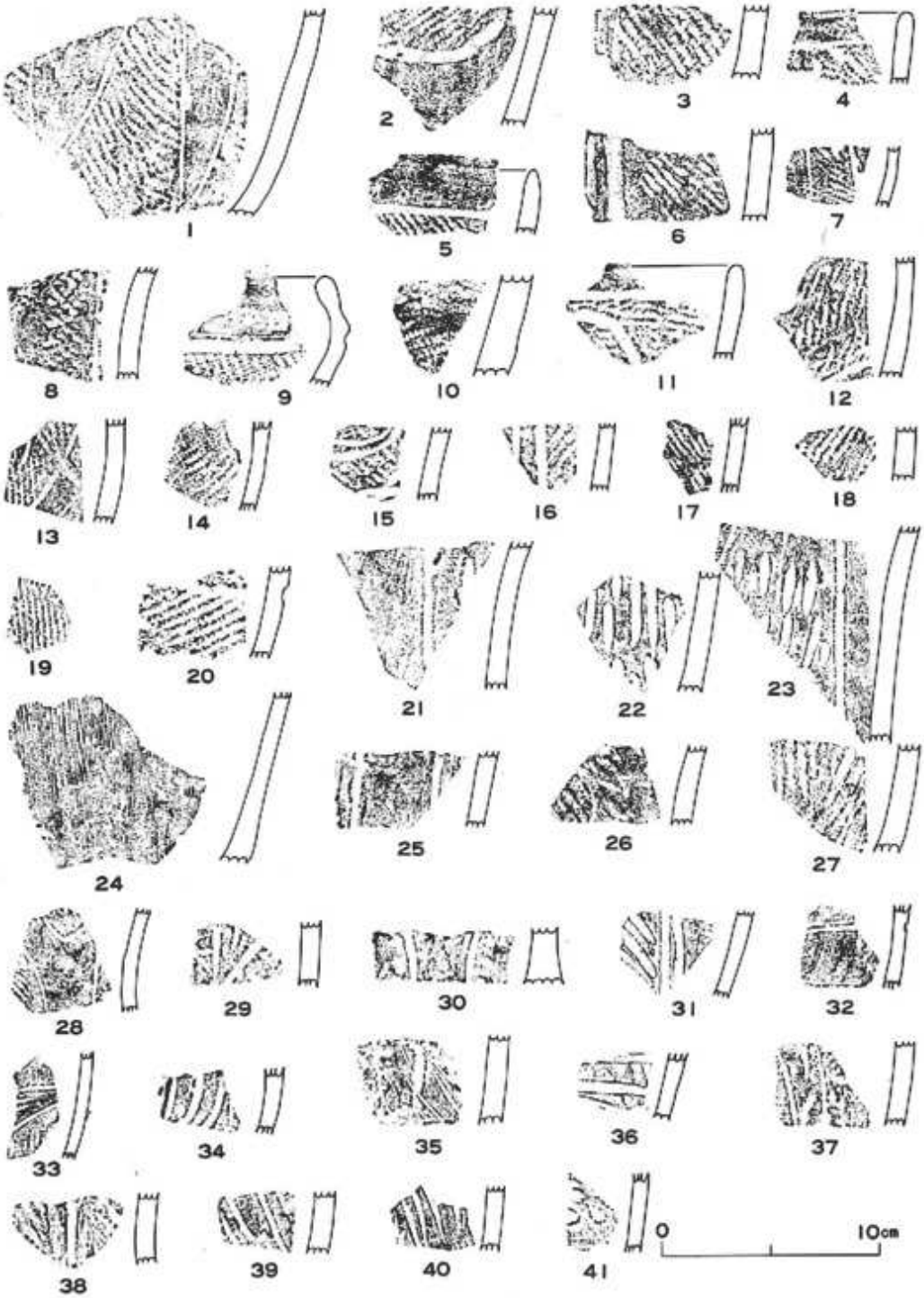
遺　物

遺物の出土状態は、敷石部に於てはプライマリーな状態では1点も確認されなかったが、敷石部の囲辺と、西側の柱穴や埋甕の囲辺部で比較的多く出土した。本址を発見した当時、炉址内に完形の深鉢形土器が埋設されていたということであったが、調査の結果炉址内の焼土上部に僅かな土器片があったのみで何ら確認することはできなかった。焼土が攪乱されている様子がないことから、おそらくは焼土上面に位置しており、発見当時に何らかの形で掘り上げてしまったのであろうと思われる。

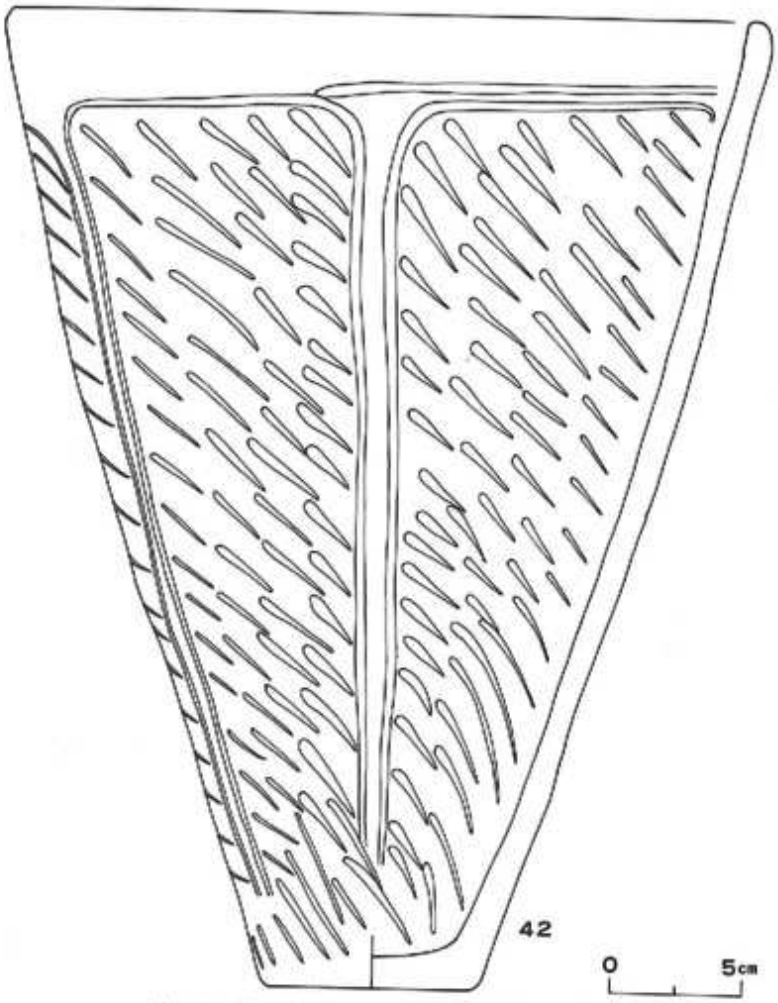
土器（第16図1～41、第17図42）

1～20、28は、沈線を描くことによって縄文部と無文部とを区画している文様構成の資料である。1～7、12～19は磨消縄文である。1は後期的様相が感じられる資料である。無文部は沈線の区画により底部に近い所で閉じ、口縁に近い所ほど広がるようになっており、また縄文部分の区画は逆に底部に向って広がっていく。縄文の原体はR{L の斜縄文であるが、あまりはっきりとした施文ではない。器厚は1.2cmで雲母、砂粒を含んでおり、黒褐色でやや良好の資料である。5は口縁部の資料で、口唇はやや尖がりぎみの様相を呈している。口縁直下2.5cmは無文部があり、無文部直下からR{L 原体による縄文が施されており、無文部と縄文部はその間に引かれた横方向の沈線によって区画されている。器厚0.8cmを測る焼成やや良好の資料である。9は同じく口縁部の資料であり、沈線により無文部とR{L の斜縄文を区別している。口縁は、口縁直下の器厚0.6cmに比べて、1.0cmとかなり肥厚く、また全体に内彎している。10は器厚1.5cmの非常に厚い土器で、雲母と砂粒を含んでおり、表面は黒色研磨が成されたように光拓があり焼成良好である。区画を成す沈線は3mm～1cmと施文具の異いによりかなり幅があるが、口縁部直下に於ては、横長の楕円区画文、胴部下半に於ては縦長の区画沈線文が施文されている。

24は櫛歯状工具によって施文された底部直上の資料である。櫛歯状工具による施文は、文様の施文と、器面の調整という機能があると思われ、その例に漏れず器面は平滑である。内面は



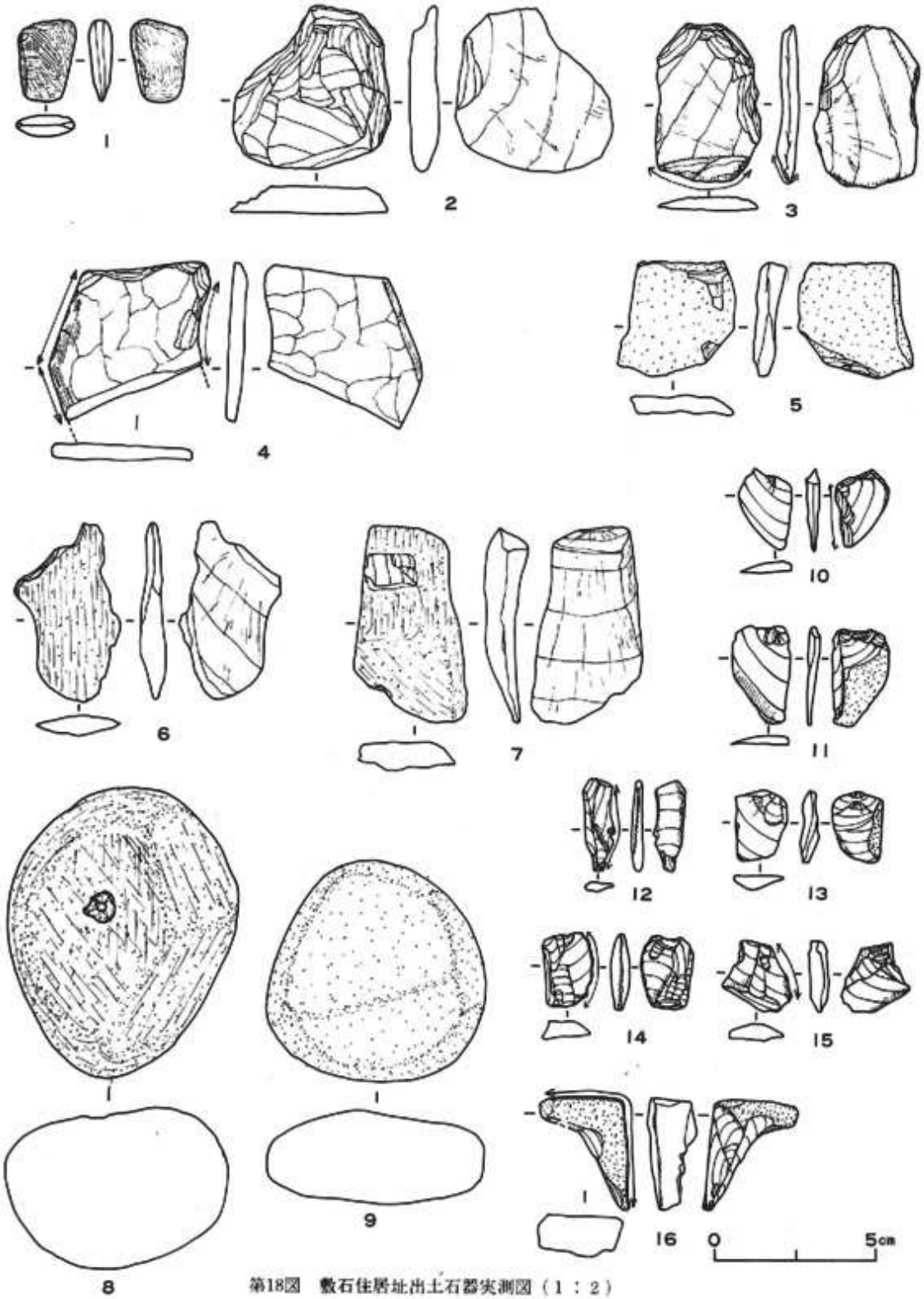
第16図　第1号敷石住居址出土土器（1：3）



第17図　敷石住居址出土埋甕実測図（１：３）

あまり丁寧には整形されていない。器厚は低部直上で1.2cm、その上部で0.6cmを測る。内外面とも赤褐色を示しており、胎土は均一で焼成良好である。

21～23、25～27、29～41 第17図42は、沈線による文様構成の資料である。42は埋甕で高さ37cm、口縁直径28.5cm、底径7.7cmを測り、内外面とも整形が丁寧に行なわれている。胴部中央から口縁にかけてススの付着が激しく黒褐色を呈しているが、他の部分は茶褐色を呈している。器厚は１cmと全体に平均している。口唇はなめらかな丸味をもっており、その直下はやや肥厚ぎみである。胴部下半に於ける接合部分の一部にかなり集中的にススの付着があり、接合部を通り抜けて内面にまで広がっている部分がある。この状態は、使用中にひびが入り、炎もしくは煙がひび割れを通して内面に入り込んできたのではないかと思われる。胎土には砂粒が多量に混入しているが、焼成はやや良好である。文様構成は、0.4cmを測る沈線により縦長の五つの区画文を描いており、区画の中は左から右下方向に対して沈線をとばすように全面に描き入れている。また口縁部直下には一部に横方向に対する沈線が施文されている。本資料は、関東の影響というよりもむしろ八ヶ岳南麓地方の曽利式文化の影響を強く受けていると思われ、終末期の曽利Ⅳ式に比定されよう。この埋甕に類似する資料は21～23、26～27、31、35、27、38、41がある。また後述する第２号住居出土の埋甕に類似する資料は、29、33～34、39～40があり、円形うず巻文を文様の主体とする土器である。



第18図　敷石住居址出土石器実測図（1：2）

石器（第18図１～16）

掻器（第18図10～16）

本址からは合計７点のスクレーパーが出土しており、全て黒曜石製である。比較的簡単な剥片を利用したものもあるが、12と14のように丁寧に加工され対称的な資料もある。

磨製石斧（第18図１）

縦径2.5cm、横径1.8cm、厚径0.7cmを測り、かなり小形の磨製石斧である。Ａ面Ｂ面とも主軸方向と横軸方向、さらに左上部と右下部間の方向に研磨がなされており、特に刃部は再研磨がなされている。側面も同様に、主軸方向に対して研磨が行なわれている。原石は、河原の小さな自然転石を利用している。

凹石（第18図８）

本資料は、縦径9.0cm、横径7.2cm、厚径4.8cmを測るしそ輝石安山岩製のもので、全体に楕円形を呈している。中央部に直径１cmの凹部がありあまり、深くなく、その周りはかなり研磨されている。

磨石（第18図９）

本址からは１点のみである。礫のＡ面に２ヶ所の研磨痕がある。やはりしそ輝石安山岩を利用している。

研磨痕ある石器（第18図４）

本資料は、機能、用途等全く確認することができない石器で、硬砂岩の平たい石の側辺部を丁寧に研磨してあり、図中の上と下の部分は破損している。

加工痕ある石器（第18図２、３）

いずれの資料も硬砂岩製で、２と３はかなり類似性のある加工をしている。形態は小形の打製石斧のようであるが、いかなる石器の分類に入るかははっきりとしない。３は先端部と思われる所に主軸と直交する方向に使用痕が残されている。剥離技法は横剥ぎが中心である。

研磨痕あるフレイク（第18図６、７）

両者とも研磨されている石器から剥離されてしまったフレイクである。７は打撃部ははっきりとつかむことができる。しかし、６はない。

第3表　第1号敷石住居址石器集成表

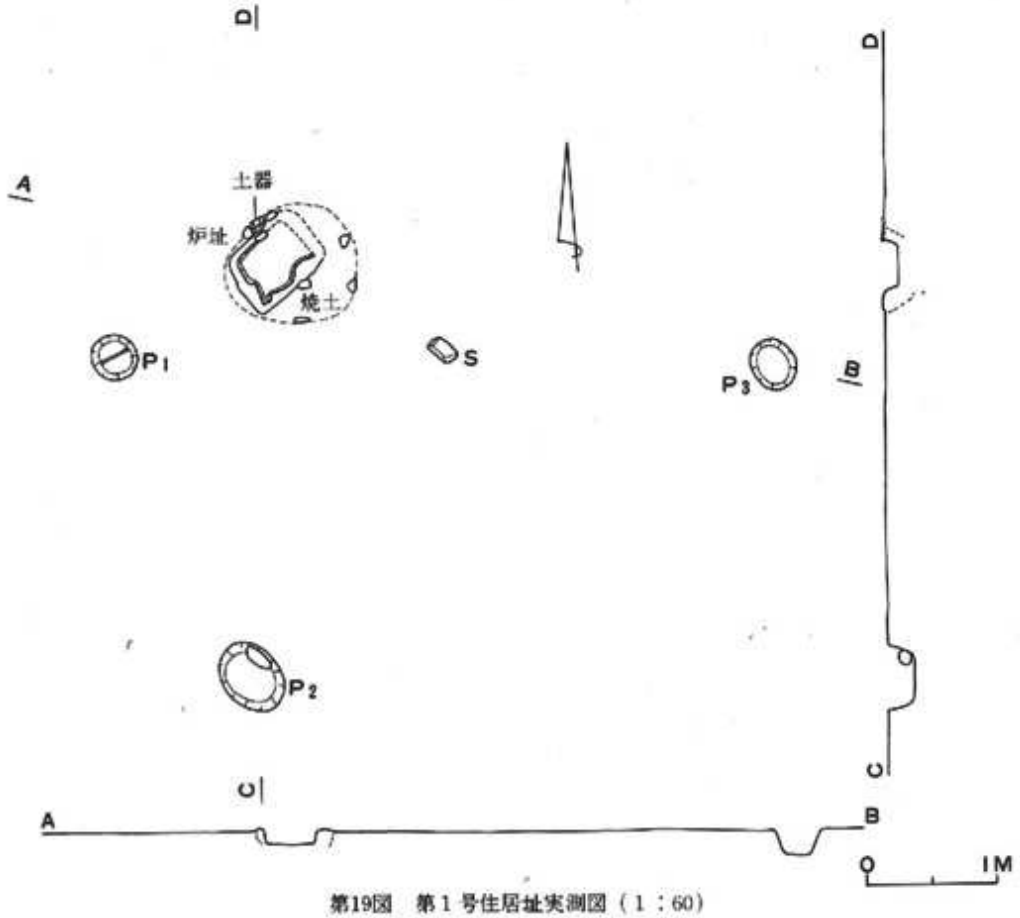
遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第一号敷石住居址	削器	10	縦長	黒曜石	2.6	1.7	0.5	2.0	−	−	−	−	／	全て側片刃のスクレーパーである。
		11	〃	〃	3.1	1.8	0.4	2.5	−	−	−	−	／	
		12	〃	〃	2.8	0.9	0.4	2.0	−	−	−	−	／	
		13	〃	〃	2.2	1.6	0.5	1.5	−	−	−	−	／	
		14	〃	〃	2.4	1.6	0.6	1.5	−	−	−	−	／	
		15	〃	〃	2.2	2.0	0.6	2.0	−	−	−	−	／	
		16	〃	〃	3.4	2.7	1.6	10.0	−	−	−	−	／	
	小型磨製石斧	1	短冊形	硬砂岩	2.6	1.8	0.7	7.0	−	−	−	−	−	丁寧に研磨されているが使用痕はない。
	凹石	8	楕円形	しそ輝石安山岩	9.0	7.2	4.8	371.0	−	−	／	／	／	
	磨石	9	円形	しそ輝石安山岩	6.8	6.8	2.9	180.0	−	−	／	／	／	
	研磨ある石器	4		硬砂岩	5.0	4.8	0.5	15.0	−	−	−	−	／	
	加工痕あるフレイク	2	縦長	硬砂岩	5.2	4.9	0.9	25.0	−	−	−	−	／	
		3	〃	〃	5.0	3.2	0.7	12.0	○	○	−	−	／	使用痕が確認される。
	研磨痕あるフレイク	6	〃	〃	5.5	2.7	0.8	11.0	−	−	−	−	／	研磨痕が確認される。
		7	〃	〃	6.0	3.4	1.4	371.0	−	−	−	−	／	

第３節　第１号住居址

遺　　構（第19図）

本址は調査地区の中央よりやや西側に検出された縄文式時代中期末葉の竪穴住居址で、第２号、第４号、第５号、それに敷石住居址とほぼ同一コンタの位置にある。かかるグリットは、Ｂ－２・３、Ｃ－２・３・４、Ｄ－２・３である。本址は第４号住居址に黒色土の埋土を行いタタキをなすことによって作った貼床を持つが、耕作により壁が削られてしまい、また炉址も石が抜き取られてしまっていた。したがってプランの規模は全く不明である。柱穴は３個確認されたが、壁に沿ったものかどうかも伴別がつかない。

炉址は、石が全て抜き取られていたが、周りの土が容滓状焼土塊が固く締っていたため石の原位置や、規模などを捉えることができた。規模は70×60cmの長方形を呈しており、内部には焼土と



第19図　第１号住居址実測図（１：60）

灰がかなり残されていた。焼土塊の上部より炉底までは13cmを測る。

遺　物

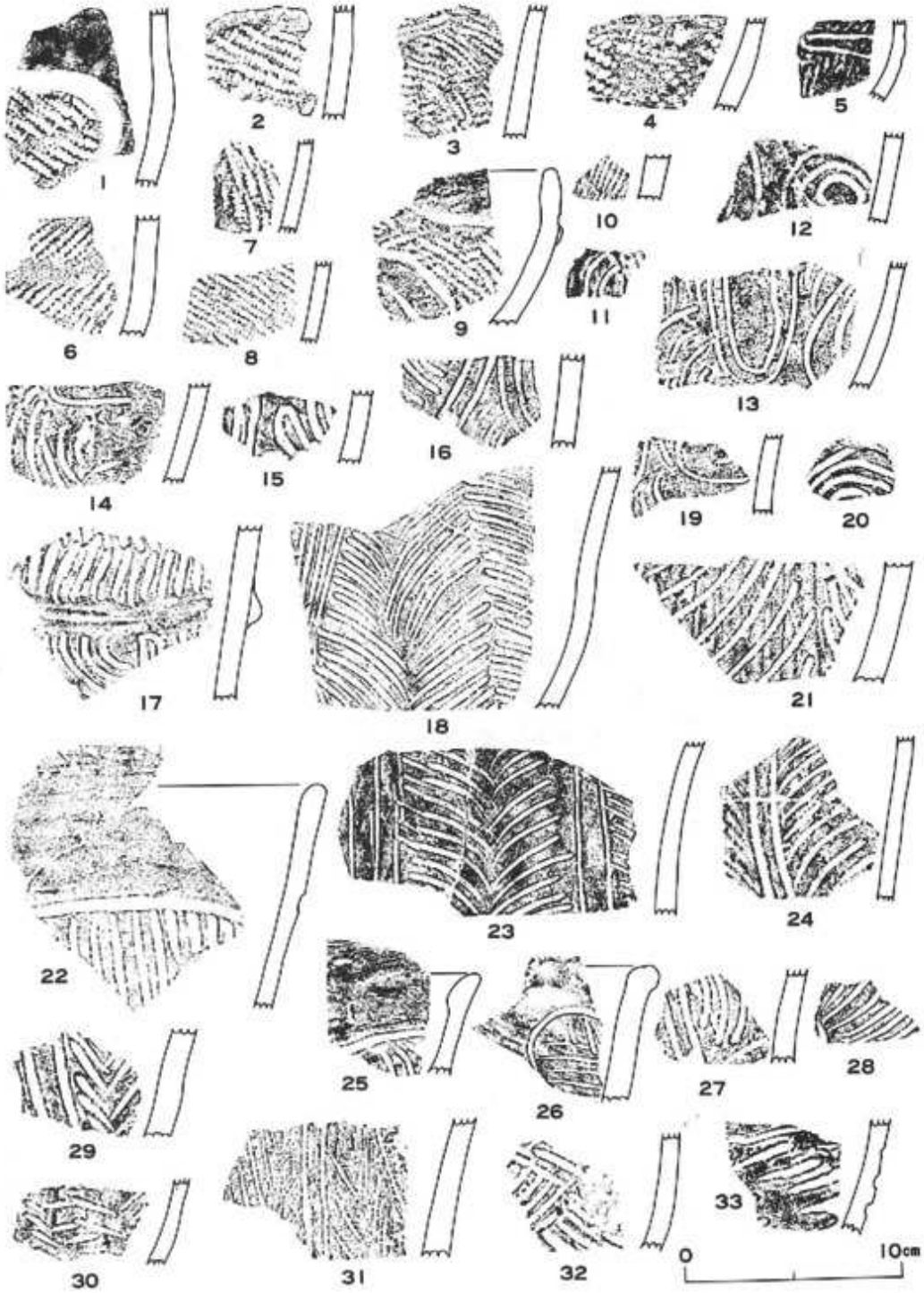
出土遺物は、壁等が破壊されていたため伴出遺物という点で苦しむところがあった。本址で取り上げた遺物は、床面直上もしくは炉址内、柱穴内より出土したものに限り、それよりも上層で出土した資料はグリッド遺物として取り扱った。

土器（第20、21図）

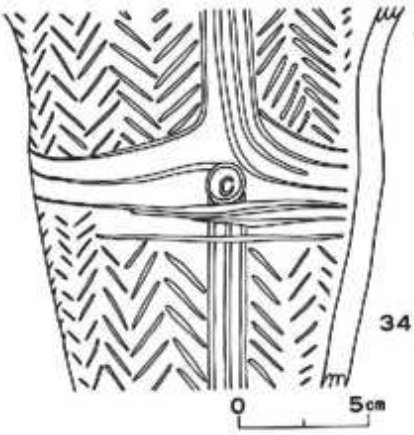
本址出土の土器を分類すると、縄文が文様の主体となるもの（第20図1～10）、うず巻沈線文が文様の主体となるもの（第20図11～16、19～20、22、25）、綾杉状文が文様の主体となるもの（第20図17～18、21、23～24、26～33、第21図34）のようになる。

1～2、4、7、9は、本群の中にあって比較的粗大な縄文を施文しており、原体はいずれも右撚りのR{上の斜縄文である。1は縄文の周りを幅広の沈線により区画しており、横長の楕円区画文になるかと思われる。その他の部分には無文部がかなり残る。器面は研磨がなされたように黒褐色で光沢があり、内面は茶褐色を示している。器厚は0.8～1.1cmで胎土には砂粒が多量に混入しており、焼成良好である。2は縄文部を沈線によらず無文部を残すことによっていわば区画している。器厚は0.9cmで焼成は比較的良いが、乱雑な作りである。7も同様に無文部を残す資料である。9は1と同様無文部と縄文を沈線によって区画しているが、沈線に沿って粘土紐の貼付けによる隆帯がある。口縁は肥厚くほぼ直立状態を示しており、その直下よりかなりの内反をしている。器厚は1.0cmを測り、胎土にはかなりの砂粒が混入している。焼成はやや良好である。3、5～6、8は中位の縄文、10は本群の中では最も細かい縄文が施文されている土器である。3はこの小破片だけでも5方向の施文が行なわれており、規則性が余りない。R{上原体である。器厚は0.9cmで赤褐色を示しており、焼成はやや良好である。5は無文部を沈線によって区画しており、その他の部分には縄文が施文されている。6は沈線による区画はなく縄文の上下の帯状施文との間に無文部を残している。原体はL{RRである。10は細かいL{RR原体による回転施文である。

22と25の口縁部の資料は、11～16、19～20の、いわゆる円形のうず巻文と斜状沈線で文様構成をする土器と同類系に属するものと思われ、これと同一する土器は、第2号住居址から出土した埋甕の文様構成をみれば明らかである。22は口唇は丸味を帯び、やや外側にふくらみをもちながら胴部へと続いている。口縁から下の方へ5cmの間には無文帯があり、その直下に縦方向に引かれた沈線をとり囲んで横長の楕円区画文が施文されている。器厚は0.8～1.8cmを測り、器面にはススが付着して黒くなっており、雲母、砂粒が混入した焼成やや良好の資料である。25は文様形態、胎土等同様であるが、口縁部に違いがみられる。胴部の器厚が0.7～0.8cmに対して、口縁部は1.1cmとかなり内側に対して肥厚している。これらの口縁部に対して胴部の文様構成の付属する資料は11～16がある。13は胴部下半の資料で、口縁部直下の横長楕円区画文から



第20図　第1号住居址出土土器（1：3）



第21図　第１号住居址炉址内出土土器
（１：３）

無文部を区画する二重の沈線が下半まで描かれており、その両側に斜状沈線がある。器厚は0.8cmを測り、胎土には砂粒が混入し焼成やや良好である。これらの資料の上部に位置するものに11～12、19と20がある。円形うず巻文の位置は、横長楕円区画文の下にあり、横方向に等間隔で数個描かれているのが普通である。

以下は綾杉状文が文様の主体となる資料である。18は上部から下部への二重のＵ字状沈線の両側に綾杉状沈線文が描かれている。沈線は右はらいと左はらいが行なわれ、同一の工具による施文かと思われるが右はらいの方が太い沈線になっている。器厚は0.9cmを測り内外面とも黄色を示す焼成良好の資料である。23は同様な資料である。26は口縁部の資料である。口唇は平らな状態であるが、外側に対してかなり肥厚しており器厚1.5cmを測る。またその他の器厚は1.2cmを測り、本類の中にあって最も厚い資料である。沈線による楕円区画文の中に綾杉状文が施文されている。34は炉址内の焼土上面から出土した土器で、内部を上に向けていた。この資料は半欠品であり、おそらく残りの半分は耕作により取られてしまったのであろう。比較的長時間炎が当った痕があり、部分的にススが付着していることから、この炉址内でかなりの二次的な焼成があったのではないかと思われる。口縁部と底部は欠損してないが、胴部の中央には上下を分けるように横方向の沈線が描かれている。この沈線に直交するように上下にまた沈線が描かれている。片側半面の資料であるので明確さを欠くが、欠損部にも同様の沈線があったと思われ、したがって沈線によって４つの区画文が存在する。この区画文内には綾杉状文が整って施文されている。器厚は0.8～1.0cmで、内外面とも整った整形をしており、焼成良好である。

石器（第22図　第23図）

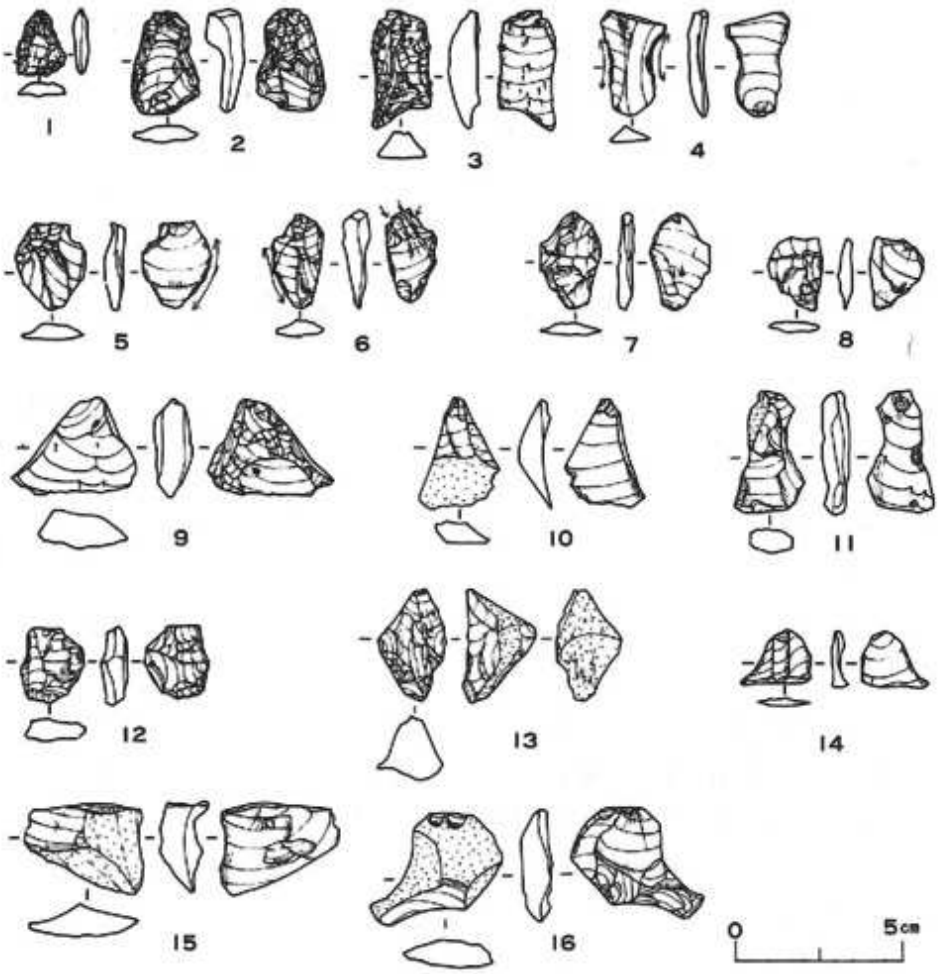
１～16は黒曜石製の石器及びフレイクである。

石鏃（第22図１）

本址からは１点しか出土していない。周りは丁寧にリタッチが行なわれているが脚部の作出がない。中央部には、原石より剥離した剥離面がそのまま残されている。全体に形態はずんぐりしており対称性に欠ける資料で、長さ2.0cm、幅1.5cm、厚径0.5cmを測る。

掻器（第22図２～３、９～10）

２はＡ面Ｂ面とも非常に丁寧なリタッチが行なわれている。図中の上部はかなりの厚みが残っている。３はＡ面に対して丁寧な加工がみられ、断面はややカマボコ状を示している。この黒曜石にはかなりの夾雑物が混入している。９はＢ面の加工が顕著で、３と同様残りの面に対し



第22図　第1号住居址出土石器実測図（1：2）

ては加工痕がない。10も同様の資料であるがA面にかなりの自然表皮を残している。

削器（第22図4～8、11～13）

4は、比較的薄いフレイクを利用しているサイドスクレーパーである。側辺の中央のくびれ部にリタッチが行なわれている。5は原石より剥離した打撃点の周りに多くの調整痕があり、側辺部の片側にリタッチが行なわれている。6も同様な方法で調整が行なわれており、両側辺にリタッチがある。11と12は一部に自然面を残している資料である。13は断面が三角形を呈する資料で、1面に自然表皮を残している。A面は比較的丁寧な調整が行なわれている。

加工痕あるフレイク（第22図16）

スクレーパーとして分類してある資料の中には、いわゆる本類に分類すべき資料が含まれている可能性がうかがえるが、いちおう本類は16の資料1点をとり上げた。片面に自然表皮を残しているが、上下からの加工がみられる。

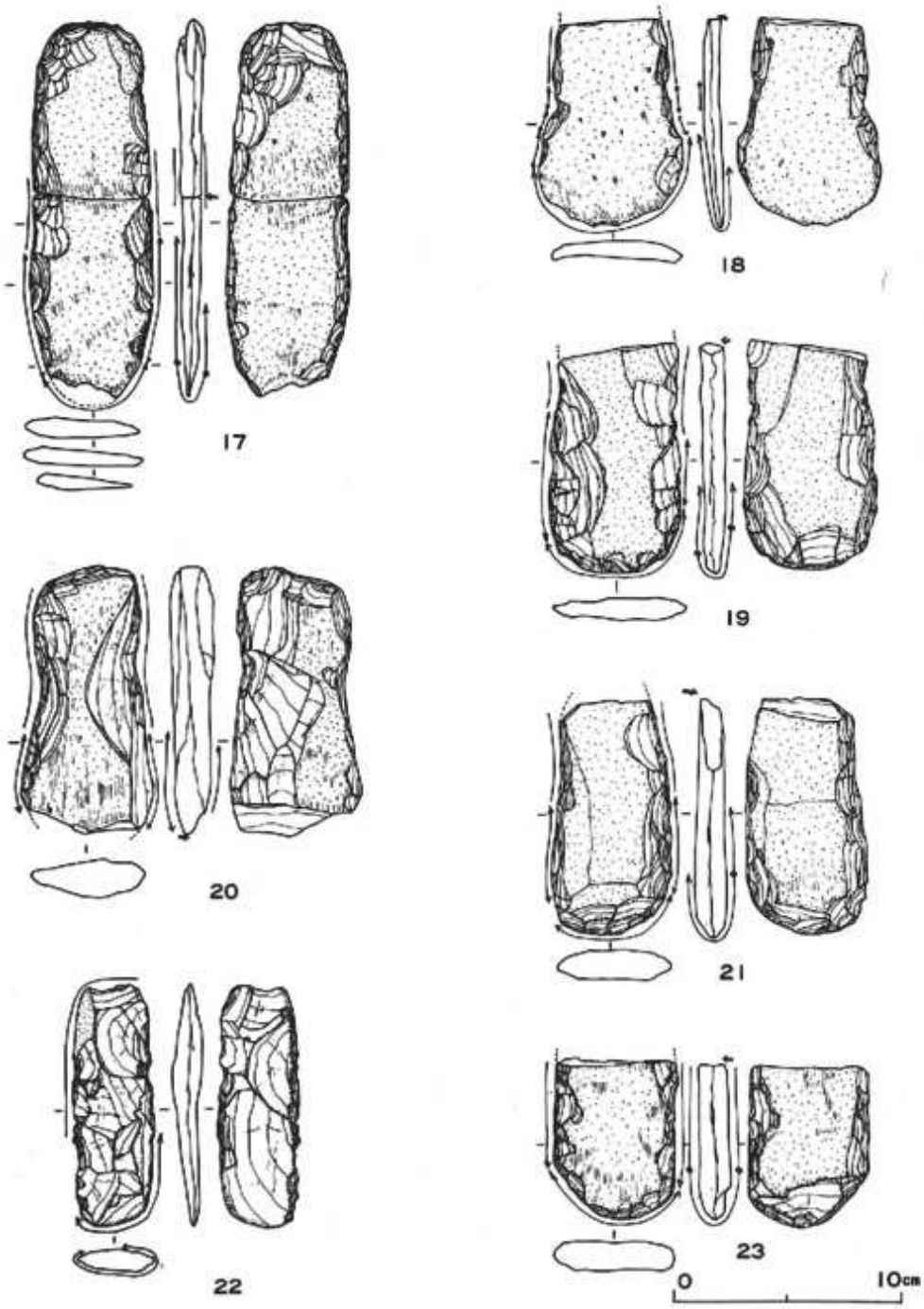
フレイク（第22図14、15）

本址からは、フレイクの出土量が少ないことか特徴である。15は自然表皮を剥がすためのフレイクである。

打製石斧（第23図17～21、23）

本址出土の打製石斧は、全て硬砂岩製であり、両面に珪化作用による自然の板状節理面をもっているのが特徴である。原石は付近の蓼科山関係のものではなく、南佐久郡の川上村方面のものであることがわかっている。このように自然の板状節理面を両面にもつ打製石斧を出土する遺跡は、下吹上遺跡周辺には、極楽寺遺跡（後期）にしかない。

17は短冊形を呈する接合資料である。縦径16.4cmで先端の欠損部を含めると16.7cm程度になるかと思われる。横径は5.4cm、厚径は1.3cmを測り、かなり薄い資料である。断面中央部の矢印（⬅）は、折れた時の力の方向を示すものである。A面B面ともに板状節理面をもち周辺部を加工しているが、特にA面の中央の両側辺部と基部先端に多くの剥離面をもっている。原石は、本資料とほとんど形態を同一にするものであったと思われ、先端刃部に当る部分はほとんど加工しておらず、原石面を刃部として使用している。この打製石斧はかなり使用したと思われ使用痕が顕著である。先端刃部は、ある程度は一致しているが主軸に対して3方向以上の使用痕が認められる。また接合部の両側にも、刃部使用痕とは異なった磨耗的な痕が顕著に残っている。図中の矢印は例言でも記述してある通り、使用痕の範囲を示すものであるが①と②は先端刃部の使用痕を示すものである。①は極度に使用された部、②は同じく使用範囲を示すものであるが①よりも使用痕が弱いものを示している。また③は、直接対象物にはふれない磨耗痕（使用痕）で、着柄部あるいはその他何らかの原因で残された磨耗痕を示している。したがってCの断面図には、A面とB面にみられる①～③を角度として捉えるために範囲を記入し、①→①′、②→②′、③→③′として記号を設定した。Cの断面図中⊕は①の部分に当たる所であるが、極度に使用痕が残っている所で、使用対象物に対して48°の角度を示している。また②′は78°を示している。②を使用する時には必ず①も使用していることは当然である。これらの使用痕は側辺部に於ても同様に現われている。③と③′は恐らくは着柄部に当たり、使用中に柄と本体がすれる時に付いた磨耗痕ではないかと思われる。これらの観点に立って本資料をみると、どのような形態で着柄されていたかが重要な問題であり、それによって使用用途がある程度明確化されてくように思われる。少なくとも本資料は断面形態が直線的に対称であり、また使用痕のあり方からして、シャベル様に使用されたものであり、対象物は地面であったと推察できるものである。これと同類をなす資料に19がある。本資料も短冊形を呈しているが、基部中央より末端部が欠損しており、折れの方向は矢印の通りである。やはり自然の板状節理面を生かしている。使用痕は刃部の周辺部及び側辺部に顕著に現われており、①の先端部は47°、②の部分では対象物に対して90°の角度を示している。③の部分ははっきりとした使用痕はみられないが、着柄するための剥離部分がみられる。刃部にやや厚味をもつが非常に対称的な資料である。18は撥形を呈する資料で、基部が欠損している資料である。原石は17と同様一部に面をもたない断面三角形の



第23図　第1号住居址出土石器実測図（1：3）

ものを選んでおり、尖がっている部分を先端刃部にしているため、そこには加工痕はみられない。A面B面とも自然の板状節理面を大きく残し、側辺部に加工がなされているものの、簡単な第一次剥離面のみである。平面形態は、先端刃部に至って両側にふくらんでおり、断面はシャベル状にやや彎曲している。使用痕は刃部に沿って激しく残り、やや斜め方向になっており全体から測定すると61°を測る。20は撥形を呈する資料で、先端の刃部が欠損している。本址出土の打製石斧の中では1.9cmと最も厚い。また自然板状節理面の残っている部分が最も少ない資料であり、この両者は密接な関連があると思われる。厚い原石の側辺部を対称な刃部にするためには、何回もの大きな剥離が必要となって来るためであり、節理面もA・B面のようにしだいに残り方が少なくなってくるのである。特に基部中央のくびれている部分は大きな剥離面が目立っており、基部末端部と磨耗痕との関連に於て着柄部を想定させるものである。この着柄部を想定される所の磨耗痕は、主軸に対して平行になっているため、柄も主軸方向に着いていたのではないかと思われる。また使用痕は、かなり基部の深い位置にまで達しており5°角を示している。したがってかなり突き立てられるようなかたちで使用されたのではないかと思われる。21と23はいずれも基部を欠損しており、自然の板状節理面を残す短冊形打製石斧であるが、刃部の形態からいわゆる「斜刃形」を呈する資料である。斜刃とは、主軸に対して右もしくは左側に刃部がかたよっているもので、当然用途も異なって来ると思われる。使用痕のみならずこれらの刃部形態に対す注意が余り払われていなかったのが現状であり、このような内容をも含めた総合的データーが、機能、用途を決定してくると考えられるのである。形態で判断していく研究は、早く脱皮すべきだと考える。21は、基部よりも先端刃部の方が厚みを持つ資料であり、20の剥離面と原石との関係のように、厚味のある刃部に対して多くの剥離を行なっている。使用痕は主軸と平行方向にみられ、65°と90°の角度になっており、対象物に対して65°～90°の間で使用されていたと考えられる。23は21に比べると刃部(斜刃)の斜きが大きくなっている。同様なことは、基部の厚さよりも刃部の方が厚味を増している。使用痕も同じく主軸に対して平行に残っており、使用角度は先端刃部に於てはほぼ90°を成し、リングや加工により高くなっている所は磨滅してしまっており、いかに激しく使用されたかがわかる。さらに基部に至っても使用痕が残っているが、欠損しているために捉えることはできない。21も23も斜刃でありながら使用痕は他の資料と同様主軸に対して平行であるということは、全く同じように使用したことは考えられず、使用対象物の変化、あるいは着柄種類の相違などがあったのではないかと思われる。しかし明確に捉えるだけの資料がないので今後の課題として残しておく。

横刃形石器（第23図22）

本資料は、平面形態からみると打製石斧の様相を呈しているが、使用痕の観察から明らかに横刃形石器であると思われる。縄文式時代に於ける横刃形石器の報告例はほとんどないのではないかと思われるが。これらは、打製石斧の破片などとして取り扱われている資料の中も、注意すると多

第4表　第1号住居址石器集成表

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第一号住居址	石鏃	1	三角鏃	黒耀石	2.0	1.5	0.5	1.1	—	—	—	—	—	やや対称性に欠けている。
	掻器	9	三角形	〃	3.0	3.7	1.1	8.1	—	—	—	—	／	
		10	〃	〃	3.3	2.0	0.8	2.0	—	—	—	—	／	
		2	縦長	〃	3.1	2.1	1.2	5.3	—	—	—	—	／	
		3	〃	〃	3.6	1.8	0.9	3.2	—	—	—	—	／	
	削器	4	〃	〃	3.1	2.0	0.5	0.8	—	—	—	—	／	縦長の剝片を利用したものが多く、片刃と両刃のものが含まれるが、両刃の方が多い。
		5	〃	〃	2.6	2.2	0.6	0.9	—	—	—	—	／	
		6	〃	〃	2.1	1.6	0.8	1.2	—	—	—	—	／	
		7	〃	〃	3.0	1.8	0.5	0.5	—	—	—	—	／	
		8	〃	〃	2.1	1.7	0.5	1.2	—	—	—	—	／	
		11	〃	〃	3.7	2.2	0.9	5.0	—	—	—	—	／	
		12	方形	〃	2.2	1.9	0.9	2.0	—	—	—	—	／	
		13	三角形	〃	3.3	2.1	2.1	8.1	—	—	—	—	／	
	加工痕あるフレイク	16	縦長	〃	2.8	3.3	1.2	7.8	—	—	—	—	／	
	フレイク	14	横長	〃	1.7	2.3	0.4	0.4	／	／	／	／	／	フレイクの出土量は少ない。
		15	〃	〃	2.7	3.5	1.3	5.0	／	／	／	／	／	
	打製石斧	17	短冊形	硬砂岩	16.4	5.4	1.3	120.0	7.0	4.0	48°	78°	○	先端部欠損、全長推定16.7
		18	撥形	〃	•9.1	6.4	0.8	58.5	4.2	2.7	—	61°	—	基部欠損
		19	短冊形	〃	•10.1	5.8	1.2	103.0	3.6	3.6	47°	90°	—	〃
		20	撥形	〃	•11.7	5.8	1.9	163.0	4.5	3.8	—	5°	○	先端部欠損
		21	短冊形	〃	•10.4	5.4	1.4	112.0	2.8	5.2	90°	65°	—	基部欠損、斜刃
		23	〃	〃	•6.8	5.3	1.5	85.0	現存部全体		—	90°	—	〃　〃
	斜刃横刃形石器	22	〃	粘板岩	10.5	3.5	1.3	45.5	刃部全体		／	／	—	打製石斧とも考えられる。

数含まれているのではないかと思われる。刃部となる部分は、長軸に平行な縁辺部であるため、図は横長方向に表現すべきであると思われる。長径10.5cm、短径3.5cm、厚径1.5cmを測り、粘板岩を原石としている。断面はやや屈曲しているが対称的である。製作手法は大きな横剝ぎの剝離が中心であり、二次的に刃部を丁寧に作出しているのが特徴である。刃部の形態は鋸刃状を呈しているが、いわゆる背になると思われる所にも鋸刃状に加工されている。図中の下部は、使用時の先端部になると思われるが、切出し状の斜刃になっており、この部分だけは鋸刃状にはなっておらず、鋭利な刃部を作り出している。使用痕はあらゆる側辺部に対して直角方向にみられる。これらの様相を呈する石器は、明らかに植物性食品にかかわる用途に使われたと思われ、しいて言えば、穂積み的性格を持つものではないかとの理解をしたい。

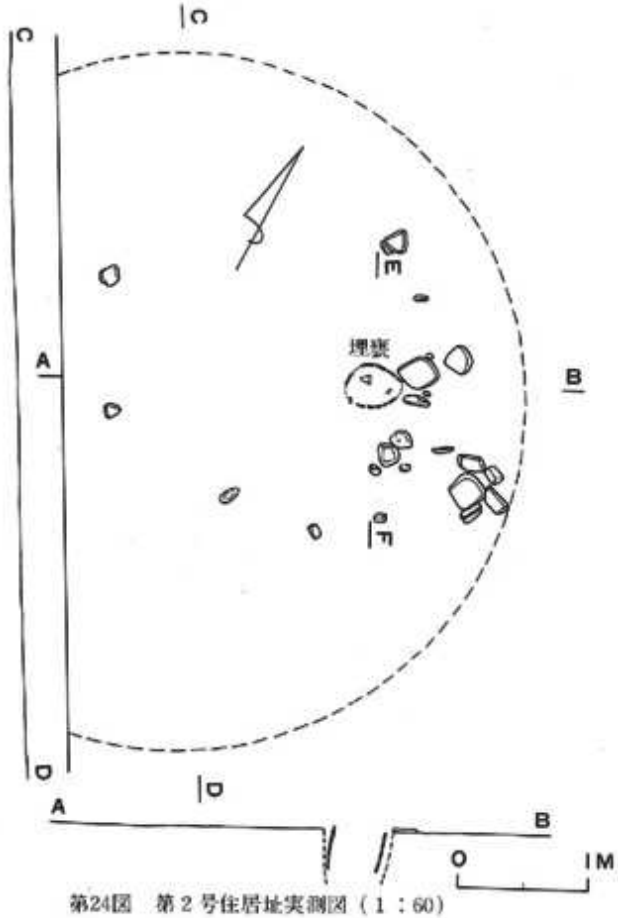
第4節　第2号住居址

遺　　構（第24図、第25図）

本址は調査地域の最西端に検出された縄文式時代中期末葉の円形竪穴住居址である。かかるグリッドはA－2・3、B－2・3であるが、調査地域外にプランのおよそ半分がかかってしまっていたため全体のプランを確認することはできなかった。しかも第1号住居址と同様耕作による破壊が激しく、壁を全く確認することができなかったし、また柱穴も確認することができなかった。したがってプランの想定は、残されていたタタキのある床面と、埋甕施設それに遺物の分布から行なった。また耕作者から、耕作中にA－2グリッド付近の調査区域外から焼土が多量にあったことや、焼石を抜き出した覚えのあることを聞いた。現に調査中、その付近が攪乱されており、耕作土に混入している焼土がかなり目についたことなどからここにはまちがいなく炉址が存在していたことがわかった。したがってそのようなことを考慮に入れ、波線ではあるがプランの想定を行なった。推定で直径が5.5mになるかと思われる。

埋甕施設（第25図）

埋甕は、プランとほぼ東側の壁際に近い所で確認され、口縁部を床面上に現わしていた。蓋石は、埋甕を掘り上げる過程で埋甕内部に落ち込んでいることを確認した。この周囲には河原石の比較的遍平なものや、表面を磨ってある磨石などが置かれていた。埋甕を埋納するための土坑は、掘り切り口の直径50cm、深さは78cmを測る。この施設は非常に特異な構造をなしており、深鉢形土器が埋納されていた位置は掘り切り口より36cmまでの所であり、その直下に直径20～25cmの楕円形の石が存在し、それは小円礫の石組の上に置かれていた。石組みは土坑の周囲の壁面に押し込んで構築してあり、その直下は、深さ20cmのすり鉢状の落ち込みになっていた。埋甕の直下に石が置かれている例は比較的多く確認されているが、置かれている石の下にさらに土坑が存在している例は、数少ない事礼の一つではないかと思われる。このような構造をなす設設は、



第24図　第2号住居址実測図（1：60）

いわゆる一般的にみられる埋甕施設とは少々意を異にするのではないかと思われる。大きく分けるとするなら、深鉢形土器の部分と石を有する下部の土坑の部分になるが、深鉢形土器は胴部下半は意識的に欠いてあり、しかも欠け口を磨き疑似口縁を作出してある。例えこの土器の中に何かを入れようとしても、納まらないのは当然である。したがって中心的機能を果たすのは下部の土坑で、土坑内に埋納物を入れ石蓋をしたと考えるべきで、胴部下半部を欠く深鉢形土器は、本来は中心的機能を果たすべきであるが、本址の場はあくまでも疑似的な存在として置かれていたのではないだろうかと考えるのである。

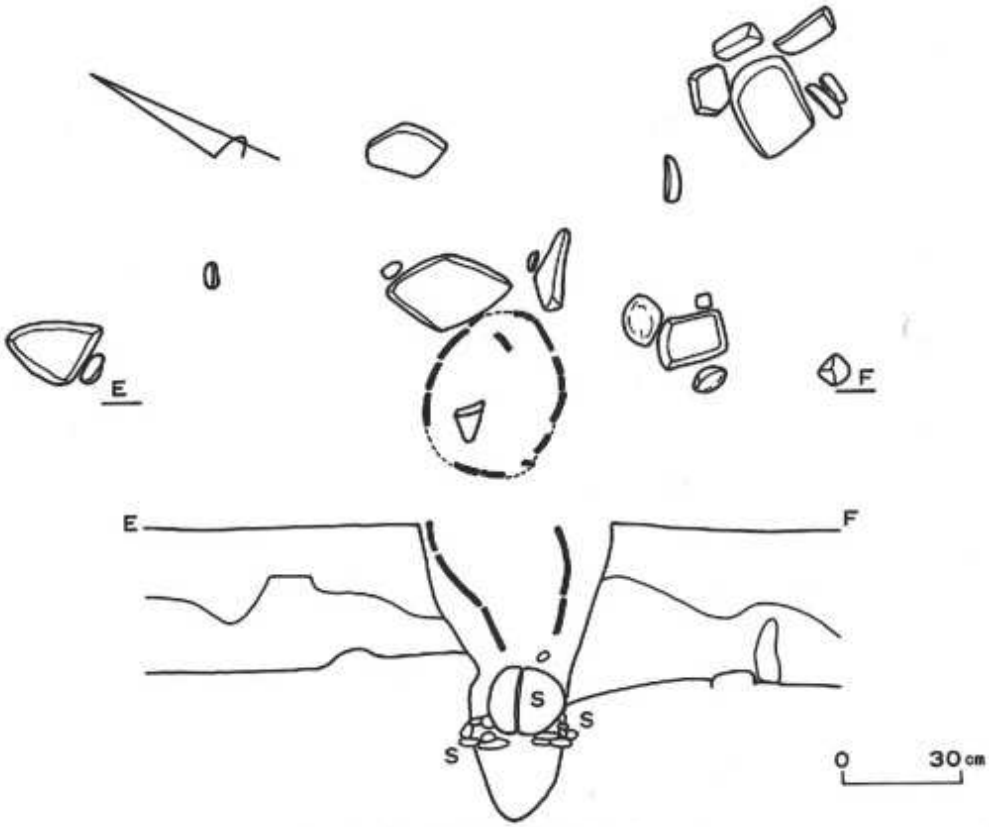
遺　物

本址の遺物も、壁等が破壊されている状態にあったため床面上に密着しているもののみを伴出遺物として取り扱い、その他の遺物はグリッド遺物として取り扱った。

土器（第26図、第27図）

本址出土の土器は、縄文を文様の主体とするものと沈線により円形のうず巻文を主体として文様の構成を行なっているもの、綾杉状文が文様の主体となるもの、その他の沈線文土器などが分類としてあげられる。

縄文が文様の主体となる資料は1～26、29である。このうち縄文部と無文部とを沈線によって区画している資料は1～17、29で、1は深鉢形土器の口縁部で、口唇はやや尖がる形状を呈し、口縁直下の無文帯の所は肥厚している。無文部と縄文部の区画は上部は隆帯によって行なわれ、下部は沈線によって行なわれている。縄文原体は一定した方向性がなく、施文することによって残った無文部を埋めるような施文方法である。器厚1.0～0.8cmでススが付着して黒褐色を示し、焼成やや良好の資料である。2は縄文部の間にかなりの割合を占める無文部があり、沈線は縄文部と無文部とにかかわり合いなく描かれている。縄文は1と同様太い原体であり、



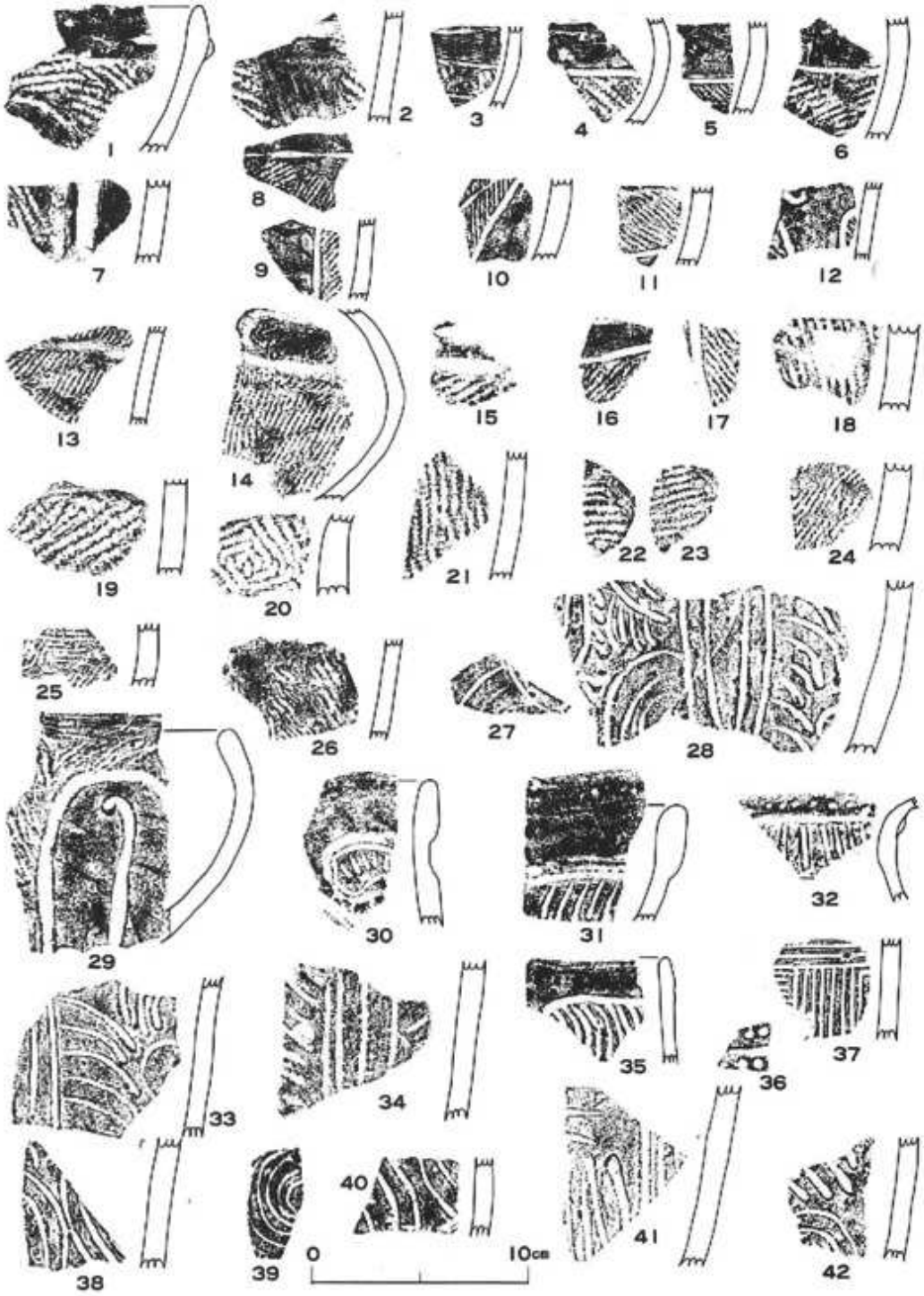
第25図　第2号住居址埋甕実測図（1：20）

R{L/Lを示している。胎土は均一で黄色を示す焼成良好の土器で、器厚は0.8cmを測る。5、8～11は同様に沈線で区画している資料であるが、他のものに比べると縄文原体が比較的細い資料である。縄文原体は6、8、9、10はL{R/Rで、あとはR{L/Lを示している。いずれも胎土は均一で、黄褐色を示す焼成良好の資料である。13と14は非常に類似性のある資料で、14は胴部の資料である。かなり外側に対してのふくらみをみせている。無文部には、沈線による横長楕円の区画文があり、その直下よりR{L/L縄文が施文されている。13はR{L/L縄文の施文の後に、横方向に対する沈線を描いており、器厚はいずれも0.8cmを測り、胎土には砂粒と小石が混入しており、焼成良好である。

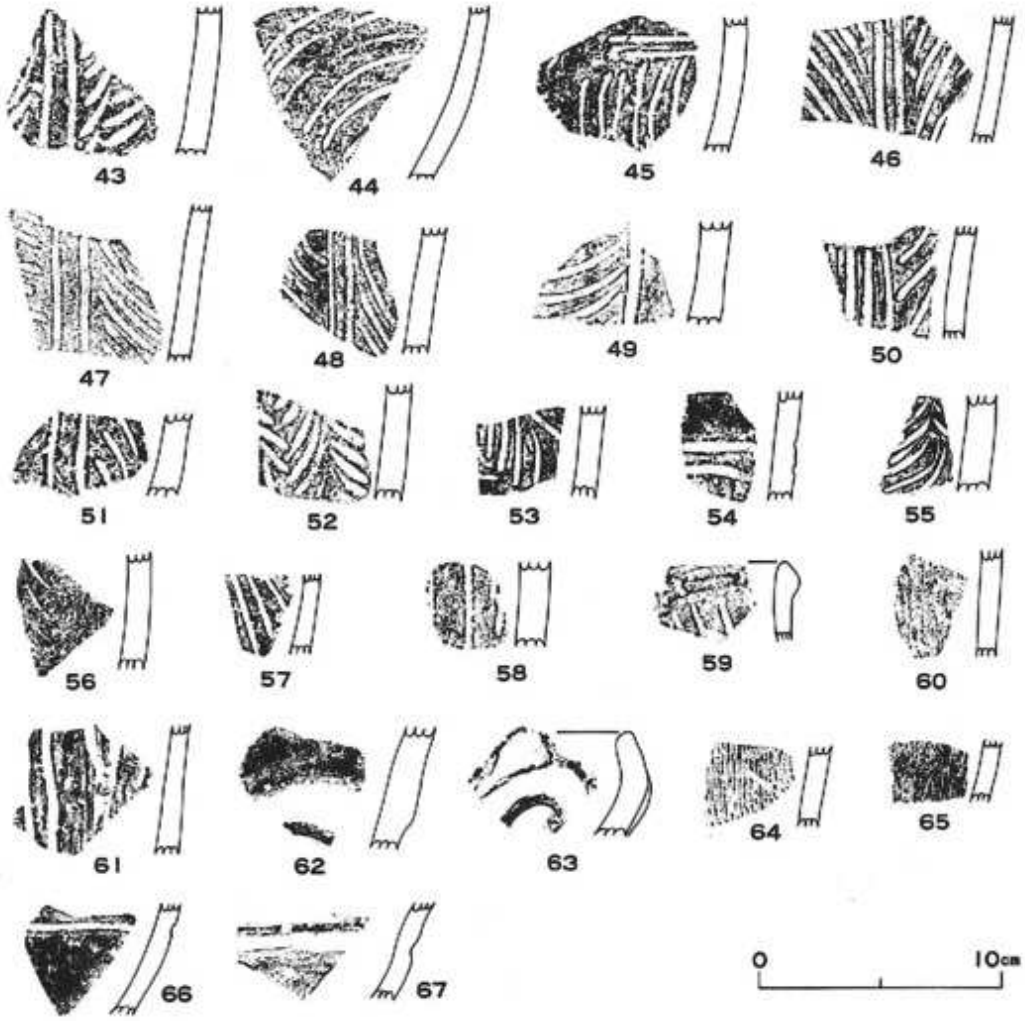
27～28、33～34、38、42、68は沈線による円形うず巻文を主体とした土器であり、さらに30 31、35は、それらの資料の口縁部に当たるものである。これらの資料は本址出土の中にあって最も量的に多いものである。埋甕はこの分類に属しており、最もまとまりのある資料であるので代表して記述しておく。

埋甕（第28図68）

埋甕の出土状態は遺構のところで記述したが、非常に興味ある見解が得られている。口縁部の直径43×48cmでかなりの変形した資料で、高さは現存部で34.3cm、器厚は1.5cmを測る。口唇

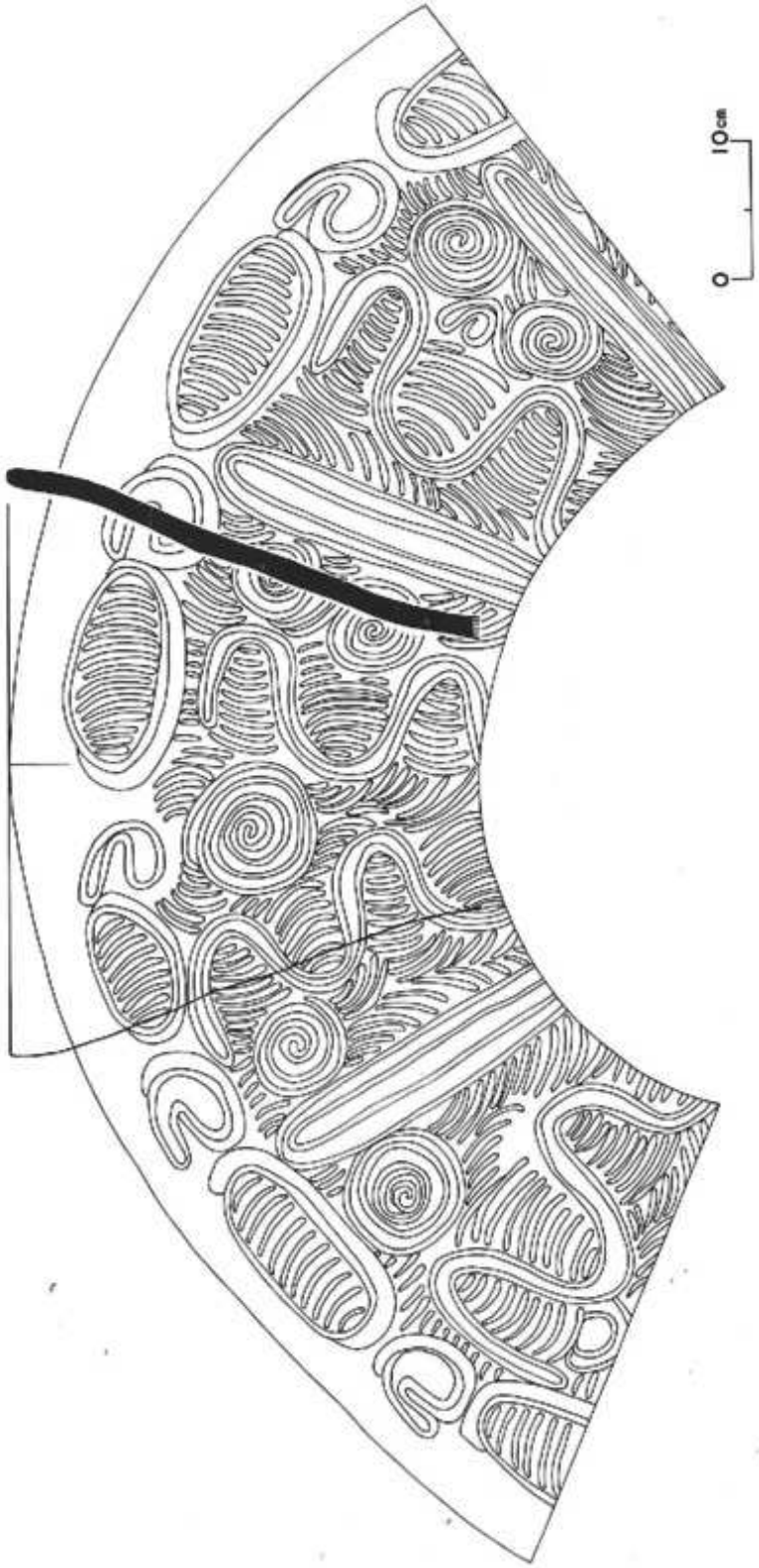


第26図　第2号住居址出土土器（1：3）



第27図　第2号住居址出土土器（1：3）

は平らになっておりよく整形されている。口縁部直下は、やや外側に対してふくらみをもっているが、下部に至るにしたがって内彎し、再びふくらむという微妙ではあるが器面に凹凸がある。胎土は砂粒を僅かに含んでいるおり、全体が黄褐色を示す焼成良好の資料である。文様構成は比較的規則性があるが、全体からすると微妙に文様のサイクルが異なる部分がある。口縁部直下には沈線による横長楕円形の区画文があり、区画の中は上から下にかけてやや「＞」の字型に沈線が幾本も描かれている。区画沈線の半分より下の部分の外側には、粘土紐の貼付による隆帯がめぐらされている。この横長楕円の区画文は、横帯に五つ描かれている。さらにこの五つの区画文間に、一つ置きに「つ」の字型を呈するような、同じく内側を沈線でなぞらえ外側に隆帯の貼付けによる文様が五つ描かれている。隆帯が使われているのはこの横帯に並ぶ十個の文様だけであり、以下胴部の文様構成は全て沈線によるものである。器面全体は上下の二



第28図　第2号住居址出土埋甕展開図（1：6）

重沈線によって三分割されている。沈線の間は無文になっている。さらにこの沈線の間には、上から下にかけて１本ないし２本の大きく波うつ波状沈線が描かれており、しかもこの沈線も二重である。この直線的な沈線と波状沈線との間に、沈線によるうず巻が施文されている。同じ区画に二つ上下に描かれている部分が２ヶ所、一つだけ描かれている所が３ヶ所あり、区画内に於ける位置は、上部の楕円区画文などが描かれているすぐ下に当る部分である。さらにこれらの文様構成以外の部分に綾杉状文が基本となるが、右払いあるいは左払いの沈線文が描かれ、口縁部直下の無文部を除いて全ての器面は沈線による文様構成によって埋めつくされている。本資料は中期末の曽利Ⅳ式期に比定されよう。

43～59は綾杉状沈線文が主体となっている資料であるが、埋甕の文様構成にもあるように、綾杉状文とは若干異なる変形した沈線文がこの中には含まれている。典型的な文様構成をなすものは52と55である。

60、64～65は、縦に細かい沈線が施文されており、櫛歯状工具によるものと思われる。この手法は、器面調整に重きを置いており、整っている。器厚は0.8～1.0cmで黄褐色を示しており、焼成はやや不良である。

石器（第29図、第30図、第31図）

石鏃（第29図１）

本址からは石鏃は１点出土しただけであった。縦径1.9cm、横径1.2cm、厚さ0.4cmを測る赤色チャート製のもので、本遺跡から出土した石鏃のうち黒曜石以外のものは本資料だけである。比較的対称的でリタッチも丁寧に行なわれていた。脚部は短かく長身鏃の部類に属している。

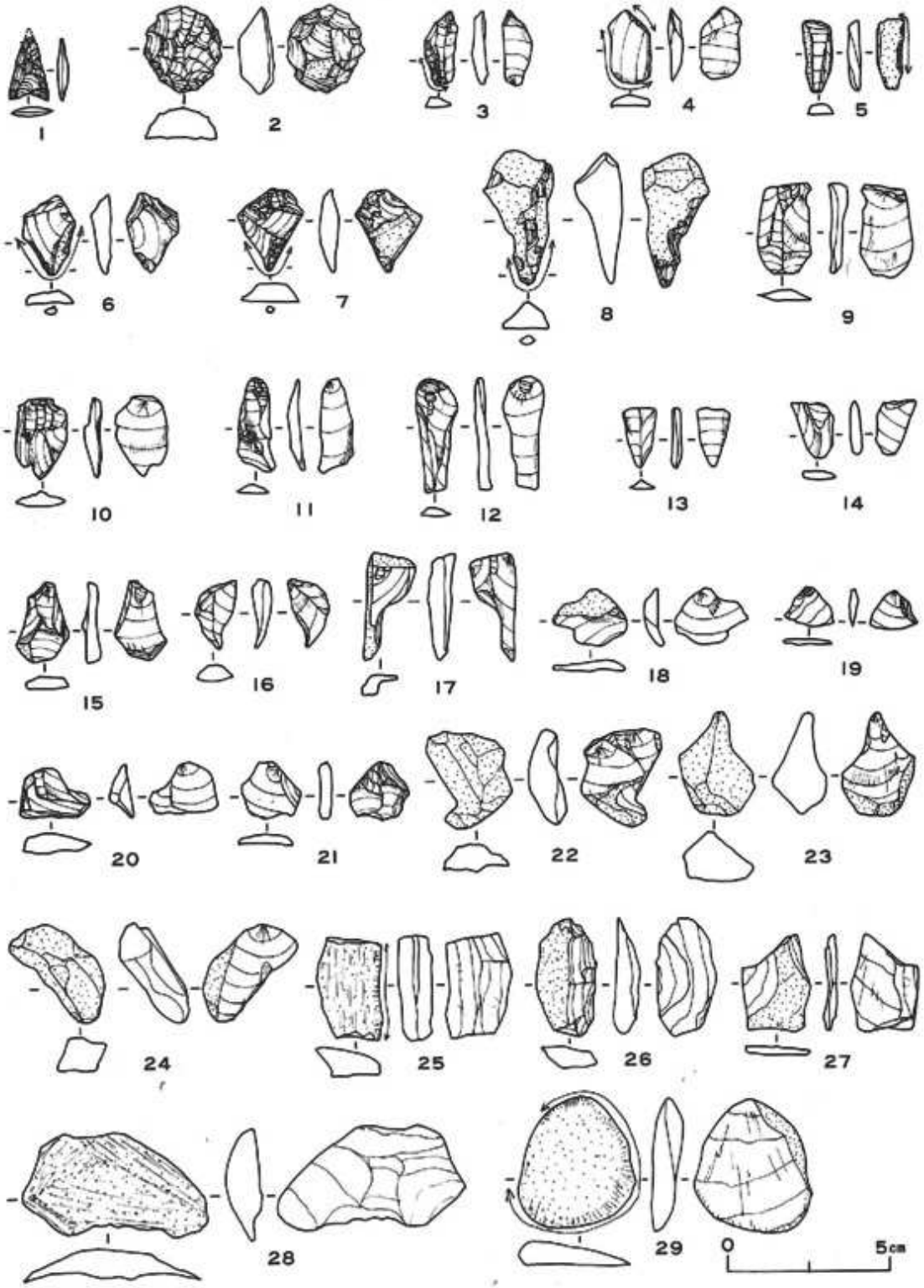
掻器（第29図２）

２は、平均の直径2.5cmを測る黒曜石製のラウンドスクレーパーで、本址より唯一出土している。厚径は1.1cmで、断面は一面が平らになるカマボコ型を呈しており、全体は細かく丁寧な剥離が行なわれているが、カマボコ状を呈するＡ面に比べるとＢ面の方が剥離面は大きく、また一部に自然表皮を残している。周囲の刃部はより細かな剥離が目立っている。

削器（第29図３～５、25、29）

３～５はサイドスクレーパーで、３と４は主軸に対して斜め方向に刃部が作出されており、特に４は45°角になっている。５は主軸に対して平行であり、両面に自然面を持ち、リタッチはその自然面に対して行なわれている。３と４はブレイド状の剥片を利用しているのに対して、４は不定形な剥片を利用している。25と29は硬砂岩製の資料であるが、いずれもスクレーパーとして分類に含めてよいかの疑問もあるが、いちおうここで取り扱った。25は、不定形な剥片の鋭利な部分を刃部としてあり、側辺部に沿って刃部は直角方向に使用痕が残されている。また29は、思考剥離により剥離された剥片か、あるいは偶然に剥げた剥片であるのかは判別がつかないが、自然表皮の周囲に使用痕が残されている資料である。

石錐（第29図６～８）

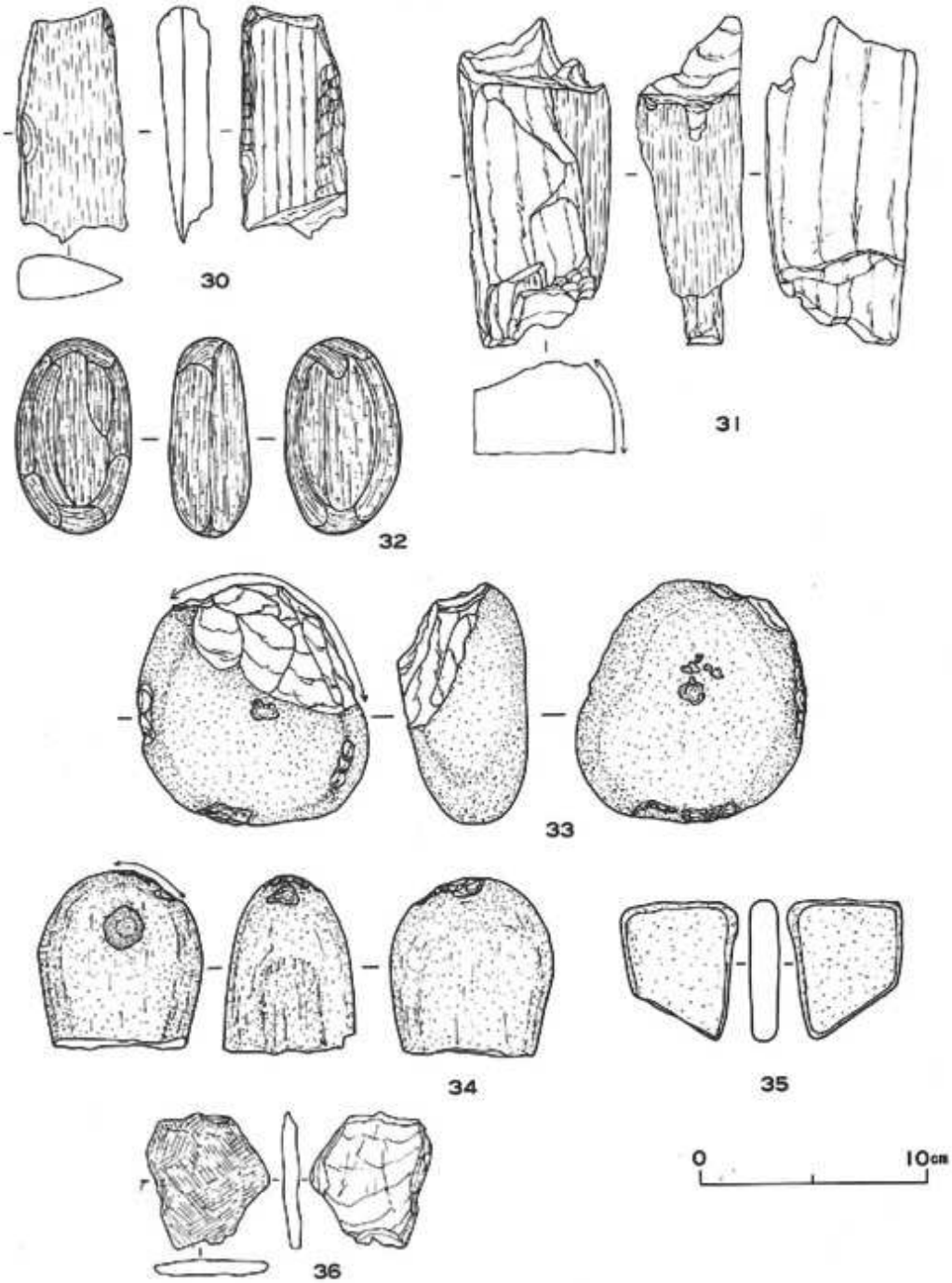


第29図　第2号住居址出土石器実測図（1：2）

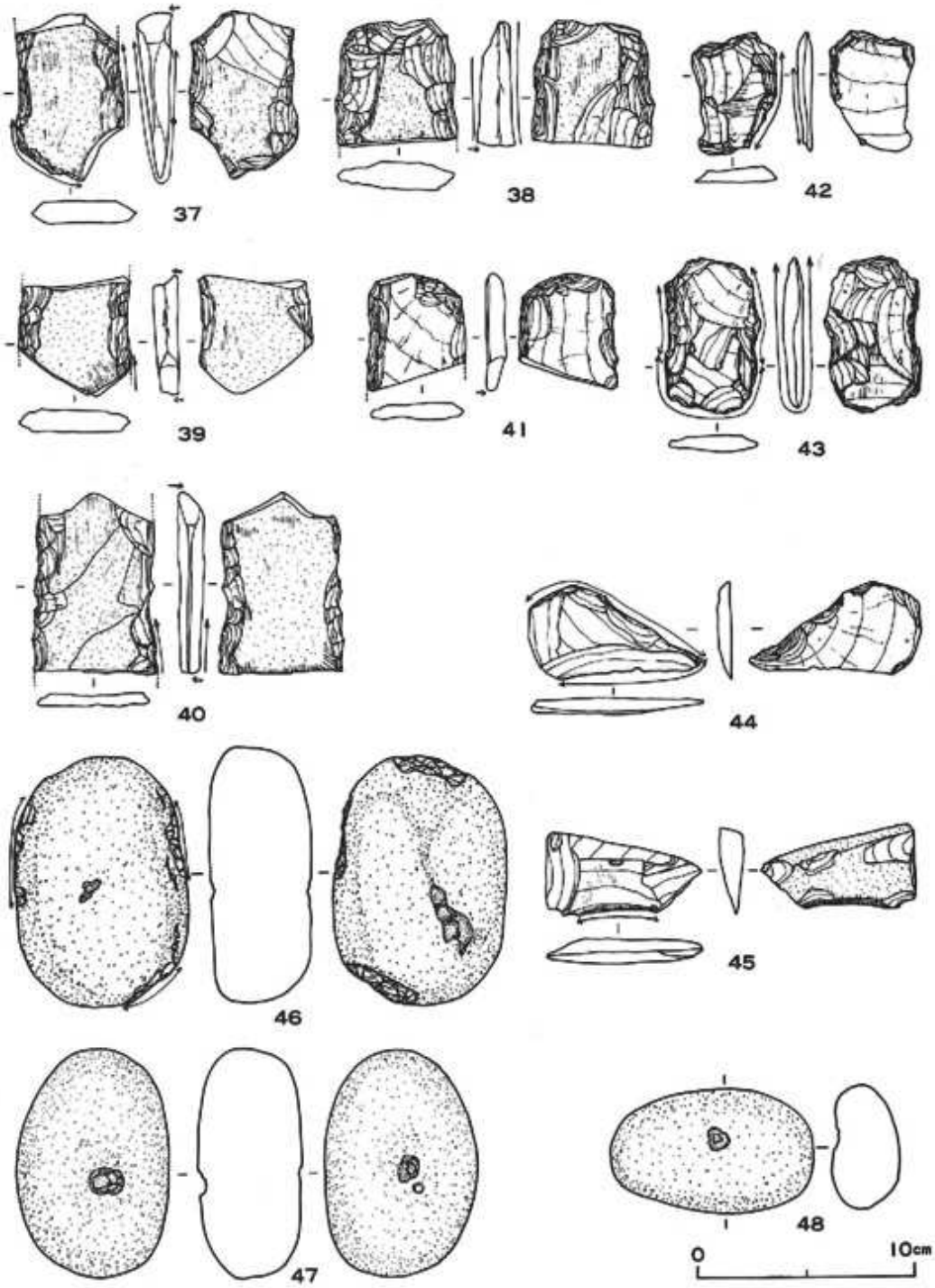
本址出土の石錐は3点である。6は縦径2.4cm、横径1.7cm、厚径0.6cmを測る黒曜石製の資料である。剥片の鋭利な先端部を刃部として作出してあり、その他の部分にはほとんど加工をしていないのが特徴である。刃部に達する一面に自然面を残している。断面は刃部先端部だけがほぼ円形を呈している。7も同様な形態を呈する資料で、縦径2.6cm、横径2.0cm、厚径0.7cmを測り、先端の刃部と基部には加工が行なわれているが、その他は自然表皮面を残したり、第一次剥離面が残されている。刃部の大半は断面三角形を呈しているのに対し先端刃部だけが丸味を帯びている。8は製作途上であると思われる資料であるが、全面に自然表皮面をもち、石錐の形態に加工しやすい原石に対して剥離を行なっている。これらの資料の中で6と7は、一般的に見られるような刃部が直線的な形態をとる資料とは異って、63°～65°に基部に向って開く様相を呈している。また基部よりも刃部の方が長いのが一般的であるが、本資料はほぼ同じ長さである。これらの資料は、機能的に違いがあるのか、あるいは限化形態を示すのか、または地域的な差なのかという問題を残すものである。

打製石斧（第31図37～41）

打製石斧は5点出土しているが全て欠損している。37は刃部の一部と基部を欠損している資料で、両面に自然の板状節理面を残している。形態は短冊形になると思われる。周辺部に対して比較的簡単な加工を行なっているが、原石そのものが刃部に至るほど薄くなっているためそれほどの加工は必要としないものである。したがって加工部よりも自然面の方が面積が大きい。現存部で縦径7.5cm、横径4.6cm、厚径1.6cmを測り、断面は刃部を頂点とする二等辺三角形状を呈している。刃部は欠損しているが、やや丸味を帯びる形態であると思われる。使用痕は非常に顕著で、全てが主軸と同一方向に残っている。A面の先端部は特に顕著であり、いちだんと使用痕が多く、さらに基部中央部にまで達している。B面はA面ほどではないが顕著に残っており、本址出土の中にあっては最も使用されている資料と言える。使用角度は22°を測る。38は基部末端部の資料で、基部中央から刃部先端まで欠損してしまっている。本資料も自然の板状節理面を両面にもっている。横径5.5cm、厚径1.8cmを測るが、他の資料より厚径があり、また中央部に至るほど増している。加工痕は非常に大担になされ、自然面を狭くしている。断面をみると直線的で対称的な形状をしている。使用痕は自然面に顕著に現われているが、使用痕というよりも磨耗痕と表現した方が適切であると思われる。この磨耗痕は直接的機能をはたすことによって残っているのではなく、使用することによる柄ずれがこのような状態で残ったのではないかと思われる。39は先端刃部と基部とを欠損している資料で、やはり両面に自然の板状節理面を持っている。本資料も原石の自然の状態を利用しており、両側辺部を比較的簡単に加工している。両端の折れの方向は一致している。使用痕は僅かに残っており、主軸に対して平行のものと、わずか斜め方向に残っている二種類が認められる。40も先端刃部と基部末端部を欠損しており、折れの方向は異っている。形態は短冊形を呈し、両側辺部に第一次剥離面のみを残すリタッチが行なわれており鋸歯状になっている。A面B面ともに使用痕が顕著に表われているが



第30図　第2号住居址出土石器実測図（1：3）



第31図　第2号住居址出土石器実測図（1：3）

いずれも異なった種類である。A面は、主軸と同一方向の使用痕が、二箇所に分離して残り、分離している間の所に右上↔左下の使用痕がある。この使用痕は、かなり強い作用によって付いたらしく、一見して分かるほどに掘りくぼんだ状態になっている。これと位置を同じくする側辺部は、加工により若干の内側への凹部を作出してあり、この部分も使用痕が顕著に残っている。これらは使用痕というよりは磨耗痕としての様相を強く感じさせる。またB面に於ては、僅かではあるがA面と同一方向の使用痕が残っている。しかしA面との関連性は、位置的にもかなり薄いように思う。41はやや異なる硬砂岩製の資料であり、両面は第一次剥離によって大担に剥離されているため自然面を持たない。基部のみを残し、他は欠損しているが、残存部の側辺は比較的加工がなされており、中央部は第一次剥離面を残している。形態は短冊形を呈しているが両側辺部はせり上がり、中央部はくぼんでおり、やや対称性に欠ける資料である。使用痕等は何ら確認することはできない。

横刃形石器（第31図44、45）

44は縦径4.5cm、横径8.0cm、厚径0.7cmを測る横刃形石器である。B面は第一次剥離面をそのままに残し、縁辺部のみ一部加工を行なっており、またA面は大きく三面の剥離が存在し、そこの縁辺部に対し加工を行なっている。A面の特徴は剥離面の末端部が全て集中しているということであり、剥離面の打撃部は全てB面の剥離によって打ち欠かれてしまっていることである。刃部は、横長の剥離面の側辺を用いているが、刃部作出のための剥離はない。また刃部に対して基部の末端（背）は、やや剥離による調整がある。使用痕は、刃部と基部の両方に在るが、刃部の使用痕は縁に沿って短かく細かく残っており、また基部は磨耗痕ともいうべき状態で残っている石質は硬砂岩製である。45は44と成作テクニックがかなり類似する資料で、A面はやはり剥離面の末端部が中央に集中しているが、打撃点は存在していない。刃部には44の資料とは異なりリタッチが行なわれており、刃部に直交するように使用痕がある。また横剝ぎの技法が中心である。B面は、そのほとんどが自然面であり、刃部とその他に僅かな加工痕がみられるだけである。刃部には使用痕が残っている。断面は刃部を頂点とする二等辺三角形を呈し、縦径4.0cm、横径7.2cm、厚径1.1cmを測る対称性の資料である。石質は、硬砂岩である。

ハンマーストーン（第30図33、34、第31図46）

本址からは三点のハンマーストーンが出土しているが、三点とも他の機能をも兼ね供えている資料である。

33は三点の資料のうち最も機能点が大きな資料であり、両面が凹石として利用されている。最大径は10.6cmを測る楕円形を呈しており凹部を中心とした周辺部は平らになっており、全体に研磨されたようになっている。機能部は、最少限九面の剥離面がみられ、機能部作出のための剥離とも理解されるのであるが明確には確認できない。その他の部分に三ヶ所の機能点がみられ磨滅している。重量は795.0gを測りかなり重い資料で、使用対象物もかなり大きなものであったと思われる。34は無頭石棒の先端部ではないかと思われ、全体に研磨がなされており、ま

た凹部もみられ三種類に使われたのではないかと思われる。ハンマーストーンとしての機能部は比較的細かな剥離面が集中してみられる。石質は33と同様普通輝石安山岩である。46は凹石と機能を兼ねる資料であるが、凹石としてはあまり使用されてはいない。機能部は合計四ヶ所認められるが、長軸の両端部にある機能部が最も使用されている。縦径11.4cm、横径7.8cm、厚径4.6cm、重量590.0ｇを測る。

凹石（第30図33、34、第31図46、48）

前述したようにハンマーストーンと機能を兼ね供えている33～34、46があり、凹石として単独の機能を果している資料は47～48の二点だけである。これらのうち、両面に凹部を持つものは三点で他は片面のみ有している。いずれも顕著な機能部をもっておらず、意識的に加工したとは考えがたい資料ばかりである。石質は比較的加工しやすい普通輝石安山岩の河原石を利用しており、研磨がなされている資料もある。

磨石（第30図32）

本址からは１点出土している。縦径8.6cm、横径5.6cm、厚径3.5cmを測る楕円形を呈する資料で、全面に対して研磨がなされて合計12ヶ所以上の研磨方向が認められる。

不定形石器（第31図42、43）

本資料は通状打製石斧の剥片であるとか、小形の打製石斧だとか単的に判断されてしまっているもので、意外に注意が払われず見のがしてしまっている。名称を与えるには非常にむずかしいので不定形の分類としたが、製作技法や使用痕の観察から、ひとつの独立した石器として判断すべき資料であると思われる。

42は、縦径5.5cm、横径3.9cm、厚径0.9cmを測る粘板岩製の剥片を利用した資料である。Ａ面は周辺部からの剥離が中心となり薄く仕上げており、短軸と同一方向に使用痕が認められる。Ｂ面は、原石から剥離した剥離面が残されており、打撃点周辺に僅かな加工痕が残されている。43は、縦径6.8cm、横径4.2cm、厚径0.7cmを測る粘板岩製の資料で、Ａ面Ｂ面とも加工痕が顕著で、中央側辺部が加工によりくびれており、やや分銅形を呈するような形態をとるが、分類するとすれば短冊形になるかと思われる。使用痕は顕著で、主軸と同一方向が主体となるが、中央側辺のくびれ部と平行する面には、右下より左上方に斜めに残るものがあり、これらは周辺の側辺部や剥離面が高い位置にある所に多くみられる。また使用痕の範囲はくびれ部で一端とぎれており、このくびれ部の存在も興味をひくところである。

石剣（？）・**石棒**（第30図30、31）

30は緑泥片岩製の石剣と理解される資料であるが、確実な名称を与えることはできない。Ａ面は主軸方向に対して全面に研磨がなされまたＢ面に於ては、両側からリタッチ状の剥離が行なわれている。断面は一側辺部を頂点とする二等辺三角形を呈している。両端部は欠損しているが、いわゆる直接的機能をもつ石器ではなく、石棒とともに祭祀的な意味あいの強い資料であると思われる。31は緑泥片岩製の石棒の破片である。一部に研磨面をもっており、他の部分

第5表　第2号住居址石器集成表（その1）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第二号住居址	石鏃	1	長身鏃	チャート	•1.9	1.2	0.4	0.5	−	−	−	−	−	先端部欠損
	掻器	2	円形	黒耀石	2.6	2.4	1.1	5.0	−	−	−	−	／	ラウンドスクレーパー
	削器	3	縦長	〃	2.2	1.0	0.4	0.2	−	−	−	−	／	側片刃
		4	〃	〃	2.3	1.3	0.4	0.4	−	−	−	−	／	
		5	〃	〃	2.2	1.0	0.4	0.2	−	−	−	−	／	
		25	縦長	硬砂岩	3.2	1.9	1.1	2.0	−	−	−	−	／	
		29	円形	〃	4.1	3.6	0.9	5.5	−	−	−	−	／	
	石錐	6	縦長	黒耀石	2.4	1.7	0.6	2.0	−	−	−	−	−	平面三角形に近い形態をとり一部に自然面を残す。加工途上の様相を示す。
		7	〃	〃	2.6	2.0	0.7	3.1	−	−	−	−	−	
		8	〃	〃	4.0	2.2	1.5	9.5	−	−	−	−	−	
	打製石斧	37	短冊形	硬砂岩	•7.5	4.6	1.6	61.0	6.3	5.75	70°	22°	−	両面に自然面がある。
		38	〃	〃	•5.7	5.5	1.8	70.0	−	−	−	−	−	
		39	〃	〃	•5.4	5.2	1.2	50.0	−	−	−	−	−	
		40	〃	〃	•8.2	5.6	1.2	74.8	−	−	−	−	−	
		41	?	〃	•5.3	4.5	1.0	32.0	−	−	−	−	−	
	横刃形石器	44	横長	〃	4.5	8.0	0.7	24.5	−	−	−	−	−	横剝ぎ技法が中心
		45	〃	〃	4.0	7.2	1.1	23.0	−	−	−	−	−	
	ハンマーストーン	33	円形	普通輝石安山岩	8.6	5.6	3.5	400.0	−	−	／	／	／	凹石と兼用
		34	〃	〃	•10.6	10.0	5.5	795.0	−	−	／	／	／	凹石と兼用
		46	〃	〃	11.4	7.8	4.6	590.0	−	−	／	／	／	凹石と兼用
	凹石	33	円形	普通硬石安山岩	18.6	5.6	3.5	400.0	／	／	／	／	／	ハンマーストーンと兼用
		34	〃	〃	10.6	10.0	5.5	795.0	／	／	／	／	／	ハンマーストーンと兼用
		46	〃	〃	11.4	7.8	4.6	590.0	／	／	／	／	／	ハンマーストーンと兼用
		47	楕円形	〃	10.4	7.0	4.7	423.0	／	／	／	／	／	

（その2）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	着柄磨耗 有無	備考
第二号住居址	凹石	48	楕円形	普通輝石安山岩	9.25	5.7	3.2	215.0	／	／	／	／	／	
	磨石	32	楕円形	普通輝石安山岩	8.6	5.6	3.5	400.0	／	／	／	／	／	
	不定形石器	42	縦長	粘板岩	5.5	3.9	0.9	36.0	○	／	／	／	／	剝片加工の石器
		43	〃	〃	6.8	4.2	0.7	39.0	○	○	／	／	／	小形の打製石斧とも考えられる
	石剣？	30	断面三角形	緑泥片岩	•10.0	5.0	3.0		／	／	／	／	／	石剣かどうか疑問 } 研磨
	石棒	31	断面円形	緑泥片岩	•14.5	6.6	4.8		／	／	／	／	／	部分
	フレイク	9	縦長	黒耀石	2.8	1.6	0.6	0.2	／	／	／	／	／	縦長剝片が多い。黒耀石が多数をしめる。
		10	〃	〃	2.5	1.5	0.5	0.1	／	／	／	／	／	
		11	〃	〃	2.8	1.3	0.4	0.1	／	／	／	／	／	
		12	〃	〃	3.5	1.3	0.4	0.1	／	／	／	／	／	
		13	〃	〃	1.9	1.1	0.4	0.1	／	／	／	／	／	
		14	〃	〃	1.7	1.4	0.4	0.1	／	／	／	／	／	
		15	〃	〃	2.5	1.5	0.5	1.2	／	／	／	／	／	
		16	〃	〃	2.2	1.2	0.7	0.1	／	／	／	／	／	
		17	〃	〃	3.2	1.5	0.8	2.0	／	／	／	／	／	
		18	横長	〃	1.8	2.4	0.5	0.2	／	／	／	／	／	
		19	〃	〃	1.2	1.4	0.4	0.1	／	／	／	／	／	
		20	〃	〃	1.7	2.1	0.7	1.1	／	／	／	／	／	
		21	〃	〃	1.8	1.9	0.4	1.2	／	／	／	／	／	
		22	縦長	〃	3.0	2.4	1.0	4.3	／	／	／	／	／	
		23	〃	〃	3.1	2.4	1.7	5.1	／	／	／	／	／	
		24	〃	〃	3.3	1.6	1.2	3.2	／	／	／	／	／	
		26	〃	硬砂岩	3.3	1.9	1.1	2.4	／	／	／	／	／	
		27	〃	〃	2.9	2.1	0.4	2.1	／	／	／	／	／	
		28	横長	〃	3.4	5.6	1.1	6.4	／	／	／	／	／	

は欠損部である。原形はかなり大きなものであったと思われる。

フレイク（第29図9～24、26～27）

9～17は縦長のフレイクであり、そのなかで11と12は、ブレイド状の剥離面をもちエンドスクレーパー様の加工痕がみられるが明確な点がつかめないので、本分類に入れた。18～21は横長のフレイクであり、チップと認められる資料がある。その他は、自然表皮面をもつもので、原石と認められるものもある。

第5節　第3号住居址

遺　　構（第32図、第33図、第34図）

本址は調査地域の南西部に当たり、第2号住居址の南側に隣接して検出された。かかるグリットはA－3・4・5・6、B－3・4・5であり、第2号住居址と同様プランの半分が調査区域外にかかってしまっていたため全体プランを確認することができなかった。また、第1号、2号住居址と同様に耕作による破壊が激しく、壁を全く確認することができなかったが、幸いにも本址の方が難を逃れた感があり、床面は比較的良好な状態で残っていたし、柱穴も良好な状態で確認された。したがってプランの想定は柱穴から行なった。

本址は直径6.6mを測る円形竪穴プランになると思われる。床面は耕作により所々削られてしまっている部分があるが、ほぼ原形のまま確認された。床面上には大小さまざまな河原石が集中していたり散乱していたりしており、また床面にくい込んでいるものもあった。このような状態は他の住居址にはみられないことで、少なくとも自然流出ではなく持ち込まれたものであると理解すべきだと考える。炉址は、プラン中央よりやや北寄りの位置にあるが、すでに四方の石が抜かれていたり、また炉址内部に落ち込んでいたりして現形はほとんど止めていないが、掘り方だけはつかむことができた。南北1.3m、東西1.1m、深さ43cmを測るやや南北に長い長方形を呈しており、なだらかなすり鉢状になっている。南側の壁面には炉石の残存部があり、縦形の側面部を内側に向けるようにしていた。内部には焼土が多量に含まれており、炉壁もかなり焼けていた。内部より土器片、打製石斧、フレイク等が出土している。柱穴は合計17個確認されており、それらは壁に沿って二重に周る様相をうかがわせている。外側を周っているものはP_1～P_8であり、内側を周っているものはP_9～P_{12}－P_{15}をそれぞれ結ぶもので、住居址の建て替えも考えたが、周溝等の遺構が検出されず確認することができなかった。P_1、P_3、P_7、P_9はぐり石の存在している柱穴である。P_1とP_3はかなり浅く磨鉢状に落ち込むように入れられており、P_7とP_9は、柱穴というよりはむしろ土坑としてあつかった方が適切であると思われるほど大きなもので、P_7は直径73cmの円形を呈し、垂直に底部まで落ち込んでいる。河原石は底部に敷き詰めるようにして入り込んでおり、グリ石というより敷き石とも考えられる。P_9はP_7に比べ

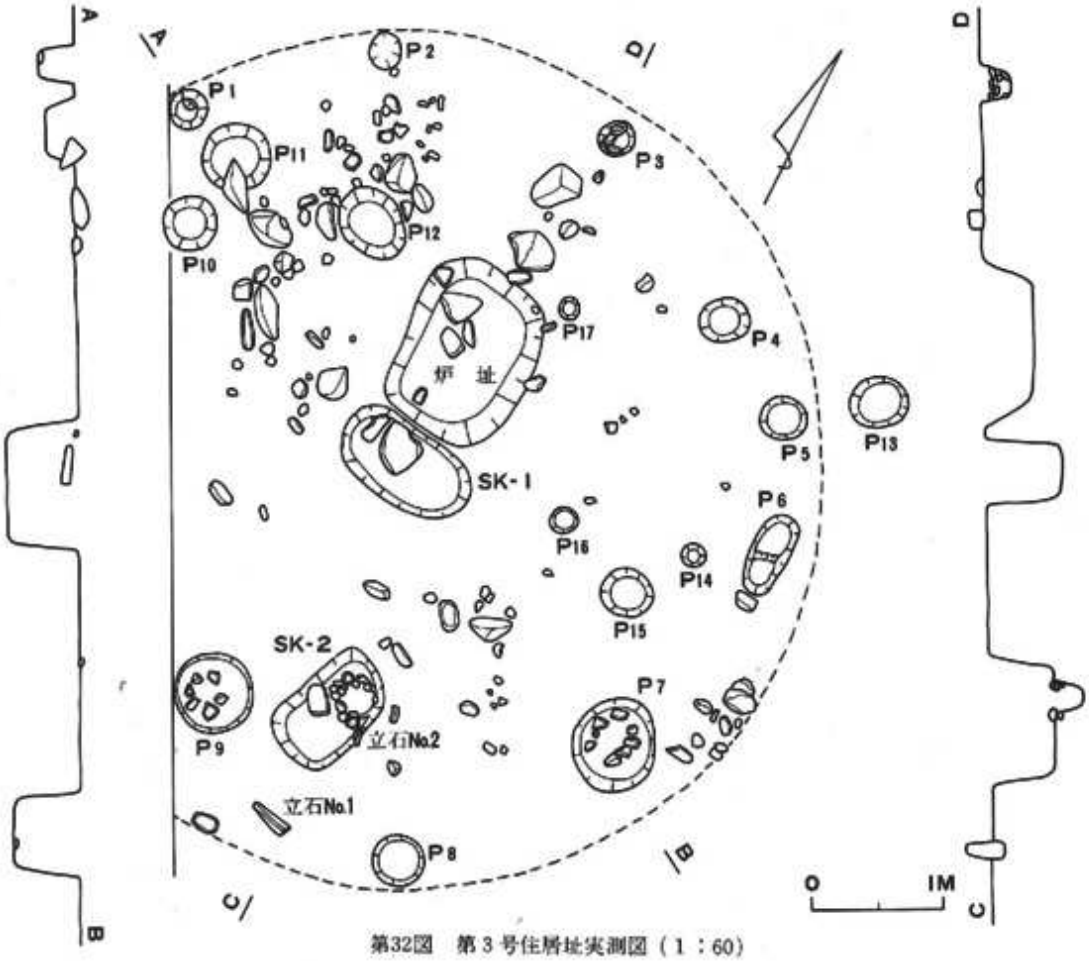
るとやや小さく直径60cmを測る円形を呈しており、同様に壁面が底部まで垂直に落ち、底部には河原石が入り込んでいる。その他の柱穴はグリ石の存在はないが、深さに僅かな相異があり、直径はほぼ一定している。

第１号土坑（ＳＫ－１）（第33図）

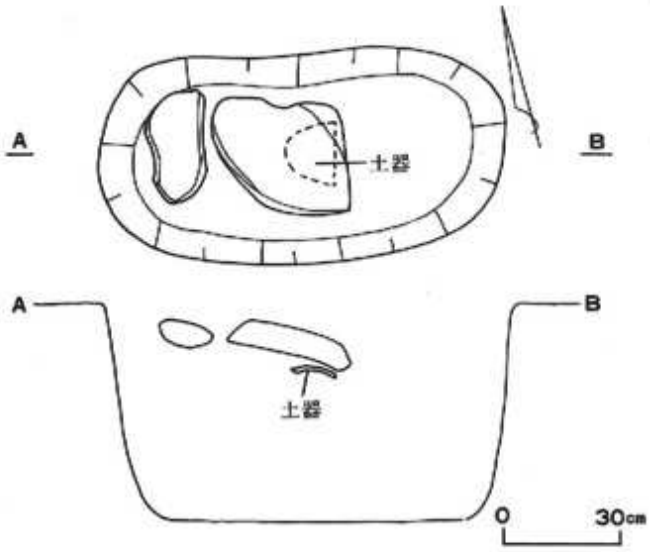
ＳＫ－１は東西1.1ｍ、南北60cm、深さ60cmを測る東西に長い楕円形を呈している。土坑の覆土上部には35×30cmの遍平な河原石があり、その直下には加曽利ＥⅣ（曽利Ⅳ～Ⅴ）式土器の半欠品が、内部を下にして横わっていた。その他には何も確認することはできなかった。河原石と土器を施設として理解するならば土坑内の覆土は人工的に埋められたという証拠になり、単なる土坑としてではなく土坑墓的性格が非常に強い遺構として理解されよう。

第２号土坑（ＳＫ－２）（第34図）

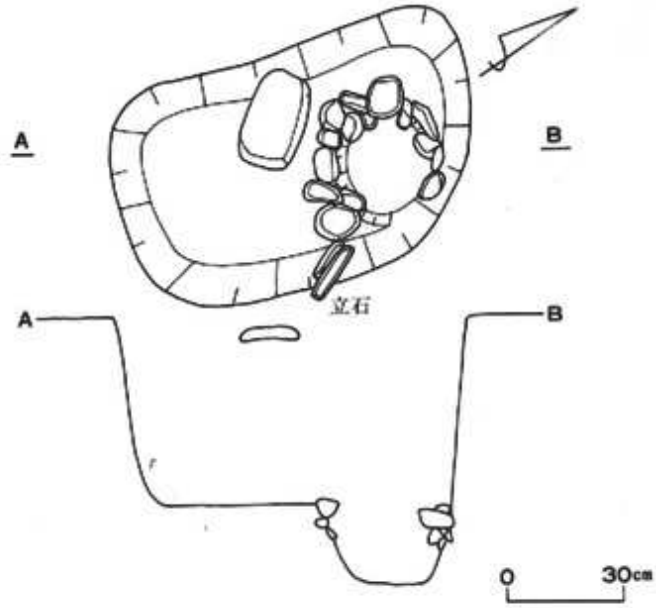
本土坑はＳＫ－１から1.1ｍ南側に寄った所で検出されており、東西60cm、南北95cm、深さ50cmと70cmを測り平面が楕円形を呈し、底部が二段になっているものである。掘り切り部には大きな礫と立石があり、ＳＫ－１の様相とよく似ている。底部はほぼ水平しベルであるが、北側



第32図　第３号住居址実測図（１：60）



第33図　第３号住居址ＳＫ－１実測図（１：20）



第34図　第３号住居址ＳＫ－２実測図（１：20）

部分にはさらに20cmほど深いピット状の落ち込みがあり、渕には河原石で囲んだ石組みが存在している。このような状況は、第２号住居址の埋甕直下の施設と非常に近似するところがある。遺物は土器片とフレイクが出土している。全体的にＳＫ―１と非常によく似ており、同一的な意味をもつ施設ではないかと考えられる。

立石

立石は合計２個確認され、No.1はプラン南側の想定される壁際にある。高さは床面上に32cm、床面下に10cmほど埋められた状態であった。これは河原石が利用されており、磨かれた様子はなかった。No.2はＳＫ―２の掘り切り部に立てられており、高さは床面上に28cm、床面下に15cmほど埋められた状態であり同様に河原石が利用されている。いずれも研磨等がなされていないため、倒れていれば立石とは判断できないほどの普通の石である。

本址は第一河岸段丘の河岸線に最も近い所にあり、また耕作土の最も浅い位置にあたっている。プランは黄色ローム層上部に存在しており、恐らくは、黒色土から掘り込みローム層の僅かまでしか掘り込まなかったのではないかと思われる。むしろローム層上に、黒色土を貼ることによって生活してい

た感がある。

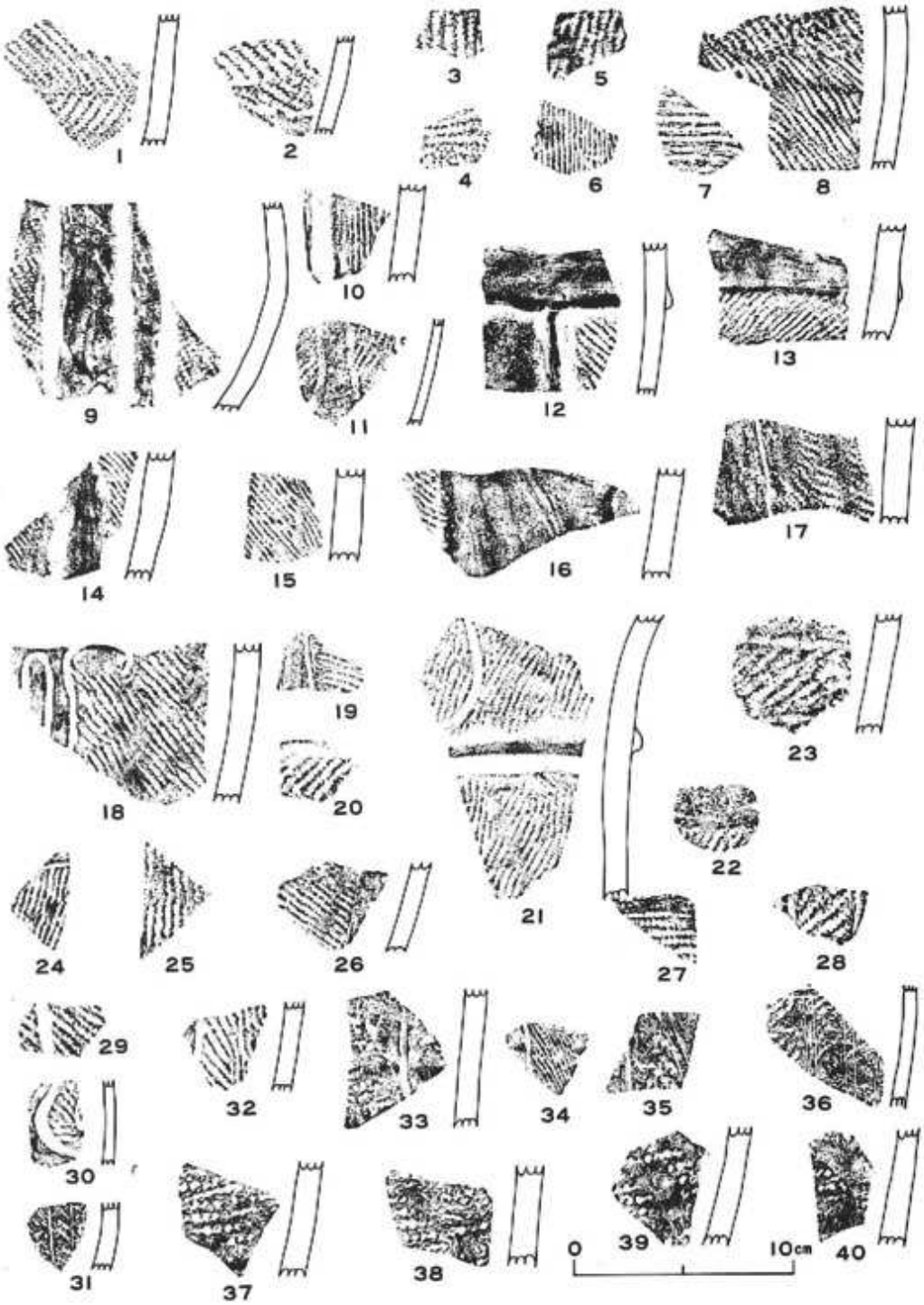
遺　物

本址出土の遺物は、第1号、第2号住居址と同様に壁面が耕作により破壊されており、したがって覆土の存在がほとんどなく耕作土・床面という関係にあったので、伴出遺物を捉えるのに最心の注意を払った。取り上げた遺物は、床面直上もしくは柱穴内、土坑内、炉址内に限った。全体に土器の出土量に比べて石器の量が少ないことが特徴である。

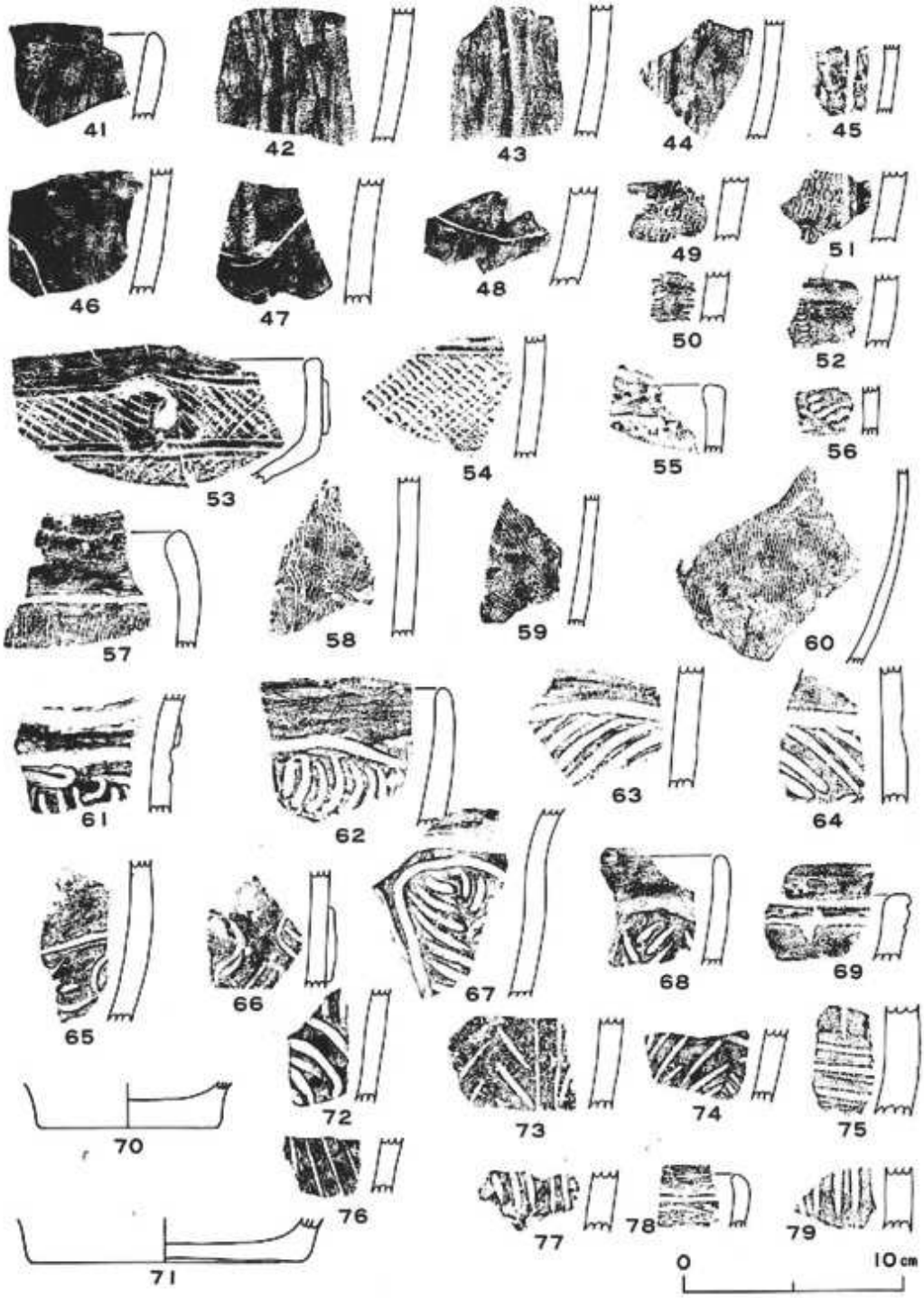
土器（第35図、第36図、第37図）

文様構成は大別すると3群に分けることができ、1群は縄文を文様構成の主体とするもの、2群は沈線により文様を構成するもの、3群は櫛歯状工具による波状沈線を文様の主体とするものである。

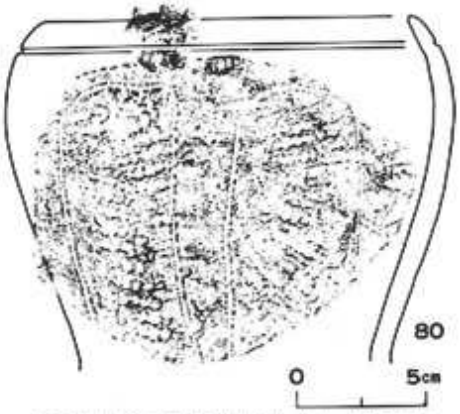
1群の縄文を文様構成の主体とする資料は第35図1～40、第36図41～45、第37図80である。1はL$\frac{R}{R}$原体を回転施文しているが、帯状に上下を逆方向から交互に行なっている。2は粗大な原体とやや細目の原体をやはり帯状に交互に回転施文しているが、回転方向は同一である。いずれも胎土は比較的均一であり、黄色を示す焼成良好の資料である。6は無節縄文で、一見沈線のように感ずるが、器面に対して縦方向の無節縄文がみられる。茶褐色を示す焼成良好の資料である。8は原体R$\frac{L}{L}$を示す単節の斜縄文で、原体は太い部分と細い部分とがみられやや不均一のものであり、施文後に磨消しがなされている。器厚は1.0cmと厚く、胎土には砂粒がかなり含まれており、やや黒褐色を示す焼成良好の資料である。9～36は、沈線あるいは隆帯によって縄文部と無文部を区画している資料である。9は幅0.8cmの沈線を三本上下に引くことによって、縄文部とさらに無文部を区画している。器厚は0.8cmで小石が混入し、整形はやや雑然としており、所々にススが残る胴部下半の資料である。同様に上下の太い沈線をもつものに10と14があり、幅は0.8～1.2cmにもおよんでいる。器厚は1.2cmといずれも厚く、黄褐色を示す焼成良好の資料である。その他は比較的細かい沈線により区画を成しており、量的にはやや多い。17は縄文と沈線の施文の後、かなり激しく磨消しが行なわれているため、施文部の浅い所は磨り減った状態になり無文化してしまっている。器厚は1.3cmを測り、胎土は均一であるが灰褐色を示し焼成不良の資料である。18原体R$\frac{L}{L}$の粗大な単節斜線文を施文してあり、さらに上部が蕨頭のようになる沈線を上下に描いている。部分的にススが付着しており、内面茶褐色、外面黄褐色を示す焼成良好の資料である。31、33、35～36は縄文を施文した後に沈線を施文してあり、特に36は幅0.1cmの棒状工具によるもので、平行する二本ずつの配列があり、沈線文の間は通常の無文とは違いそのまま縄文が残されている。器厚は0.6cmを測り比較的薄い方で、胎土には小石が混入しているが、黄褐色を示し焼成良好である。37～40は単節縄文で、器面に対して軽く回転させており、部分的に施文されていない所が残っている。器厚は1.2cmと全般に厚く、灰褐色を示す焼



第35図　第3号住居址出土土器（1：3）



第36図　第3号住居址出土土器（1：3）



第37図　第3号住居址出土土器（1：3）

成不良の資料である。80はＳＫ－１から出土した資料で図上復元したものであるが、口縁部直径14cm、器厚0.6～0.8cmを測る深鉢土器である。口縁部はかなり内側に内反しており、周囲をとり囲むように沈線が描かれている。文様構成は「逆Ｕ」字形に沈線が施文され縄文を区画しており、これらの文様は周囲に５～６個あると思われる。縄文原体はＲ|$^{L}_{L}$を示しかなり乱雑な施文であり、また器面もあまり整形した様子もなく凹凸が多い。　内面の整形に丁寧に横なでが行なわれている。胎土には砂粒が多量に混入されており、器面黒褐色、内面茶褐色を示す焼成不良のかなりもろい資料である。本資料は時期的に若干下るものであると思われる。12～13、15～16、21、41～44は粘土紐の貼り付けによる隆帯によって無文部との区画を行なっている資料である。12は口縁部付近の資料であるが、無文帯があり、その直下に横方向に隆帯をめぐらし、さらにその隆帯と直交するように別の隆帯が貼付されている。したがって口縁直下は無文帯となり、その直下に区画された縄文部と無文部が存在している。器厚は0.8～1.1cmを測り、無文帯に少量のススが付着し黒ずんでおり、他は黄褐色を示す焼成やや良好の資料である。13は12と同様口縁部直下の資料であるが、やはり無文帯がありその直下に細めの隆帯が貼付され、縄文部との区画を行なっている。縄文原体はＬ縄文で比較的細い。器厚は1.3cmと厚く小石が混入しており、赤褐色を示し焼成やや良好の資料である。15と16は器面に対して縦の方向に隆帯を貼付した資料であるが、16は他の資料に比べて１区画中の無文部の幅が７cmとかなり広いものである。器厚は1.1cmで焼成良好である。21は隆帯の貼付と沈線文の組み合わせによる文様構成をもっており、隆帯は器面に対して横の方向に貼付されており、その両側をヘラ状工具による横引きの整形を行なっている。この隆帯により上下の縄文の文様区画が成されている。さらに縄文を施文した後にやや円形を描くような沈線が描かれている。原体はＬ|$^{R}_{R}$を示す斜縄文で、器厚は1.2cmを測り、胎土は均一で黄色を示す焼成良好の資料である。41～44は前記した隆帯で区画された資料であるが、縄文部が欠損してしまって無文部のみとり残されたものであると思われる。器厚は１cm程度で、器面はやや荒れてはいるが丁寧に成形がなされており、黄褐色を示す焼成良好の資料である。46～48は、器面の無文部に対して沈線により円形の文様が施文されているもので、器面は丁寧に整形され研磨がなされている感があり、茶褐色を示し光沢がある。器厚は1.1cmを測り、胎土は均一であり焼成良好の資料である。61～79は、第３群の沈線により文様構成をなしている資料であり、綾杉状沈線を基調とするものである。61は口縁部直下の資料で器面に対して横方向に隆帯が貼付され、その両側をヘラ状工具の横引きにより整形がなされている。さらにその下には沈線により横長の楕円区画文が描かれているが、この沈線の上

部中央は接合しておらず片側は蕨頭状に曲がっている。沈線の内側は、上から下に対して若干屈曲する沈線が描かれている。器厚は0.9cmを測り、小石と砂粒が混入しており、茶褐色を示す焼成やや良好の資料である。62～64は、同様の横長楕円区画文が施文されている資料である。62は口縁部の資料で、口唇は丸味を帯び、やや内側に内反ぎみである。区画沈線よりも内側に描かれている沈線の方が細く0.4～0.5cmを測る。器厚は0.8～1.1cmで砂粒が多量に混入しており、器面は部分的にススが付着して黒褐色を呈し、内面は茶褐色を示しており、焼成やや良好の資料である。63も口縁部直下の資料で、無文帯の直下に沈線による横長の区画文が施文され、その内側に斜状の沈線文が施文されている。沈線の幅はいずれも0.5cmで同一施文具を使用したものではないかと思われる。器厚は1.1cmで、茶褐色を示す焼成良好の資料である。67～68、72は沈線による区画文の内側に綾杉状沈線文が施文されている資料である。67は口縁部直下の資料で、無文帯の下には横帯沈線が施文され、その下にやや方形を呈するような縦長の沈線区画があり逆綾杉状ともいうべき沈線が描かれている。器厚は1.0cmで胎土には小石が混入しており、やや黒味がかった茶褐色を示す焼成良好の資料である。68は口縁部の資料で、口唇は丸味を帯び、ほぼ直立状態で下部に至る。口縁は無文帯となっておりその下に沈線というよりはむしろヘラ状工具によるなでのような区画があり、その内側に綾杉状沈線文が施文されている。器厚は、0.8cmを測り、黒褐色を示す焼成良好の資料である。73は綾杉状沈線文と縦方向の二本の沈線によって文様構成されている資料である。74は縦方向の沈線が小片のためみられないが、73と同様の文様構成になるかと思われる。

沈線による区画文は、本址の場合には横長の楕円区画文の時にはかなり太い原体を使用し、しかも器面に対して深く施文している。それに対して綾杉状沈線文はかなりバラエティーがあるが、一般には太く施文を行なっていても浅いものが多い。

53は、浅鉢形土器の口縁部と思われる資料である。口唇はやや平らになって厚味を帯び0.9cmを測る。口縁から直すぐ下部に至り、しだいに内弯しつつ底部に至る。口縁部直下は無文帯があり、その下には横方向に半載竹管文により無文帯と下部の縄文からの区画を行ない、その内側に左上方から右下方にかけての半載竹管文が平行に幾条にも施文され、半載竹管文と直交するように、右上方から左下方にかけて細い沈線が間隔をまばらにして施文されている。またその中に隆帯の貼付による半月形の文様がある。沈線の下にはL$\frac{1R}{1R}$の原体をもつ斜縄文が施文されている。胎土は均一でやや黒褐色を示す焼成良好の資料である。54は横方向に対する半載竹管文の直下に左上方より右下方に斜状の半載竹管文が平行に幾条も施文され、またそれに直交するように右上方より左下方にかけて細かい沈線が描かれている。器厚は0.9cmを測り、胎土には砂粒が混入し、やや器面は黒ずんでいるが焼成良好の固い焼きである。57～58は、櫛歯状工具による波状沈線文が施文されている資料である。57は口縁部の資料で、口唇は丸味を帯び、胴部の0.9cmに対して1.2～1.3cmとかなり肥厚しており、内側にやや内反している。口縁部は無文帯でその下に横方向に対する沈線が描かれている。波状沈線はそこから下方に対して施文さ

れており、櫛歯状工具の幅は2.5cm程度であると思われ、その間に10本の櫛目が存在する。全体に黒褐色を呈し焼成はあまりよくない。58は同じ資料の胴部に当る資料と思われ、かなり大きな波状を描いている。

石器（第38図、第39図、第40図）

本址出土の石器は、他の住居址に比べると打製石斧の数が少なく、その代りに磨石、ハンマストーンの数が増えており、中でも研磨痕のあるフレイクが多い。

石鏃（第38図1～3）

1～3は黒曜石製の石鏃であり、3個とも形態が異なっている。1はやや肩部に張り出しがみられ、また基部は外側に反りぎみに突き出しており、幅が広く厚さもある。剥離面はかなり大きなものであり、尖端部は二次剥離によって調整している。2と3は対称性の長脚鏃であるが、2の資料の方が基部がやや長く、また3の方が身部に丸味がある。厚さは1に比べると薄くなり0.3cmを測る。

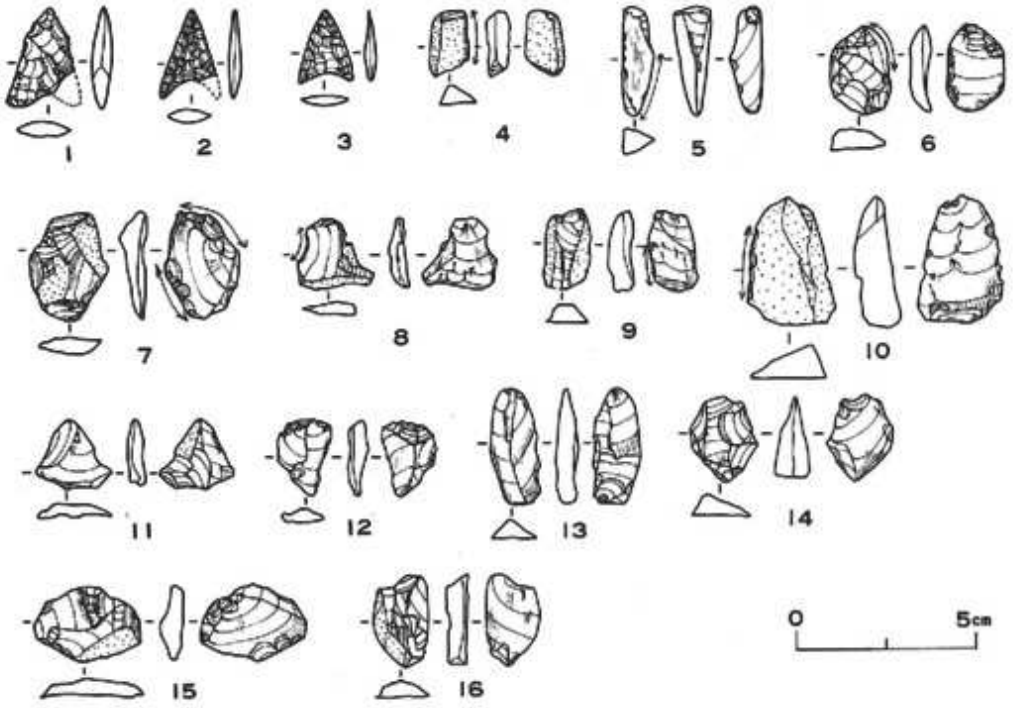
削器（第38図4～10）

4～10は黒曜石製のスクレーパーである。4は断面が三角形を呈し、全面に自然面を持っているが、最も鋭い部分には刃部に対して直角方向にかなりの使用痕が認められる。縦径1.7cm、横径1.1cmを測るかなりの小形の資料である。5はナイフ状形態をもつスクレーパーで、リタッチによって刃部を作出しているのではなく、二つの剥離面による鋭利な部分を刃部としており、刃こぼれがみられる。また刃部の続きには、グレーバー状の剥離面が確認される。刃部作出のための剥離面には、研磨かあるいは削痕かと思われる磨耗部が残されている。縦径は0.3cmで断面三角形の資料である。6と7は剥片の先端部から側辺部の中央にかけてリタッチが行なわれているもので、B面はいずれも原石より剥ぎ取った時の剥離面を残している。7は一部に自然面を残している。8～10は側辺部にリタッチのあるサイドスクレーパーで3点とも自然面を残している。10は原石の自然表皮面を剥がした剥片を利用し、その鋭い側辺部にリタッチを行なっている。縦径3.6cm、横径2.5cm、厚径1.1cmを測る。

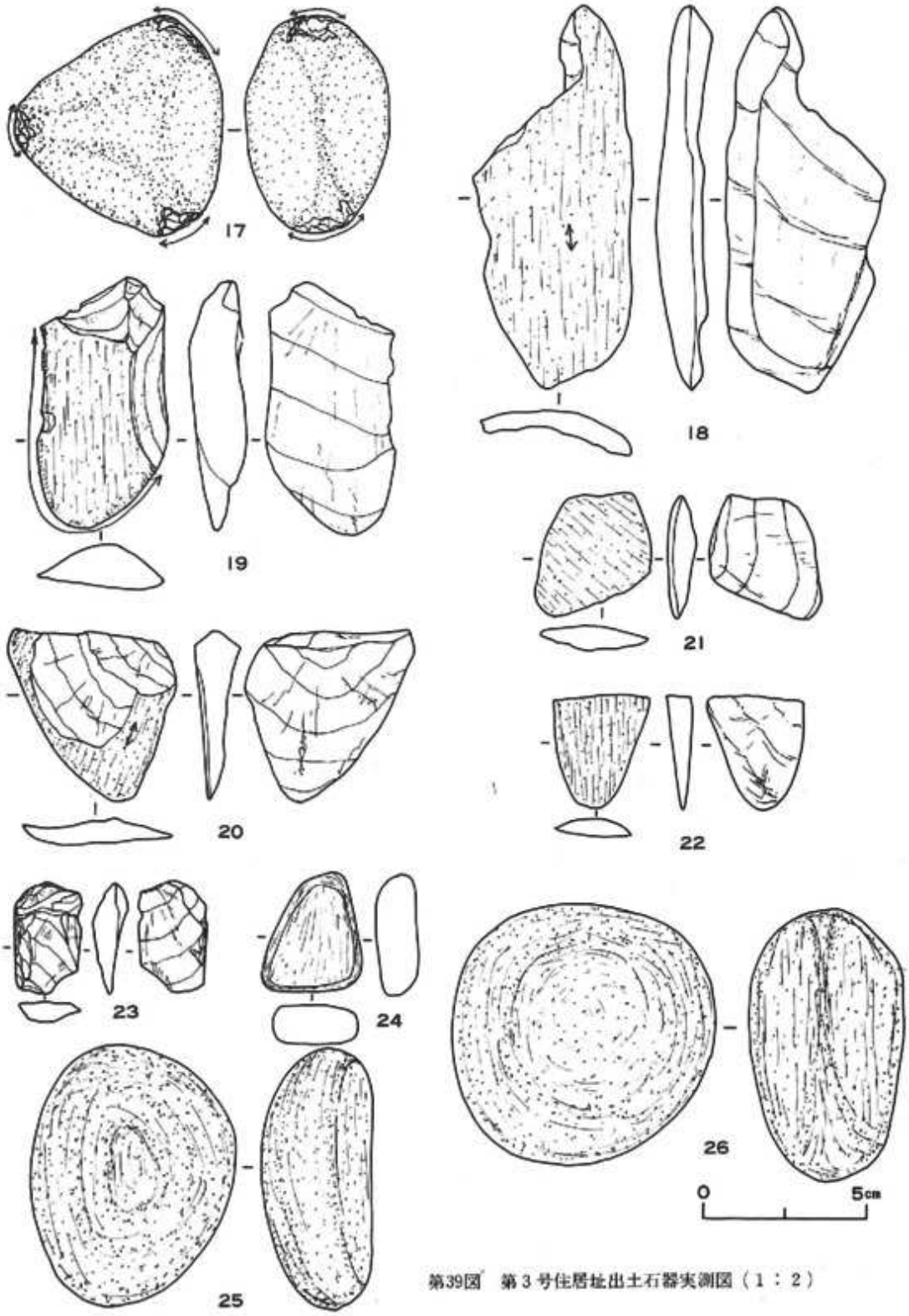
打製石斧（第40図27～31）

本址より出土した打製石斧は合計5点を数え、それぞれが異なった種類、様相を呈している。27は両面に自然の板状節理面をもつ資料で、基部は欠損しているが現存部分で縦径9.3cm、横径4.8cm、厚径1.35cmを測る。本資料は使用痕が誠に顕著で、先端刃部より6.8cm、B面で5.4cmもの使用痕が認められ、局部磨製と見誤るほどである。したがって自然板状節理面は使用により削り取られた状態である。使用痕の強度をみると、大きく三段階に把握することができる。対象物に対する使用角度は三段階ともほぼ一定して49°～53°である。また使用痕の末端部から欠損部までは、使用の際に柄とのスレがあったのではないかと思われる磨耗部を残しており、これには方向性がなく、また磨耗の範囲が正確に把握できるものである。これらの様相から着柄部

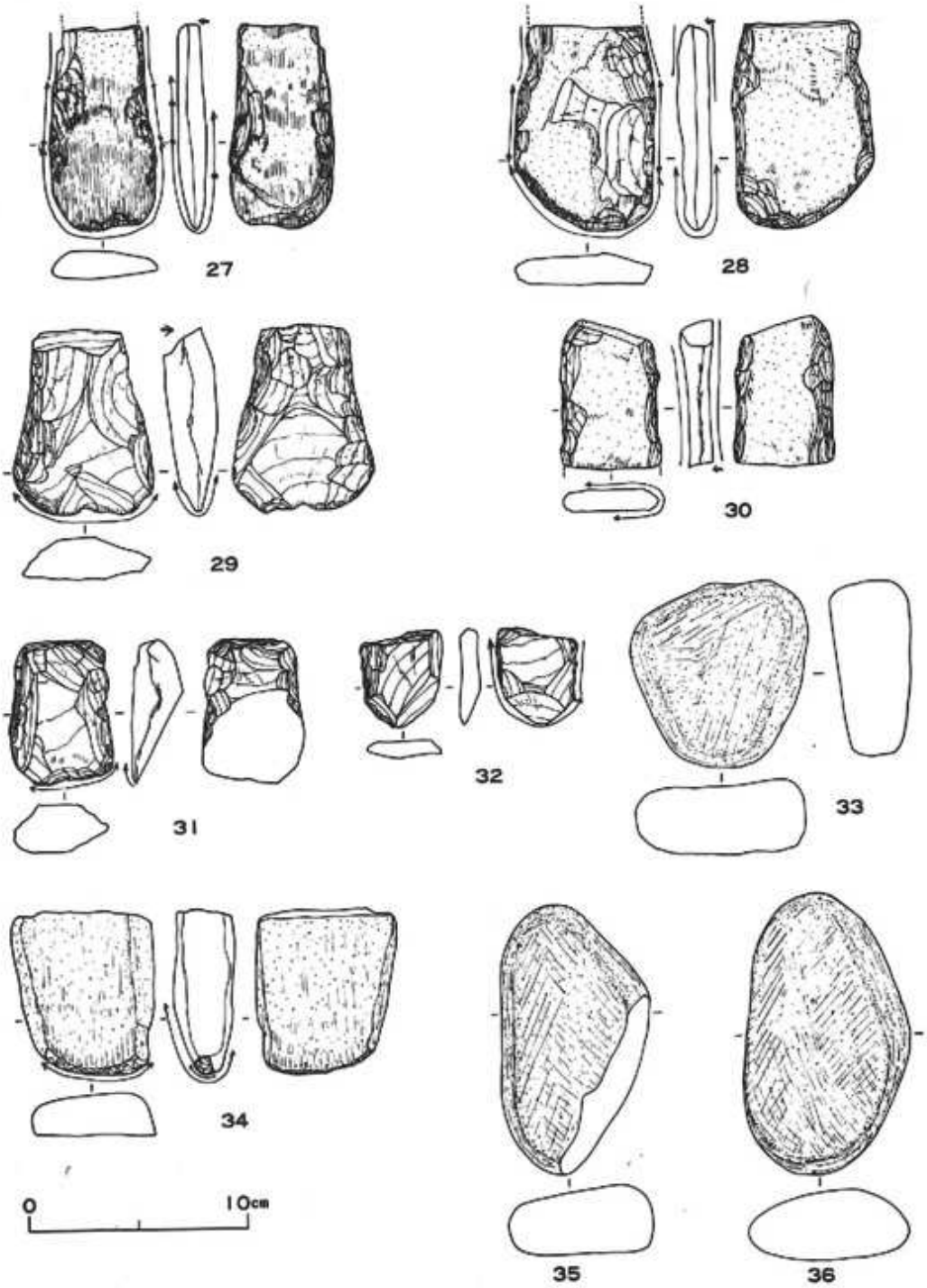
であると積極的に考えてもよい ように思われる。本資料の製作技法は、自然節理面のある硬砂岩を長方形に荒打ちをし、さらにその周辺部を刃部として作出していく方法である。先端刃部及びその周辺部は、使用により剥離面が磨滅しており、痕跡だけを止めているだけである。側辺部は基部に近いほど大きな剥離をしているが、特に着柄と思われる所から刃部寄りの所が両側面ともに内側へ深く剥離を行なっている。本資料は、最も長い期間激しく使用されたものと思われる。28は刃部形態が斜刃を成 す資料で基部が欠損している。本資料も両面に自然の板状節理面をもっており、周囲の側辺だけを全体に加工している。断面は直線的である。先端刃部は主軸に対してかなりの斜状になっており、使用痕が顕著である。使用痕は、主軸に対して平行するものが多く、僅か刃部に対して平行に近いものもあり、剥離面のリングの高い部分はかなりの磨耗を受けている。また先端刃部にかかわる使用痕は側辺部に於ても受けており、使用痕が残っている。先端部より６cmの所に着柄による磨耗と思われる部分があり、主軸に対して平行とさらに直角方向に磨耗痕が認められる。現存部分の縦径9.5cm、横径6.4cm、厚径1.5cmを測る29は同様に自然の板状節理面を両面にもっている資料で先端部を欠損している。製作技法もやはり同様で、調査しやすい原石を選び、先端部と基部それに両側辺部を１回もしくは２回程度の打撃によって調整している。断面は中央部が凹む様相を呈しており、刃部付近に至るとやや厚味をもち先端部に至って尖がるものと思われる。切断面に磨耗痕が残っている。また基部近辺の側辺部で、内側に対してえぐるように剥離が成されている部分にも磨耗があり、着柄部として理解されるところである。30～31は同じ硬砂岩製の打製石斧であるが、前記した自然の板



第38図　第３号住居址出土石器実測図（１：２）



第39図　第3号住居址出土石器実測図（1：2）



第40図　第3号住居址出土石器実測図（1：3）

状節理面を持つ硬砂岩とは石質のできあがる過程が若干異なるものを使用している。30は撥形を呈する資料で基部を欠損している。加工痕は全体に横剝ぎの剝離面をもつものが多く、側辺部は厚さを取り除くための加工痕が顕著であり、また先端刃部は両面とも大きな剝離によって鋭く作出しており、中央側辺部は同様に剝離によってややくびれ部を作出している。断面をみると先端部はかなり鋭く、基部中央から末端部に至るほど厚く、紡垂状にふくらんでいる。使用痕は先端刃部にのみみられ、主に主軸方向に対して平行に残っているが、部分的に斜めに残されている所がある。縦径8.5cm、横径6.4cm、厚径2.35cmを測る。31はB面基部中央から先端部にかけて欠損しているが、A面の刃部には何ら影響を与えておらず、いわば完形品の資料である。石質や加工痕の様相からみると30と同系統に属するが、形態は異なっていおり、平面が長方形を呈する短冊形を呈している。断面は中央がふくらんでいる。周辺部は全体にかなり丁寧に加工してあり、第一次剝離は横剝ぎ状に大きく行ない、第二次加工で細かくリタッチを行なっている。A面の中央部には自然面を残しているが、注意して観察しないと見落してしまうような伴別しにくいものである。使用痕は先端刃部にのみ残されており主軸に対して平行であるが、僅かな痕跡でありあまり使用されたとは考えられない。本資料は炉址の焼土中より出土しており、熱変成を受けている感がある。縦径6.65cm、横径 4.6cm、厚径 2.3cmを測る。32は刃部のみを残す欠損品であり、現存部で縦径 4.4cm、横径 3.6cm、厚径 1.0cmを測る打製石斧であると思われるが、先端部よりもむしろ側辺部を中心的機能点としており、打製石斧以外の名称を与えることの必要性も感じる。剝離面は側辺部に横剝ぎを中心として荒打調整を行ない後にリタッチを加えている。また欠損部の切断面は使用中に折れたと思われ、再加工をしている。

ハンマーストーン（第39図17、第40図34）

17は平面が三角形、断面は楕円形を呈する普通輝石安山岩製の資料で、三角形の各頂点部に打撃痕がみられる。厚径は4.4cm、重量は220.0ｇを測る。普通の山石を利用している。34は17の資料とは使用対象物が異なっていると思われ、形態と打撃痕の違いがみられる。基部は欠損しているが現存部分で縦径7.2cm、横径6.2cm、厚径2.9cm、重量255.0ｇを測る。打撃点の周辺には細かい研磨痕が多く残っており、強度な打痕部分は認められない。

磨石（第39図24～26、第40図33～36）

本址より磨石は6個出土しており、いずれもさまざまな形態をしている。研磨方向は乱雑的でなくそれぞれの資料ごとに統一されている。側辺部においても長径方向に対して行なわれている。24はそれらの資料の中にあって河原石を利用した小型のもので3.7×3.2cmを測る粘板岩製のものであり、その他はしそ輝石安山岩あるいは普通輝石安山岩を利用したものである。

研磨痕あるフレイク（第39図18～22）

研磨痕あるフレイクは全てフレイクに研磨を行なったものではなく、何らかの研磨された石器から剝離あるいは離脱したものとみられる。このような資料はかなり見落し安いものである

第 6 表　第3号住居址石器集成表（その1）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第三号住居址	石鏃	1	長身鏃	黒曜石	・2.9	1.6	0.55	1.0	—	—	—	—	—	基部欠損
		2	〃	〃	・2.5	1.5	0.4	0.7	—	—	—	—	—	〃
		3	〃	〃	2.0	1.5	0.3	0.6	—	—	—	—	—	長軸に対して幅が大きい。
	削器	4	縦長	黒曜石	1.7	1.1	0.5	1.0	—	—	—	—	／	
		5	〃	〃	3.0	0.85	1.05	1.3	—	—	—	—	／	面に研磨痕がみられる。
		6	〃	〃	2.4	1.65	0.6	2.3	—	—	—	—	／	全て縦長のものである。
		7	〃	〃	3.0	2.2	0.7	3.2	—	—	—	—	／	
		8	〃	〃	2.0	2.0	0.5	2.1	—	—	—	—	／	
		9	〃	〃	2.2	1.8	0.7	1.8	—	—	—	—	／	
		10	〃	〃	3.6	2.5	1.1	7.8	—	—	—	—	／	
	打製石斧	27	短冊形	硬砂岩	・9.3	4.8	1.35	89.0	6.8	5.4	53°	49°	○	極度の使用痕がみられる。
		28	〃	〃	・9.5	6.4	1.5	138.0	3.0	3.0	—	0°	—	斜刃形石斧
		29	〃	〃	・6.5	4.5	1.5	50.0	／	／	／	／	○	先部欠損
		30	撥形	〃	・8.5	6.4	2.35	121.0	1.4	1.7	—	10°	—	基部欠損
		31	撥形	〃	・6.65	4.6	2.3	70.0	1.2	／	—	—	—	
		32	縦長	粘板岩	4.40	3.6	1.0	15.0	○	○	—	—	—	使用痕あり
	ハンマーストーン	17	三角形	普通輝石安山岩	6.6	6.5	4.4	220.0	○	○	—	—	／	三方に使用痕あり
		34	方形	〃	・7.4	6.2	2.9	255.0	○	○	—	—	／	全体に研磨されている。
	磨石	24	楕円形	粘板岩	3.7	3.2	1.2	415.0	—	—	／	／	／	
		25	円形	しそ輝石安山岩	8.0	6.2	3.4	220.0	—	—	／	／	／	
		26	〃	普通輝石安山岩	8.3	8.0	4.7	350.0	—	—	／	／	／	
		33	楕円形	〃	8.0	8.2	3.7	370.0	—	—	／	／	／	
		35	〃	〃	・12.4	6.8	3.0	417.0	—	—	／	／	／	
		36	〃	〃	13.0	7.5	3.1	400.0	—	—	／	／	／	

（その2）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部	全体	着柄磨耗 有無	備考
第三号住居址	加工痕あるフレイク	23	縦長	粘板岩	3.85	2.1	1.1	3.0	−	−	−	−	／	
	研磨痕あるフレイク	18	縦長	硬砂岩	11.7	4.9	1.4	65.0	／	／	／	／	／	表皮離脱のための剝片が多い。
		19	〃	〃	7.6	4.0	1.5	50.0	／	／	／	／	／	
		20	〃	〃	5.1	5.0	1.4	15.0	／	／	／	／	／	
		21	〃	〃	3.8	3.5	0.95	9.0	／	／	／	／	／	
		22	〃	〃										
	フレイク	11	横長	黒曜石	1.9	2.1	0.4	1.5	／	／	／	／	／	
		12	縦長	〃	2.1	1.5	0.5	1.5	／	／	／	／	／	
		13	〃	〃	3.2	1.3	0.6	2.5	／	／	／	／	／	
		14	〃	〃	2.25	1.85	1.0	2.3	／	／	／	／	／	
		15	横長	〃	2.05	2.95	0.7	3.2	／	／	／	／	／	
		16	縦長	〃	2.5	1.45	0.6	2.8	／	／	／	／	／	

が精査して取り上げるべき資料である。17はそれらの資料の中にあって特異なもので再加工して使用しており、周辺部には僅かな使用痕がみられる。

加工痕あるフレイク（第39図23）

本分類に取り上げた資料は1点のみであるが、黒曜石フレイクの中には、思考剝離面と思われるものも見うけられるが、偶然性も伴なうため本分類に入れることをさけた。23は粘板岩製であり、縦径3.35cm、横径 2.1cm、厚径 1.1cmを測る。

フレイク（第38図11～16）

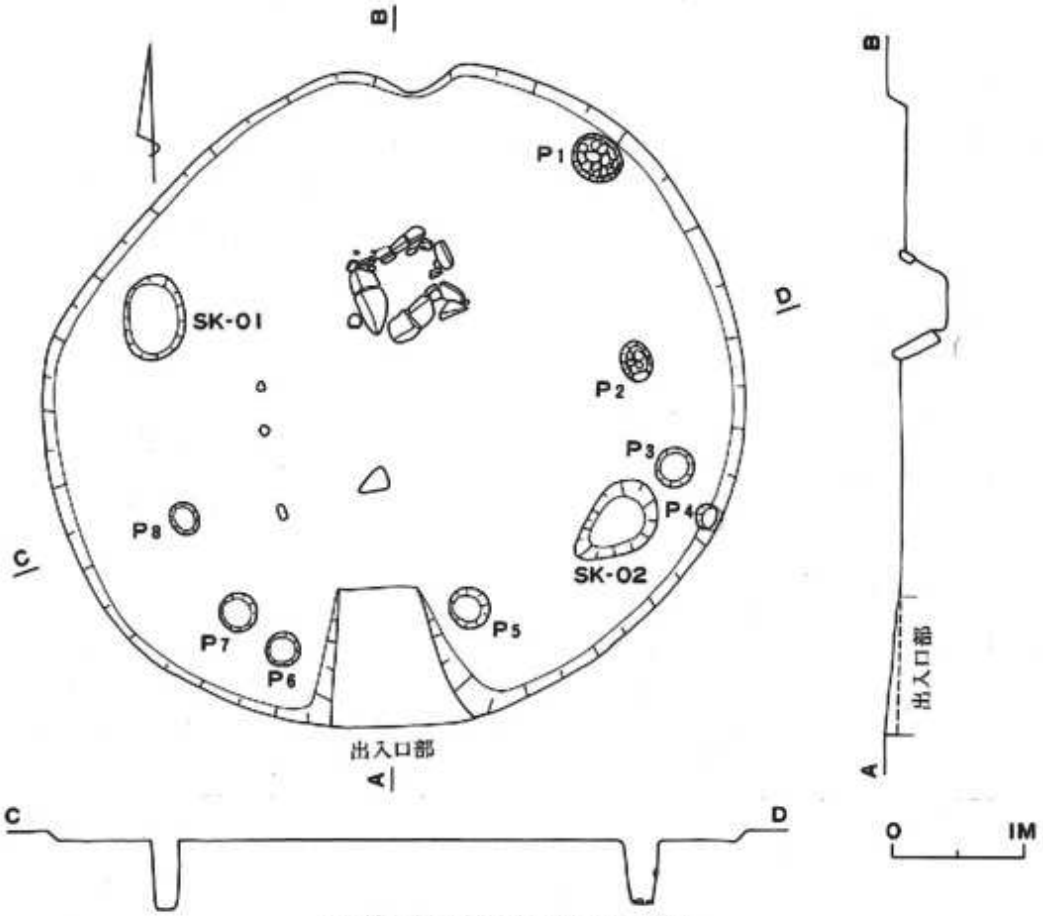
図に耐えうるフレイクは6点だけであるが、その他チップとして捉えることのできる資料もある。本類に取り上げた資料は全て黒曜石製である。

第6節　第4号住居址

遺　構（第41図）

本址は、調査地域の中央よりやや西側に位置する縄文式時代中期末葉の円形竪穴住居址である。かかるグリッドはB—2・3、C—2・3、D—2・3であり第1号住居址と複合関係にある。第1号住居址のところでも記述したが、本址は第1号住居址の貼床の下層にあり、時期的には第1号住居址よりも古く存在することが確認されている。しかしながら遺物の時期、形式差はほとんどなく、本址の覆土が第1号住居址の貼床という状態なので、家屋の建て替えによるものかも知れない。石器に於ては第1号住居址との時期、形式差を知ることはできないが、本址は打製石斧が1点も出土しておらず、石器組成からみるとかなりの違いがみられるのである。いずれにしても第4号住居址→第1号住居址という関係が分かっており、また他の第2号、第3号住居址との時期、形式差がないことも確認されている。

本址は、直径5.5mの不正円形を呈する竪穴住居址である。床面は本遺跡の遺構の中では最も良好な状態を示し、各所にタタキが成されており、水平レベルも一定している。壁面は、高さが10～15cm程残っており、自然崩壊や第1号住居址との復合関係の際に削られてしまっていると思われるので、本来はもっと高い壁が築かれていたと考えられる。壁の南側に、本址で最も注目すべき出入口部が確認されている。外側の壁に接する部分は幅1.1m、内側は60cm、外側から内側への長さは1.06mを測る。また床面から外部に至る傾斜角は6°でかなり緩和な傾斜をもって作られている。床面との接地点は、段差もなくそのまま結かり、壁面に至ってやや扇状に広がりをみせ、外部の生活面へと続いており、出入口部の上面は固くタタキが成されている。柱穴は合計8個検出され、P_1とP_2は、柱穴の堀り切り部と壁にグリ石が組まれるように置かれており、また底部にも丁寧に円形を描くように石が敷かれていた。P_1の直径は40cm、深さ42cmを測り楕円形を呈しており、P_2は直径30cm、深さ50cmを測り同じく楕円形を呈している。本址



第41図　第4号住居址実測図（1：60）

の柱穴の中で直径はP_1が量も大きく、深さはP_8の55cmに次いでP_2は2番目である。P_5とP_6は、出入口部の両側に位置しており、ほぼ対象的に構築されている。直径はいずれも28～30cm、深さ11.5cmでほぼ同様な規模、形態をもっており、これらの関係から明らかに出入口部と関係があるものとして理解することができる。土坑はＳＫ—１とＳＫ—２の二基が確認された。ＳＫ—１はプラン西側の壁面近くにあり、直径64—48cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。内部の壁は垂直に落ち、また底部は平らになっている。ここからは中期末葉の小形深鉢形土器の半欠品（第44図88）が覆土内より出土し、さらに土器片、黒曜石のスクレーパー、フレイクが僅かに出土している。ＳＫ—２は直径75cm—50cmを測る楕円形を呈し、深さは10cmあり比較的浅いものでやはり壁面は垂直に落ち、底部は平らになっている。内部より土器片が少量出土している。炉址はプランの中央部よりやや北側に位置しており、四方を石で囲む石囲い炉で、規模は外径で80×70cm、内径は70×50cm、底径は30×25cmを測り、北北西方向を向いている。西側の炉石は、大きな１枚の割り石を利用し、炉面であるかのように威厳をみせている。その他の石は横積み状に置かれ、石と石のすき間には小石を詰め込んでいる。これらの石はかなり強度な熱を受けたと思われ、ボロボロに剝げ落ちているが、その割り合いには灰や焼土がほとんど堆

積していなかった。炉址内からは僅かな土器片とフレイクが出土している。

遺　物

本址に於ける出土遺物は、床面と第1号住居址の貼床であるところの本址の覆土中より出土しているが、貼床より出土している遺物は、可能性が少ないとはいえ第1号住居址の遺物と混在していることも考えられるため、ここで取り上げる遺物は全て床面直上より出土した資料に限った。また貼床であるのか、自然堆積であるのか不明確な部分も存在しているため、床面直上の資料に限った。

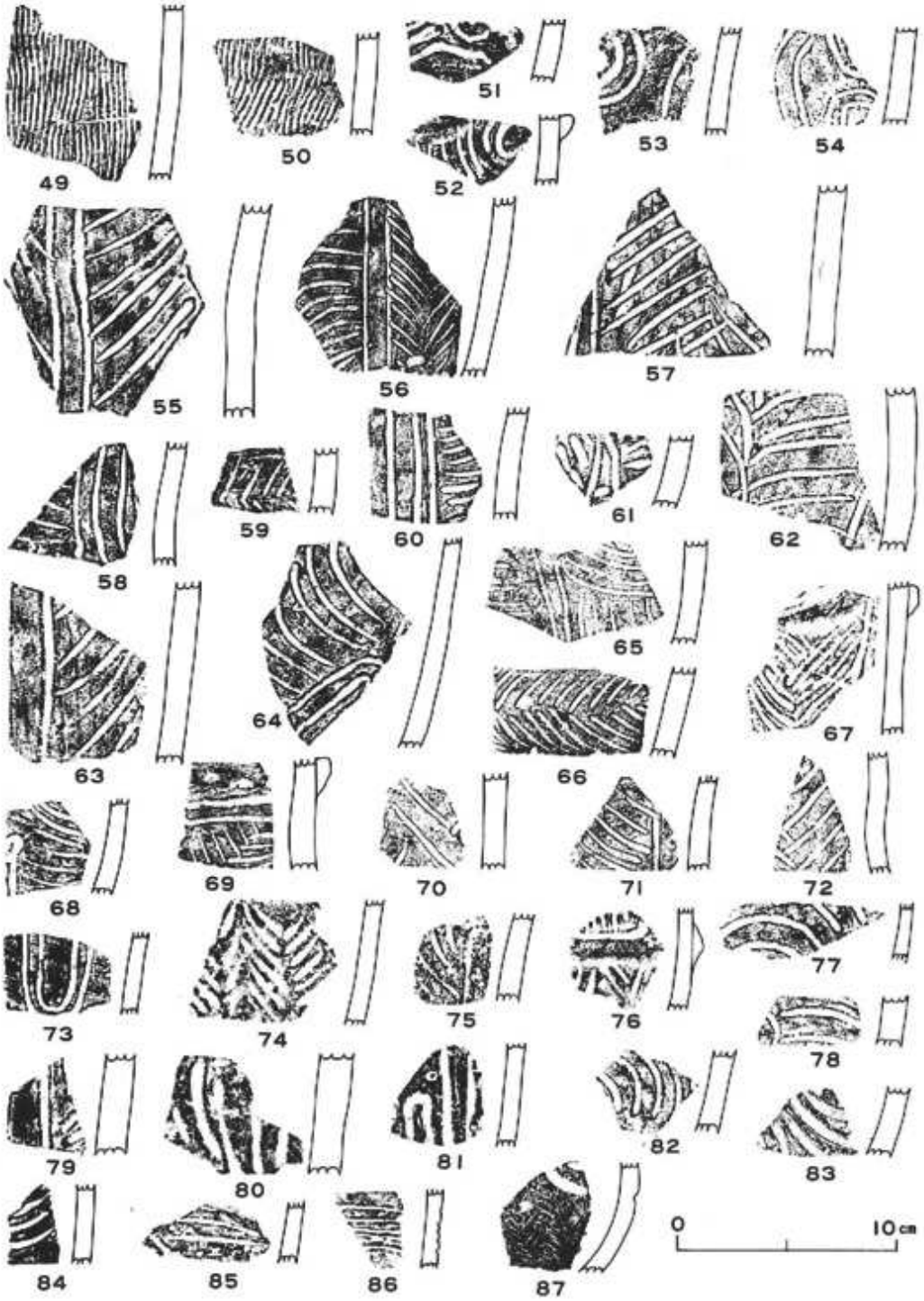
土器は全て破片であったが多量に出土しており、比較的文様構成にバラエティーがある。また石器は、他の住居址に比べると量が少なく、組成としてもあまり整ってはいない。特に本遺跡独特の自然板状節理面を両面にもつ打製石斧を含めた、打製石斧が出土しておらず、それに対して大形のスクレーパーをはじめ多数の黒曜石片が出土している。

土器（第42図、第43図、第44図）

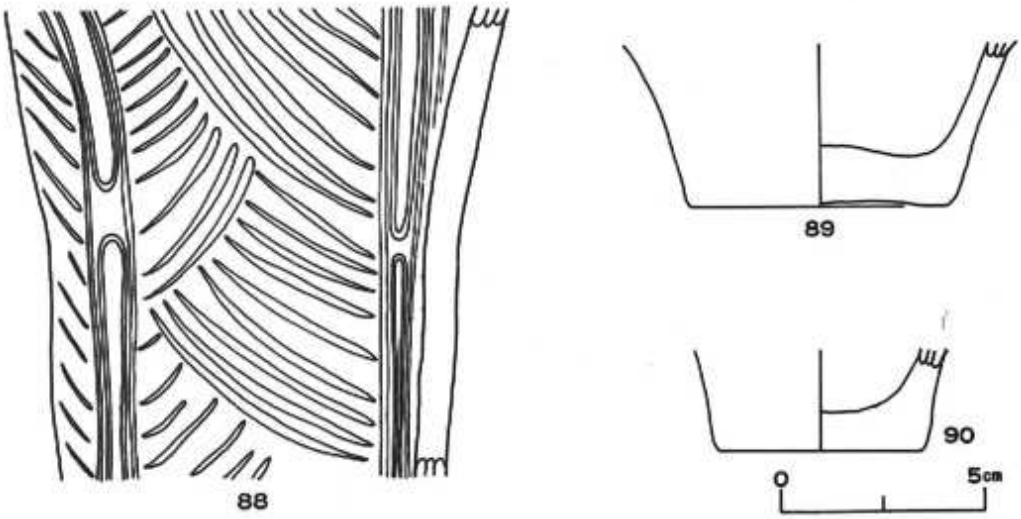
文様構成は大きく3群に分類することができ、1群は、縄文を文様構成の主体とするもの、2群は、縄文と沈線の組み合わせにより文様構成を成すもの、3群は、沈線を文様構成の主体とするものである。

第1群と第2群の資料は（第42図1～27、第43図49～50）がある。その中でも2～3、8～9、11、18、21、23、49～50は縄文部のみみられるが、小片であるために沈線部が表われていないと考えられ、第1群として明確に捉えることのできる資料は、このうち49～50だけであると思われる。49～50は、一見沈線のようにみえるが、無節縄文を施文した土器である。胎土には小石が混入しており、赤褐色を示す焼成良好の資料である。器厚は0.9～1.0cmを測る。第2群土器としてあげられる資料は、前記したもののうち49～50を限くものである。これらの資料は、沈線によって縄文部と無文部とを区画しており、いわば区画文として分類すべきものかも知れない。1は粗大なL$\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$原体を用いた斜縄文と無文部とを縦状沈線によって区画している資料で、器面にはススが付着し茶褐色を呈しており焼成良好である。7は全面にL$\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$原体の斜縄文が施文され、その後に2本1組の縦方向に対する平行沈線が施文されている。器厚は0.6cmと薄いが、この薄さと縄文原体の細さが非常にバランスがとれている。黄褐色を示す焼成良好の資料である。13はL$\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$原体の縄文部を沈線により縦長の長方形状を画することによって区画している資料である。器厚は0.9cmで焼成良好である。12は無文部を沈線により円形に区画している資料で、さらにその周りには粘土紐の貼付けによる隆帯がとりまいている。縄文原体はL$\left|\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$を示し、所々施文されない部分を残しており、施文後磨消が行なわれている。器厚は0.9cmを測り、黒褐色を呈して焼成やや良好である。27は12の無文部の区画に対して縄文部を沈線により楕円区画しており、さらに隆帯がその周りをとまいている。14は縄文部を二重の沈線によく区画しており、縄文原体はR$\left|\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.$を示す。その直上は、器面に対して横方向に2本の平

第42図　第4号住居址出土土器（1：3）



第43図　第4号住居址出土土器（1：3）



第44図　第4号住居址出土土器（1：3）

行する沈線が引かれており、沈線間の無文帯に直径1cmを測る円形の刺突文がある。器厚は0.9cmを測り、器面は黒褐色で光沢があり、内面は茶褐色を示し、砂粒を多量に混入している焼成やや良好の資料である。第3群土器である沈線を文様構成の主体としている資料は、口縁部に於ける横長の楕円区画文と直線の交鎖する斜状沈線文、円形うず巻文、それに綾杉状沈線文の4つに大きく把握することができる。この口縁直下の楕円区画文と円形うず巻文との関係は第2号住居址の埋甕の所で記述したように同一個体に於ける構成をなすものであると思われる。口縁部に於ける横長楕円区画を有する資料は30～31、34～35、37、39、46がある。30は口唇が平らになっており、0.6cmと厚さは一貫しており、ほぼ直立状態を示す。31は口縁に丸味をもち無文帯になっており、その直下に横長楕円の区画文がある。区画文内には縦状の沈線が施文されており、無文帯が0.1cmであるのに対し、区画文部は0.5cmと薄くなっている。胎土には砂粒が多量に混入しており黒褐色を示す焼成良好の資料である。34は口縁部を欠損している資料であるが、横長楕円の中に左上方から右下方にかけて沈線が描かれている。器厚は0.6cmを測り、焼成良好の資料である。37は口唇に丸味を帯びて直立しており、同様に無文帯の下に横長楕円の区画文があり、その内側に縦方向の沈線が施文されている。31と同様に無文部が厚くなっており0.9cmを測り、区画文部は薄くなり0.6cmを測る。砂粒が多量に混入しており、黒褐色を示す焼成やや良好の資料である。円形うず巻文を有する資料に41、第43図51～54、77～78、82～84がある。41は粘土紐の貼付とその整形によって文様を構成しているものであるが、他の資料は沈線により円形のうず巻をなしている。いずれも茶褐色を呈し、胎土に多少砂粒の含まれている資料もあるが焼成良好の土器である。横長楕円区画文の下に四重から五重の円形うず巻が施文され、その周りには綾杉状沈線文を基調とした変形の沈線が施文される構成をもつ。綾杉状沈線文を施文されている資料には55～72、74～76、79～80、87～88がある。これらの資料は分類す

ると三つの形態があり、その1つは、最も基本となる「ハ」状のもの、その2は、逆の「ハ」のもの、その3は、横向きに施文されているものとがある。55、58、60～65、69～72、74～76、79、84、87～88は、基本的文様形態を示す資料である。大部分は二本又は四本の縦方向に引かれた沈線の間に施文されている。本址出土のこれらの資料は、沈線が太く大担に描かれており、おそらく器形や土器の大きさに合わせて施文したのであろうと考える。器厚は1.4cmを最大として、沈線の細い土器ほど0.8～0.9cmと薄くなる傾向を示している。胎土は全体に均一で焼成良好であるが、薄い資料は砂粒が混入し焼成はもろいものが多い。なかでも87は、特に細い沈線で施文してあり、65の資料と比べると、仮に3.5cmの幅の中に65は三段しかないのに対して87は9段も描き入れられている。88はＳＫ―1より出土した土器で半欠品であるが、覆土中より欠損部を下に向けていた。他の資料に比べると、かなり炎が当ったと思われ黒ずんでいるが、焼成は非常によくまた文様も深くはっきりと施文されている。綾形状文の特徴である縦方向の沈線が描かれ、その間に、少々変形した大担な綾杉状文が施文されている。器厚は0.9cmで胎土にやや小石を含んでおり、胴部がくびれる小形深鉢形土器である。56は逆の綾杉状沈線が施文されている資料であり、器厚1.1cmを測る黄色を示す資料である。また59、66は横方向に対して綾杉状沈線文が施文されている資料である。4つめの分類である直線の交鎖する斜状沈線文土器に32がある。32は口縁部の資料で、横方向に対する沈線区画の内側に左右両方から描かれている斜状沈線が施文されている。口唇は丸味を帯び、器厚は1.0cmを測り砂粒と少量の雲母を含んでおり、内面は茶褐色、外面は黒褐色を示す焼成良好の資料である。

石器（第45図、第46図）

本址出土の石器は、黒耀石製の資料が多く、また打製石斧の出土が全くないことが特徴とされる。出土状況は、黒耀石製の石器や剥片は炉址囲辺部に集中しており、その他の石器は壁近くに分散して出土している。

石鏃（第45図、1～4）

本址からは4点出土しているが、左右対称となる資料はなく全て対称性に欠けており、整形も比較的荒く無造作に作られている感がある。4はＢ面に自然の表皮面を残しており、製作途中の資料であると思われる。

削器（第45図5～12）

出土した8点の資料のうち2点は大形のスクレーパーで、他は一般的なものである。5は一部に自然面を残すが、Ａ面Ｂ面ともに全体を加工し、二次加工として全周をリタッチしている。縦径2.0cm、横径2.4cm、厚径0.8cmを測り、断面は紡垂形を示しており、いわばラウンドスクレーパーの様相を呈している。6～12はサイドスクレーパーである。6はＢ面全体に自然面を残しており、原石の調整フレイクにリタッチを行なっている資料である。7は大形スクレーパーで、Ａ面はプラットフォームより左右2回の剥離を行なっており、また自然面を残している部

分より1回の剥離を行なっている。これらの剥離は自然表皮を取り除くために行なったものと思われる。B面に於ける剥離面は、原石よりプラットフォームに打撃を加えることによって剥離しており、ネガティブな形態をしている。これの両側辺部にリタッチを行なっている。縦径4.3cm、横径1.9cm、厚径0.6cmを測り、横断面はやや丸味を帯びる三角形を呈している。8も同様の大形の資料で縦径4.5cm、横径1.7cm、厚径0.7cmを測り、断面が三角形を呈している。B面は1回の打撃により剥離されているが、A面は上下両端からの自然表皮面を取り除くための剥離を行なっているが、一部に自然面を残す。側辺部にリタッチを行なっているが、上部先端部にも加工を行なっており、サイドスクレーパーとエンドスクレーパーの両機能を有している資料である。10と11は両側辺に刃部を有している資料であり、11は縦径1.3cm、横径1.1cm、厚径0.5cmを測る非常に小形の資料である。リタッチはかなり丁寧に行なわれている。

磨製石斧（第46図27）

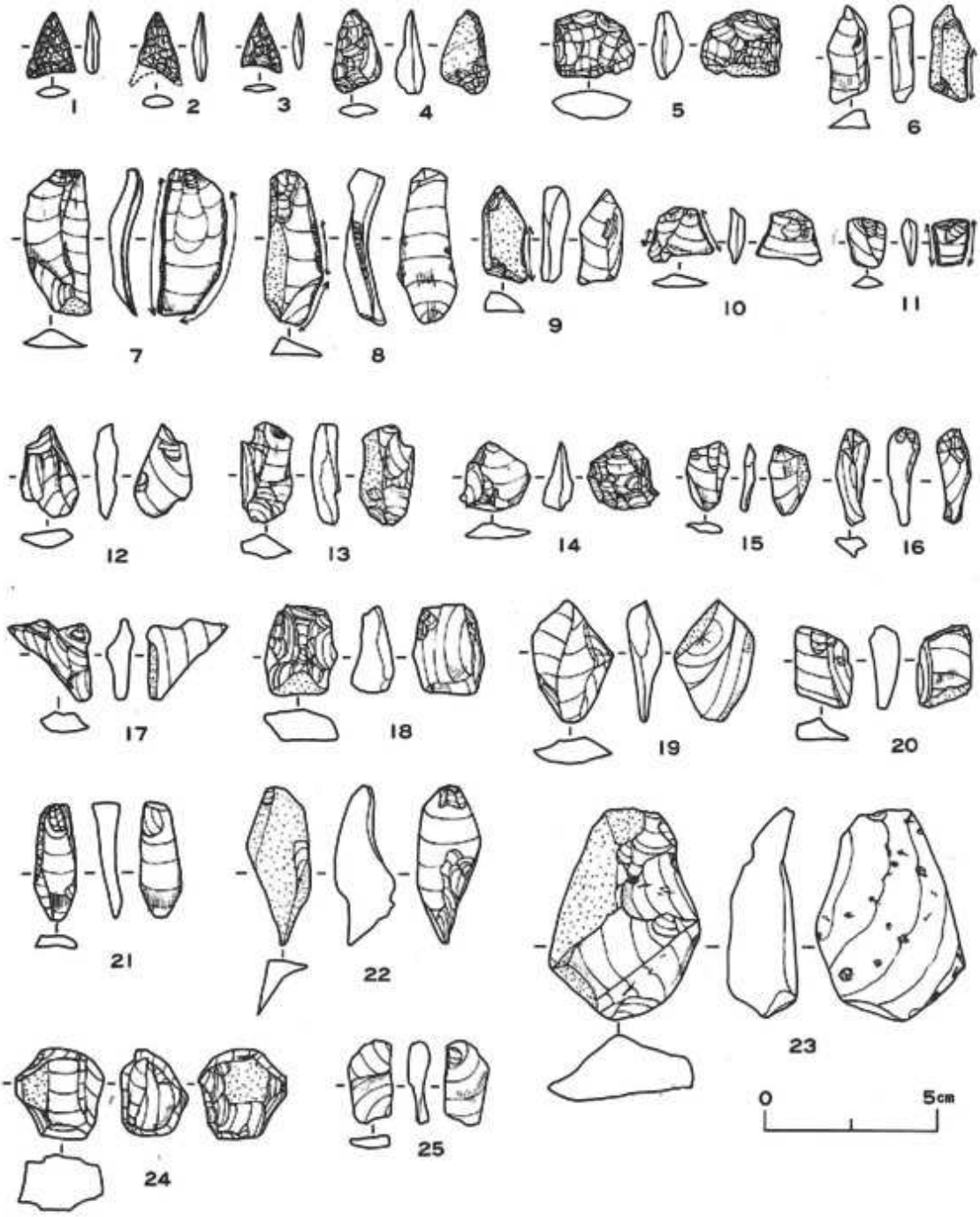
本資料は、プランの出入口部に近い床面に、刃部を上面に向けて突き刺さった状態で出土しており、特異な様相を示している。縦径9.0cm、横径3.1cm、厚径2.3cmを測り、縦断面は先端刃部が尖がる紡垂形を呈し、横断面は側辺部の1辺が直線状態となるが、ほぼ楕円形を呈している。主軸方向に対して全面に研磨がなされており、特に刃部を中心とする部分は丁寧になされているが、かなり全体的に風化が激しく研磨部分がすでに存在していない所がある。使用痕はかなり明瞭に残っており、刃部は刃こぼれを起こし、また刃部から中央部までに固い物が当って削り剥げてしまった痕がある。石質は磨製石斧特有の緑泥片岩製である。

横刃形石器（第46図26）

本資料は、粘板岩製の対称的な横刃形石器である。原石より大きな剥片を取り、周辺部から内側に対して調整しており、大部分は横剥ぎの技法によって行なわれており、他の住居址やグリッドなどから出土している横刃形石器と同様である。全体的に大担にかなり大きな剥離面を残しているが、A面に於てはその後に細かなリタッチを加え刃部を調整しているし、さらに基部に対しても細かな調整痕が残っている。B面は原石からの剥離面をそのままに残し、さらに1回大きく剥離をした後に刃部と基部に調整を行なっている。使用痕は非常に顕著で、刃部と基部に残っている刃部使用痕は、刃部に対して直角方向に残っており、いわゆる削痕と呼ばれるものである。また基部の使用痕は磨耗状態にあり、研磨されたようにツルツルしており方向性はなく、剥離面のリングの高い所は特に磨耗を受けている。縦径8.0cm、横径10.3cm、厚径1.85cm、重量170gを測るすばらしい資料である。

ハンマーストーン（第46図33）

33は普通輝石安山岩製のハンマーストーンであるが、機能点を除く他の部分は欠損している。横断面は楕円形を呈しており、全体に研磨がなされており丁寧に調整されている。本来的には、その様相から無頭石棒かそれに近似するものであり、最終的にハンマーとして利用されたのではないかと考える。機能点は、細かな打撃部が明瞭に表われており比較的よく使用さ



第45図　第4号住居址出土石器実測図（1：2）

れたのではないかと思われる。

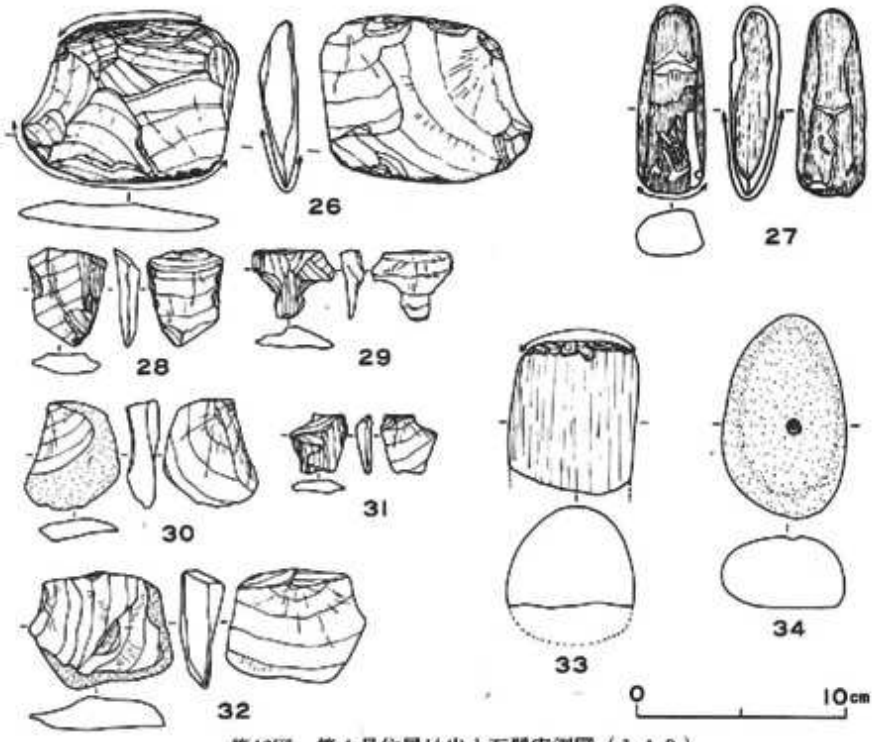
凹石（第46図34）

本資料は普通輝石安山岩製の凹石であり、片面だけ使用され、中央部に直径0.8cmの円形の凹部がある。断面は楕円形を呈しており、底部は平らになっている。

加工痕のあるフレイク（第45図13～19、21～24、第46図28、29、31）

本資料は、黒曜石製11点、硬砂岩製1点、粘板岩製2点がある。黒曜石製の資料は全ていずれかの部分に自然表皮面を残しており、自然表皮を剝離するための加工痕として理解することができ、さらに二次加工として側辺部等に加工を行なっている。これらの資料はいわばスクレーパーとしても使用できる形態をとっているが、リタッチや使用痕が確認できないため本類に含めた。23と24は、コアー的な様相をもっている資料で、23はコアーとして剝離を行なった後に、良質面を得るために、今まで使用した面を取り除いた部分であると思われ、いわゆるコアーの不用物剝片として理解される資料である。剝離面にかなり一定した方向性をもっている資料である。24は、いわゆる調整石核的な資料であり、自然表皮を取り除く剝離がみられる。ここから剝離されたフレイクは、自然表皮を取り除きスクレーパ等に利用されるという一連の様相本類では捉えることができる。28はスクレーパ様の石器であるが明確に捉えることまできない。本資料も剝片利用の石器で両側辺はリタッチ状の調整痕がみられるが、使用痕等は確認できない。また29と31も同様の形態をふむ資料である。

フレイク（第45図20、25、第46図30、32）



第46図　第4号住居址出土石器実測図（1：3）

第７表　第４号住居址石器集成表（その１）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第四号住居址	石鏃	1	長身鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.4	1.5	－	－	－	－	－	基部欠損 基部の形が整っていないものが多い。
		2	〃	〃	・2.0	1.2	0.4	1.0	－	－	－	－	－	
		3	〃	〃	1.6	1.2	0.4	0.5	－	－	－	－	－	
		4	〃	〃	2.4	1.4	0.75	2.5	－	－	－	－	－	
	削器	5	横長	黒曜石	2.0	2.4	0.8	2.8	－	－	－	－	／	片刃と両刃は半々である。
		6	縦長	〃	2.8	1.1	0.65	2.5	－	－	－	－	／	
		7	〃	〃	4.3	1.9	0.6	5.0	－	－	－	－	／	
		8	〃	〃	4.5	1.7	0.7	6.0	－	－	－	－	／	
		9	〃	〃	2.75	1.75	0.8	3.0	－	－	－	－	／	
		10	横長	〃	1.6	1.9	0.5	2.5	－	－	－	－	／	
		11	縦長	〃	1.3	1.1	0.5	1.1	－	－	－	－	／	
		12	〃	〃	2.8	1.65	0.7	2.5	－	－	－	－	／	
	磨製石斧	27		緑泥片岩	9.0	3.1	2.3	113.0	○	○	－	－	－	使用痕が顕著である。
	横刃形石器	26	縦長	粘板岩	8.0	10.3	1.85	170.0	○		－	－	－	大形で対称的である。
	ハンマーストーン	33	縦長	普通輝石安山岩	・7.2	6.1	6.1	300.0	○	○	－	－	／	石棒の頭部を使用した感がある。
	凹石	34	楕円形	普通輝石安山岩	9.7	5.9	3.45	275.0	－	－	－	－	／	
	加工痕あるフレイク	13	縦長	黒曜石	2.9	1.5	0.7	3.0	－	－	－	－	／	スクレーパーとして使用されているものがいくつかあると思われる。
		14	〃	〃	2.0	1.9	0.8	1.5	－	－	－	－	／	
		15	〃	〃	2.0	1.2	0.3	1.0	－	－	－	－	／	
		16	〃	〃	2.8	0.9	0.8	1.5	－	－	－	－	／	
		17	横長	〃	2.3	2.4	0.7	2.0	－	－	－	－	／	

（その2）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部	全体	着柄磨耗有無	備考
第四号住居址	加工痕あるフレイク	18	縦長	黒耀石	2.5	2.0	1.2	9.0	−	−	−	−	／	スクレーパーとして使用されているものがいくつかあると思われる。
		19	〃	〃	3.5	2.4	0.85	5.0	−	−	−	−	／	
		21	〃	〃	3.3	1.25	0.85	2.0	−	−	−	−	／	
		22	〃	〃	4.1	1.8	1.8	10.1	−	−	−	−	／	
		23	〃	〃	6.1	4.4	2.0	45.0	−	−	−	−	／	
		24	〃	〃	2.5	2.5	1.9	13.0	−	−	−	−	／	
		28	〃	硬砂岩	4.8	3.5	1.0	20.0	−	−	−	−	／	
		29	横長	粘板岩	3.3	4.0	1.0	10.0	−	−	−	−	／	
		31	縦長	〃	2.8	2.7	0.7	1.5	−	−	−	−	／	
	フレイク	20	縦長	黒耀石	2.3	1.6	0.8	2.5	／	／	／	／	／	
		25	〃	〃	2.3	1.2	1.6	2.0	／	／	／	／	／	
		30	〃	硬砂岩	5.2	4.2	1.5	32.0	／	／	／	／	／	
		32	横長	〃	5.6	6.4	2.0	80.0	／	／	／	／	／	

黒曜石製2点と硬砂岩製2点を取り上げたが、剥離面に一定程度の規則性があり、また図に耐えうる資料は4点のみであった。その他多数のフレイクが出土している。

第7節　グリッド遺物

グリッド遺物として取り上げた資料は、遺構面までの表土及び包含層の遺物であり、また、本遺跡は耕作により遺構の破壊があったためプランに伴なうものか判断つかない遺物があり、それらも含めた。

土器（第47図1～35、第48図36～52）

縄文前期中葉の土器

1～7は、前期の黒浜式に比定される資料で、第5号住居址付近より出土しているため、恐らくは第5号住居址に伴なっていたものと考えられるが、遺構内より出土した資料でないため万全を期し本項で取り扱った。1は羽状縄文土器であり、口唇は丸味をもっている。器厚は0.9cmを測り、胎土には繊維が混入している。2はL｜$\frac{R}{R}$の単節斜縄文が施文され、一部に竹管による整形がみられる。3は組紐縄文で、口縁がやや肥厚している。組紐の末端部が施文されている。4はR｜$\frac{L}{L}$を示す縄文が施文されており、その上部には半截竹管による押し引き文が、横方向に平行して二本施文されている。5は羽状縄文のようにみえるが、R｜$\frac{L}{L}$の単節縄文を、方向を異にして交鎖するように施文した資料である。6は無節縄文で繊維が多量に混入している。

縄文中期初頭の土器（第47図22、23）

本資料は五領ヶ台式に比定される。いずれも幾本もの平行沈線と半截竹管の押し引き文が施文されており、器厚1.0～1.1cmを測り、胎土は精錬され、赤褐色を示す焼成良好の資料である

縄文中期中葉～末葉の土器（第47図8～17、19、21、24～35、第48図36～52）

これらの資料を分類すると、1群に縄文を文様の主体とし、沈線により区画をなするもの、2群に沈線を文様の主体としたもので、この中には綾杉状沈線も含まれる。3群に沈線が主体となるが、器面整形も兼ね供えている資料がある。

1群の縄文を文様の主体とする資料は、8～17、19がある。8は口縁部の資料である。口唇は平らになりかなり肥厚している。L｜$\frac{R}{R}$原体の縄文が施文され、その周りを沈線で区画しているが、口縁の最上部にまで施文されている。また口縁は波状的な様相を示すが、部分的なくせであるのかも知れない。器厚は口唇の肥厚部で1.2cm、胴部で0.8cmを測り、器面全体が黒色を帯びていて光沢があり、焼成良好の資料である。15も口縁部の資料で、口唇にやや厚味をもっており、かなり内側に内反している。器厚はふくらみのある部分が最も薄く0.5cmを測り、他は0.8cmを測る。2群の沈線を文様の主体としている資料は31～32、36～52がある。31と32は器面に対

して縦あるいは横方向に対して沈線が描かれ、その間の無文部に刺突がなされている。この両者の刺突の形態がやや異なっており、32は刺突後の整形が整っている。37～39は深鉢形土器の口縁部で、無文帯の直下に横長の楕円区画文と、沈線と隆帯によるうず巻文が構成されている。41も同様口縁部の資料であるが、波状口縁の波状部とみられ、円形をなしている。文様の構成は、口縁に沿って二重沈線が引かれ、内側の沈線文中に縦状の沈線文がさらに施文されている。器厚は1.0～1.1cmを測り、器面黒褐色を示す焼成良好の資料である。これらの資料と文様構成を同一にする資料は、40、42、44～52があり、第2号住居址出土の埋甕に代表されるものである。また43は口縁部直下より沈線による縦長の区画文とその中の一定方向による斜状沈線文土器は、第1号敷石住居址の埋甕に代表される文様構成をもつものである。

縄文後期的様相をもつ土器（第47図18、20）

いずれも口縁部の資料で、かなり細い原体の縄文で施文していることが特徴である。18は、口縁部が肥厚し、やや内反ぎみである。口縁は無文であり、その下に沈線が描かれている。縄文原体は、L｜$\frac{R}{R}$を示し丁寧な施文である。20は浅鉢形土器の口縁部である。口縁はやや内反ぎみであるが直立して無文部になっており、L｜$\frac{R}{R}$原体を呈する縄文部からはかなり内側に屈曲している。

縄文中期末を中心とする本遺跡の中にあって本資料は、明らかに後期文化の様相を呈する資料であり、むしろ後期の所産であるといっても決して過言ではない。中期文化の中に後期的様相のある資料が混入しているということは、他からの混入した資料でない限り、ある一定地域に於ては、両方の文化が何らかの形で双方とも影響を受けつつ共存していたと考えざるを得ないのである。

石器（第49図、第50図）

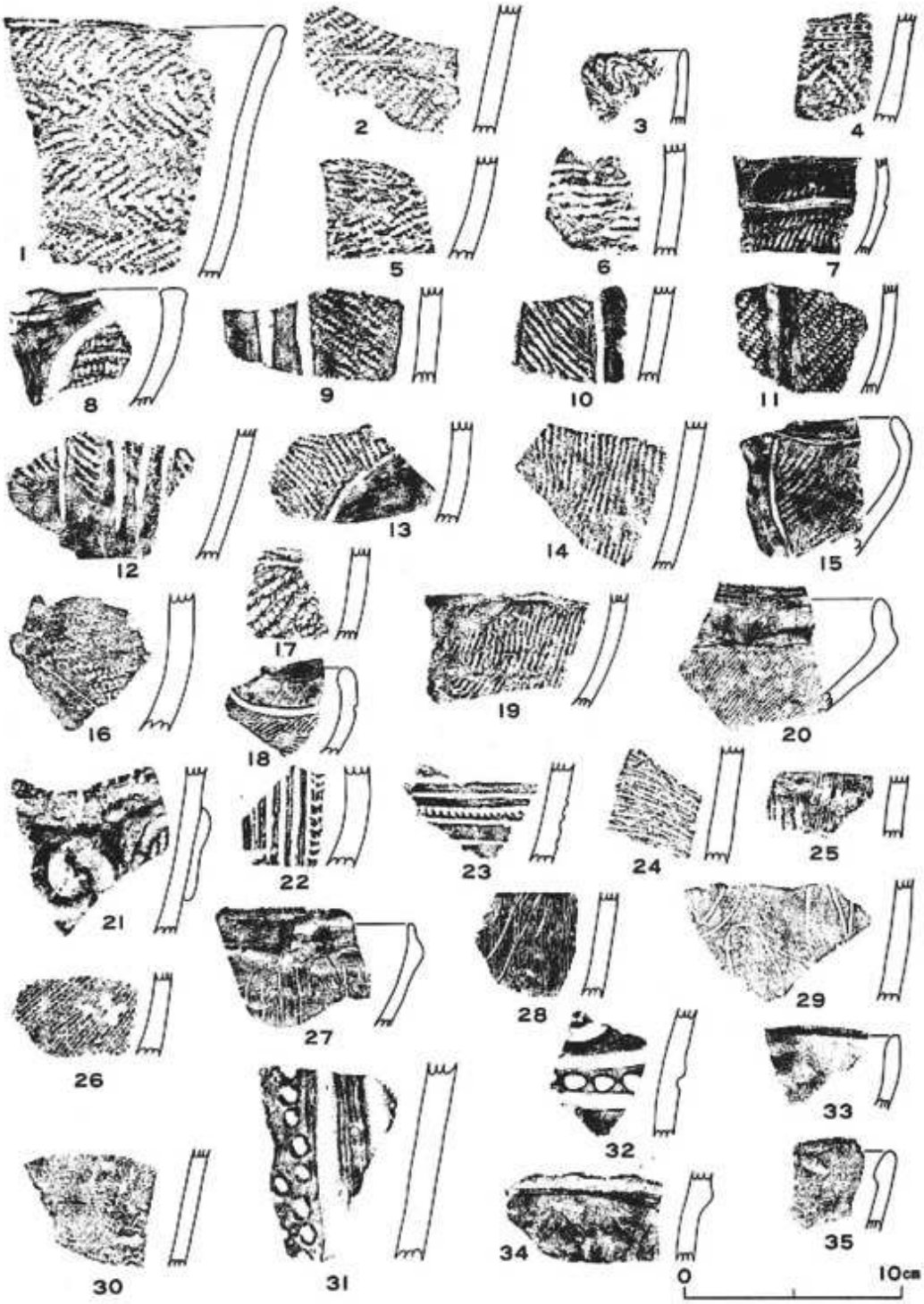
グリッドから出土した石器は、各住居址出土の石器とほとんど変化はないが、新たにノミ形石器という他ではあまり例のない資料が出土している。

削器（第49図2～13）

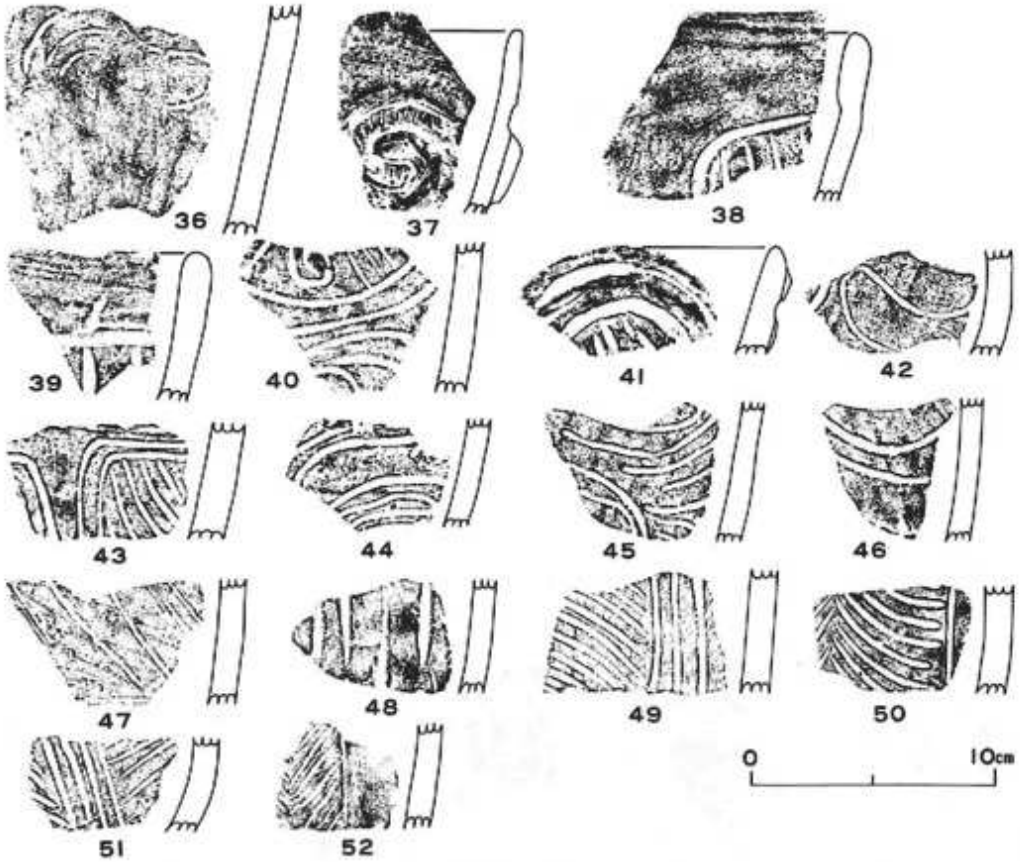
本資料は、原石の自然表皮面を剝離したフレイクを利用したものが多く、A面もしくはB面に自然表皮をもつものが多い。2と3は、中でも比較的大形のサイドスクレーパーで、自然表皮を剝がした剝離面の鋭い側辺部に対してリタッチを行なっている。3は両側辺部と先端部にリタッチが加えられており、一部エンドスクレーパーとしての機能も兼ね供えていた資料であると思われる。9と11はいわゆるナイフ形を呈するサイドスクレーパーで自然表皮面を剝離することによって刃部を作出している典形的な資料である。13はエンドスクレーパーで非常に小形の資料であるが、本資料も自然表皮面を剝離した側辺部にリタッチを行なっている。

ノミ形石器（第50図18）

本資料はチャート製のいわゆるノミ形石器で、縦径8.5cm、横径2.3cm、厚径1.3cmを測る。全面



第47図　グリッド出土土器（1：3）



第48図　グリッド出土土器（1：3）

的に研磨がなされており、平面形態から観察すると石槍かあるいは磨製石斧の感を受ける。製作技法は、磨製石斧と寸分変わっておらず、平面部の研磨がなされ、さらに両側面部も主軸と同一方向に研磨がなされている。異なるところは先端刃部と基部末端の技法で、先端刃部はややカーブを描いているが鋭く尖っており主軸とは幾分斜め方向に研磨がなされている。また基部の末端は、側面部と全く同様に面をとり研磨がなされている。断面をみると僅かな「く」の字にカーブを描いている。刃部は先端部の鋭く尖っている部分だけであると思われ、刃こぼれ状の使用痕が残っている。機能は木材を加工する時に使用された間接的生産にかかわる石器ではないかと考える。例えば、打製石斧の柄の加工であるとか、住居の建築、修理などにも利用されたのではないかと思われる。いずれにしても本資料は非常に珍らしく、また重要な資料であり、今後に課題を投げかけそうである。

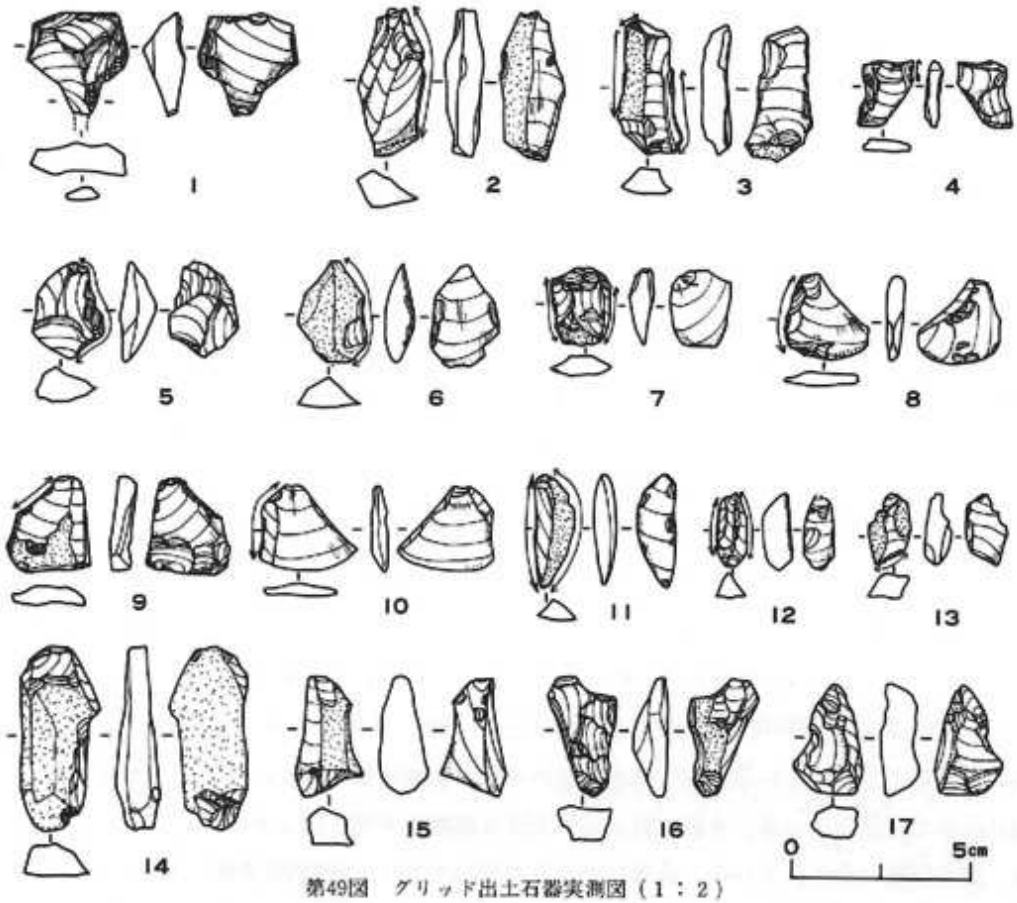
打製石斧（第50図19～22、24～25、29）

遺構から出土した打製石斧は、自然の板状節理面を両面に残す資料が中心であり、その他に1点ないしは2点そのような硬砂岩製以外の資料が出土していたが、グリッドから出土した資料は、ほぼ同数の割合いで全面加工あるいは石質の異なるものが出土している。

19は硬砂岩製で両面に自然の板状節理面をもつ資料である。先端部は欠損しているが、現存部で縦径11.3cm、横径5.6cm、厚径1.6cmを測る。A面は側辺部からかなりの剥離がなされており、特に基部の末端は比較的大きな剥離がみられる。B面は周りを平均に剥離されている。断面は基部末端付近が比較的厚味をもっており、先端刃部に至るにしたがって薄くなっている。使用痕は、主軸に対して平行方向と斜め方向があり、位置的には基部に集中してみられる。使用角度は、先端部で31°、全体から測定すると90°で、対象物に対してほぼ直角に使用されていたと思われ、また柄は主軸方向に着けられていたのではないかと思われる。20と21は自然板状節理面を両面にもつ資料であるが、いずれも先端部及び基部を欠損している。折れの方向は20は同一方向であるのに対し、21は異なっている。21はA面に稜をもつ原石を使用しており、稜を取り除くための剥離がなされているが、かなりの痕跡を残している資料である。22はA面に自然面を残す粘板岩製の資料で、硬砂岩に比べると比較的剥離しやすい。A面の加工は先端刃部と両側辺に対してわずかに行なわれているだけで、大部分は自然面をうまく利用したものといえる。B面は原石より剥離した面をそのまま残し、先端刃部と両側辺部に加工を加えているだけである。原石より剥離した本資料の形態が整っていたために、あまり手を加えずに成品化された資料である。これらのことは、硬砂岩の資料と同一である。使用痕は、刃部からA面では3.6cm、B面では2.2cmを測り、使用角度は45°である。これらのほかに基部の両側辺部には磨耗痕があり、着柄の関係もうながしている。24は粘板岩製の小形の部類に属する資料であり、基部中央から先端にかけて欠損している。A面B面ともに大きな剥離面を残す加工がなされ、側辺部に対しては、調整剥離がなされている。全体にかなりの凹凸があり、対称的な資料とは考えられない。25は自然の板状節理面を持つ硬砂岩とはやや質を異にする硬砂岩製の資料である。縦径10.4cm、横径4.2cm、厚径2.1cmを測り、長さの割合いには厚い資料で、断面はカマボコ型を呈し、平面は撥形を呈している。B面は原石より剥離した面をそのままに残し、周辺部を加工している。A面はカマボコ状の厚さを取り除くための剥離がなされており、その後周辺部に加工している。使用痕は、あまり顕著ではないが先端刃部より中央部までが主軸と同一方向に、また中央部から基部末端まで主軸に対して直角方向にそれぞれ残されている。刃部使用角度は56°である。29は粘板岩製の資料である。基部以外は欠損しているが、かなり大きく重量がある。細部まで細かく丁寧に加工されているが、製作中に折れたのではないかと考えられる。

横刃形石器（第50図26、30）

26は剥片利用の硬砂岩製の資料である。原石より剥離したフレイクに、簡単な刃部と基部の調整により作出したもので、今まで取り上げて来た資料の例にもれず横剥ぎの剥離技法によっている。A面は僅かな調整剥離面以外は自然表皮面もそのままに残している。縦径4.6cm、横径8.8cm、厚径は中央部で10cmを測り、断面形態をみると基部から刃部に至るほど薄くなっている。使用痕は、刃部に対して直角方向に残り、また基部は僅かな磨耗が残っている。30は打製石斧の剥片を利用したような様相を示しており、平行する側辺部に対して斜めに刃部が作出されて



第49図　グリッド出土石器実測図（1：2）

おり、剥離面と刃部との関係が興味あるものとなっている。使用痕は確認することができなかった。

ハンマーストーン（第50図31）

本資料はしそ輝石安山岩製であり、最大径3.6cmを測り楕円形を呈する非常に小形のものである。一部に僅かな使用痕が残っている。

石錐（第49図）

本資料は黒曜石製の石錐で、先端部は細かく丁寧に加工されており、刃部は断面三角形に近い形状になっている。

加工痕あるフレイク（第49図14～17、第50図23、27～28）

これらの資料は、14～17が黒曜石製、23は硬砂岩製、27～28は粘板岩製である。4～17は縦長のフレイクを利用した資料であるが、14は両面とも自然表皮面を有しており、片側部と先端部に対して加工を行なっている。

27は、欠損している資料であるが、B面は原石より剥離した面をそのままに残しており、A面は横剥ぎに近い大きな剥離面を残している。A面と両側辺部には、削痕というよりはむしろ

第8表　グリッド出土石器集成表（その1）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	有無	備考
グリッド	削器	2	縦長	黒曜石	4.1	2.0	1.1	9.0	−	−	−	−	／	自然表皮を残しているものがかなり多い。全体の形態は多様である。
		3	〃	〃	3.8	1.8	0.8	8.5	−	−	−	−	／	
		4	〃	〃	1.9	1.3	0.4	0.5	−	−	−	−	／	
		5	〃	〃	2.8	2.0	1.1	1.0	−	−	−	−	／	
		6	〃	〃	2.8	1.8	0.9	1.0	−	−	−	−	／	
		7	〃	〃	2.2	1.9	0.7	0.5	−	−	−	−	／	
		8	〃	〃	2.5	2.4	0.6	1.0	−	−	−	−	／	
		9	〃	〃	2.7	2.3	0.7	1.5	−	−	−	−	／	
		10	横長	〃	2.5	2.8	0.5	1.1	−	−	−	−	／	
		11	縦長	〃	3.1	1.6	0.7	1.1	−	−	−	−	／	
		12	〃	〃	2.1	1.1	0.8	0.5	−	−	−	−	／	
		13	〃	〃	2.0	1.2	0.8	0.5	−	−	−	−	／	
	ノミ形石器	18	縦長	チャート	8.5	2.3	1.8	30.0	○		−	−	−	研磨が成され、先端部が使用されている。
	打製石斧	19	短冊形	硬砂岩	•11.3	5.6	1.6	150.0	−		31°	90°	○	
		20	〃	〃	•5.0	5.0	1.1	40.0	−	−	−	−	−	両端部欠損
		21	〃	〃	•6.0	4.6	1.8	55.0	−	−	−	−	−	
		22	〃	粘板岩	11.1	5.1	1.6	123.0	3.6	2.2	−	45°	○	
		24	〃	〃	•5.1	4.5	1.1	22.0	−	−	−	−	−	両端部欠損
		25	撥形	硬砂岩	10.4	4.2	2.1	120.0	5.2	2.0	−	56°	○	
		29	短冊形	粘板岩	5.1	7.9	2.7	158.0	−	−	−	−	○	

（その2）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用角度 先部	全体	有無	備考
グリッド	横刃形石器	26	横長	硬砂岩	4.6	8.8	1.0	35.0	○	○	−	−	−	片面に自然面をもつ
		30	縦長	粘板岩	6.0	4.8	0.9	21.0	○	○	−	−	−	石斧の折れを利用したと思われる。
	ハンマーストーン	31	楕円形	しそ輝石安山岩	3.6	2.7	1.5	100.0	○		−	−	／	
	石錐	1	キリ形	黒耀石	2.8	2.8	1.2	5.0	−	−	−	−	−	先端部欠損
	加工痕のあるフレイク	14	縦長	黒耀石	5.1	2.2	1.3	11.0	−	−	−	−	／	
		15	〃	〃	3.3	1.9	1.3	2.0	−	−	−	−	／	
		16	〃	〃	3.3	1.9	1.0	1.5	−	−	−	−	／	
		17	〃	〃	3.1	2.0	1.0	1.5	−	−	−	−	／	
		23	〃	硬砂岩	4.5	2.3	1.1	11.0	○		−	−	／	使用痕が確認される。
		27	〃	粘板岩	7.4	5.3	1.0	30.0	○		−	−	／	
		28	〃	〃	5.3	0.7	0.8	12.0	○		−	−	／	

磨耗痕が残っており、特に剥離の稜に顕著である。28も同様粘板岩製の剥片石器で平面部における使用痕は認められないが、両側辺の鋭い部分にみられる。本資料も欠損しているが、27と同様に使用痕が刃部に対して直角であるということに共通性が見い出せるが、いわゆる横刃形石器的な使用が成されていたのではないかと考えられるのである。

第8節　表面採集の遺物

本遺跡に於ける表面採集の遺物は、土器よりも石器の方が良好であり、特に凹石は遺構全体から出土した量を大きく上まわっている。打製石斧なども質的に良好な資料が得られている。これらの資料は、本調査地域の範囲内より採集し、またヤックラ状の石積み中より採集したものが多い。

石鏃（第54図25）

本資料は、一方の脚部が欠損している黒曜石製のもので、片面に自然面を残しており、製作途上の資料ではないかと思われる。縦径 2.6cm、横径 1.4cm、厚径 0.5cmを測る。

削器（第54図28～33）

27は片面に自然表皮面をもつ資料であるがあらゆる側辺部から刃部作出のための加工が成されており、サイドスクレーパーと、エンドスクレーパーとの両用石器とも考えられる。30は、エンドスクレーパーと考えられ、同じく片面に自然表皮面を持っている。これらに代表されるように、本遺跡に於ける黒曜石製フレイクは、自然表皮面を剥離することにより、比較的鋭い部分を作出していく技法が中心となっている。

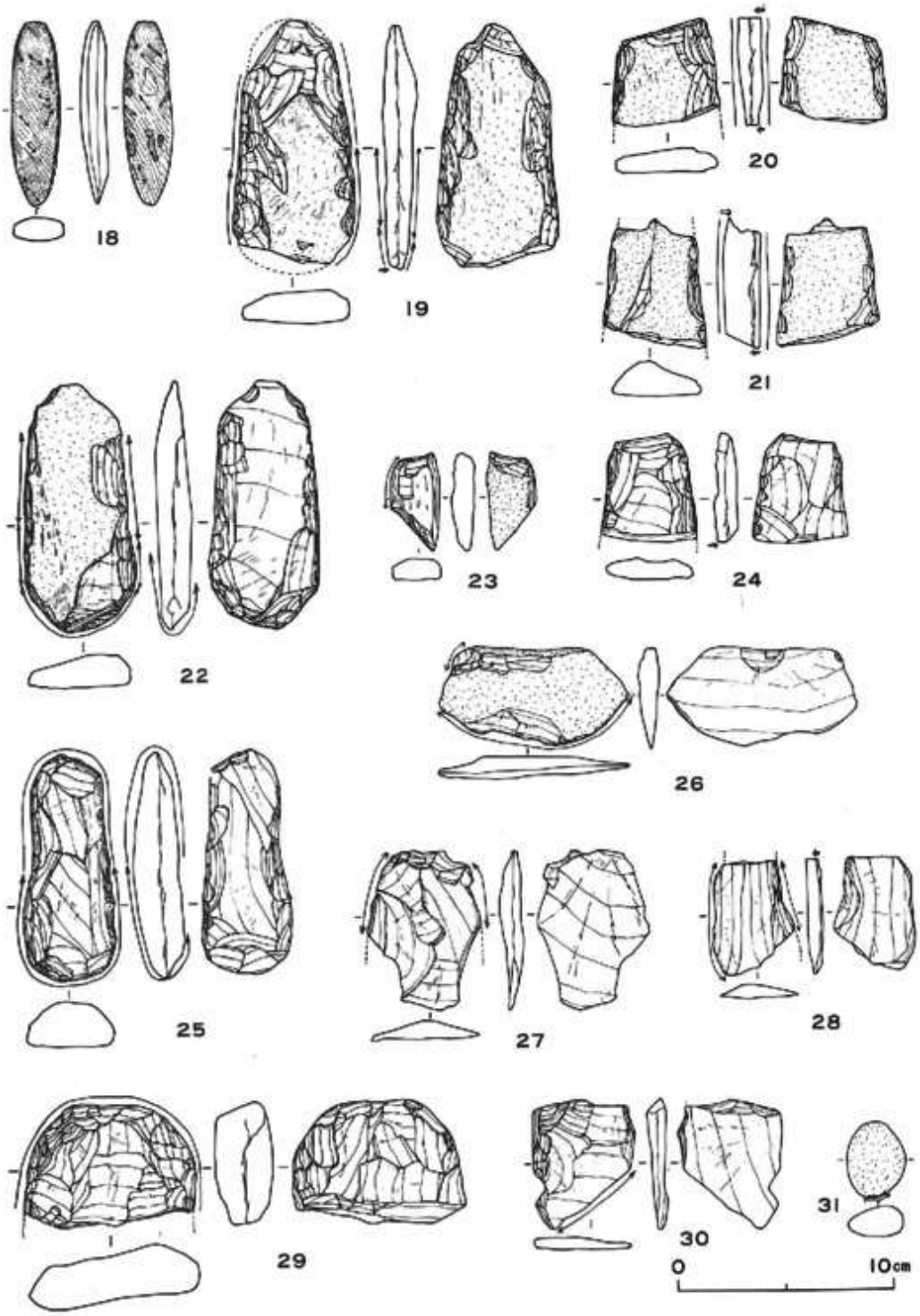
石錐（第54図26～27）

これらの資料は、住居址から出土している石錐とは形態的な違いがみられ、いわゆる一般的にみられる形態を有している。いずれも先端刃部を欠損しているが、基部が残っており、丁寧な加工痕がみられる。27は特に先端刃部に至るほど丁寧で、基部は自然面を残すなどやや荒い所がみられる。

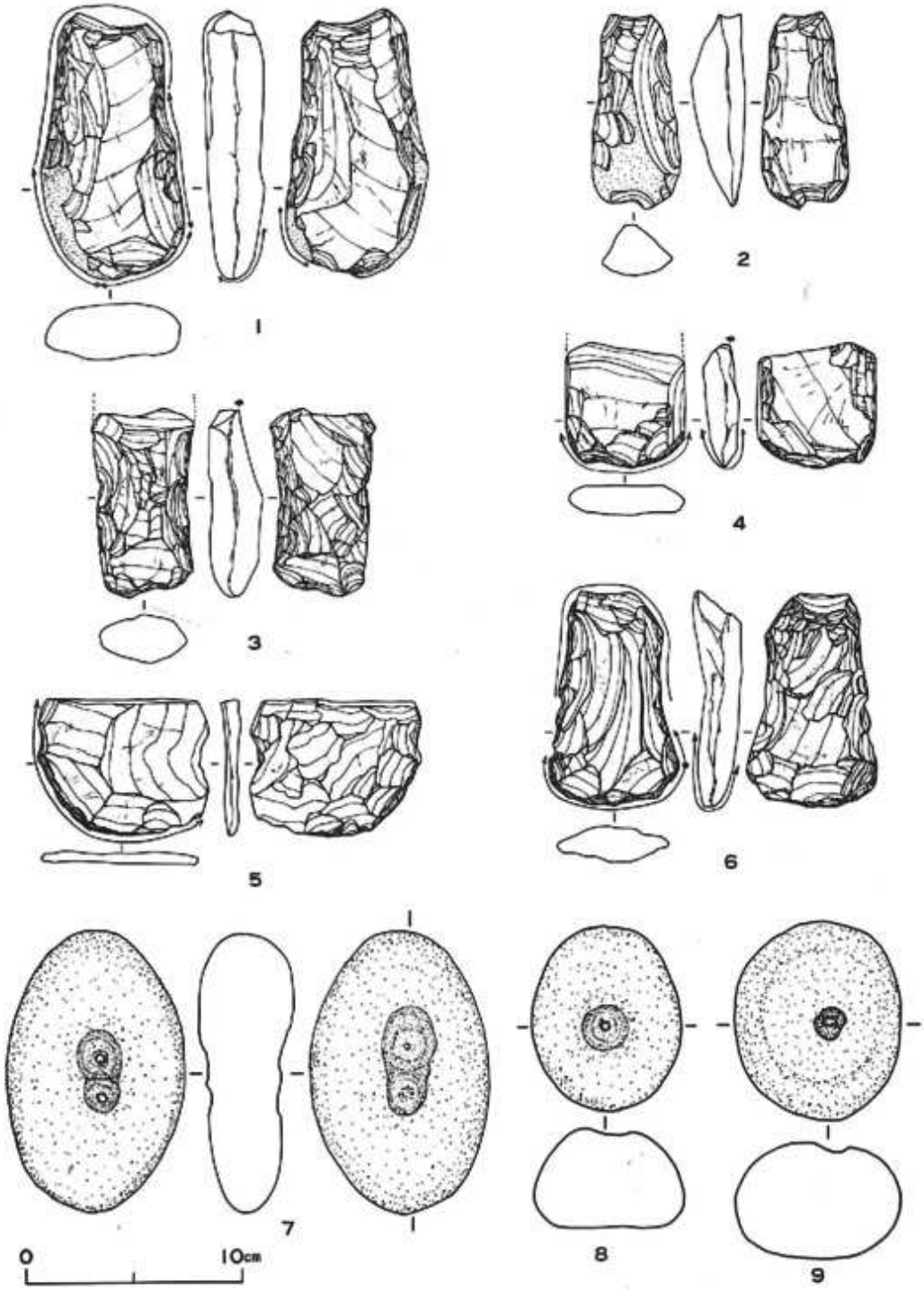
打製石斧（第51図1～4、6）

表面採集による打製石斧は、住居址からは出土していない形態の資料が多く、また両面に自然の板状節理面を持っている資料は1点も含まれていない。

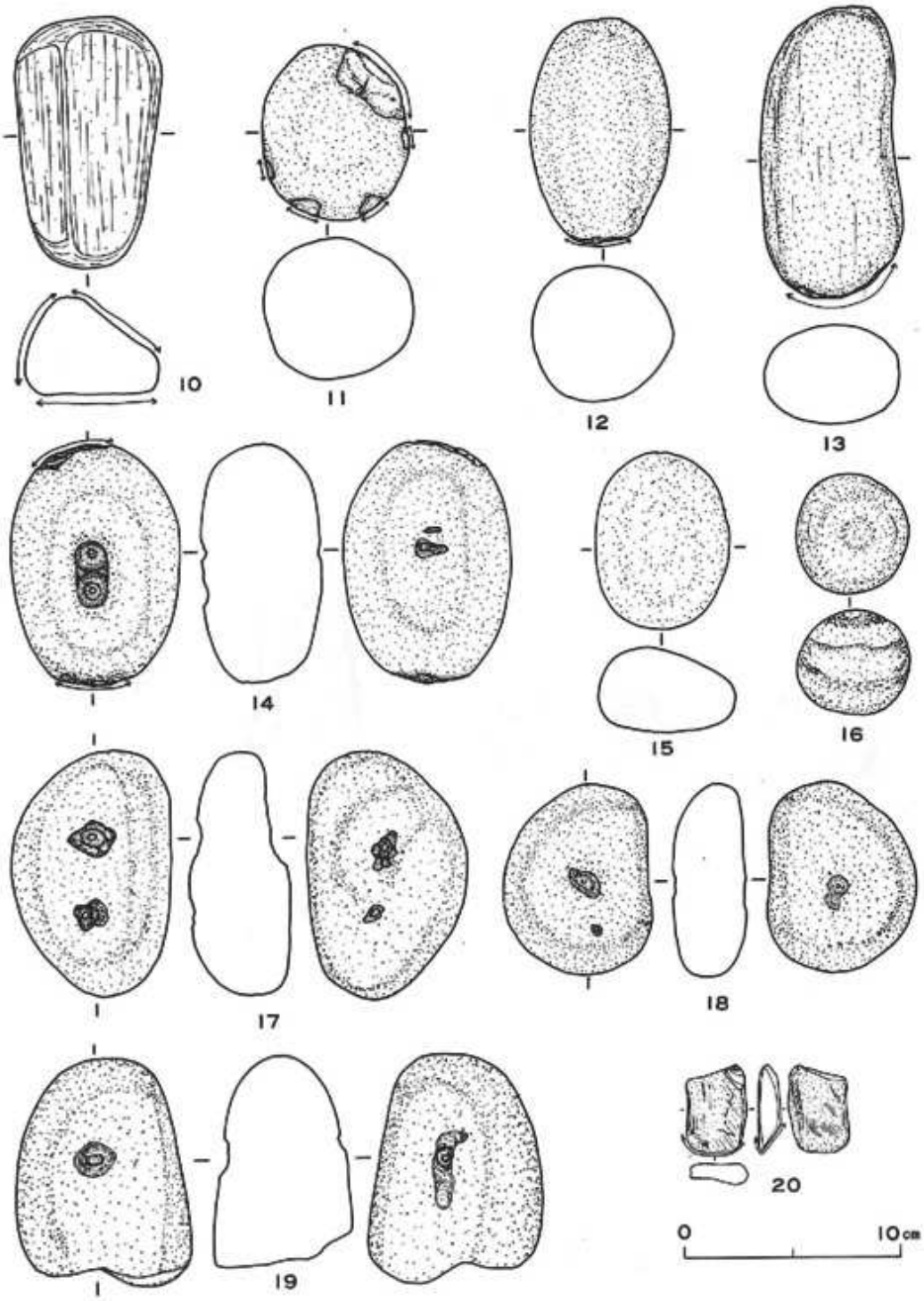
1は縦径12.4cm、横径6.3cm、厚径2.8cmを測る資料で、長さの割合にはかなり厚みのあるずんぐりとした形態を示している。特徴的なのは、先端刃部にあまり手が加わらず、肥厚しており、しかも自然面が残されている。さらに、主軸に対して斜めに刃部がある斜刃形となっている。A面B面ともに中央部に主軸とほぼ同一方向の大きな縦長の剥離面が残されており、打撃方向はいずれも基部末端から刃部にかけて成されている。基部のほぼ中央部には両側辺部から



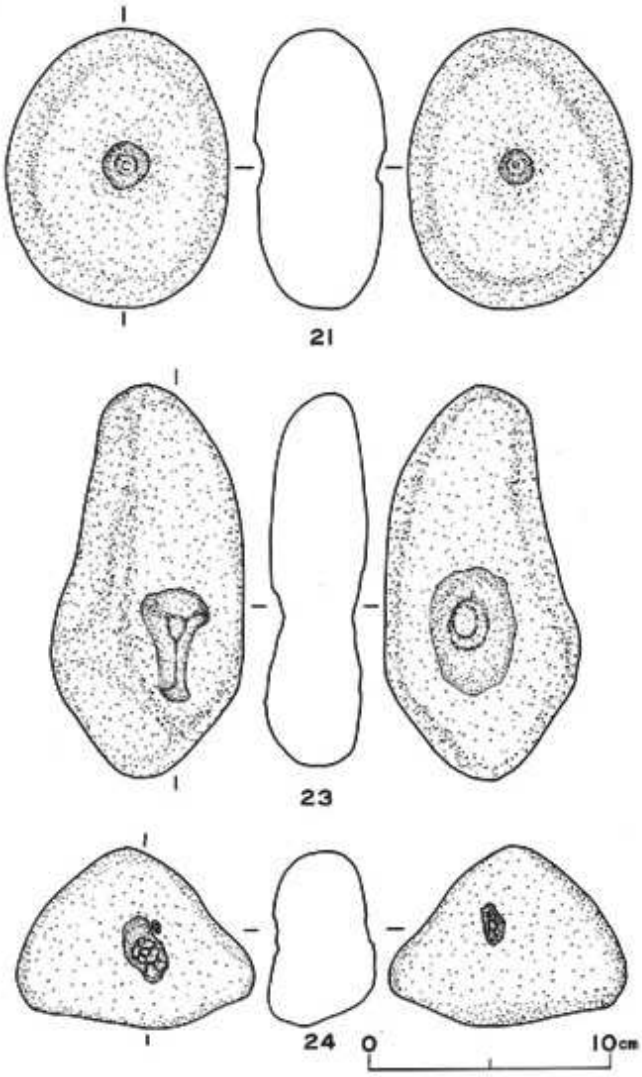
第50図　グリッド出土石器実測図（1：3）



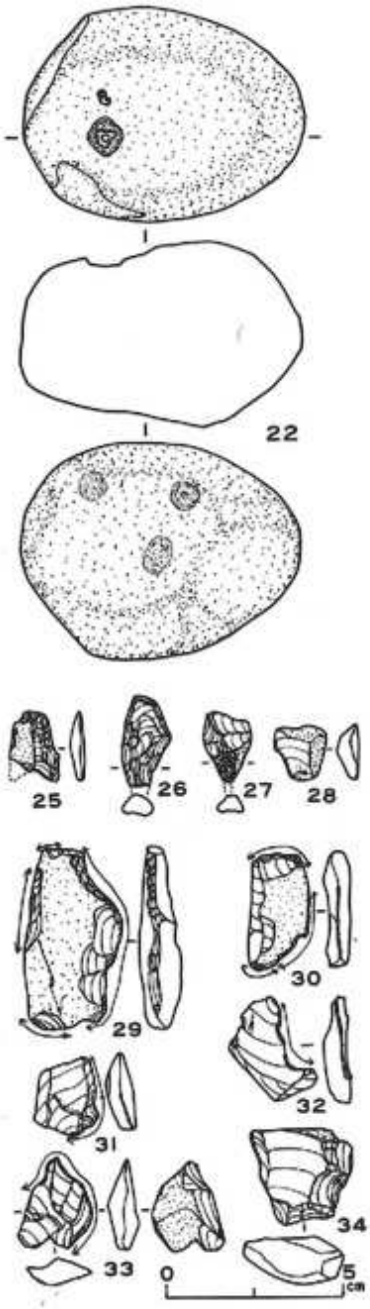
第51図　表面採集石器実測図（1：3）



第52図　表面採集石器実測図（1：3）



第53図　表面採集石器実測図（1：3）



第54図　表面採集石器実測図（1：2）

剥離がなされ、やや内側に凹む様相を示している。刃部には使用痕が残されており、特に先端部と自然表皮面の残されている所が顕著で、磨耗痕のような状態である。2は、断面が三角形に近い形状をなす資料で、基部の中央は2.5cmとかなり厚くなっている。A面は先端刃部から基部中央まで自然表皮面が残されており、先端はあまり加工されていないが両側辺部には、中央の厚さを取り除くための剥離と刃部作出のための剥離がなされている。B面は、原石より剥離した面をそのまま残し、全周に対して刃部作出のための剥離がなされている。このように中央部にかなりの厚味のある三角形の頂点となるような資料は、本資料しかないが、グリッドより出土した第50図25に類以性を求めることができる。25は断面がカマボコ状を呈しており、全体

が加工され対称的な資料となっているが、本資料は、より薄くしようとすれば不可能ではないが、現在の形状、寸法を保つためにはここまでが限度であることを示しているかと思われる。3は基部が欠損している比較的軟かな硬砂岩製の資料であり、断面の刃部形態は1との類以性をもち、全体にそりがみられ、中央部から刃部に至るほど厚くなる傾向を示し、また横断面は楕円形を呈している。加工はあらゆる方向からなされているが、刃部と側辺部を除けば規則性があまりみられない。4は調査地域からややはずれた所で採集した資料である。この資料もやや質を異にした硬砂岩製で、両面ともに大きな剥離面を残しており、先端刃物部と両側辺部に刃部作出のための剥離が認められる。また先端刃部には剥離面の高い位置に主軸と平行方向の使用痕が認められる。6は、第3号住居址出土（第40図30、31）の2点の資料と同様に、熱変成を受けた硬砂岩を使用しており、色調、形態、剥離技法等非常に類以性の強い資料である。平面形態は撥形を呈し、断面はかなりの反りが認められスプーン状の形態をなし、基部末端にはつまみ状の肥厚部分がある。この肥厚部分は恐らくは着柄と関係がありそうで、柄から抜け落ちないためのかえりの役割を果しているのではないかと思われる。加工痕は両面が非常に対称的で、A面は横剥ぎによる大きな剥離の連続によって加工し、最後に周辺刃部を作出しているのに対し、C面は大きな剥離面もみられるが、比較的細かな剥離を繰り返すことによって、平面部と側辺刃部も作出している。使用痕は先端部に顕著で45°角に使用されたことが確認できる。全体の形状や使用痕から観察すると鍬的な機能をなした資料ではないかと考えられる。

横刃形石器（第51図5）

本資料は非常に薄手であり、節理面をもたない硬砂岩を加工している。A面は大きな剥離面を側辺部より残しているが、B面はあらゆる方向から細かい剥離を行なっている。このような形態を示す資料は、いわゆる横刃形石器の形態とは異なる所があるが、用途等考えた場合同様の範囲に入る資料であると思われる。

ハンマーストーン（第52図11～14）

ハンマーストーンは合計4点得られた。11は、普通輝石安山岩製の円礫を利用した資料で、打撃痕は5ケ所みられるが、加工しない円礫を使用することから、対象物に対する打撃点の面積は比較的広くなると思われる。したがって石器等を加工するための間接的生産用具ではなく、たたきつぶしたりするために使用されたのではないかと思われる。12は、縦径10.4 cm、直径6.5cm、重量510 g を測る普通輝石安山岩製の砲弾形を呈する資料で、主軸における先端部が機能点となっている。機能点は使用により丸味が取れ平担になっている。13は比較的扁平な普通輝石安山岩を利用した資料で、同じく主軸先端部が機能点となっており、比較的広い範囲を使用している。縦径13.5cm、横径6.5cm、重量530 g を測る。14は凹石と両用のハンマーストーンであり、普通輝石安山岩の楕円礫を利用している。両端ともかなりの回数にわたって使用されており、明瞭に残っている。

凹石（第51図7～9、第52図14～17～19、第53図21～24）

凹石は、調査地域内のやっくら状の石積みの中から多数みつかった。形態分類すると、Ａ：正楕円形を呈するもの（７、14、21）、Ｂ：不定形楕円を呈するもの（17～19、22～24）、Ｃ：円形〔球形〕を呈するもの（８、９）になる。これらのうち、片面にだけ凹部があるものは、８、９の２点があり、また両面に凹があるものは（７、14、17～19、21～24）の９点である。石質より分類すると、しそ輝石安山岩製が21、23の２点だけで、その他は全て普通輝石安山岩製であり、比較的軟質で加工しやすい河原石を利用していることが特徴である。14はハンマーストーンとしても利用しており、この石質は比較的硬い普通輝石安山岩製である。凹部の形態は、ほぼ正円形を呈するものと、不正円形を呈するものがあり、ほぼ半数ずつであり、正円形を呈するものの方が深く作出されている。また23のように自然に凹んでいる部分を加工してさらに、凹部を作出している珍しい資料がある。全体の形態と凹部との関係をみると、凹部が正円形を呈している資料は、全体の形態も正楕円形になっているし、不正円形の凹部の資料は、不定形な形態を示しているといえる。

以上のように観察してみると、石質や形態、あるいは凹部の状態など、かなり一定した様相を呈しているといえ、また遺構に伴なう資料も含めてみると、かなり量的にも多いということがいえる。

磨石（第52図10、15、16）

10は特殊磨石の形態をなす資料で、断面は基本的には三角形を呈しているが、頂点となる３点をさらに研磨してあるために、それほど明瞭ではないが六角形になっている。研磨方向は、主軸方向になされている。原石はしそ輝石安山岩の河原石を利用しており、縦径11.2cm、重量50.0ｇを測る。15はやや扁平の楕円礫を利用したしそ輝石安山岩製の資料、また16は球形の河原石を利用した普通輝石安山岩製の資料で、自然のなめらかさに合わせるように僅かに研磨がなされている。

第9表　表面採集石器集成表（その1）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部角	全体	着柄磨耗有無	備考
表面採集	石鏃	25	長身鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.5	－	－	－	－	－	製作中に欠損したための廃棄されたものか。
	削器	28	縦長	黒曜石	1.5	1.5	0.7	0.4	－	－	－	－	／	あらゆるところに刃部がある。
		29	〃	〃	5.2	2.8	0.7	16.0	－	－	－	－	／	
		30	〃	〃	3.3	1.7	0.8	5.0	－	－	－	－	／	
		31	〃	〃	2.2	1.9	0.8	4.0	－	－	－	－	／	
		32	〃	〃	3.0	1.7	0.7	0.4	－	－	－	－	／	
		33	〃	〃	2.6	2.0	0.8	3.1	－	－	－	－	／	
	掻器	34	横長	黒曜石	2.6	3.0	1.3	11.0	－	－	－	－	／	
	石錐	26	縦長	黒曜石	•2.6	1.4	0.5	4.0	－	－	－	－	－	先端部欠損 ｝他とは異なった形態を示す。
		27	〃	〃	•2.6	1.3	0.6	4.2	－	－	－	－	－	〃
	打製石斧	1	短冊形	硬砂岩	12.4	6.3	2.8		0.15	2.3	－	52°	○	表採では両面に自然面をもつものは確認されていない。
		2	〃	〃	•9.0	4.1	2.5		－	－	－	－	－	
		3	〃	〃	•8.7	4.7	2.4		－	－	－	－	－	
		4	〃	〃	•5.8	5.5	1.5		1.55	1.55	－	90°	－	
		6	撥形	〃	9.9	6.1	2.3		3.4	1.85	90°	45°	○	
	横刃形石器	5	¼円形	硬砂岩	6.2	7.9	0.7		○	○	－	－	－	
	ハンマーストーン	11	円形	普通輝石安山岩	8.1	6.8	6.5	430.0	○		－	－	／	かなり顕著に使用痕が認められる。
		12	楕円形	〃	10.4	6.5	6.2	510.0	○		－	－	／	
		13	〃	〃	13.5	6.5	4.5	530.0	○		－	－	／	
		14	〃	〃	11.1	7.9	5.6	689.0	－	－	／	／	／	凹石と兼用

（その２）

遺構名	石器名	図版番号	形態	材質	法量 縦径(cm)	横径(cm)	厚径(cm)	重量(g)	刃部使用痕(cm) A	B	使用度 先部	全体	着柄磨耗 有無	備考
表面採集	凹石	7	楕円形	普通輝石安山岩	12.9	8.2	4.4	540.0	−	−	／	／	／	ハンマーストーンと兼用
		8	〃	〃	8.5	7.0	4.6	258.0	−	−	／	／	／	
		9	〃	〃	9.2	5.4	7.7	433.0	−	−	／	／	／	
		14	〃	〃	11.1	7.9	5.6	689.0	−	−	／	／	／	
		17	〃	〃	11.2	7.4	4.7	460.0	−	−	／	／	／	
		18	〃	〃	9.0	6.8	3.4	320.0	−	−	／	／	／	
		19	〃	〃	9.5	8.0	6.5	750.0	−	−	／	／	／	
		21	〃	しそ輝石安山岩	11.5	9.3	5.5	645.0	−	−	／	／	／	
		22	〃	普通輝石安山岩	11.5	9.2	7.5	1120.0	−	−	／	／	／	
		23	〃	しそ輝石安山岩	15.4	7.8	4.0	700.0	−	−	／	／	／	自然の凹部を加工利用
		24	三角形	普通輝石安山岩	7.2	10.0	4.2	362.0	−	−	／	／	／	
	磨石	10	断面三角形	しそ輝石安山岩	11.2	6.8	4.3	500.0	−	−	−	−	／	断面三角形の特殊磨石様である。
		15	〃	〃	8.2	6.3	4.0	230.0	−	−	−	−	／	自然石を利用
		16	〃	普通輝石安山岩	5.5	5.4	4.8	110.0	−	−	−	−	／	
	研磨痕のある石器	20	縦長	硬砂岩	3.7	2.8	1.1	15.0	−	−	−	−	／	

第4章　総　　括

第1節　黒浜期資料の周辺

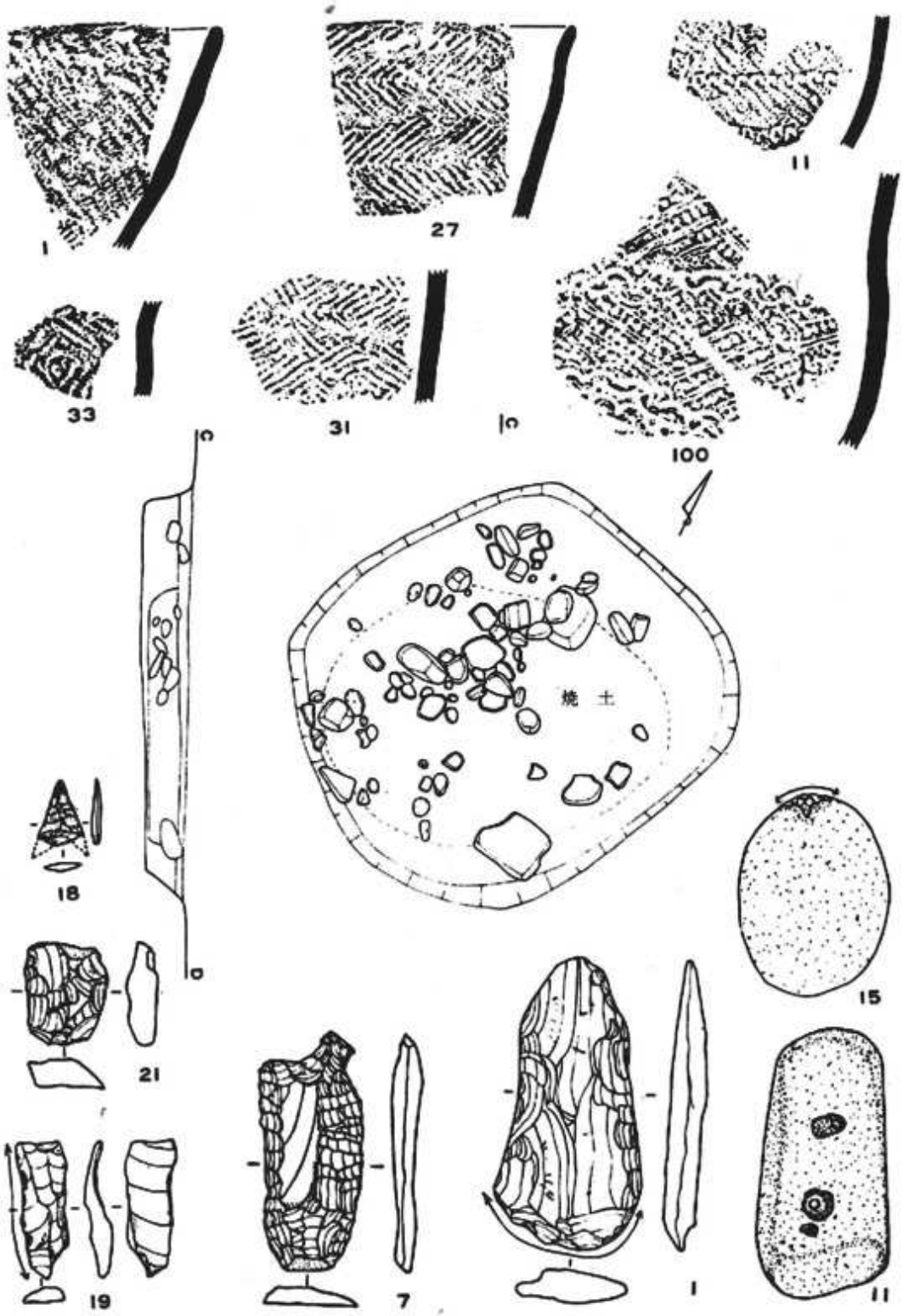
住居址はほぼ隅丸方形の竪穴であって、一辺が 3.8× 3.5mで、やや胴張りである。多量の礫石が投入されていた。中部高地のあり方をみれば、こうしたプランを持っ住居址は東まわり的であって、関東的である。千曲川水系をそのうちに入れるが、埴科郡戸倉町巾田遺跡も、本下吹上第5号址例とほとんど同様な所見となっている。しかし、飯山市有尾遺跡では、円形竪穴住居址が検出されているが、この有尾例は、器壁にほとんど繊維が入らない土器群であって、どちらかと言えば西まわり的であって、その土器群を、中部高地における黒浜期併行として「有尾式土器」の名称が与えられている。そうしたなかで、東まわり巾田遺跡の土器群にも、「巾田式土器」の名称が与えられて把握されている。

こうしてみると一応、下吹上の資料を東まわり黒浜期併行の巾田期に比定できる。

土器をみると一応Ⅰ～Ⅳ類の土器群として分類されたが、単節縄文、無節縄文，結節のある羽状縄文、結節のない羽状縄文、刺突文のあるもの、コンパス文のあるもの、異条縄文の行われたもの、そして無文の土器群などによって構成されているのは、ほぼ縄文多用の通常のあり方を示している。しかし、巾田式土器及び、関東の黒浜式土器に比べて、やや半載竹管による刺突文や平行沈線文の量がすくないのに注意される。そういう点では、関山期の残影をみる思いであって、おのずから、下吹上第5号住居址の時間的位置が明らかになるものと思われる。

もう一つ注意されるのは、明らかに繊維の混入は、意図的に行われていることである。①土器の製作者は、どの土器にも例外なく繊維を混入するのではなく、その混入を必要とする器形にのみ行うことがおぼろげながらわかること、②その区別はどうやら施文の方法にも暗黙の共通性があること、が明らかになりつつあることである。

縄文早・前期を通じて、器形的には深鉢形土器の尖底から平底へとの変化をとげて来ることが明らかになっている。しかし、その器壁のあり方をみると、すでに、押型文土器のころから含繊維土器がみられるようになるが、そのあり方をみると、楕円押型文土器により繊維の混入がなされているとの傾向が明らかである。いわば、含繊維土器は楕円文を行うというあり方、無繊維土器は山形文などと文様組成でそのパターンを分類していた可能性を、押型文期の後半にみられるのである。こうしたあり方が、この期まで更に追求されて来ているとみてよく、その中には、重要な土器の用途による器壁粘土の決定が、内在していて、みかけ上は、施文に



第55図　第5号住居址及び出土の遺物

よる分類あるいは、器形の異り、あるいは深鉢形土器の大小による分類など、かなり複雑な構造をとっていた可能性があるものと理解できる。下吹上第5号住居址の少ない資料の分析から、そうした重要な課題が提起できるものと思われる。含繊維という行為が、単に粘土のつなぎであるとする単純な理解では、カバーできない問題が多すぎることが明らかである。

含繊維土器と無繊維土器の同時存在が持つ意味は、土器の用途による異りを示唆している。用途別による土器の存在は、縄文早・前期の生産様態そのものにかかわる重要な問題であることに注意しなければならない。その手がかりの一つが土器の側面から把握できたと言えよう。

その手がかりのもう一つは、生産用具としての石器である。攻撃用石器や解体用石器の存在に加え、打製石斧や凹石など、耕作用石器や、調整用石器の存在が把握される。

縄文前期終末期の生産カレンダーの理解にも、これらが重要な認識をもたらすこととなるにちがいない。

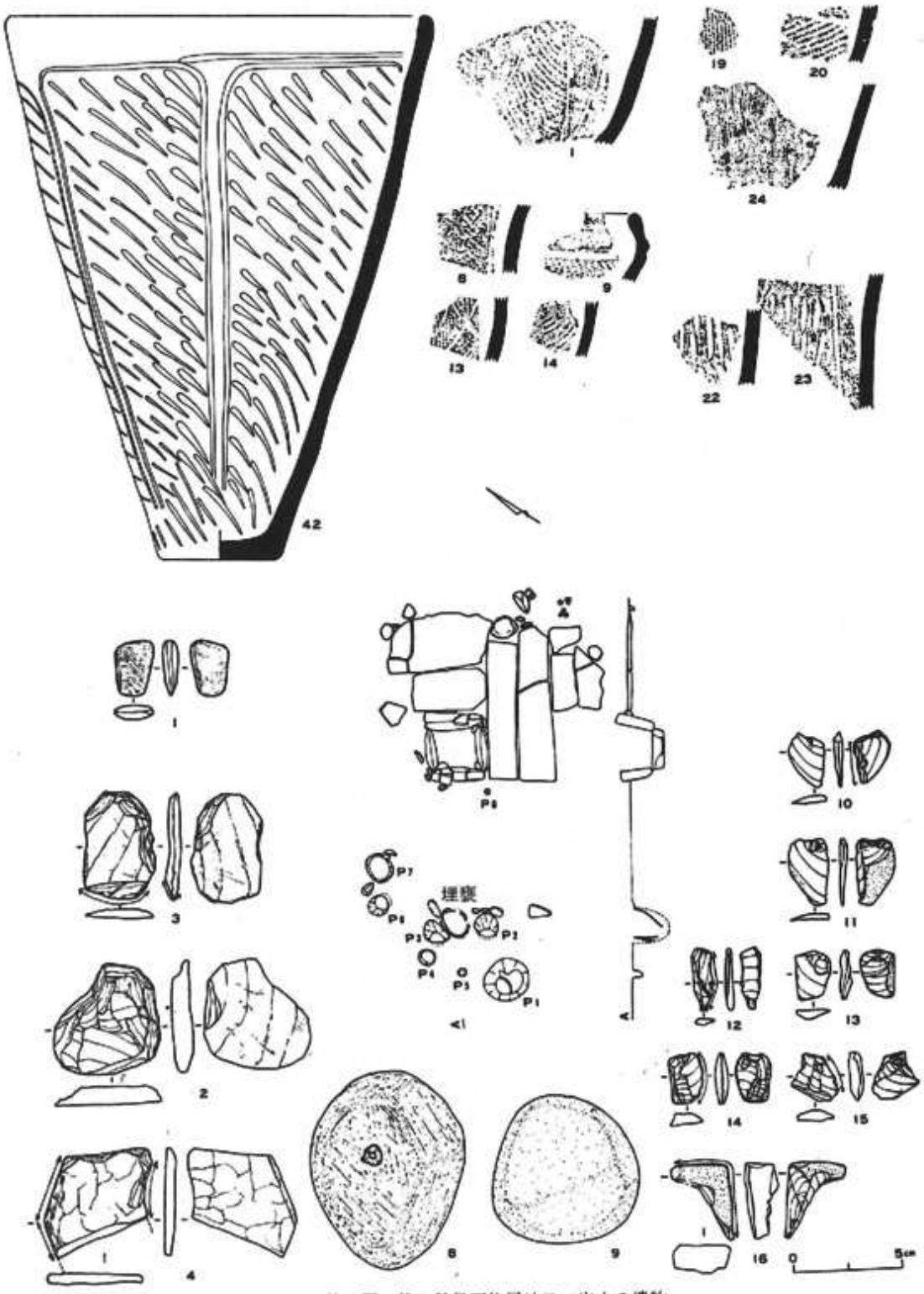
第2節　敷石住居址の提起するもの

住居址内に敷石施設をもつ遺構の出現は、加曽利EIII期であろう。八ヶ岳編年でいう曽利IV期である。

千曲川水系においては、戸倉町巾田遺跡や小諸市郷土遺跡例がもっとも古く、いわゆる隆線による口縁横帯文が後退し、一たん沈線化した口縁横帯文となるが、その沈線化した時期をIII期とすると、巾田第II号配石址の埋設土器がこの期にあたる。郷土は未報告であるが，実見するにこの期のものである。ところが、いわゆる加曽利EIV期、曽利V期になるとにわかに増加し、戸倉町巾田、坂城町込山C、小諸市下笹沢、郷土川辺、東部町戌立、寺ノ浦、長門町明神原戸隠村市場平、坪根、三水村東柏原、そして下吹上遺跡例がどがある。それは後期初頭にまで及んで、軽井沢町茂沢、長野市平柴平、信州新町宮平、高山村坪井、小諸市加増遺跡など堀ノ内I・II式期のものが存在する。加曽利E期のものは、石囲炉のまわりの一部に敷石施設をなすものが多くその性格は祭祀遺跡的性格のものも含み、堀之内期になるとプラン全体に及ぶものが多く、その性格はもっぱら住居址と考えられるものが多い。しかも堀之内期は敷石プランが六角形をなすものが類例を増している。

そうした一連の洗い出しをしてみると、下吹上例もさることながら敷石部が、黒色土上になされていることも重要である。その中には、竪穴住居から平地住居への志向が生きていると思われることは当然であるが、加曽利E終末期は、下吹上遺跡においても確認されたように、集落の特定住居址にのみその施設があり、しかも、住居内の特定位置にのみ敷石施設があるというのも、注意されねばならない。

平地住居化、特定位置、土器の深鉢形土器への集約化等は一連の変化として、何の変容によっ



第56図　第1号敷石住居址及び出土の遺物

て引き起こされてくる変化であろうか。これは単に縄文中期的生産様態の終えんとしてかたづけられるものではない。新しい出発はその内部変容のその奥に隠されていることは事実であろう。

その生産様態の変革は縄文中期終末期の内部からであったのか。あるいは、すでに新しくどこかの地域ではじまっていたであろう縄文後・晩期的生産様態の外側からのものであったのか。今後の大きな課題であろう。

第3節　縄文中期末葉の課題

縄文中期末葉の課題を、本下吹上遺跡をフィルターとしてみておきたい。

① 敷石住居址の出現をめぐる問題
② 土器の深鉢形化へアプローチ
③ 石器組成の問題
④ 集落の拡散の意味するもの
⑤ いわゆる縄文中期終えんをめぐる問題

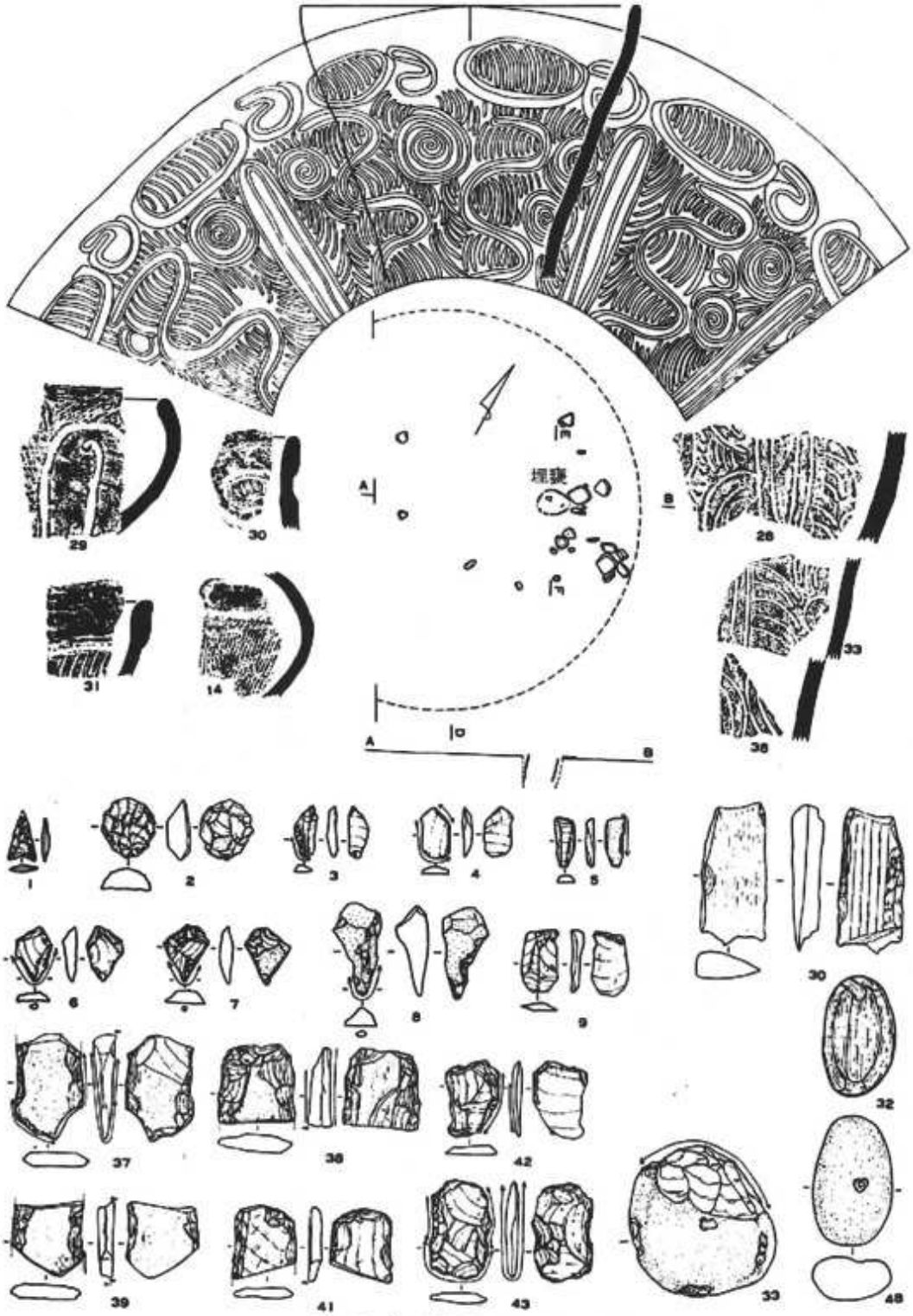
①の敷石住居址出現をめぐる問題については、すでに、前項でふれた。しかし、その要素である、a平地住居化、b特定位置、c深鉢形土器への集約、d生産様態の変容、e変容のアプローチなどは、まだ未解決の課題そのものと言ってもよい。しかし、a、c、dなどは縄文後・晩期的パターンの内部で把握されるべきものであることは明らかである。その縄文後・晩期化を、過渡期の様相としてホリゾンタルにとらえるか、あるいは、後・晩期的生産様態からのアプローチとしてとらえるか、が重要な問題であろう。

②なぜ縄文中期的生産様態の象徴的表現であった土器のセット化が加曽利E期になると失われてくるのか。デコラチーブな供献形態の土器がまず消滅する。貯蔵形態の土器は有孔鍔付樽形土器＋器台形土器⟶有孔鍔付壺形土器＋ミニチュア土器＋器台形土器⟶小形の台付有孔鍔付土器⟶小形の両耳有孔鍔付土器⟶両耳土器へと変化し、加曽利EIII期で消滅し、IV期にまではもたらされていない。煮沸形態の土器は、ずん胴な深鉢形土器へと集約してしまい、あたかも、後・晩期の粗製土器である煮沸形態の深鉢形土器化と軌を同じくしている。注意されるところである。

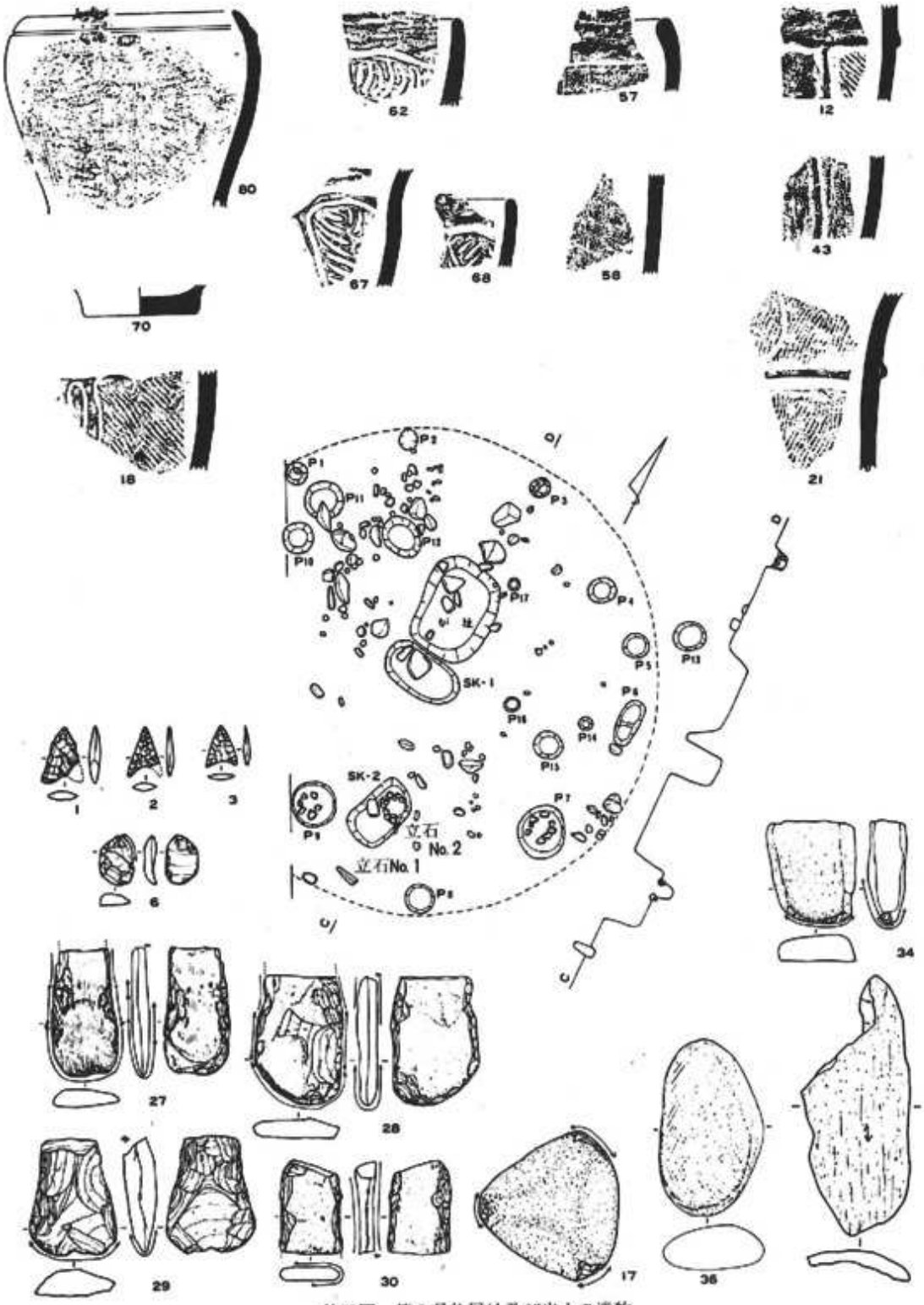
土器セット文化は完全に破壊してしまったと、その事実を容認しなければならない。

③石器の組成は、下吹上の5遺構において狩猟用の攻撃用の石器と解体用の石器など、どの遺構にも見られること、また耕作用の石器と考えられる打製石斧や、調整用の磨石や凹石、ハ

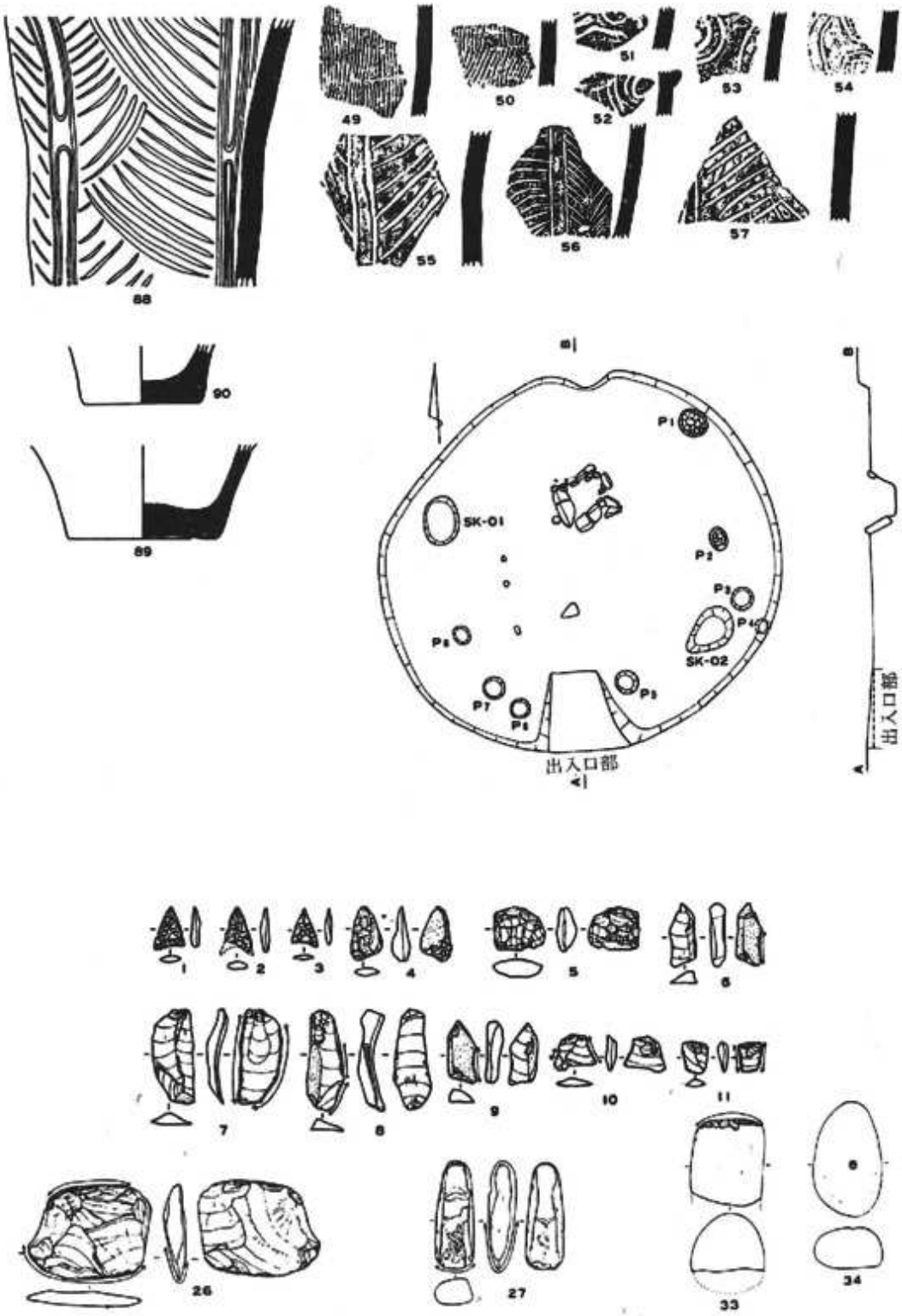
第57図　第1号住居址及び出土の遺物



第58図　第2号住居址及び出土の遺物



第59図　第3号住居址及び出土の遺物



第60図　第4号住居址及び出土の遺物

ンマーストーンなどがそれである。地球上の温帯に属する地帯は、好むと好まざるとにかかわらず、季節の変化が存在し、それに食料生産は影響を与えられていることは自明である。単一な生産システムを許される地帯は寒冷帯と熱帯である。そこには、季節のいちじるしい変化は存在しないで、ワン・パターンの季節と対応するワン・パターンの生産システムしかあり得ないのである。縄文式時代を通じて、単一の生産システムであったなどと理解を限定することは、あらゆる条件を考えても可能でない。そこには明らかに年間を通じた生産カレンダーが存在していることは事実であったと思われるのである。石器の組成はこれを雄弁に物語っている。

④集落規模の縮少がよく議論されている。しかし、一方では加曽利E期はその遺跡の数がむしろ増大しているので、この縮少と拡散は、相対的な関係にあるものと考えてよい。本来、環状集落址あるいは馬蹄形集落址といわれるものは、同時期存在としてはあり得ず、小環状集落が、一形式数百年間に、あるいは縄文中期数形式二千年間に、丘陵端崖上を平行移動した結果、結果として認識されるものであることと理解している。

そうしたなかで、加曽利E期は、一形式構成の集落が、集落ごと移動してテラスや段丘上、あるいは丘陵上を占有する例が多いので縮少と拡散の相対現象が起こり、結果していると理解するのが妥当であろう。それを、どんな生産様態の対応とみるべきであろうか。

⑤縄文中期の終えんは、縄文中期的生産様態の終えんとみるべきである。縄文中期的生産様態は、どうして終えんしたかについては明らかでないが、おそらくは、縄文後・晩期的生産様態の展開にともなって、一種の収斂現象として結果したものとみるべきものであると思う。その内部には、洪積台地の生産構造から、沖積地の生産構造へと展開していることは事実である。したがって、沖積地的生産の構造からのアプローチが、洪積台地の文化を終えんに導いたと考えられる現象がある。平地敷石住居化、深鉢形土器化、その内部の生産様態の変容は、共に一連の現象とみるべきであろう。

○

第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址とも、そのプランは明確でないのは、その床面が黒色土中にあるからである。また第4号住居址も、きわめて浅く、壁高が10cm内外であることをみれば平地住居に近い存在である。曽利Ⅳ、Ⅴ期としてよいこれらの住居址群が、きわめて後期的であると言っても過言でない。第2号住居址の30、第3号住居址の18は石棒の破片と考えられるが、石棒の機能も、単なる祭祀遺物との視点から脱脚すべき時期に来たっていると思う。もっと積極的にその再検討に取り組むべきであろう。

縄文中期末葉の課題のうち、いくつかをとり上げて、その問題点を明確にしてみた。やや大胆にすぎた思いもあるが、一つのアプローチとして今後の課題として残しておきたいと思う。

第4節　埋甕をめぐって

ここで、埋甕とすることのできる資料は、第1号敷石住居址出土のものと、第2号住居址出土のものの2例である。第1号住居址例は炉内出土の大破片であり、第3号及び第4号住居址例のものは、住居址内土坑の内部から検出された同様大破片による図上復元である。

第1号敷石住居址例をみると、いわゆる口縁を上にした正位の底部の整った埋甕であって、それも、炉敷石部位、そして柱穴の所見からして貯蔵用の埋甕と理解しておいてよいものと思う。

あるいは、第2号住居址出土の破片とともに最も新しい資料であるかもしれない。へら状工具による右さがりのひっかけ状の沈線によって区画内を充填する方法をとっており、綾杉状沈線文からくずれた、やや投げやりな文様構成となっている。口縁にそって無文帯を置き、すべてへら状工具によるものである。器形はほとんどを線状に開口する深鉢形で、後期の粗製土器そのままである。

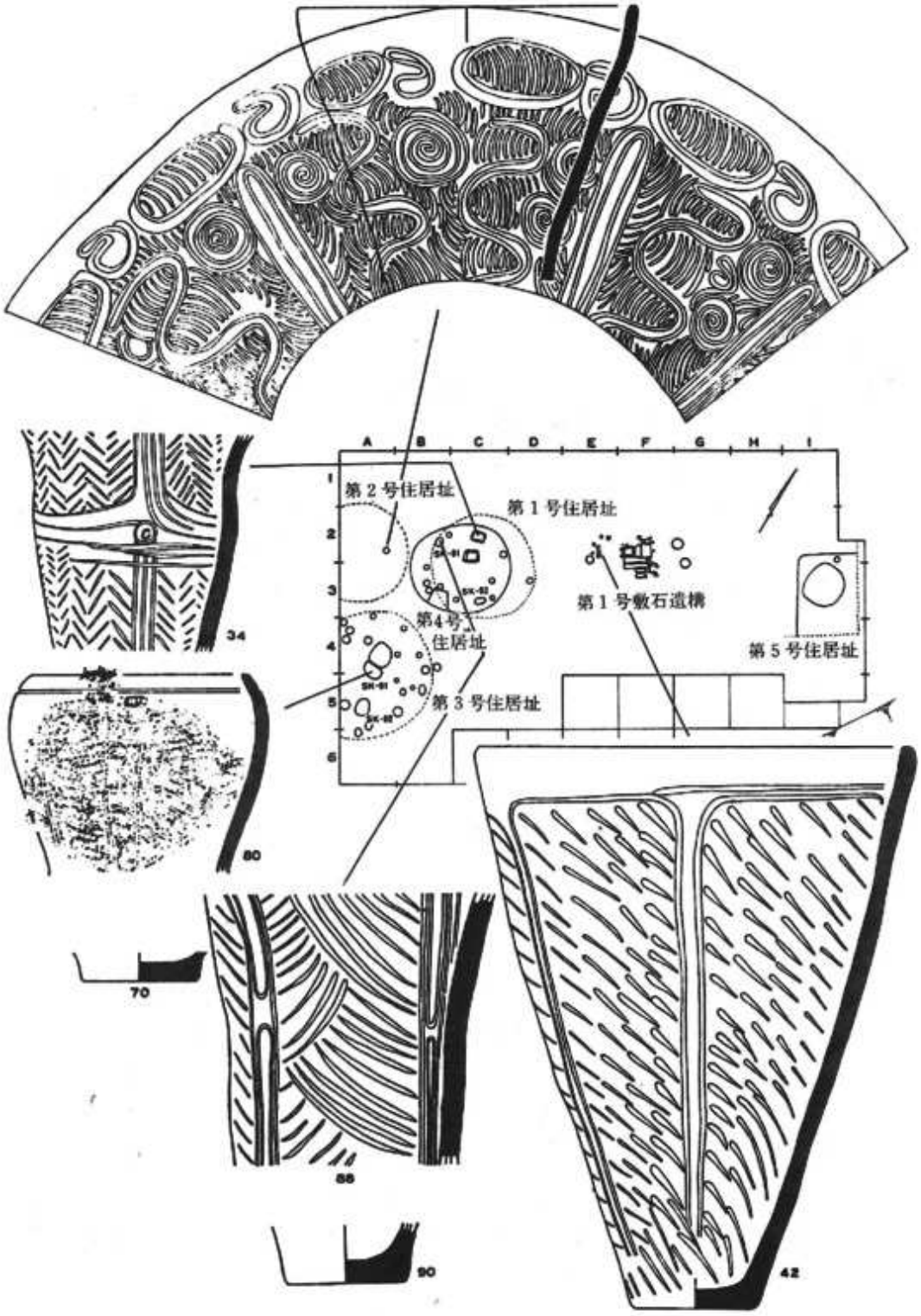
第2号住居址に伴った埋甕は、正位であったが、底部を欠いたものを利用したものである。すべてへら状工具による沈線によって施文されているが、口縁にそった沈線の口縁横帯区画文を配し、胴部は、3パターンの文様構成をとっている。二重直線の垂下と蛇行沈線の垂下、その間を渦文と、やや曲線的な平行沈線文によって充填されている。第2号住居址の壁面にそった部分と考えられてるところから検出されていて、蓋石は内部に落下して確められた。これも貯蔵用の埋甕とみるのが妥当であろうか。やや内弯するキャリパー形に近い、加曽利EⅡ～Ⅲ期に通常な器形となっている。この遺構内での最も先行する土器であるとすることができよう。

こうしてみると、かなり住居址及び集落址の時間的位置を確定することができる。

埋甕が住居内埋葬儀礼と関連させ、多くの注目される論考が収穫されているが、やや一側面でのみでしか議論になっていないきらいがある。胞落し説なども現われてにわかに注意されたが、埋甕と伏甕の概念の成立からその機能に迫った神村の好論文があるが、これも住居内祭式との関連で理解しようとする傾きが強い。胎盤埋納や幼児甕棺をやや支持した埋甕、精霊封じ込めを志向した伏甕もそれである。

加曽利E期に盛行をみるこの種の施設は、一単施設が行われると、その住居址が廃絶されるまでである種の意味を持ち、住居建てかえに際し、あるいは増改築に際して、また一甕が加えられたと見られるものもある。時には形式に若干の差すらあるものもみられるが、この現象が一住居址における使用の時間的長さを知る手がかりとなっている。

しかし、単に屋内祭式とのみの理解にとどまらずに、より機能的な利用の理解に展開が更に期待されるところである。



第61図　各住居址の出土標式土器及び堆積

第5節　生産用具のあり方

下吹上遺跡の生産用具である石器についてみておきたい。第10表がその数と百分率である。

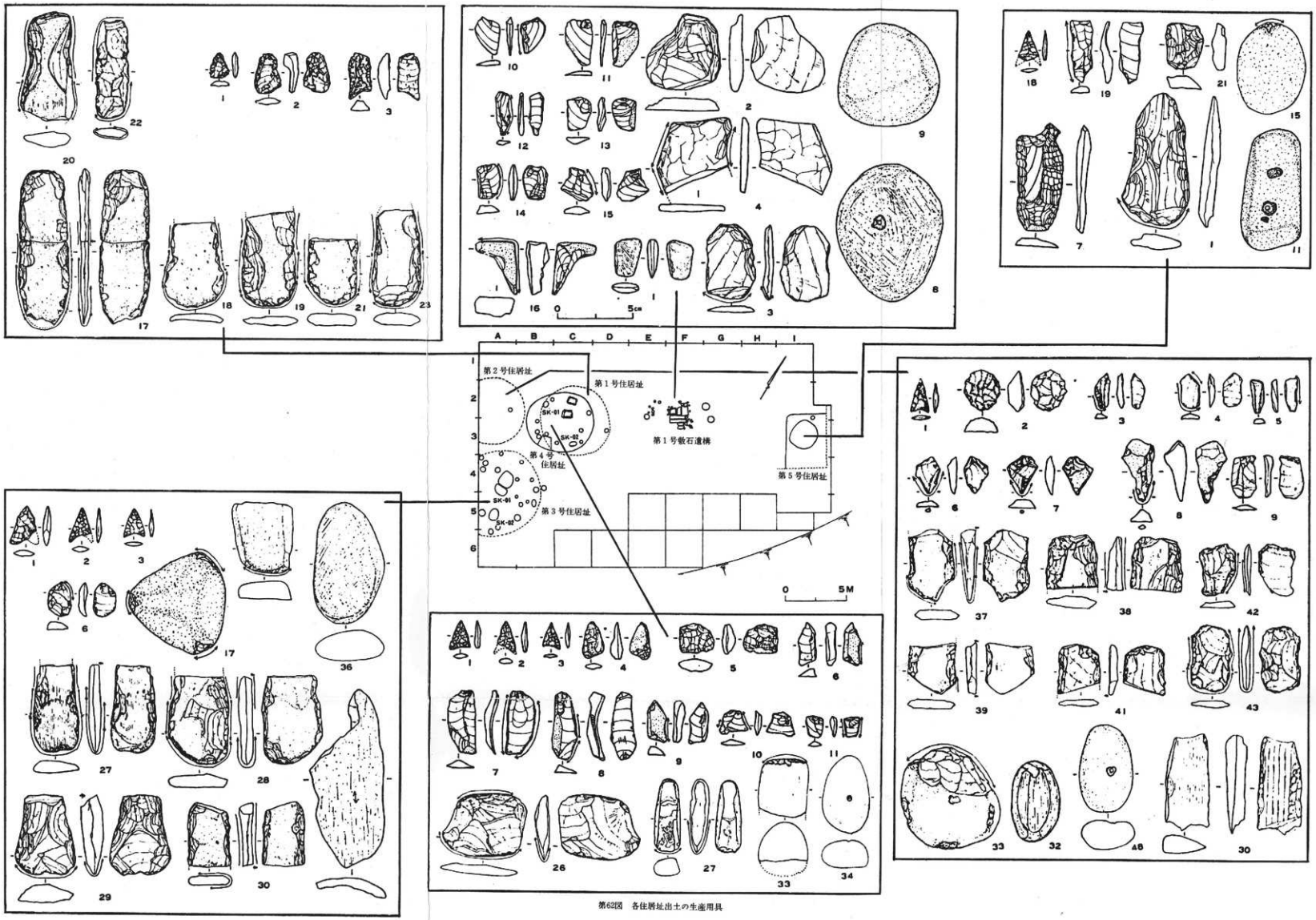
第5号住居址は、全般に攻撃、解体用の狩猟形の石器が多いことがわかる。それに比べて、耕作的石器であるものが少ないという傾向が把握できる。縄文前期という時期の生産カレンダーが、より狩猟的であることを示しているものと理解してよいものと言えよう。

縄文中期終末期の第1号敷石住居址、第1、2、3、4号住居址は、ほぼそのバランスを保っているとみてよい。縄文中期が農耕的社会であるとの仮設が出されて久しいが、ようやく落ちつきをみせて来たところである。しかし、そうした所論の中には、まったくすべて農耕的であるとの議論と、否定的議論とにわかれるが、本来温帯における農耕社会は、より複雑な食料生産カレンダーを持つのが通常であって、一人日本列島の縄文式文化のみが例外であったはずがない。まずは、縄文式文化が、世界史的にみても、その文化内容は新石器時代の文化であることを明確に位置づける必要があるものと考えられる。磨製石斧の機能、そして打製石斧の機能、ひいては、横刃形石器の機能等、きわめて農耕社会にとって、その生産になくてはならない、用具としての認識が確立されるべきであるし、その意欲的な実験と観察における論考が相ついで発表されているのは注目されるところである。本下吹上遺跡においても、特に打製石斧や横刃形石器について、その使用痕の観察を行なってあるのを注意されたい。それによる使用に際しての着柄や、使用の角度についての想定復元がなされている。その生産様態についての復元に役立つものと考える。

第1号住居址と第4号住居址は、むしろ、狩猟的パターンの石器が多いのに注意される。農耕的パターンの石器が必ずしも多くない事実を素直に受け入れておくべきである。もちろん、こうした移動廃絶と思われる住居址の生産用具が、すべて残されていると考える方が現実的ではないが、しかし、その残影を見ることは可能である。

もう一つ、その移動廃絶の時期によってもその残影は若干異りを見せるはずである。またもう一つ、蓼科山麓の下吹上という地理的環境がもたらす、生産のパターンの異りが作用しているとみることができる。そうしたファクターこそを取捨選択して、下吹上における各竪穴住居址における性格も明らかになるものとすることができる。

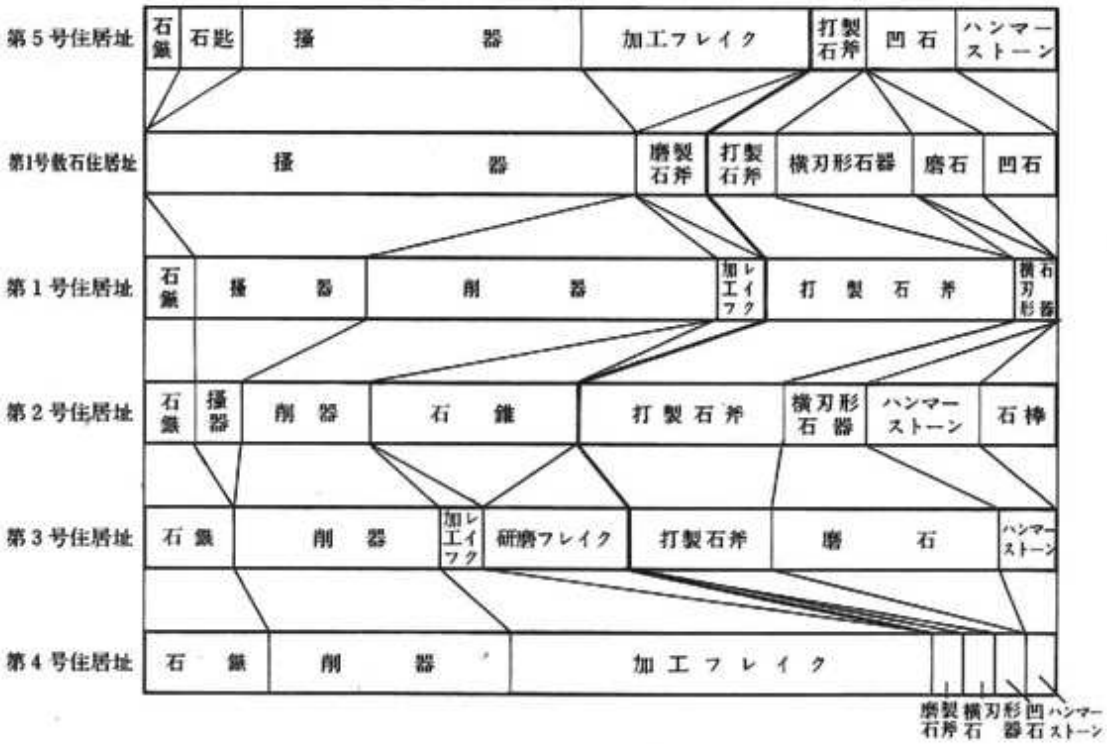
本遺跡のこうした生産用具のあり方についての研究が、今後の研究に何等かの役割りを果すことができるものと思っている。



第62図　各住居址出土の生産用具

第10表　各住居址出土の石器数及びその百分率

	石鏃	石匙	掻器	削器	石錐	加工痕のあるフレイク	研磨痕のあるフレイク	磨製石斧	打製石斧	横刃形石器	磨石	凹石	ハンマーストーン	石棒	合計
第5号住居址	1	2	12			8			2			3	4		32
	3.1	6.3	37.4			25.0			6.3			9.4	12.5		
第1号敷石住居址			7					1	1	2	1	1			13
			53.8					7.7	7.7	15.4	7.7	7.7			
第1号住居址	1		4	8		1			6	1					21
	4.8		19.0	38.0		4.8			28.6	4.8					
第2号住居址	1		1	5	3				5	2			3	2	22
	4.5		4.5	22.8	13.6				22.8	9.1			13.6	9.1	
第3号住居址	3			7		1	5		5		7		2		30
	10.0			23.3		3.3	16.7		16.7		23.3		6.7		
第4号住居址	4			8		14		1		1		1	1		30
	13.3			26.7		46.8		3.3		3.3		3.3	3.3		



第6節　第4号住居址の復元設計

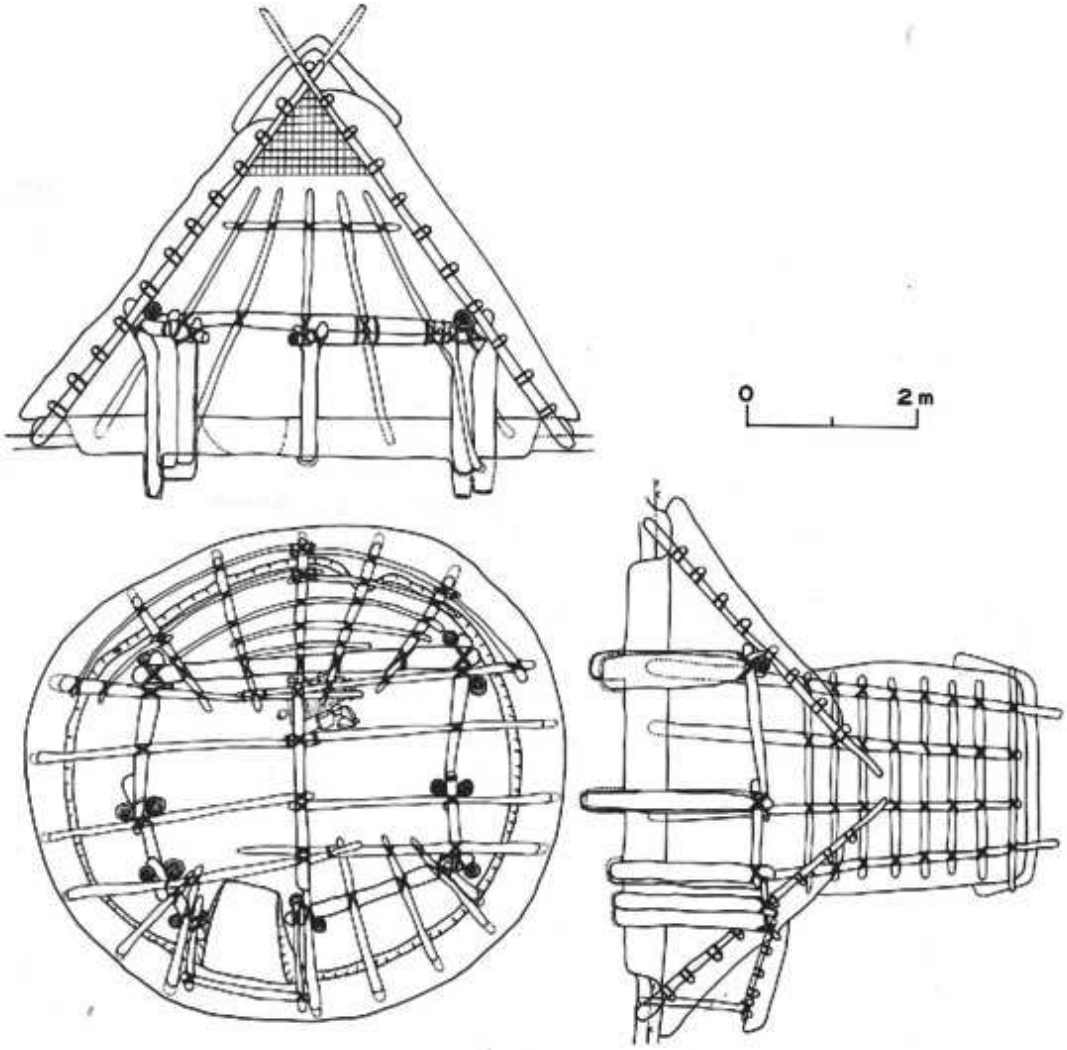
第4号住居址の復元を試みたのが、第63図である。竪穴の直径が 5.3m、深さが0.25mを基礎計算として、その竪穴掘り上げの土量を計算した。地表下 0.358cmで検出したので、0.582cmを掘り込んだとするとその土量は 5.513m³である。加えて主柱穴などの数9個の土量 0.135m³で、全体土量 5.648m³である。その土量は、おそらくその竪穴のまわりに積み上げて土手状にめぐらせたものと考えられるから、 5.7mの外径として計算すると、円周は17.898mで、半円筒状の土手を作ったとして 0.447mを底とし、高さ 0.224mを高さとするカマボコ状の土手をめぐらせることができる。したがってトータルすると床面からは 0.806m、約80cmの竪穴とすることができる計算である。

そこへ最も自然な傾斜角として50°の垂木を、外周の土手に下げる。外周にピットは検出されなかったので、0.582mの土手＋表土より垂木の深さを深くしないようにする。柱の長さは、その計算上にとどめるという逆算出の方法をとって基本的設計とした。柱の上に桁をのせ、垂木はそれによってささえ、最上部において棟木で固定する。8本の主柱と1本の桁持ち柱とによってささえ、垂木を寄せてめぐらした。垂木に直行するように棧を入れ固定する。その上を芽にてふき上げるものとした。屋根上部に空気孔を作るような構造とした。その部分には、編み物などを下げるのがよいと思う。垂木4本でそのまま千木状に出してもよいと考えたが、これについては、こだわらないものとする。

出入口部については張り出し構造とした。多くの復元住居が、出入口部がむき出しになっていて、雨はそのまま内部に入ってしまうものが多い。これは実際的ではなかったと思われる。もう一つ、多くの事例と異るのは、竪穴内の土量を上部外周に土手状に積み上げたことである。これは、竪穴内部に雨雪が入らないようにとの配慮ばかりでなく、竪穴の埋没と関連して、最も自然な方法であると考えている。

使用する用材については、おそらく雑木であったと思う。磨製石斧での伐採を考えると、クリのようなかたい木であり保護されたと思われる木は、あるいは考えることができないかもしれない。そうした意味で、ナラかクヌギのような落葉樹林帯にある普通の木であったと考えている。なお、縄は充分にあったとしてよいので、ツタやフジつるで接点をしばったとする考えをとらないで、縄を使用してよいものとする。

下吹上遺跡の段丘にこの復元家屋が建てられる日を楽しみにしている。これが縄文中期人の生活を知る大切な文化財となること、そしてその活用がなされることを願っている。



第63図　下吹上遺跡第4号住居址復元設計図

参考文献

宮坂英弐　「原住民遺跡の研究」　昭和23年
「長野県東筑摩郡宗賀村平出遺跡」　（信濃２－６）　昭和25年
「平出遺跡第二次調査の状況」　（信濃３－２・３）　昭和26年
「長野県上伊那郡伊那村遺跡第一次調査概報」　（信濃３－６）　昭和26年
「平　　出」　昭和30年
「尖　　石」　昭和32年
宮坂光昭　「縄文中期勝坂と加曽利Ｅ期の差」　（古代44）　昭和40年
「井　戸　尻」　昭和40年
「長野県伊那市御殿場遺跡緊急発掘調査概報」　（伊那路11－１）　昭和42年
桐原　健　「縄文中期にみられる埋甕の性格について」　（古代文化18－３）　昭和42年
「海戸第二次調査報告書」　昭和43年
「埋　甕　考」　昭和43年
武藤(雄)・宮坂(光)　「長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡第二次調査概報」　（信濃20－10）　昭和43年
渡辺　誠　「縄文時代における埋甕風習」　（考古学ジャーナル40）　昭和45年
木下　忠　「戸口に貽盤を埋める呪術」　（考古学ジャーナル42）　昭和45年
「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」飯田・宮田　昭和46年
「洞」　昭和46年
佐藤　攻　「茅野和田遺跡東地区の埋甕」　（長野県考古学会誌11）　昭和46年
「大城林遺跡（中間報告）」　昭和47年
「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」飯島・高森町・西春近・南箕輪村・辰野町　昭和46～47年
「長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡第２次緊急発掘調査報告書」　昭和48年
「東筑摩郡松本市塩尻市誌　歴史上」　昭和48年
中央道遺跡調査団　「調査速報」　昭和48年）
神村　透　「南信地方の埋甕について」　（長野県考古学会誌15）　昭和48年
猪越公子　「縄文時代住居址内埋甕について」　（下総考古学５）　昭和48年
桐原　健　「仮器の系譜」　（古代文化25－12）　昭和48年
神村　透　「埋甕と伏甕」　（長野県考古学会誌19・20）　昭和49年
岩崎長思　「戌亥先住民住居址」　（長野県史跡名勝天然記念物調査報告書　第13集）　昭和７年
上田三平　「石器時代の住居址について」　（建設雑誌第47集－566号）　昭和８年
岩崎長思　「寺ノ浦先住民族住居址」　（長野県史跡名勝天然記念物調査報告書第13集）　昭和７年
八幡一郎　「敷石住居の新資料」　（人類学雑誌44－７）　昭和４年
八幡一郎　「長野県北佐久郡大井村加増敷石住居址発掘調査報告書」　（北佐久郡誌編集会）　昭和28年
岩崎卓也　「郷土遺跡発掘記録第一次」　昭和36年
「郷土遺跡発掘記録第二次」　昭和40年
「長野県小諸市郷土遺跡」　（日本考古学年報18）　昭和45年
三上次男・上野佳也　（軽井沢町茂沢南石棠遺跡発掘調査報告書）　軽井沢町教育委員会　昭和43年
上野佳也　「敷石遺構についての一考察」　（古代文化25－４）　昭和48年
佐藤　攻・土屋長久　「信越本線滋野・大屋間復線化工事地内の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」（長野県考古学会研究報告書）　昭和45年
金子浩昌・山崎　元・森嶋　稔　「長野県埴科郡城坂町込山Ｃ遺跡略報－立石を伴う敷石遺構の一資料－」（信濃16－12）　昭和39年
屋代高校　「埴科郡戸倉町中田遺跡第１次調査　－特に立石を伴なう配石址について－」

（長野県考古学会誌１）　昭和39年
金子浩昌・米山一政・森嶋　稔　「長野県旭科郡戸倉町市田遺跡調査報告－その２」
（長野県考古学会誌２）　昭和40年
関　孝一　「長野県上高井郡高山村坪井遺跡の発掘調査」　（信濃21－８）　昭和44年
米山一政・笹沢　浩・桐原　健　「農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
（長野県教育委員会）　昭和45年
与良　清　「御牧原下笹沢敷石住居址調査報告書」　（小諸市教育委員会）　昭和50年
福島邦男　「下吹上遺跡発掘調査概報」　（信濃考古No.42）　昭和52年

お　わ　り　に

下吹上遺跡の調査が、望月町教育委員会で企画され、福島邦男君を中心としてその調査が実施されて、すでに２年の歳月が流れた。調査にあたっては、地域の多勢のみなさんの善意にささえられて進行し、そして終了した。深く感謝の意を表したい。

また本書にかけた福島邦男君の努力も大きい。ほとんど一人で整理し、整図し、原稿を書き上げた熱意は多大なものであった。本書が学界に、そして、地域の文化向上のために、何等かの役割を果たすことがあるとすれば、それは、福島君の努力と、町教育委員会の福島君を援けてくださったみなさんの力と思うものである。

なお、本書の出版を担当してくださった福島君の学友、信毎書籍印刷株式会社の森山公一君の努力に負うところが大きい。記して感謝の意を表するものである。　（森嶋　稔）

図版第一　下吹上遺跡全景

1．遺　跡　全　景

2．八丁地川河岸段丘（浅間山を臨む）

3．左上テントが遺跡

1．調　査　現　場

2．大谷地地籍の鉄平石自然露頭

3．調　査　風　景

1．敷石住居址埋甕調査風景

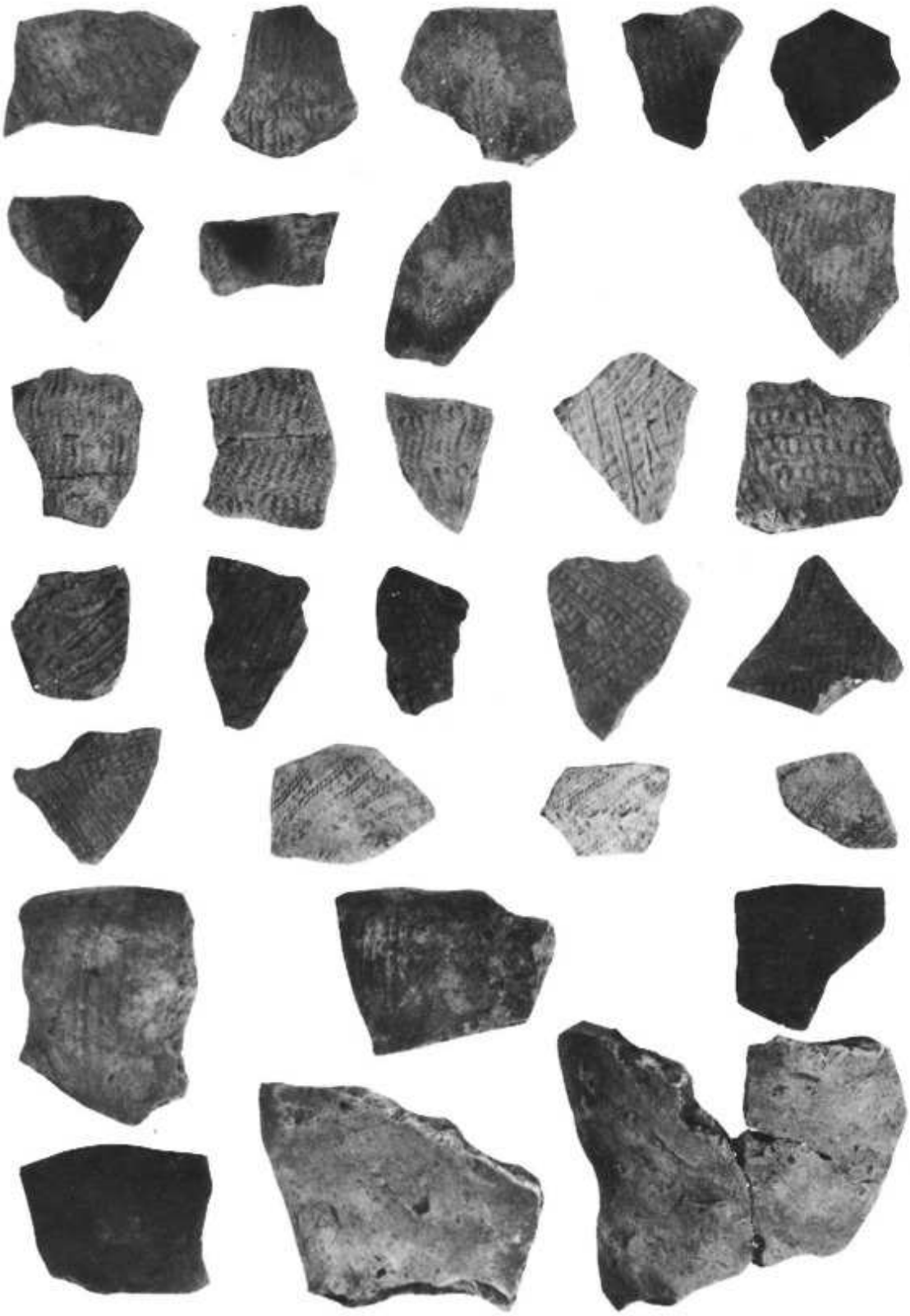
2．見学者への説明風景

3．熱心に見入る小学生

1．遺構全景

2．炉　址

図版第五　第五号住居址出土土器



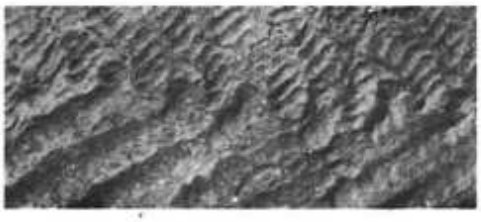
図版第六　第五号住居址出土土器

図版第七　第五号住居址出土土器

1．無節縄文

2．単節縄文

3．羽状縄文



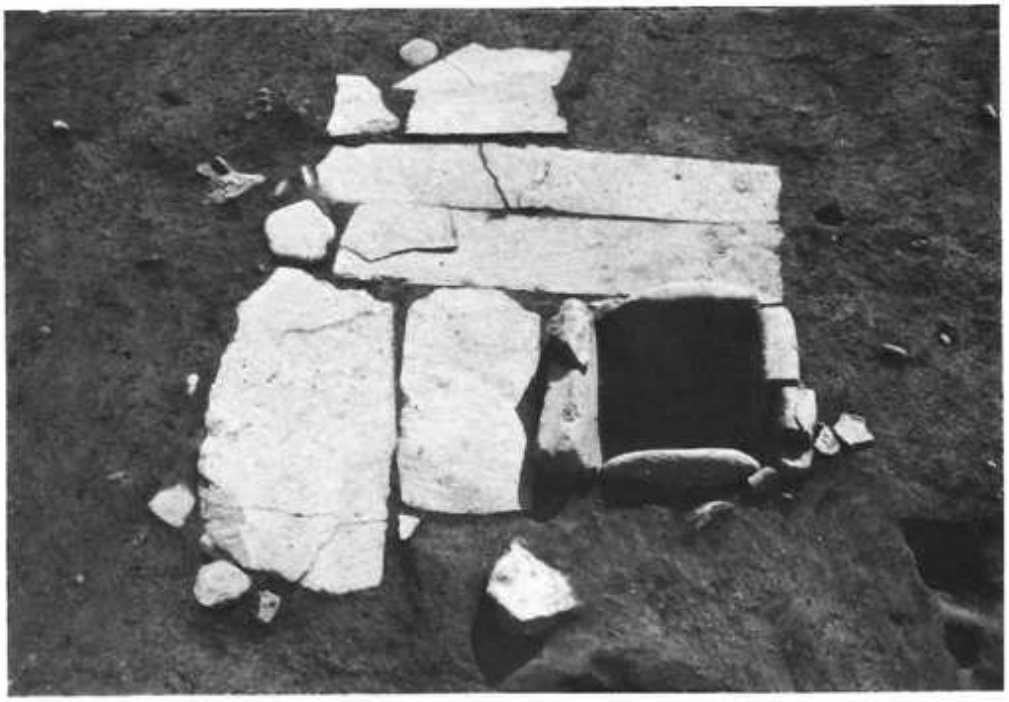
4．単節縄文の組合せ

5．複節縄文．

6．組紐縄文

図版第八　第五号住居址出土石器

1. 遺構全景



2. 敷石部

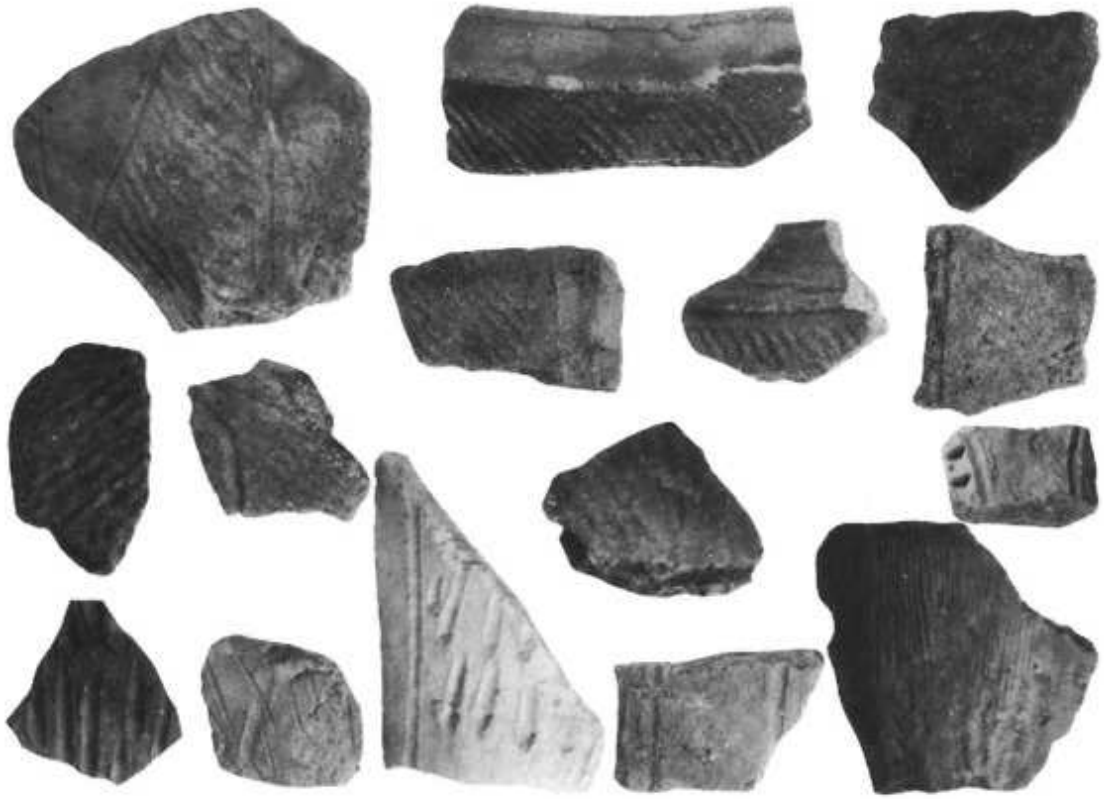
1．炉址内焼土堆積状態

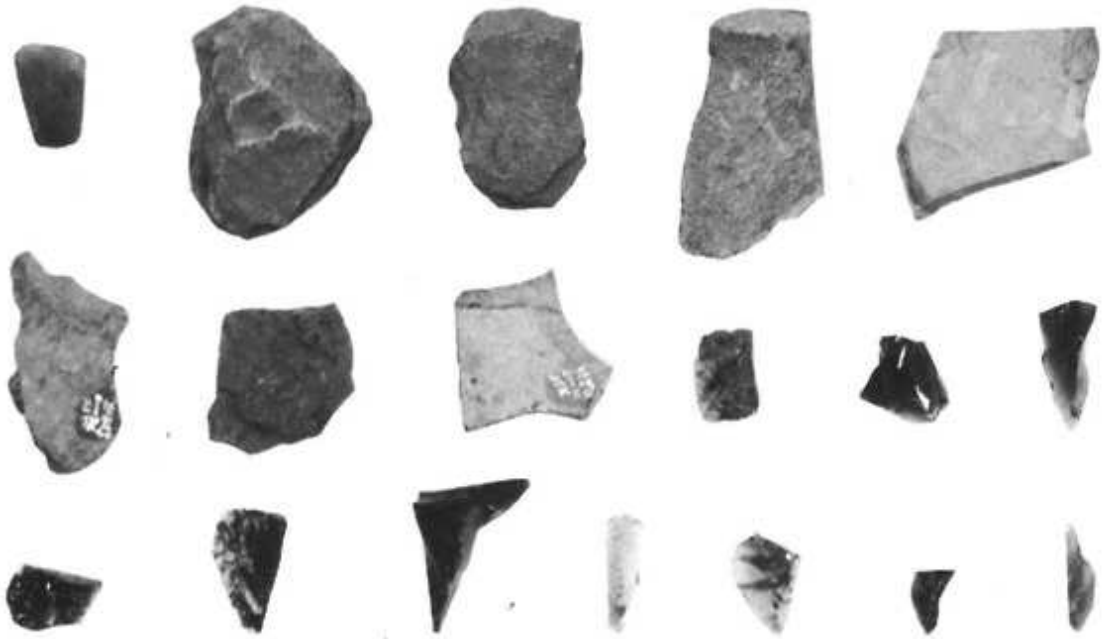
2．柱穴間出土の埋甕

3．埋甕断面

4．埋　甕

図版第一一　第一号敷石住居址出土土器・石器

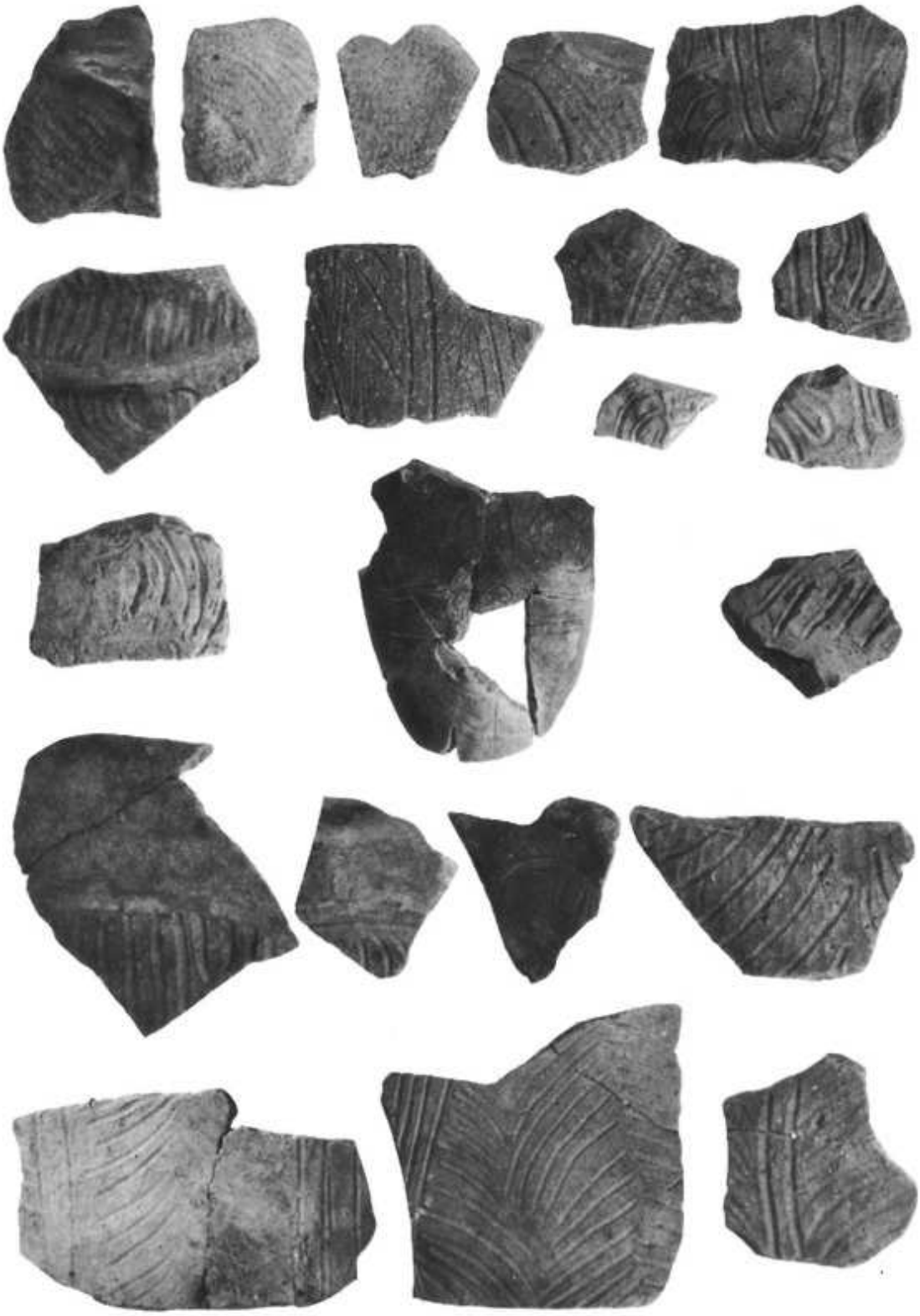




1．遺構全景

2．炉址と遺物出土状態

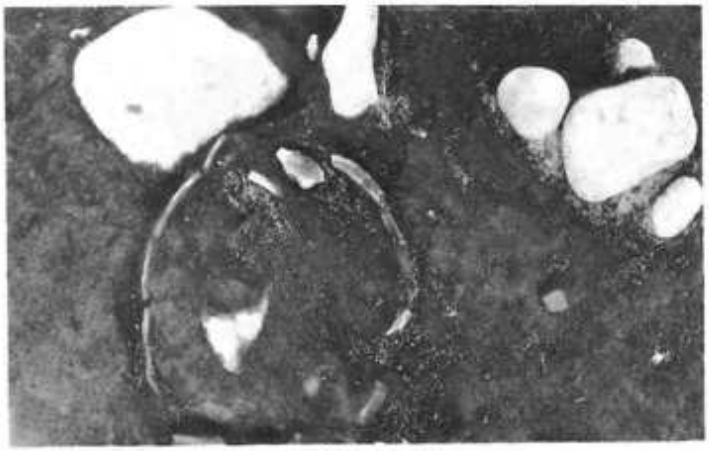
3．立替え柱穴



1．中央部炉址内出土土器

図版第一四　第一号住居址出土石器

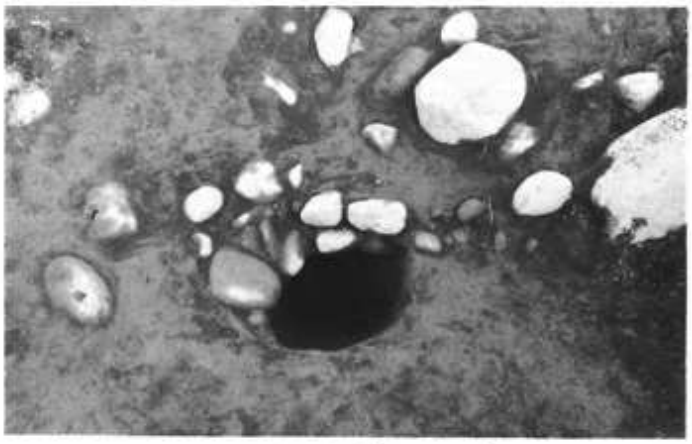
1. 遺構全景



2. 埋甕と配石

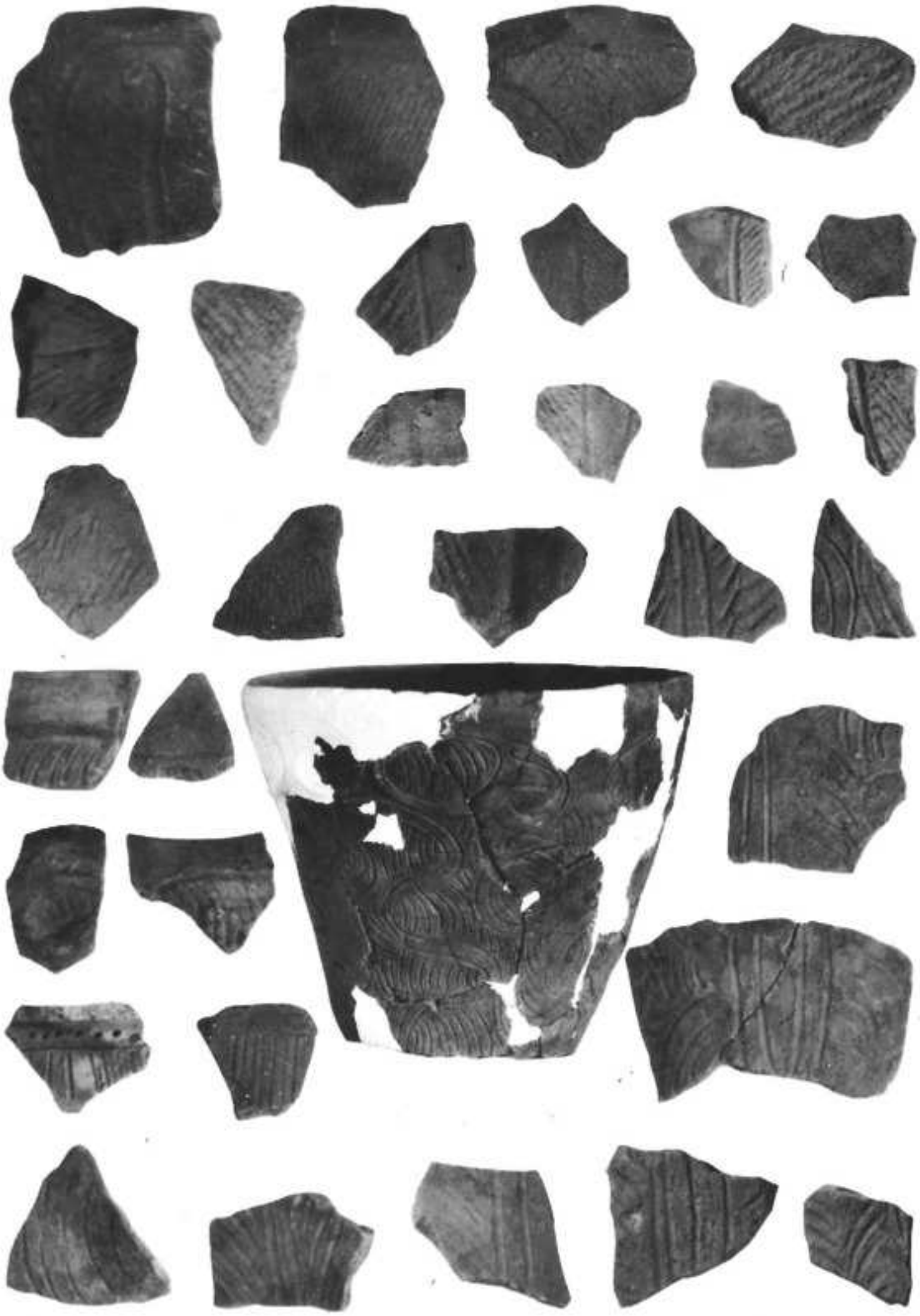
1．埋甕断面

2．埋甕下部の施設

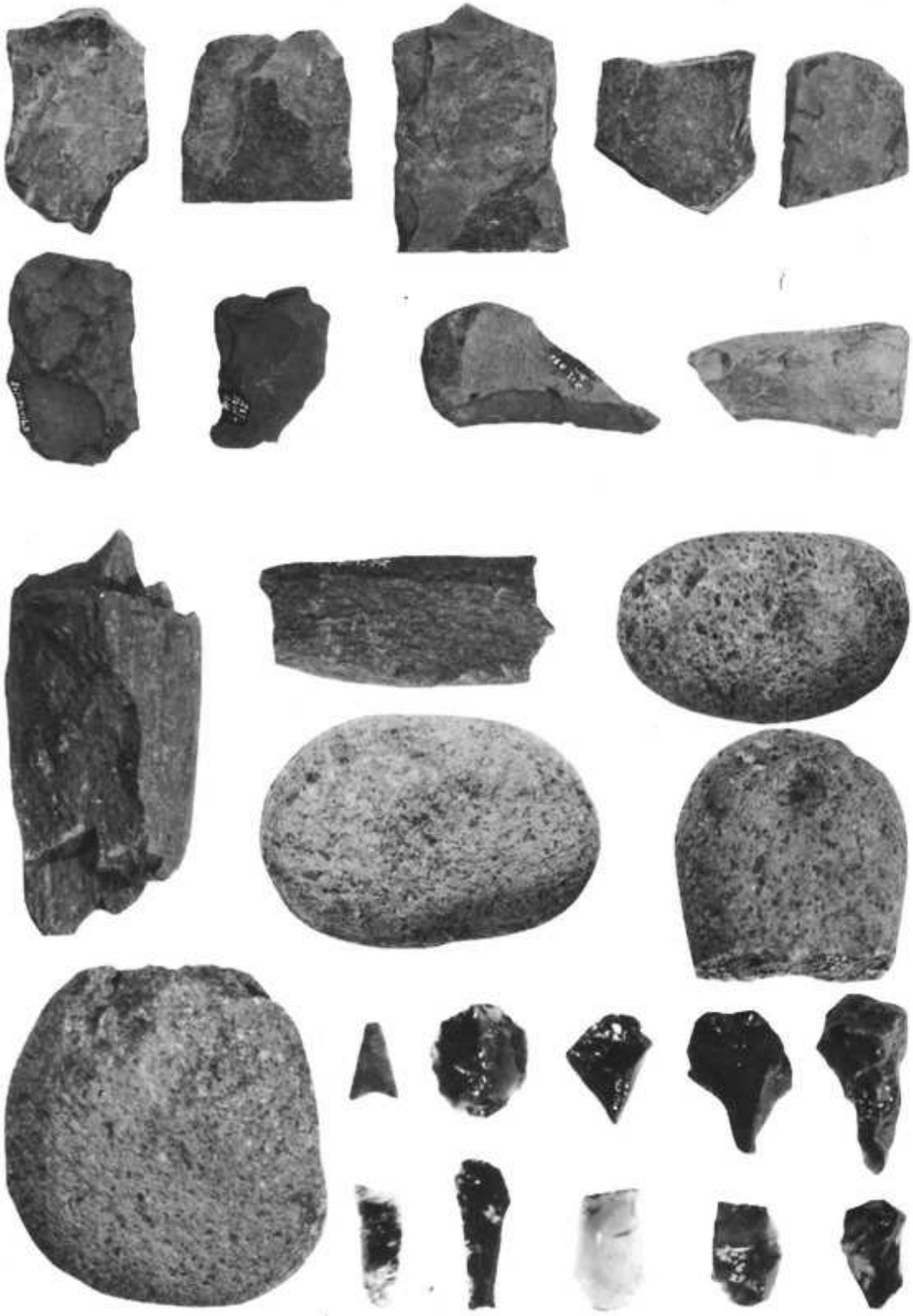


3．埋甕下部の施設

図版第一七　第二号住居址出土土器



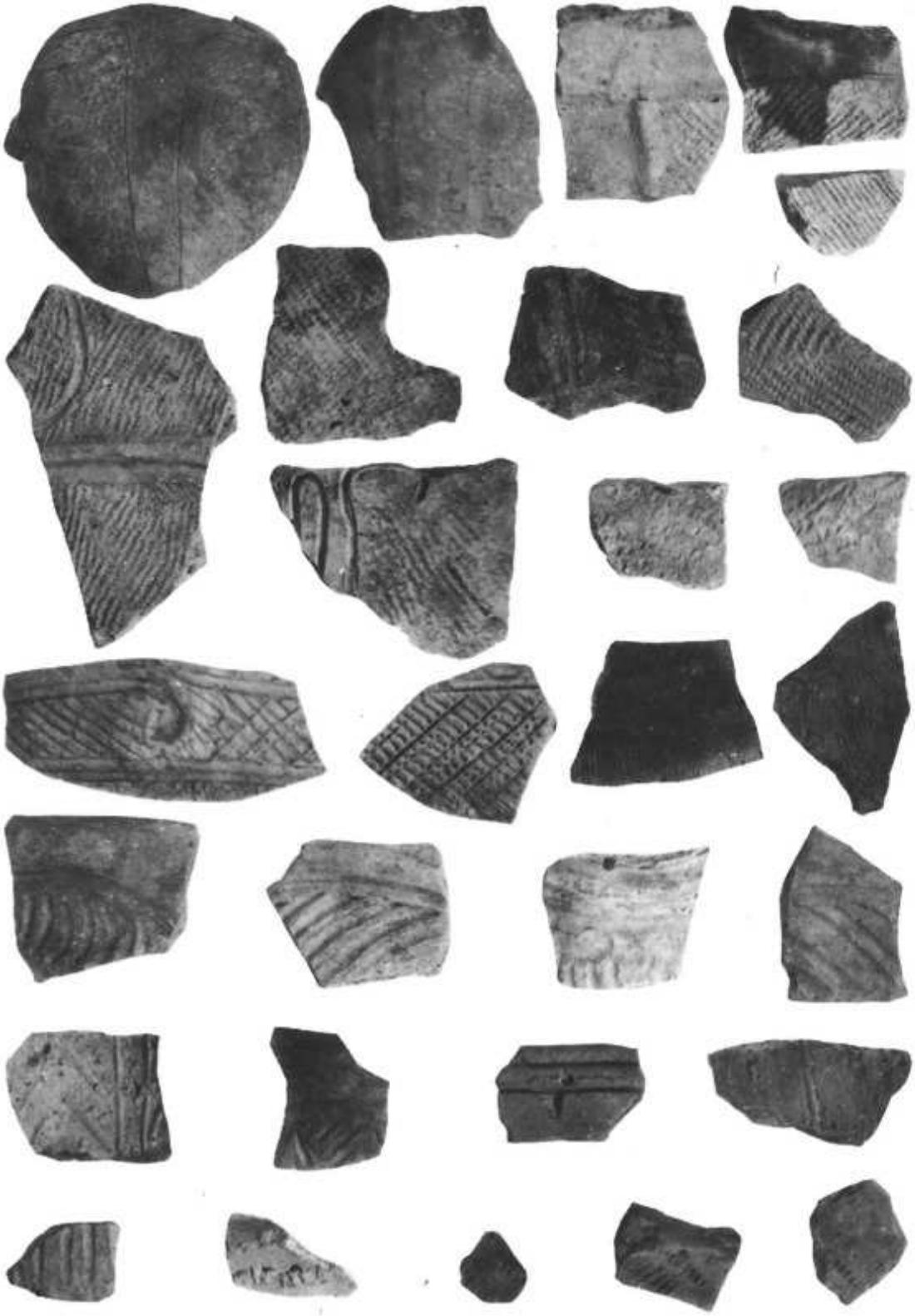
1. 中央部埋甕



図版第一八　第二号住居址出土石器

1．遺構全景

2．炉址（中央）とＳＫ－１（左）



図版第二〇　第三号住居址出土土器

図版第二一　第三号住居址出土石器

1．遺構全景（手前中央部・南が出入口部）

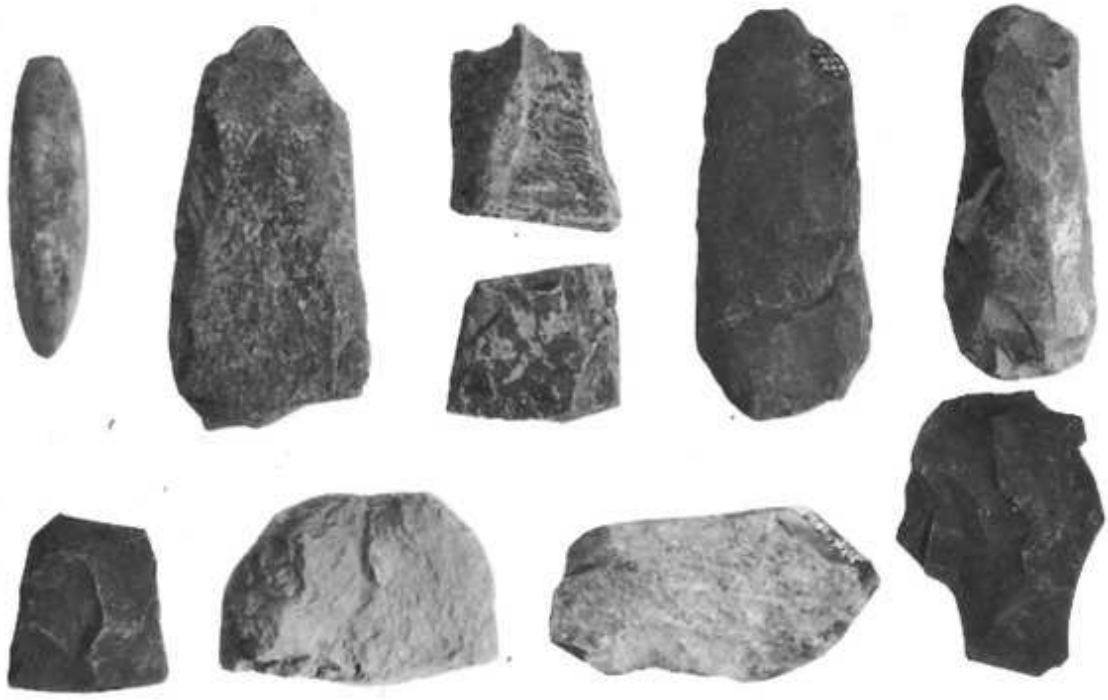
2．炉　址

3．磨製石斧出土状態
刃部を上に向け直立して
出土している。

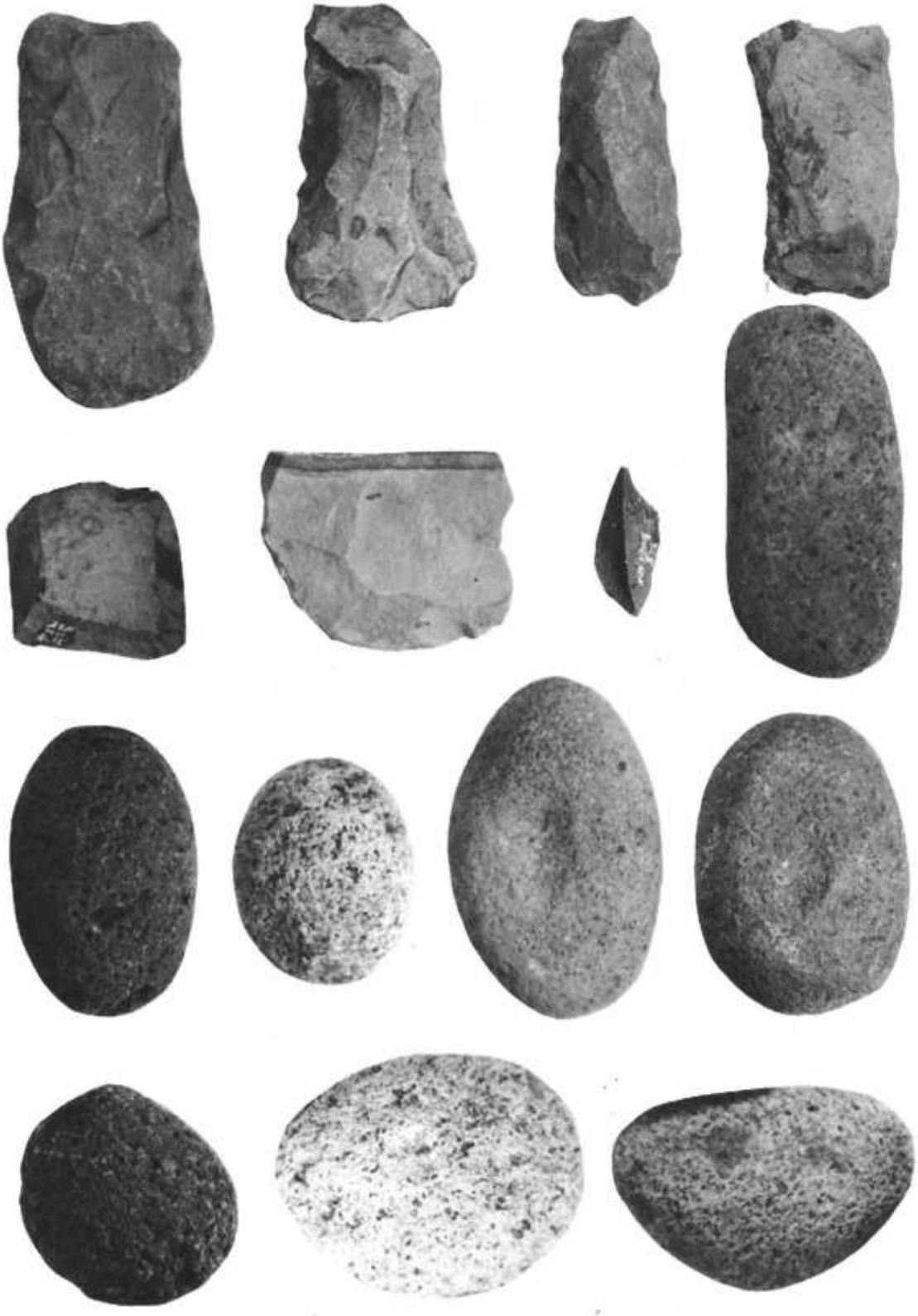
図版第二三　第四号住居址出土土器

図版第二四　第四号住居址出土石器

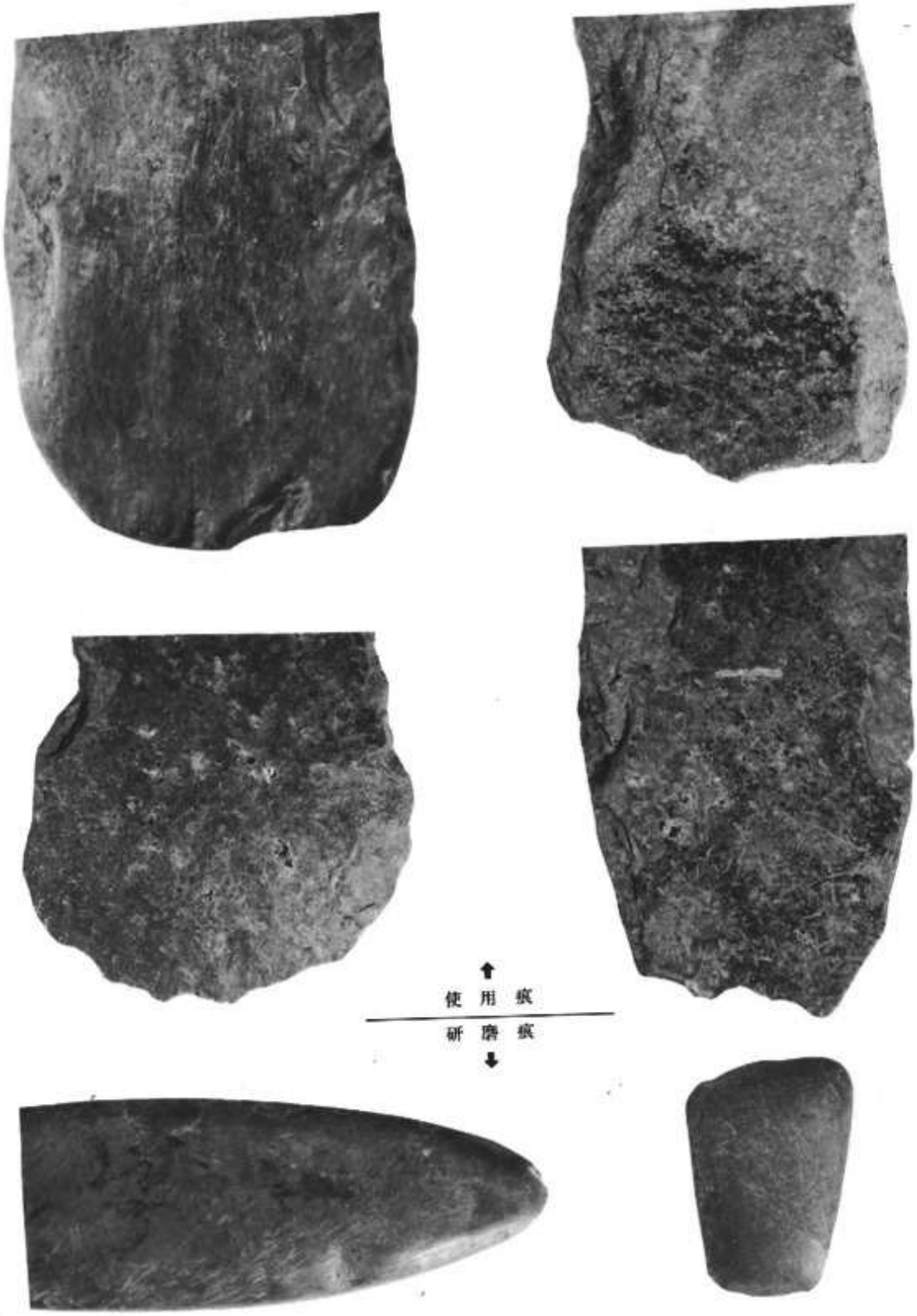
図版第二五　グリッド出土土器・石器



図版第二六　表面採集石器



図版第二七　石器の使用痕と研磨痕の観察



下　吹　上

蓼科山北麓における縄文式時代中期末葉の調査
長野県考古学会研究報告書　11

印　　刷	昭和53年11月3日
発　　行	昭和53年11月8日
著　　者	福島邦男・森嶋　稔
発行者	長野県考古学会
編集者	川上　元・林　和男
印刷所	信毎書籍印刷株式会社
発行所	長野県考古学会 埴科郡戸倉町黒彦1305－69　森嶋稔方 振替　長野10992